千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第18集

柏北部中央地区
埋蔵文化財調査報告書 7

―柏市須賀井遺跡―

縄文時代以降編

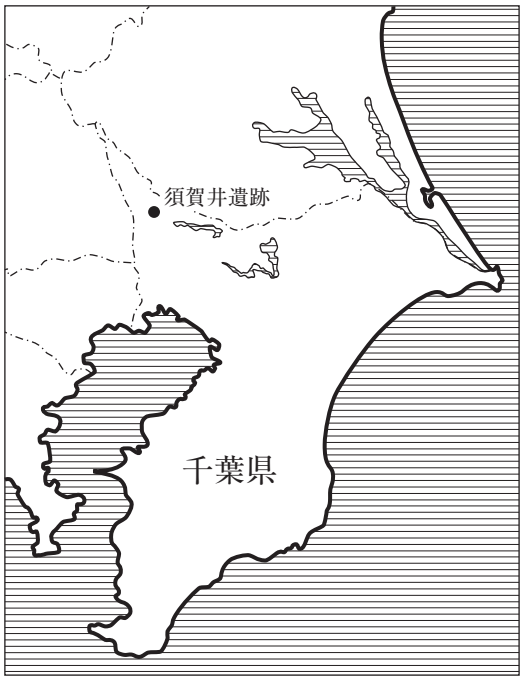
平成29年3月

千 葉 県 教 育 委 員 会

柏北部中央地区
埋蔵文化財調査報告書 7

—柏市須賀井遺跡—

縄文時代以降編



18. 広口壺の蓋

23. 龍泉窯系青磁

29. 口広有耳壺

29. 口広有耳壺

29. 口広有耳壺

30. 瓶子

30. 瓶子

31. 瓶子

中世主要陶磁器（古瀬戸・中国磁器）

序　　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第18集として、千葉県県土整備部による柏北部中央地区土地区画整理事業（公共つくばエクスプレス沿線整備事業）に伴って実施した柏市須賀井遺跡の発掘調査報告書（縄文時代以降編）です。調査の成果としては、縄文時代の竪穴住居跡や陥穴、中世の台地整形区画遺構群などが検出されました。また、中世の土坑から大変貴重な広口壺の蓋などが出土し、周辺の調査事例と合わせ、この地域の歴史を知る上で貴重な成果を加えることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成29年３月

千葉県教育委員会
文化財課長　永沼　律朗

凡　　例

1　本書は、千葉県県土整備部による公共つくばエクスプレス沿線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県柏市若柴字須賀井226-45ほかに所在する須賀井遺跡（遺跡コード　217－017）である。

3　発掘調査は、千葉県県土整備部の委託を受けて公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、整理作業から報告書作成に係る作業は、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。

4　本書の執筆は第１章、第２章第３節、第３章第２節を主任上席文化財主事鳴田浩司が、第１章、第２章、第３章第２節を主任上席文化財主事田島 新、第２章第２節及び第３章第１節を文化財主事牧 武尊が行い、編集については主任上席文化財主事田島 新が行った。

5　貝類遺体の同定･分析は千葉県立中央博物館の黒住耐二氏に依頼し、その成果を付章に掲載した。また、種実及び昆虫の同定・分析は千葉県農林総合研究センター森林研究所の小林真生子氏に依頼し、その成果を本文に記載した。

6　本書で使用した地形図は、以下のとおりである。

第１図　柏市都市計画課1/2,500都市地形図「11・17」（平成５年３月修正測量）を1/10,000に縮小して使用

第４図　国土地理院発行1/25,000数値地図「流山」[Ｎ１－54－25－１－２]（平成22年８月発行）

第５図　地図史料編纂会編 明治前期 関東平野地誌図集成1/25,000「流山」

7　遺跡周辺の空中写真（図版１）は、京葉測量株式会社が平成20年２月1日に撮影した[2008C－C35－19]を約1/8,000に拡大して使用した。

8　本書で使用した座標は、日本測地系に基づく平面直角座標（第Ⅸ座標系）で、図面の方位はすべて座標北を示す。

9　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部市街地整備課、同柏区画整理事務所、柏市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財団、千葉県立中央博物館、千葉県農林総合研究センター森林研究所、野田市郷土博物館、黒住耐二氏、小林真生子氏、藤澤良祐氏、井上哲朗氏、小高春雄氏、櫻井公子氏ほか、多くの機関、多くの方々から御指導、御協力を得た。記して感謝いたします。

10　挿図凡例

● 繊維土器　　焼土・炭化物　　粘土　　硬化面

本文目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査の概要 …… 1
　　1　調査経過 …… 1
　　2　調査の方法と概要 …… 1
　第２節　遺跡の位置と環境 …… 4
　　1　遺跡の位置と地形 …… 4
　　2　周辺の遺跡 …… 4
第２章　調査の成果 …… 11
　第１節　遺跡の概要 …… 11
　第２節　縄文時代 …… 11
　　1　竪穴住居跡 …… 11
　　2　ピット群・ピット …… 12
　　3　陥穴 …… 16
　　4　遺構外出土縄文土器・土製品 …… 16
　　5　石器 …… 21
　第３節　中世から近世初頭 …… 26
　　1　第１区画 …… 26
　　2　第２区画 …… 42
　　3　第３区画 …… 59
　　4　区画外 …… 76
　　5　遺物 …… 83
第３章　まとめ …… 98
　第１節　縄文時代 …… 98
　第２節　中世から近世初頭 …… 98
　　1　出入口に遮断機を設ける地下式坑について …… 98
　　2　遺構群の時期とその性格 …… 99
付　章　須賀井遺跡から得られた貝類遺体 …… 102
　第１節　検討資料と処理方法 …… 102
　第２節　結果及び考察 …… 102
　　1　出土貝類 …… 102
　　2　イシガイ科の出土数の推定 …… 103
　　3　出土貝類の量的組成 …… 103
　　4　イシガイ科のサイズと淡水貝類利用 …… 104
　　5　厚質イシガイ類利用の理由 …… 105

第３節　まとめ……106

報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　柏北部中央地区遺跡位置図……２
第２図　グリッド模式図……３
第３図　トレンチ配置図……３
第４図　須賀井遺跡と周辺の遺跡……５
第５図　迅速測図……６
第６図　遺構配置図……13
第７図　縄文時代竪穴住居跡（１）……14
第８図　縄文時代竪穴住居跡（２）・ピット群・ピット……15
第９図　縄文時代陥穴……18
第10図　縄文時代遺構外出土遺物（１）……19
第11図　縄文時代遺構外出土遺物（２）……20
第12図　縄文時代石器（１）……23
第13図　縄文時代石器（２）……24
第14図　縄文時代石器（３）……25
第15図　第１区画　遺構配置……27
第16図　第１区画　遺物分布……28
第17図　第１区画　掘立柱建物跡……29
第18図　第１区画　井戸……29
第19図　第１区画　地下式坑（１）……31
第20図　第１区画　地下式坑（２）……32
第21図　第１区画　地下式坑（３）……34
第22図　第１区画　土坑（１）……36
第23図　第１区画　土坑（２）……37
第24図　第１区画　土坑（３）……38
第25図　第１区画　土坑（４）……40
第26図　第１区画　溝……41
第27図　第２区画　遺構配置……43
第28図　第２区画　遺物分布……44
第29図　第２区画　地下式坑（１）……45
第30図　第２区画　地下式坑（２）……47
第31図　第２区画　地下式坑（３)･掘立柱建物跡……50
第32図　第２区画　井戸・土坑（１）……51
第33図　第２区画　土坑（２）……54
第34図　第２区画　土坑（３）・火葬施設……55
第35図　第２区画　土坑（４）……56
第36図　第２区画　土坑（５）……58
第37図　第２区画　溝……59
第38図　第３区画　遺構配置……60
第39図　第３区画　遺物分布……61
第40図　第３区画　掘立柱建物跡……63
第41図　第３区画　地下式坑（１）……64
第42図　第３区画　地下式坑（２）・大型土坑（１）……65
第43図　第３区画　地下式坑（３）・大型土坑（２）……67
第44図　第３区画　火葬施設（１）・井戸……67
第45図　第３区画　土坑（１）……70
第46図　第３区画　土坑（２）……71
第47図　第３区画　土坑（３）……73
第48図　第３区画　土坑（４）……74
第49図　第３区画　土坑（５）・火葬施設（２）……75
第50図　区画外　地下式坑……77
第51図　区画外　土坑……78
第52図　区画外　溝……80
第53図　古瀬戸・青磁・土器……84

第54図　常滑・古瀬戸・産地不明陶器……85
第55図　常滑大甕……86
第56図　常滑片口鉢……87
第57図　石製品・石造物（１）……89
第58図　石製品・石造物（２）……90
第59図　砥石……92
第60図　丸玉・土錘・フイゴ羽口・土師器・転用砥石・火打石・ルツボ……93
第61図　鉄滓・金属製品……95
第62図　銭貨……96
第63図　須賀井遺跡中世環境復原図……101
第64図　須賀井遺跡から出土した貝類遺体……107

表目次

第１表　周辺遺跡……７・８
第２表　石器属性表……22
第３表　土坑計測表……81・82
第４表　中世陶磁器類観察表……88
第５表　石製品・石造物……90
第６表　砥石……94
第７表　丸玉・土錘・フイゴ羽口・土師器・転用砥石・火打石・ルツボ……94
第８表　金属製品……97
第９表　銭貨計測表……97
第10表　須賀井遺跡から出土した貝類遺体の分類学的位置と生息場所……108
第11表　須賀井遺跡（6）SK032の分類されたサンプルの最少個体数（MNI）と重量の詳細……108
第12表　須賀井遺跡（6）SK032の各サンプルから抽出された貝類遺体（9.52mmﾒｯｼｭ）……108
第13表　須賀井遺跡から抽出された貝類遺体の状態と最少個体数……109
第14表　須賀井遺跡（6）SK032から出土したイシガイとヨコハマシジラガイの殻長組成……109

図版目次

巻頭図版１　中世主要陶磁器（古瀬戸・中国磁器）
図版１　須賀井遺跡周辺航空写真
図版２　竪穴住居跡・ピット・陥穴
図版３　第１区画　台地整形・掘立柱建物跡・井戸・地下式坑（１）
図版４　第１区画　地下式坑（２）・土坑（１）
図版５　第１区画　土坑（２）
図版６　第１区画　土坑（３）
図版７　第１区画　土坑（４）
図版８　第１区画　土坑（５）
図版９　第１区画　土坑（６）・溝（１）
図版10　第１区画　溝（２）
第２区画　遠景
図版11　第２区画　掘立柱建物跡・井戸・地下式坑（１）
図版12　第２区画　地下式坑（２）・火葬施設・土坑（１）
図版13　第２区画　土坑（２）
図版14　第２区画　土坑（３）・溝
第３区画　遠景・地下式坑（１）

図版15　第３区画　地下式坑（２）・火葬施設（１）
図版16　第３区画　火葬施設（２）・土坑（１）
図版17　第３区画　土坑（２）
図版18　第３区画　土坑（３）
図版19　第３区画　土坑（４）・溝
　　区画外　土坑（１）
図版20　区画外　土坑（２）・溝
図版21　遺構出土縄文土器
図版22　遺構外出土縄文土器（１）
図版23　遺構外出土縄文土器（２）
図版24　縄文時代石器
図版25　陶磁器類（１）
図版26　陶磁器類（２）
図版27　陶磁器類（３）
図版28　陶磁器類（４）
図版29　石製品・石造物（１）
図版30　石製品・石造物（２）
図版31　砥石
図版32　丸玉・土錘・羽口・土師器・転用砥石・
　　火打石・ルツボ
図版33　鉄滓・金属製品
図版34　銭貨

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査経過

平成24年12月刊行の「柏北部中央埋蔵文化財調査報告書４－柏市大割遺跡・須賀井遺跡－　旧石器時代編」で調査経緯と経過に触れており、内容はまったく重複するので、ここでは省略し概略説明するにとどめる。

上層調査は平成10年度から平成19年度まで10次にわたり実施した。調査対象面積は総計30,563㎡で本調査は総計10,848㎡となった。

整理作業は以下のとおりである。

平成26年度　　記録整理～原稿執筆の一部
　　文化財課長　永沼律朗
　　発掘調査班長　蜂屋孝之
　　主任上席文化財主事　落合章雄

平成28年度　　原稿執筆の一部～報告書刊行
　　文化財課長　永沼律朗
　　発掘調査班長　田井知二
　　主任上席文化財主事　田島　新
　　文化財主事　牧　武尊

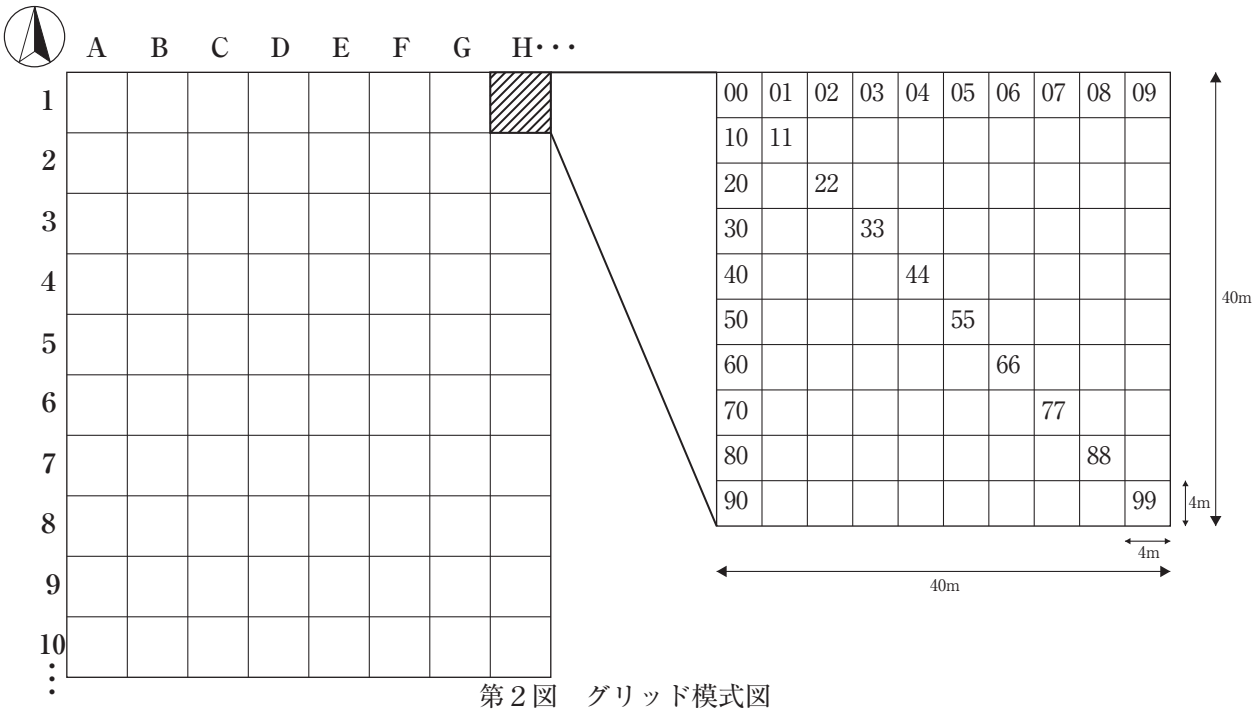
２　調査の方法と概要（第1～３図）

まず柏北部中央地区内全体を包含するように日本測地系（第Ⅸ座標系）の公共座標に基づいて大小グリッドを設定した。

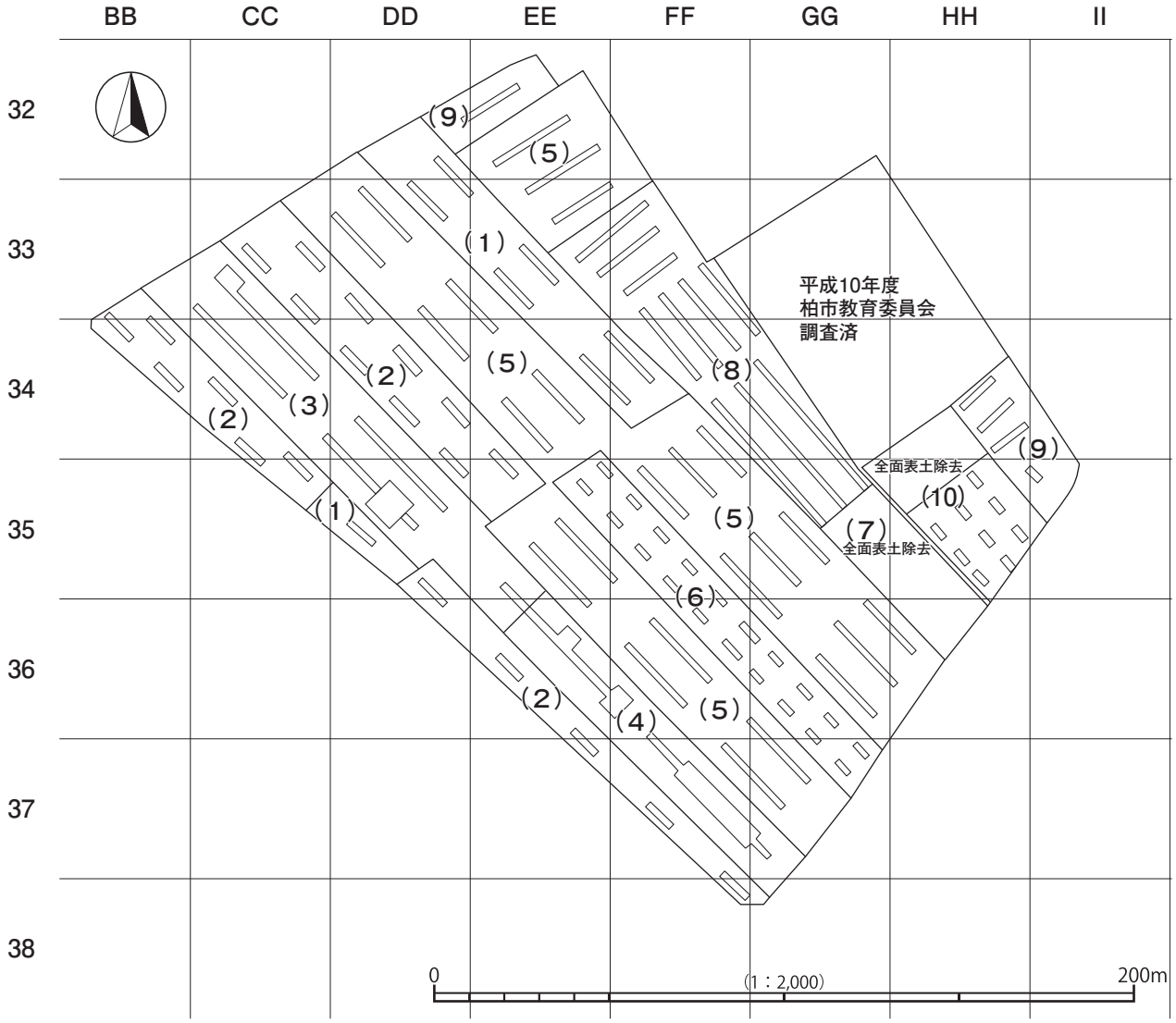
大グリッドは40m×40mで、西から東へＡ、Ｂ、Ｃ、北から南へ１、２、３の記号を付け、これらの記号を組み合わせ１Ａ、２Ｂ、３Ｃのように呼称した。さらに大グリッドの中は４ｍ×４ｍの小グリッド100個に分割し北西から南東に向かって00、01、02、‥‥‥97、98、99の番号を付け、大グリッドとの組み合わせで須賀井遺跡内では36FF-12、38GG-55などと呼称した。その結果、遺跡は北端が32EE大グリッド（グリッド北西端の座標がＸ座標 -11,740m、Ｙ座標11,200m）、西端が33BB大グリッド（グリッド北西端の座標がＸ座標 -11,780m、Ｙ座標11,080m）および34BB大グリッド（グリッド北西端の座標がＸ座標 -11,820m、Ｙ座標11,080m）、東端が34II大グリッド（グリッド北西端の座標がＸ座標 -11,820m、Ｙ座標11,360m）および35II大グリッド（グリッド北西端の座標がＸ座標 -11,860m、Ｙ座標11,360m）そして南端が38FF大グリッド（グリッド北西端の座標がＸ座標 -11,980m、Ｙ座標11,240m）および38GG大グリッド（グリッド北西端の座標がＸ座標 -11,980m、Ｙ座標11,280m）をそれぞれの限界とする範囲に内包される。

上層の確認調査は、基本的に２ｍ幅のトレンチを調査対象面積の10％となるように、その長さを設定して、重機と人力作業を並行してローム地山面が露出するまで掘り下げ、遺構や遺物の有無を確認した。

第１図　柏北部中央地区遺跡位置図



第２図　グリッド模式図



第３図　トレンチ配置図

調査は10次におよぶ長い期間を要したが、短冊状に細長い調査対象地に対して、各調査次にその地形・形態を考慮して、適宜トレンチの方向を設定したが、７次及び10次の一部については、全面表土除去による確認調査を行った。

上層本調査は、調査範囲の表土を重機で除去し、順次包含層と遺構の検出、精査、記録作成、写真撮影、遺物取上げなどの作業をおこなった。記録作成のうち、実測図面は基本的に平板を使って全体図･トレンチ配置図･遺構平面図を作成し、併せて遺構断面図･土層断面図についても作成した。写真撮影はフィルムカメラ（35mm及び120mmモノクロ、35㎜カラーリバーサル）を使用した。

上層調査にあたっては、調査次ごとに番号を付している。ただし、調査年次によっては、遺構の性格を考慮せず単純に001から数字を順次付したものや、遺構の性格を考慮して例えば土坑ならSK001などと、数字の前に記号を付したものなど、まったく統一されることはなかった。結局整理作業では、新に番号や記号を変更することはせず、それぞれの調査次の記号・番号の先頭に調査次を表す、例えば５次調査のSK001であれば（5）SK001などと標記変えするにとどめた。

縄文時代以降を対象とした上層調査分の整理作業は、千葉県教育庁教育振興部文化財課発掘調査班が平成26年度から実施し、平成28年度に本報告書刊行に至った。

なお、出土遺物の写真については、デジタルカメラで写真撮影を行った。また、挿図の一部及び写真図版については、写真図版候補の写真を選出し、仮レイアウトを行い、その挿図・写真図版原図をもとに、デジタル編集によるトレースや写真補正等をして、挿図・写真図版を作成した。

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と地形

柏北部中央地区土地区画整理事業は、柏市の北西部にあたる東西２㎞、南北３㎞ほどの範囲で、その中で須賀井遺跡はほぼ中央に位置する。遺跡西端をつくばエクスプレスが南北に走り、遺跡から500ｍほど南側の「柏の葉キャンパス駅」周辺には高層マンション、大規模店舗や大学が置かれ、都内への通勤圏として近年人口増が著しい地域である。また東は国道16号が遺跡の東の境界となっていて、およそ２㎞北の常磐自動車道柏インターチェンジ周辺には物流倉庫・工場などが林立し、物流の一大拠点となっている。

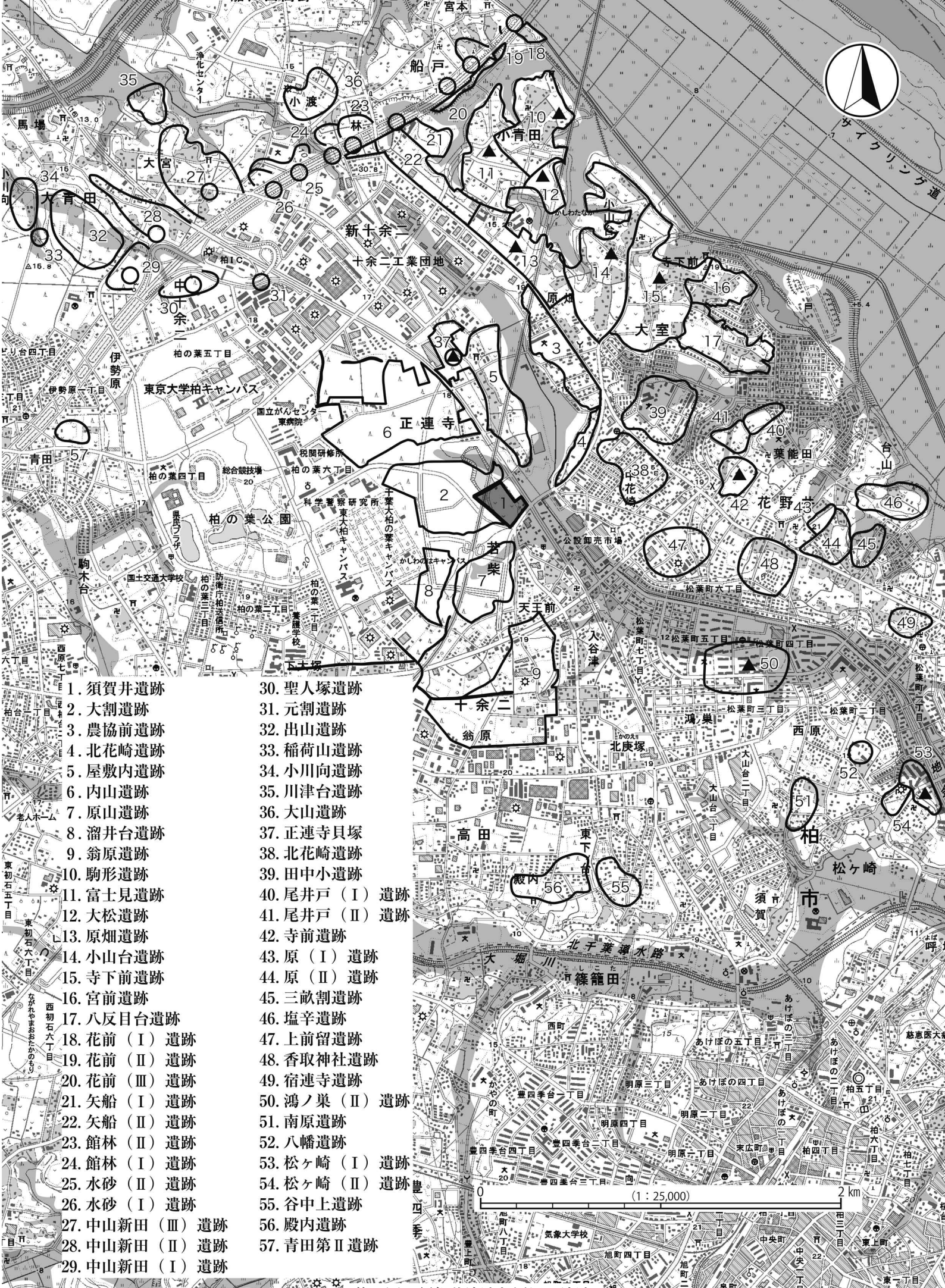
須賀井遺跡の標高は14ｍから18ｍ強で、東側には手賀沼水系である地金堀が南東方向に向かって流れ、遺跡は地金堀とその支流によって開析された台地突端に位置する。全体として地金堀に向かって西から東へ緩やかに傾斜する。

２　周辺の遺跡（第４・５図、第１表、図版１）

今回報告する須賀井遺跡は、縄文時代以降についてまとめたもので、中世から近世を主体として、縄文時代前期の遺構などが見つかっている。ここでは、縄文時代については、隣接する原山遺跡や大割遺跡などの報告で触れられていることから概観するにとどめ、主に中世から近世の特徴について説明する。

縄文時代

早期については撚糸文系や条痕文系の土器や遺構などが検出されているが、前期になると遺跡数、遺構数などが爆発的に増加し、集落遺跡が形成されるようになる。中期には環状集落などが確認されているが、前期に比べると減少する。後期では遺跡数としてはさらに減少し、晩期では若干の遺物が見つかる程度である。



1. 須賀井遺跡
2. 大割遺跡
3. 農協前遺跡
4. 北花崎遺跡
5. 屋敷内遺跡
6. 内山遺跡
7. 原山遺跡
8. 溜井台遺跡
9. 翁原遺跡
10. 駒形遺跡
11. 富士見遺跡
12. 大松遺跡
13. 原畑遺跡
14. 小山台遺跡
15. 寺下前遺跡
16. 宮前遺跡
17. 八反目台遺跡
18. 花前（Ⅰ）遺跡
19. 花前（Ⅱ）遺跡
20. 花前（Ⅲ）遺跡
21. 矢船（Ⅰ）遺跡
22. 矢船（Ⅱ）遺跡
23. 館林（Ⅱ）遺跡
24. 館林（Ⅰ）遺跡
25. 水砂（Ⅱ）遺跡
26. 水砂（Ⅰ）遺跡
27. 中山新田（Ⅲ）遺跡
28. 中山新田（Ⅱ）遺跡
29. 中山新田（Ⅰ）遺跡
30. 聖人塚遺跡
31. 元割遺跡
32. 出山遺跡
33. 稲荷山遺跡
34. 小川向遺跡
35. 川津台遺跡
36. 大山遺跡
37. 正連寺貝塚
38. 北花崎遺跡
39. 田中小遺跡
40. 尾井戸（Ⅰ）遺跡
41. 尾井戸（Ⅱ）遺跡
42. 寺前遺跡
43. 原（Ⅰ）遺跡
44. 原（Ⅱ）遺跡
45. 三畝割遺跡
46. 塩辛遺跡
47. 上前留遺跡
48. 香取神社遺跡
49. 宿連寺遺跡
50. 鴻ノ巣（Ⅱ）遺跡
51. 南原遺跡
52. 八幡遺跡
53. 松ヶ崎（Ⅰ）遺跡
54. 松ヶ崎（Ⅱ）遺跡
55. 谷中上遺跡
56. 殿内遺跡
57. 青田第Ⅱ遺跡

第４図　須賀井遺跡と周辺の遺跡

須賀井遺跡
村寺蓮正
村二余十
村水駒
村田高
村田蕃篠
村谷ノ前
村季四豊
村崎長
村室大
村井野花
村塚若
村田青大
國
總
郡
飾
高
東
0
2 km
(1：25,000)

第５図　迅速測図

第１表　周辺遺跡

No.	遺跡名	所在地	水系	遺跡種別	前期遺構等	備　考
1	須賀井遺跡	柏市若柴 226-3 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	前期、中期	陥穴
2	大割遺跡	柏市若茉字大割 227-1 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	早期、前期	炉穴
3	農協前遺跡	柏市大室正連寺 156 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	前期	
4	北花崎遺跡	柏市花野井北花崎 746 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	前期	
5	屋敷内遺跡	柏市正連寺字屋敷内	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡	黒浜住居７・土坑６・陥穴３・遺構内貝層	旧正蓮寺貝塚含む
6	内山遺跡	柏市正連寺字内山 394-3 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	早期（撚糸文、条痕文）	陥穴
7	原山遺跡	柏市若柴字原山	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡	黒浜住居６・陥穴８	
8	溜井台遺跡	柏市若柴字溜井台 264-1 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	早期（井草・夏島・子母口～野島・茅山上層）、前期（黒浜・諸磯・浮島・前期未縄文）、中期（阿玉台・加曽利Ｅ）、後期（堀之内・加曽利Ｂ）	陥穴
9	翁原遺跡	柏市十余二字翁原	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	早期（井草・夏島）	
10	駒形遺跡	柏市小青田字駒形	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡・貝塚	黒浜住居 13 以上・遺構内貝層・炉穴	早期撚糸文～沈線文集石 早期条痕文～前期後葉集落跡 川端貝塚
11	富士見遺跡	柏市小青田字立山	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡・貝塚	花積下層集落・黒浜拠点集落 住居 100 以上・遺構内貝層・炉穴	駒形・小青田貝塚
12	大松遺跡	柏市小青田字大松	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡・貝塚	関山Ⅱ～黒浜集落 住居 10 以上・遺構内貝層	中期前葉～後葉拠点集落 大松貝塚
13	原畑遺跡	柏市大室字原畑	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡・貝塚	黒浜住居 19・土坑５・遺構内貝層	
14	小山台遺跡	柏市大室字前畑	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡・貝塚	黒浜住居 10 以上・遺構内貝層・炉穴	中期中葉～後葉拠点集落 前畑貝塚
15	寺下前遺跡	柏市花野井字寺前	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡・貝塚	黒浜住居１	
16	宮前遺跡	柏市大室宮前 1615	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	後期	
17	八反目台遺跡	柏市大室字東山 1479-1 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	前期、中期	
18	花前（Ⅰ）遺跡	柏市船戸字花前	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡・貝塚	黒浜住居８・遺構内貝層	後期前葉集落跡
19	花前（Ⅱ）遺跡	柏市船戸字新町	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡	前期後葉集落跡	後期前葉集落跡
20	花前（Ⅲ）遺跡	柏市船戸新町 1472 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡・包蔵地	早期（井草～稲荷台・茅山・茅山上層以降絡条体圧痕）、前期（浮島Ⅰ・諸磯ａ・ｂ）、中期（加曽利ＥⅡ）、後期（堀ノ内１）	花前Ⅱ-1 遺跡、前期後葉集落跡、炉穴
21	矢船（Ⅰ）遺跡	柏市船戸字矢ノ船	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡	前期集落跡 土製玦状耳飾り出土	矢船遺跡
22	矢船（Ⅱ）遺跡	柏市船戸字矢ノ船	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡	前期集落跡 土坑・陥穴検出	
23	館林（Ⅱ）遺跡	柏市船戸字館林 1781 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	包蔵地	早期（田戸下層・田戸上層・芝山）、前期（諸磯ｂ・ｃ・浮島・興津・十三菩堤・前期未縄文）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰａ～Ⅰｂ）、後期（加曽利Ｂ）	
24	館林（Ⅰ）遺跡	柏市船戸字館林 1731 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	包蔵地	早期（田戸下層・田戸上層・芝山）、前期（諸磯ｂ・ｃ・浮島・興津・十三菩堤・前期未縄文）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰａ～Ⅰｂ）、後期（加曽利Ｂ）	
25	水砂（Ⅱ）遺跡	柏市大青田水砂 1559 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	集落跡・包蔵地	早期（稲荷台・三戸・田戸下層・田戸上層・茅山）、前期（黒浜・諸磯・浮島・興津・前期未縄文）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰａ～Ⅳ・勝坂・中峠・加曽利ＥⅡ～Ⅲ）	水砂遺跡、中期前葉集落跡炉穴
26	水砂（Ⅰ）遺跡	柏市大青田水砂 1551 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	集落跡・包蔵地	早期（稲荷台・三戸・田戸下層・田戸上層・茅山）、前期（黒浜・諸磯・浮島・興津・前期未縄文）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰａ～Ⅳ・勝坂・中峠・加曽利ＥⅡ～Ⅲ）	水砂遺跡、中期前葉集落跡、炉穴
27	中山新田（Ⅲ）遺跡	柏市大青田字八両野 744 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	包蔵地	早期（撚糸文終末・茅山）、前期（諸磯ａ・ｃ・浮島）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅱ・Ⅲ・加曽利Ｅ）、晩期（安行 3a）	中山新田Ⅲ遺跡、炉穴、土坑
28	中山新田（Ⅱ）遺跡	柏市大青田字八両野 744 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	集落跡・包蔵地	早期（茅山）、前期（諸磯ａ・ｃ・浮島Ⅰ～Ⅲ・興津・前期未縄文）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰｂ～Ⅳ・勝坂・中峠・加曽利ＥⅡ～Ⅲ）、後期（加曽利Ｂ・安行）、晩期（安行３Ｃ・大洞Ａ併行）	中山新田Ⅱ遺跡、中期前葉集落跡、陥穴

No.	遺跡名	所在地	水系	遺跡種別	前期遺構等	備　考
29	中山新田（Ⅰ）遺跡	柏市十余二 572 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	集落跡・貝塚・包蔵地	早期（井草～稲荷台・三戸・田戸下層・子母口～茅山上層以降）、前期（関山Ⅱ・黒浜・諸磯ｂ・浮島Ⅱ・Ⅲ・興津・前期未縄文）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰａ～Ⅳ・勝坂・中峠・加曽利ＥⅢ）、後期（称名寺・堀之内・加曽利Ｂ・安行１・２）、晩期（大洞Ａ併行）	中山新田Ⅰ遺跡、中期前葉集落跡、炉穴
30	聖人塚遺跡	柏市大青田字聖人塚 694 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	集落跡・包蔵地	早期（夏島・田戸下層・子母口～茅山上層以降）、前期（黒浜・諸磯ａ～ｃ・浮島Ⅱ・Ⅲ・興津・前期未縄文）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰａ～Ⅳ・勝坂・中峠・加曽利ＥⅢ）、後期（称名寺・堀之内・加曽利Ｂ・安行１・２）、晩期（大洞Ａ併行）	聖人塚遺跡、中期前葉集落跡、炉穴
31	元割遺跡	柏市青田新田飛地字元割 212 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	包蔵地	中期（勝坂）	元割遺跡、旧石器終末～草創期の石槍・植刃
32	出山遺跡	柏市大青田出山全区他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	包蔵地	中期（勝坂・加曽利Ｅ）、後期（加曽利Ｂ１）	
33	稲荷山遺跡	柏市大青田稲荷山 296 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	包蔵地	中期（阿玉台）	
34	小川向遺跡		古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	包蔵地	前期（浮島Ⅲ・諸磯ｂ）、中期（阿玉台・加曽利Ｅ）	
35	川津台遺跡	柏市大青田川津台 1387 他	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	包蔵地	中期（阿玉台・加曽利ＥⅡ）	
36	大山遺跡	柏市大青田小渡 1603 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	中期（阿玉台・加曽利Ｅ）	
37	正連寺貝塚	柏市正連寺内山 420 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡・貝塚	前期（黒浜）	遺構内貝層？
38	北花崎遺跡	柏市花野井北花崎 746 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	後期（加曽利Ｂ）	
39	田中小遺跡	柏市大室中野台 1256	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡	前期（黒浜）、中期（阿玉台）、後期（安行）	住居跡、堀立建物跡
40	尾井戸（Ⅰ）遺跡	柏市花野井尾井戸 1827 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡	早期（鵜が島台・茅山上層）、前期（関山・黒浜・諸磯・浮島）、中期（加曽利Ｅ）	住居跡
41	尾井戸（Ⅱ）遺跡	柏市花野井尾井戸 1764 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	早期（茅山）、前期（関山）、中期（阿玉台・加曽利Ｅ）	
42	寺前遺跡	柏市花野井寺前一帯	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡・貝塚	前期（黒浜・浮島）、中期（加曽利Ｅ）、後期	住居跡
43	原（Ⅰ）遺跡	柏市花野井原 970 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	中期（加曽利Ｅ）	
44	原（Ⅱ）遺跡	柏市花野井丸山 1070 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	中期、後期	
45	三畝割遺跡	柏市花野井三畝割 1179 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	早期、後期	
46	塩辛遺跡	柏市花野井塩辛 1414 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	早期（茅山）、前期（黒浜・興津）、中期（阿玉台・加曽利Ｅ）	
47	上前留遺跡	柏市花野井字上前留	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡	黒浜住居３	
48	香取神社遺跡	柏市花野井字西高野	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡	黒浜住居１	
49	宿連寺遺跡	柏市宿連寺木戸ノ内 344 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡・包蔵地	前期（黒浜）、中期（阿玉台・加曽利Ｅ）、後期（安行）	住居跡
50	鴻ノ巣（Ⅱ）遺跡	柏市十余二字鴻ノ巣	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡・貝塚	黒浜住居 20・遺構内貝層	
51	南原遺跡	柏市松ヶ崎南原 1083-1 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	前期	
52	八幡遺跡	柏市松ヶ崎八幡 328 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡	前期（黒浜）	住居跡
53	松ヶ崎（Ⅰ）遺跡	柏市松ヶ崎井戸作 419 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡	前期（黒浜）	前期中葉集落跡？、遺構内貝層？、炉穴
54	松ヶ崎（Ⅱ）遺跡	柏市松ヶ崎八幡 351 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡	前期（黒浜）	住居跡
55	谷中上遺跡	柏市高田谷中上 790 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	包蔵地	前期、後期（加曽利Ｂ）	
56	殿内遺跡	柏市高田西下ノ台 1030 他	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡	前期（浮島）、中期（加曽利Ｅ）	住居跡
57	青田第Ⅱ遺跡	流山市青田 140 他	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	包蔵地	中期（阿玉台、加曽利Ｅ）	

中世

中世の須賀井遺跡周辺は、下総国相馬郡に含まれていたと考えられる。相馬郡衙推定地は我孫子市日秀西遺跡が比定されており、対して須賀井遺跡は相馬郡の西端近くに位置することになる。古代からなお引き続き、手賀沼も広大な香取の海の一部として、海運往来が盛んであったと考えられる。

10世紀初頭に成立した延喜式に

―井上駅に十疋、浮島駅・河曲各駅に五疋、茜津・於賦駅に各十疋の馬を置く―

とあり、現在の市川にあったと推定される国府から常陸国へ向かう東海道上に所在する各駅に馬を置くという内容であるが、この茜津が手賀沼西側に所在したと推定されている。

古代から中世に時代が下っても手賀沼西側は、常陸方面への陸上交通の要衝であり、また、これより北では香取の海が広がり、その水上運輸の起点となる「津」（港湾）が存在し、当地域の発展を担っていたと考えられる。

そのような交通の動脈に接する地金堀と大堀川が合流する地点の台地先端に松ヶ崎城がある。城は小規模な単郭構造で、遺構は虎口、土塁、堀、腰曲輪や古墳を利用したと思われる櫓台が比較的良好に現存する。この城は15世紀後半から16世紀前半には築造されたとされるが、確たる文献資料はないものの、当地域の有力武士の本城であったであろう。

一方、調査事例を遺跡周辺で探すと、北方およそ２㎞に所在する富士見遺跡、駒形遺跡をはじめ、整理作業中だが小山台遺跡、寺前遺跡などの大規模土地区画整理事業に伴う面的調査事例が挙げられる。

富士見遺跡では３地点で台地整形区画を確認し、地下式坑、井戸、方形竪穴遺構、溝状遺構、多数の土坑が検出された。遺物は内耳土器、土器擂鉢を主体とする在地産土器がもっとも多く、それに古瀬戸平碗、折縁深皿、卸目付大皿、皿類や量的には少ない常滑産の甕や片口鉢、輸入磁器などが加わる。報告では年代の特定が容易な瀬戸製品から判断して古瀬戸後Ⅲ期（15世紀前半）にほぼ収まるとしている。

駒形遺跡では地下式坑、土坑、溝状遺構、道路跡が、寺前遺跡では台地整形区画、地下式坑、堀、溝、土坑、火葬跡が検出されている。

また、松ヶ崎城跡の地金堀を隔てた対岸には、中馬場遺跡や法華坊遺跡がある。

法華坊遺跡は現在では完全に姿を消してしまっているが、土塁や腰曲輪で囲まれた単郭の城跡が認められた。

中馬場遺跡では、大規模な発掘調査が行われ、縦横に走る溝状遺構と、それによって区切られた区画内に建物跡群、柱穴群、井戸跡、多数の土坑、地下式坑などが検出された。出土遺物のうち焼き物には瀬戸窯産の平碗、天目茶碗、皿、盤、擂鉢、花瓶、水差し、常滑窯産の甕、青磁・白磁の中国陶磁、カワラケ、内耳土器、擂鉢などの在地産の土器などが多量に出土している。

さらに、中世板碑の分布を見ると、須賀井遺跡直近の若柴長覚寺には「正和（1312 ～ 1316）」銘の種子板碑が出土しているのを一例として、手賀沼沿岸および手賀沼水系の大堀川、地金堀、大津川に面した台地上にその分布域が見られる。

しかし、手賀沼西側からかなり奥まった須賀井遺跡周辺には総じて大規模な中世遺跡は希薄である。

参考文献

（財）千葉県都市公社　1974 『柏市鴻ノ巣遺跡』

（財）千葉県文化財センター　1982 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－館林、水砂、花前Ⅱ－１－』

（財）千葉県文化財センター　1984 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ－』

（財）千葉県文化財センター　1985 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－花前Ⅱ－１・花前Ⅱ－２・矢船－』

（財）千葉県文化財センター　1986 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－元割・聖人塚・中山新田Ⅰ－』

（財）千葉県教育振興財団　2007 『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書１－柏市溜井台遺跡－』

（財）千葉県教育振興財団　2009 『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書２－柏市原山遺跡－　旧石器時代編』

（財）千葉県教育振興財団　2011 『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書３－柏市農協前遺跡－　旧石器時代編』

（公財）千葉県教育振興財団　2012 『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書４－柏市大割遺跡・須賀井遺跡－旧石器時代編』

（公財）千葉県教育振興財団　2013 『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書５－柏市原山遺跡－縄文時代以降編』

千葉県教育委員会　2015 『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書６－柏市大割遺跡・農協前遺跡－　縄文時代以降編』

（財）千葉県教育振興財団　2008 『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書１－柏市大松遺跡－　旧石器時代編』

（財）千葉県教育振興財団　2009 『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書２－柏市駒形遺跡－　縄文時代以降編1』

（財）千葉県教育振興財団　2011 『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書３－柏市原畑遺跡－　縄文時代以降編1』

（財）千葉県教育振興財団　2011 『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書４－柏市大松遺跡－　縄文時代以降編1』

（公財）千葉県教育振興財団　2013 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書５－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編２』

（公財）千葉県教育振興財団　2014 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書６－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編１』

（公財）千葉県教育振興財団　2015 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書７－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編２』

（公財）千葉県教育振興財団　2015 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書８－柏市富士見遺跡・原畑遺跡・駒形遺跡－旧石器時代編』

（公財）千葉県教育振興財団　2016 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書９－柏市大松遺跡－縄文時代以降編２』

柏市教育委員会　1997 『柏市史　原始・古代・中世編』

柏市教育委員会　2000 『平成10年度　市内遺跡発掘調査報告書』

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会　2000 『手賀沼が海だった頃－松ヶ崎城と中世の柏北域－』たけしま出版

第２章　調査の成果

第１節　遺跡の概要（第６図）

縄文時代の遺構としては前期の竪穴住居跡１軒とピット群及びピット２基、陥穴７基が検出された。

中世から近世初頭の遺構としてはほぼ３地点（およそ4,700㎡）に集中する傾向にある。また、その集中地点は調査前には畑の小さな段差として現代にその名残をとどめていたことが結果として分かった。それぞれの集中地点は緩やかに東方向に傾斜するローム地山を整形し、平坦面を造り出し区画し、さまざまな遺構が混在することから、北から順に第1、第２、第３区画と分類し、これらの区画以外の地点については区画外として、それぞれの特徴を記述した。

この台地整形区画は基本的には掘立柱建物、地下式坑、井戸、火葬施設（墓）ほか多数の土坑、溝から構成される。第1区画では掘立柱建物跡４棟・地下式坑６基・井戸３基・土坑63基・溝11条、第２区画では地下式坑７基・井戸４基・火葬施設（墓）２基・土坑60基・溝４条、第３区画では掘立柱建物跡２棟・地下式坑・大型土坑８基・井戸３基・火葬施設（墓）５基・土坑60基、区画外では地下式坑３基・土坑13基・溝３条がみつかっている。

第２節　縄文時代

第８次調査地点の33FF大グリッドから34FF大グリッドにまたがる地点の北側に、縄文時代前期の竪穴住居跡１軒とピット群及びピットが２基検出され、その他に陥穴７基が調査対象範囲の全面に点在している。

１　竪穴住居跡

(8) SI001（第７図、図版２・21）

遺跡の北側33FF-98グリッドに位置し、後述する（8）SI002と重複あるいは隣接している。長軸4.55m、短軸3.61m、深さ12㎝を測る。平面形態は楕円形であるが、多少各辺がうねった感じのアメーバ状で、長軸方向はN-34°-Eである。覆土は暗褐色土をマーブル状に含む褐色土が主体である。炉はなく、柱穴と考えられるピットが８基検出されている。

遺物は前期の縄文土器と土製品が出土している。土器は地文が縄文のみのものがほとんどで、沈線文や竹管文をもつものは少数である。胎土は植物繊維を多量に含むものが大半であり、焼成はやや不良のものが過半数を占める。色調は黄褐色から黒褐色を呈するものが多い。器面調整として、外面はナデがなされているものが多く、内面はナデおよびケズリ後にミガキがなされているものが多い。図示した土器はいずれも黒浜式である。

１はヘラ状工具によるコンパス文が口唇部に施されている。２・３は竹管による円形刺突文が横位に施されており、３は口唇部がやや膨らみ、わずかに外反している。４・５は右巻きL、６は左巻きRの撚糸文が施されており、６は口唇部が外削ぎによって形成されている。７～９は地文が縄文のみである。７は胎土に砂礫を多く含み、縄文は単節LRである。８は単節LRの縄文を有し、口唇部断面はヨコケズリ及びヨコナデにより角状を呈している。９は単節RLをもち、口唇部はヨコケズリされて、器厚が薄くなっている。10は沈線状の刺突文、11は半截竹管による複列の押引文と斜行沈線が施され、口唇部は内削ぎによって形成されている。12、13はヘラ状工具による斜行沈線が施されており、葉脈文の一部であると考えられる。

14・15は半截竹管による平行沈線文を有する。16はアナダラ属の貝殻を2枚合わせて施した貝殻腹縁文を有する。17は半截竹管によって平行沈線に挟まれた爪形文が施され、地文に単節RLの縄文を有する。

18～40は縄文もしくは撚糸文を有する胴部片であり、18は無節の縄文Rが施されている。19は２種の撚糸文が施されており、上部は左巻きで節の細いL、下部は右巻きで節の太いLである。21は無節縄文の原体圧痕がみられる。24・25は同一個体と考えられ、単節LR（直前段多条）が26・27は同一個体と考えられ、単節LRが施されている。28・29は単節縄文の圧痕を有し、外面に擦痕がみられる。31は内面に丁寧なミガキがなされている。33は単節LRが施され、内面は橙色を呈しており、調整として縦位のヘラケズリ、横位にナデ、丁寧なミガキがなされている。35は縦位の単節LR（直前段多条）が施されている。36は２種の縄文を有し、上部は横位の単節LR（前々段多条）で、下部は横位の単節LRである。40は２種の撚糸文を有し、下部は２条を組みにして左に巻きつけたL、上部に右巻きのR（直前段多条）である。外面はナデ、内面は横位のヘラミガキがなされている。41は上げ底がなされており、内外面ともミガキがなされている。

42・43は土製円盤である。42は器面が内湾していることから土器からの転用と考えられる。43は灰色を呈しており、器面は磨かれている。

出土した遺物はいずれも覆土から出土しており、本住居の帰属時期の資料とするには十分とはいえないが、出土した土器から黒浜式期の可能性が高い。

２　ピット群・ピット

(8) SI002（第８図、図版２）

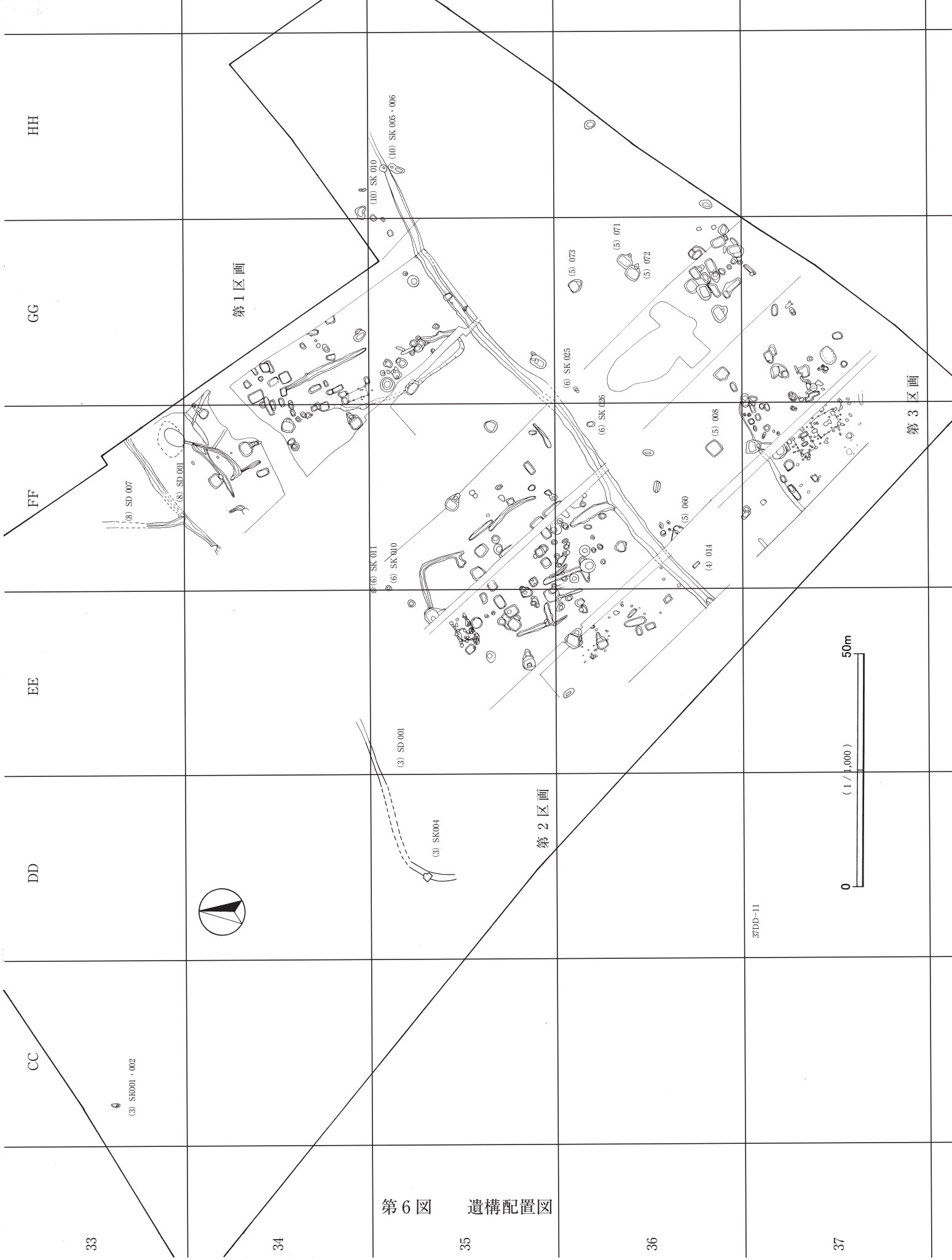
遺跡の北側33FF-97グリッドに位置し、(8) SI001と重複あるいは隣接している。壁の立ち上がり、炉も確認できなかったが、調査の段階では、柱穴と考えられるピット６基を検出したため、破線で推定したような竪穴住居跡と判断した様である。しかし、出土した遺物もないことから時期は不明で、積極的に住居跡であるという根拠も薄弱なため、近接する (8) SI001の付随施設の可能性も含め、縄文時代のピット群として報告する。

(8) SH005（第８図、図版 21）

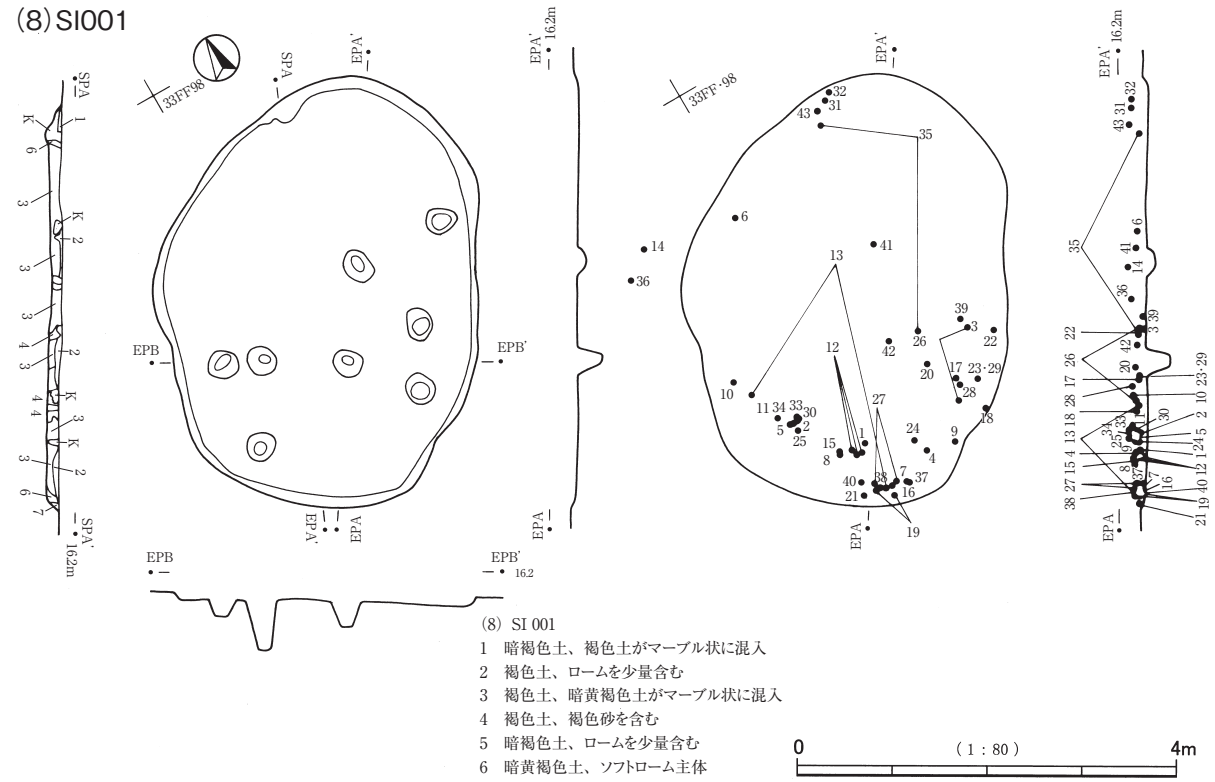
遺跡の北側34FF-06グリッドに位置し、近接するグリッドには、(8) SI001や (8) SI002がある。縄文土器がまとまって出土したことから、縄文時代のピットと判断した。他にピットは検出されなかったが、竪穴住居跡の一部の可能性もある。長軸0.57m、短軸0.45m、深さ19㎝を測る。平面形態はほぼ円形に近い楕円形で、主軸方向はN-25°-Eである。覆土は、上層に褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。

土器２点を図示した。遺構外の近接した地点の遺物と接合する。いずれも黒浜式である。１は単節LRの縄文が施されている。焼成はやや不良で、胎土に植物繊維を多量に含む。口唇部はケズリおよびナデがなされており、断面が角丸状を呈している。内外面ともにヨコケズリ後にヨコナデがなされている。２は横位および斜位の単節RLの縄文が施されている。焼成は良好で、外面は橙色を呈しており、胎土に植物繊維を多量に含む。内外面ともにヨコケズリ後にヨコナデがなされており、内面はさらにミガキがなされている。

本遺構の帰属時期は、出土した土器から黒浜式期の可能性が高い。

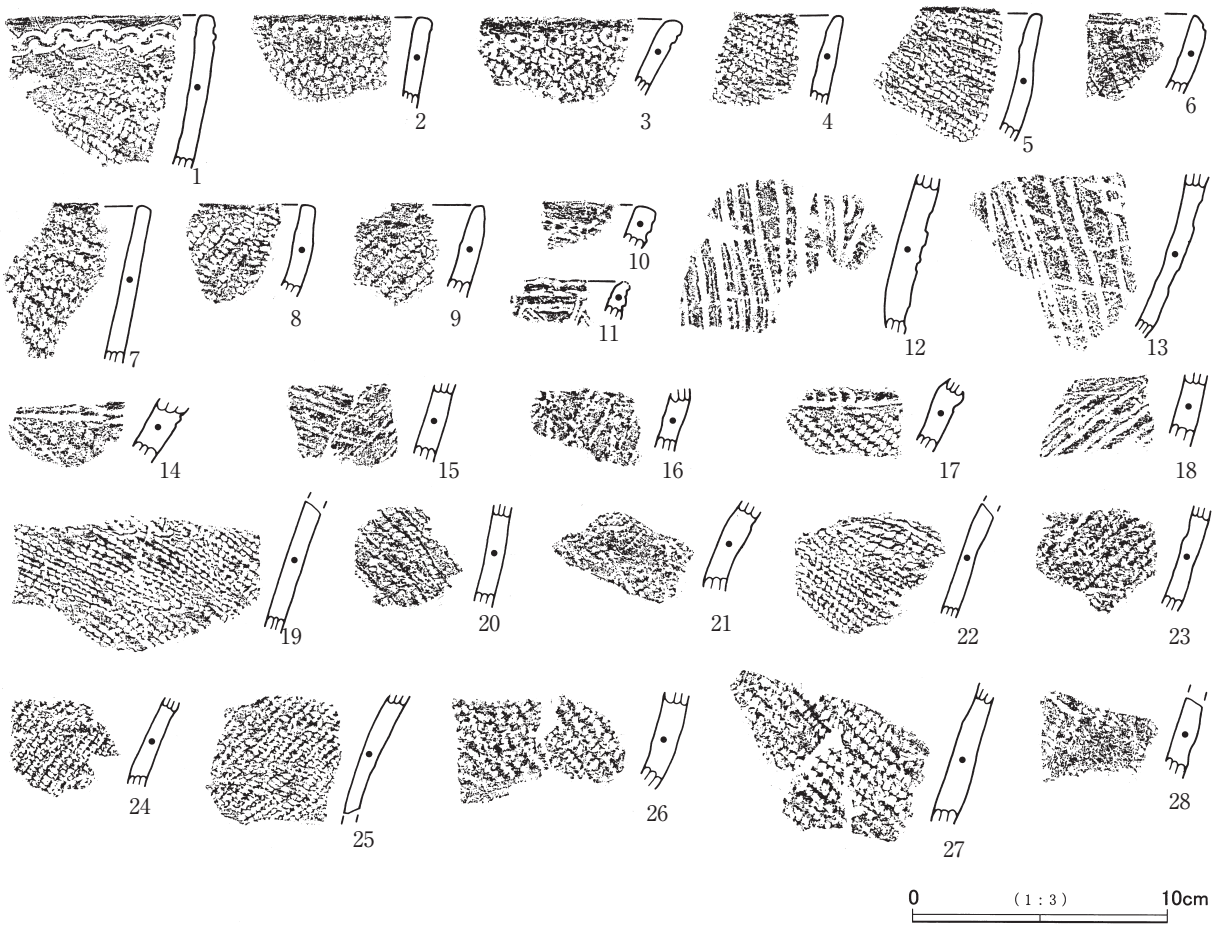

HH
GG
FF
EE
DD
CC
33
34
35
36
37
第1区画
第2区画
第3区画
(8) SD 007
(8) SD 001
(3) SK001・002
(6) SK 011
(6) SK 010
(10) SK 010
(10) SK 005・006
(3) SD 001
(3) SK004
(6) SK 025
(6) SK 026
(5) 073
(5) 071
(5) 072
(5) 060
(5) 008
(4) 014
37DD-11
0
50m
(1/1,000)

第6図　　遺構配置図



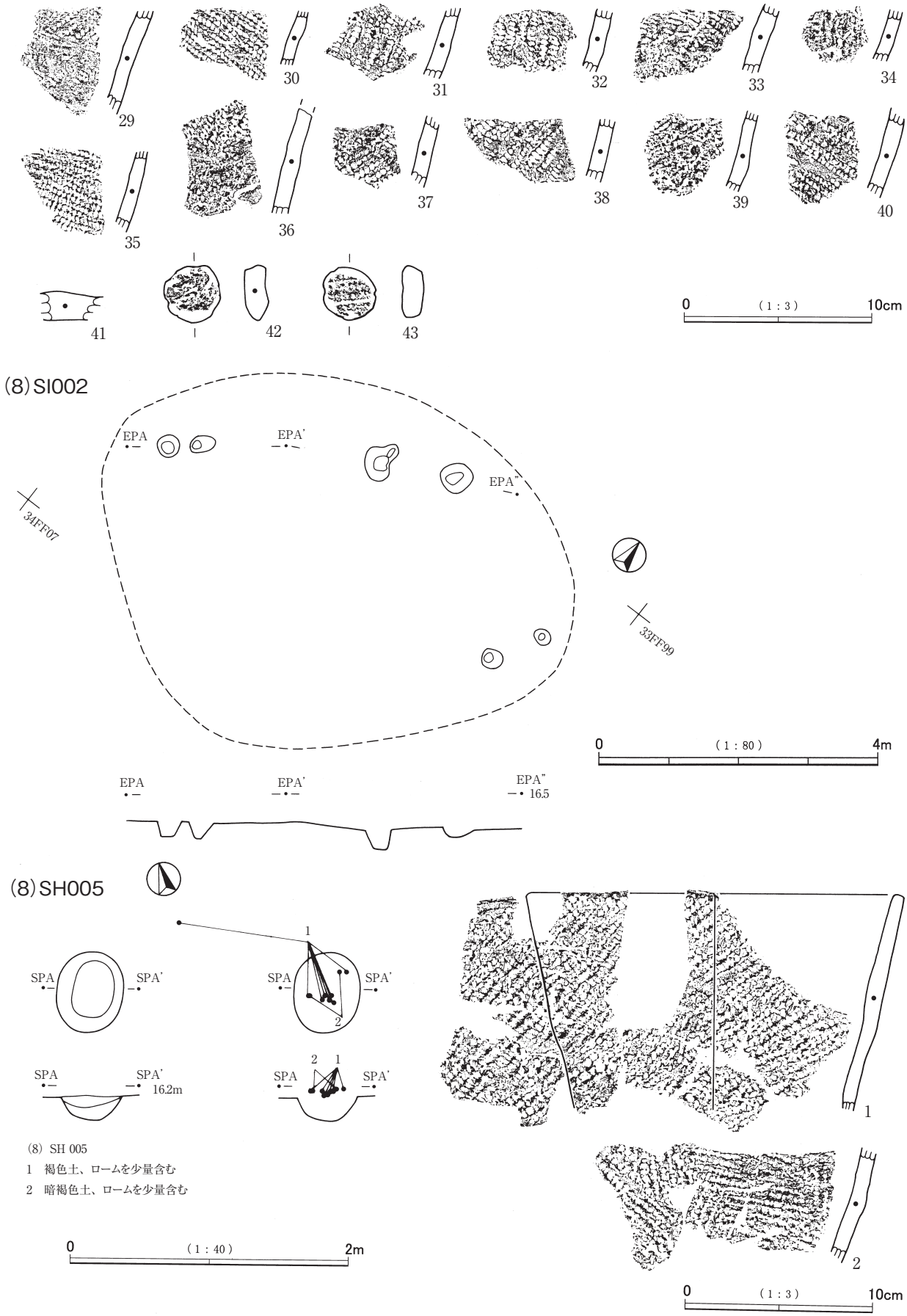
(8) SI 001
1 暗褐色土、褐色土がマーブル状に混入
2 褐色土、ロームを少量含む
3 褐色土、暗黄褐色土がマーブル状に混入
4 褐色土、褐色砂を含む
5 暗褐色土、ロームを少量含む
6 暗黄褐色土、ソフトローム主体
7 褐色土

0 (1:80) 4m



0 (1:3) 10cm

第7図　縄文時代竪穴住居跡（1）



第８図　縄文時代竪穴住居跡（2）・ピット群・ピット

3　陥穴

(8) SK011A（第９図、図版２）

34GG-93グリッドに位置する。縄文時代の陥穴と中世の土坑が絡んでいて、調査段階では同じ番号を付していたので、整理段階で縄文時代の陥穴を（8）SK011Aとし、中世の土坑をBとした。平面形態は楕円形で長軸2.88m、推定短軸1.50m、深さ1.32mを測る。長軸方向はN-52°-Wである。覆土は黒褐色土や灰褐色土が主体である。

(4) 001（第９図、図版２）

36EE-14グリッドに位置する。平面形態は楕円形で長軸2.46m、短軸1.28m、深さ2.22mを測る。長軸方向はN-43°-Wである。覆土はロームが主体である。

(4) 012（第９図、図版２）

36EE-89グリッドに位置する。平面形態は楕円形で長軸不明、短軸1.32m、深さ2.02mを測る。長軸方向はN-33°-Eである。覆土は黒色土が主体でロームを含む。

(7) SK001（第９図、図版２）

36HH-25グリッドに位置する。平面形態は円形に近い楕円形で長軸2.20m、短軸1.78mで、深さは湧水による水没のため不明である。長軸方向はN-14°-Wである。覆土は上部から中部にかけては黒褐色土や暗褐色土、下部はロームが主体である。

(5) 054（第９図、図版２）

36FF-57グリッドに位置する。平面形態は楕円形で長軸2.31m、短軸1.37m、深さ1.90mを測る。長軸方向はN-10°-Eである。覆土のしまりは良く、下部はロームが主体である。

(5) 078（第９図、図版２）

36FF-55グリッドに位置する。平面形態は楕円形で長軸2.72m、短軸1.14m、深さ2.23mを測る。長軸方向はN-97°-Eである。覆土のしまりは悪く、下部はロームが主体である。

(5) 084（第９図）

35GG-92グリッドに位置する。平面形態は楕円形で長軸3.50m、短軸2.42m、深さ2.46mを測る。長軸方向はN-29°-Eである。覆土は黒褐色土や暗褐色土が主体である。

4　遺構外出土縄文土器・土製品

33FF-54・55や34FF-12・13・23などまとまって出土したグリッドやその他のグリッドから出土した縄文土器、中・近世の遺構などに混在していた縄文土器および土製品について説明する。

縄文土器は前期中葉から晩期までのものが出土しているが、大半が前期の黒浜式土器である。土製品は土製円盤や土器片錘のほか、前期の黒浜期と考えられる用途不明の遺物が出土している。

縄文土器は以下のように分類する。

第Ⅰ群土器　黒浜式土器

第Ⅱ群土器　前期後葉土器

第Ⅲ群土器　中期土器

第Ⅳ群土器　後・晩期土器

第Ⅰ群土器　黒浜式土器（第10・11図１～44、図版22）

本群の土器の胎土は植物繊維を多量に含むものがほとんどであり、焼成は若干不良もしくはやや不良と

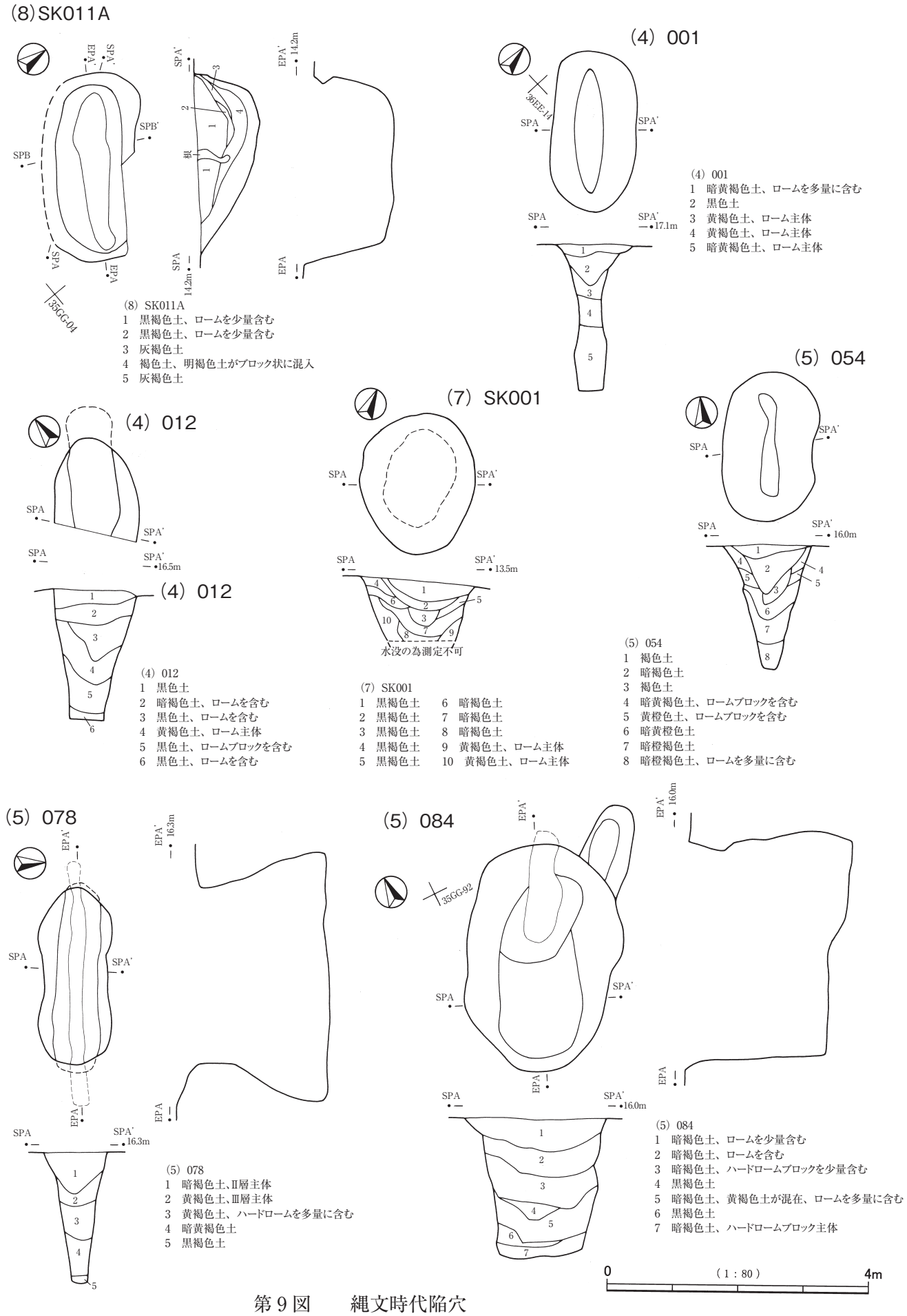
されるものが大半である。色調は黄褐色から黒褐色を呈するものが多い。器面調整として、外面はヨコケズリ後にナデがなされているものが多く、内面はケズリないしはナデの後にミガキがなされているものが多い。

1は無節Rの縄文を地文とし、竹管による円形刺突文が施されている。口唇部および内面の調整は丁寧になされており、口唇部断面は角状を呈している。2は口唇部に半截竹管による押引文が施され、地文として網目状撚糸文を有する。3はコンパス文が施されており、口唇部に丁寧なミガキがなされ、断面は角丸状を呈している。4～8は地文が縄文の口縁部であり、4は無節Rの縄文を有する。5・6は附加条LR＋Lを有している。5の口唇部は内削ぎによって形成されている。6は口唇部の一部を指頭で上から斜方向に押し込まれており、わずかな起伏を呈している。7は口唇部がわずかに外反する形態であり、地文に無節Lを有する。8は単節RLと単節LRが羽状を呈するように施されている。器面が摩耗しているため判然としないが、附加条RL＋LRであろう。10・11は半截竹管による平行沈線で描いた大型菱形文の一部であると考えられる。11は菱形文に重複するように斜行する条線を有している。14は先端が丸状の工具によりコンパス文が描かれている。12・13・15～18は葉脈文を構成すると考えられる斜行沈線文を有し、12・15・17・18は半截竹管による施文である。13は斜位に施された単節LRの縄文をもつ。16は幅広で浅い沈線が、縦位と斜位に施されている。器形は上部においてゆるやかに外反する。17は葉脈文を切るように半截竹管による連続刺突文が施されている。19は横位の集合沈線文が施されている。

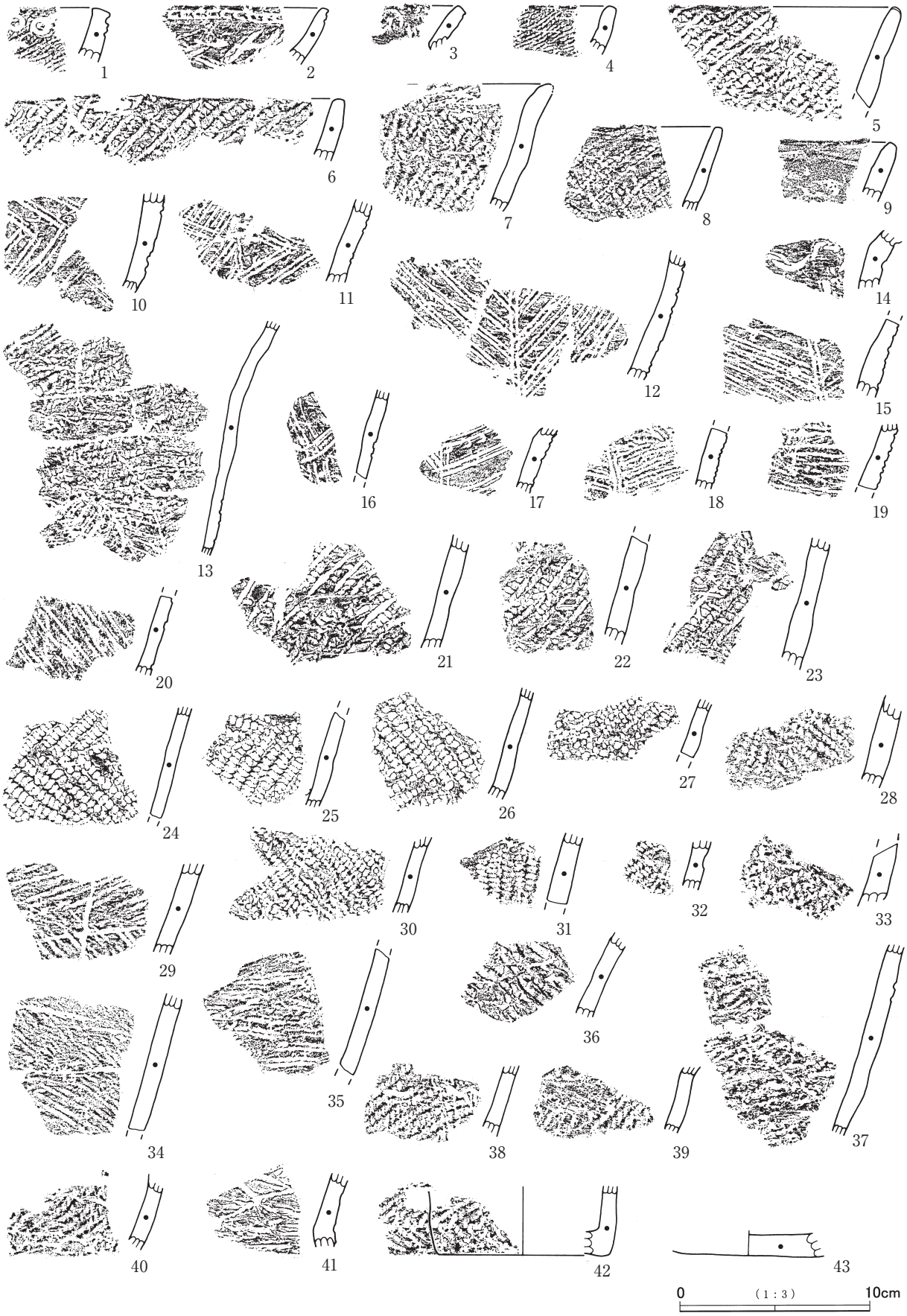
20～40は縄文のみ施文されている胴部片であり、20～23はいずれも横位の附加条LR＋Lである。24～29は縄文が羽状を呈しており、24は横位の単節LRとRL、25と27は縦位と横位の単節LR、26は横位と縦位の単節RL、28は縦位と縦位のRL、29は横位と縦位の無節Rである。24～27はいずれも内面にミガキがなされており、26は特に縦位のミガキ痕が明瞭にみられる。30～33は単節縄文が施されており、30は横位の単節RL、31は斜位の単節LR、32と33は横位の単節LRである。33は指頭による圧痕がみられる。30・33の内面は丁寧なミガキがなされており、30は縦位方向にヘラ状工具のミガキ痕がみられる。34～40は無節の縄文が施されており、36は無節Lであり、内面にミガキがなされている。41は単絡条体第5類の網目状撚糸文が施されている。42・43は底部片であり、42は無節の結束縄文（LとR）が横位に施されている。44は胴部から底部であり、半截竹管による短沈線が横位に施されている。

第Ⅱ群土器　前期後葉土器（第11図45～51、図版23）

45～47は浮島式である。45は浮島Ⅱ～Ⅲ式の深鉢であり、口縁部がわずかに外反する。胴部に放射肋をもたないハマグリなどの貝殻によって、器面に垂直に立てて左右に支点を変えながら刺突するロッキング手法で描出した鋸歯状の貝殻腹縁文を有する。口唇部にはわずかに斜行する2条のキザミが施されている。口縁部から胴部に明瞭な輪積痕を残し、内外面ともヨコケズリ、ヨコナデ後にミガキがなされている。器面はにぶい黄橙色を呈するが、口縁部に近づくにつれて灰黄褐色がまだらに入る。46は浮島Ⅰa～Ⅰb式であり、半截竹管による平行沈線によって鋸歯状文が施されている。47は細かい鋸歯状の貝殻腹縁文が2条施されている。48は興津式であり、口縁部にアナダラ属の貝殻によって縦位に施された貝殻腹縁文や、同貝殻によるキザミが施された隆線を有する。口縁部は4単位の波状を呈し、波頂部を形成する際の接合痕を明瞭に残している。49は浮島式と考えられる無文の口縁部から胴部であり、明瞭な輪積痕を残す。胎土は砂粒を非常に多く含む。50～51は前期末に属すると考えられ、口唇部にキザミを有し、結節縄文の原体圧痕がみられる。胎土は砂礫を含み、橙色を呈している。


(8)SK011A
SPA'
EPA'
SPB'
SPB
SPA
EPA
35GG-04
SPA'
SPA
14.2m
EPA'
14.2m
EPA
根
(8) SK011A
1 黒褐色土、ロームを少量含む
2 黒褐色土、ロームを少量含む
3 灰褐色土
4 褐色土、明褐色土がブロック状に混入
5 灰褐色土
(4) 001
35EE-14
SPA
SPA'
SPA
SPA'
17.1m
(4) 001
1 暗黄褐色土、ロームを多量に含む
2 黒色土
3 黄褐色土、ローム主体
4 黄褐色土、ローム主体
5 暗黄褐色土、ローム主体
(4) 012
SPA
SPA'
SPA
SPA'
16.5m
(4) 012
(7) SK001
SPA
SPA'
SPA
SPA'
13.5m
水没の為測定不可
(7) SK001
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土
5 黒褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
8 暗褐色土
9 黄褐色土、ローム主体
10 黄褐色土、ローム主体
(5) 054
SPA'
SPA
SPA
SPA'
16.0m
(5) 054
1 褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 暗黄褐色土、ロームブロックを含む
5 黄橙色土、ロームブロックを含む
6 暗黄橙色土
7 暗橙褐色土
8 暗橙褐色土、ロームを多量に含む
(4) 012
1 黒色土
2 暗褐色土、ロームを含む
3 黒色土、ロームを含む
4 黄褐色土、ローム主体
5 黒色土、ロームブロックを含む
6 黒色土、ロームを含む
(5) 078
EPA'
EPA'
16.3m
SPA
SPA'
EPA
EPA
SPA
SPA'
16.3m
(5) 078
1 暗褐色土、Ⅱ層主体
2 黄褐色土、Ⅲ層主体
3 黄褐色土、ハードロームを多量に含む
4 暗黄褐色土
5 黒褐色土
(5) 084
EPA'
EPA'
16.0m
35GG-92
SPA
SPA'
EPA
EPA
SPA
SPA'
16.0m
(5) 084
1 暗褐色土、ロームを少量含む
2 暗褐色土、ロームを含む
3 暗褐色土、ハードロームブロックを少量含む
4 黒褐色土
5 暗褐色土、黄褐色土が混在、ロームを多量に含む
6 黒褐色土
7 暗褐色土、ハードロームブロック主体
0
(1 : 80)
4m

第９図　　縄文時代陥穴



第 10 図　　縄文時代遺構外出土遺物（1）

第 11 図　　縄文時代遺構外出土遺物（2）

第Ⅲ群土器　中期土器（第11図52～68、図版23）

52 ～ 61は中期中葉の阿玉台式土器であり、胎土に雲母や砂礫を含むものが多い。52 ～ 55・57・58は阿玉台Ｉb式であり、52は波状沈線を有し、輪積痕上にヒダ状圧痕が施されている。53は口縁部に角押文によるモチーフが描かれており、口唇部と直交するようにキザミが内面から施されている。54はV字状の突起を有しており、垂下する突起に沿って単列の角押文が施されている。また口唇部はヘラ状工具による刺突文を有する。55は無文の口縁部である。器厚は薄く、内外面ともにケズリおよびナデがなされている。57は隆帯に沿って単列および複列の角押文が施されている。58は垂下する隆帯を有し、浅い節をもつ沈線文がU字状に施されている。56・59は阿玉台Ⅱ～Ⅲ式であり、56は口唇部に突起を有し、その直下に抉りの入った突起を有する。また突起および隆帯を挟むように、先端を尖状に加工した半截竹管による角押文が施されている。外面は橙色を呈しており、口縁部の内面はミガキがなされている。60は胎土に雲母や砂礫を顕著に含むことから阿玉台式期と考えられる。区画と思われる凹部がみられ、断面が三角状の隆帯を有する。

62 ～ 68は中期後葉の加曽利E式土器であり、いずれもⅢ～Ⅳ式に属すると考えられる。62は口唇部に横位の沈線が施され、単節LR（前々段多条）の縄文を有する。63は口唇部に稜を有し、直下に単節RL（前々段多条）の縄文が施されている。口唇部の内面は折り返し成形によって、一部わずかなふくらみを有する。64、65は地文に単節縄文（64はLR、65はRL）を有し、縦位の磨消文が施されている。66は楕円状を呈すると考えられる隆帯区画を有し、区画内に単節LRの縄文が施されている。68は器台付土器であり、4単位の円形の穿孔を有する。

第Ⅳ群土器　後・晩期土器（第11図69～76、図版23）

69は後期初頭の称名寺式土器であり、縦位の沈線による区画内に列状に継続すると考えられる刺突文を有する。71は後期前半の堀之内１式土器であり、わずかにふくらんだ形状をしている。地文に単節LRを有し、複列の沈線文によって三角形のモチーフを描出していると考えられる。72 ～ 74は堀之内２式の深鉢である。横位の沈線文を有しており、一部は入組状となっている。口唇部は逆「く」の字状に内反する。胎土に砂礫を含み、ケズリやナデの痕跡が明瞭に残っている。75は後期加曽利B式である。単節RLが磨消されており、口唇部に外面からの刻みと、横位の沈線文が施されている。76は晩期安行３c式である。えぐりとりによる三叉入組文を有しており、器面は丁寧なミガキがなされている。

土製品（第11図77～78、図版23）

77は土製品としたが、用途不明の遺物であり、土器片の可能性もある。土器口縁部のような形状で器面が内湾しており、端部には細い穿穴を有する。下部の両側に空間を有するようなT字形を呈しているため、土器ではなく土製品として報告した。胎土に植物繊維を多量に含み、内外面とも横位のナデおよびケズリ後にミガキがなされていることから、前期中葉の黒浜式期に属すると考えられる。78は土器片錘である。胎土から中期の中葉のものと考えられる。横位の沈線およびキザミ、地文として単節LRの縄文を有する。施文から中期中葉の加曽利EⅠ式のものを転用したと考えられる。

５　石器（第12～14図、第２表、図版24）

１～３はチャートの石鏃で、１は凸基、２は平基、３は凹基である。１は正面に最終的な仕上げ痕が集中しており、基部が欠損している。なお、石材については良質な珪質頁岩の可能性がある。２は右側縁の一部を除き、正面に最終的な仕上げ痕が集中している。先端部が欠損しており、裏面に縦溝状の衝撃剥離

痕がみられる。３は正面に最終的な仕上げ痕が集中しており、右の脚部が欠損している。

４は比較的硬質緻密なホルンフェルスの打製石斧である。上部と裏面器体右側が欠損している。

５は砂岩の定角式の磨製石斧である。両面に研磨残しと考えられる敲打（剥離）痕、基部と刃部に使用による剥離痕がみられる。６はホルンフェルスの磨製石斧である。刃部側が欠損している。正面側と裏面側の表皮の状態の差は顕著である。正面側の上部と裏面側全体の剥落（剥離）痕は使用による表皮上面の剥落の可能性もあるが、自然面を正面に残した破損礫などを素材とし、剥離面側の一部を研磨して形態を整えたものと考えたい。また、裏面や左側面の一部にみられる光沢痕は研磨によるものか磨耗によるものかは不明であるが、研磨痕の可能性が高いと思われる。なお、石材については緑色岩の可能性がある。

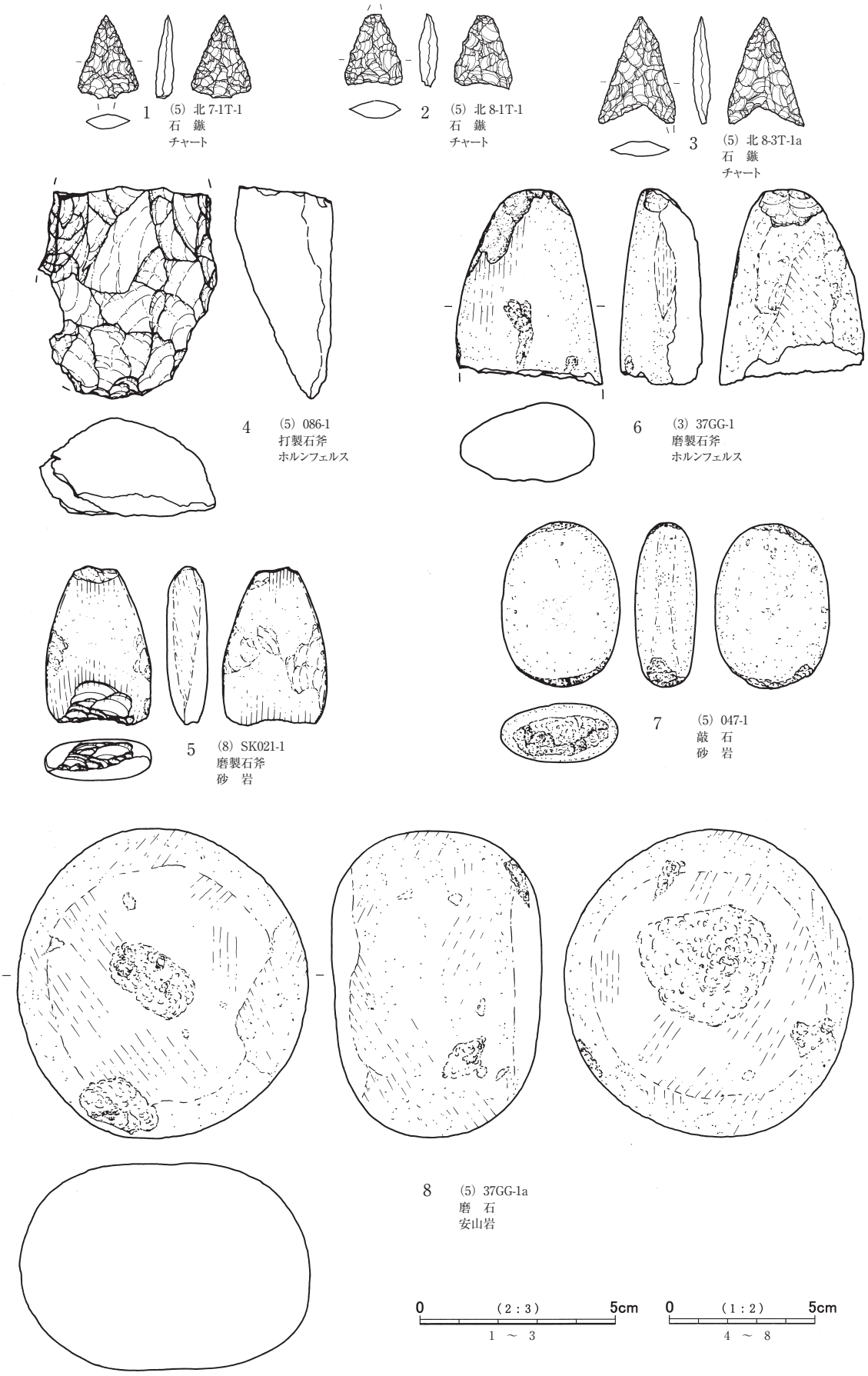
７は砂岩の敲石である。小型で偏平な楕円礫を素材とし、両端に浅い敲打痕がみられる。

８・９・12は安山岩、10・11・13は砂岩の磨石で、12・13は欠損している。８は大型で厚みがあり、９は小型で薄手の円形の磨石であるが、度重なる使用によって、元々は８のような形状のものが９のように変形したものかもしれない。両者とも両面に顕著な磨耗痕と浅い敲打痕、周辺に浅い敲打痕・わずかな磨耗痕がみられる。10は不定形な小型礫の左側縁上部と右側縁に表皮上面の一部が剥落したようなごく浅い敲打痕と細かい擦痕がみられる。11は比較的大型で偏平な楕円礫の両端・正面中央・右側縁の一部に10と同じような表皮上面の一部が剥落したようなごく浅い敲打痕がみられる。12は８や９と同様の部位に同様の磨耗痕や敲打痕がみられる。欠損品ではあるが、推定される直径や厚さなどの変異から８→12→９というように縮小・変形したことをうかがわせる資料である。13は両面と左側縁に浅い磨耗痕や浅い敲打痕がみられる。また、欠損面も含め、被熱により赤化している。

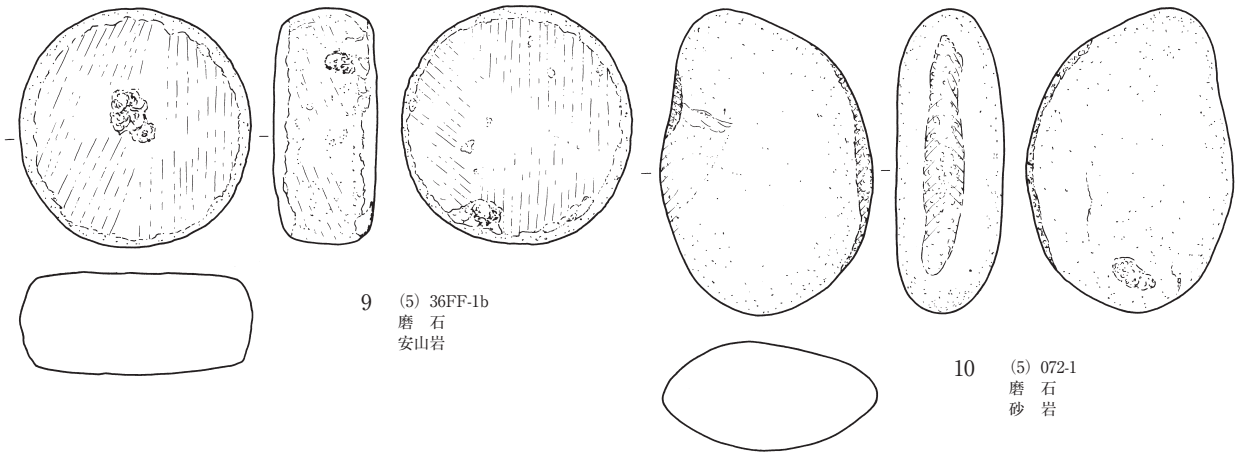
14・15は安山岩の凹石である。15は欠損部が多いため不明だが、14は両面の平坦面が周辺に比べると平滑で、使用による磨耗の可能性がある。また、両者とも濃淡の差はあれ、欠損面も含め表面に被熱に関係するものと考えられる黒色化がみられる。

第２表　石器属性表

挿図番号	遺物番号	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	備　考
第12図１	(5) 北7- 1 T- 1	石鏃	チャート	21.8	15.9	4.1	1.1	珪質頁岩か
第12図２	(5) 北8- 1 T-1	石鏃	チャート	19.3	15.1	4.8	1.2	
第12図３	(5) 北8-3T-1a	石鏃	チャート	28.1	20.3	4.1	1.7	
第12図４	(5) 086- 1	打製石斧	ホルンフェルス	73.5	61.3	33.8	145.5	
第12図５	(8) SK021- 1	磨製石斧	砂岩	54.8	36.2	13.7	41.0	
第12図６	(3) 37GG- 1	磨製石斧	ホルンフェルス	67.8	50.1	28.2	131.6	緑色岩か
第12図７	(5) 047-1	敲石	砂岩	57.1	40.4	20.9	65.7	
第12図８	(5) 37GG-1a	磨石	安山岩	106.7	99.2	72.1	1148.1	
第13図９	(5) 36FF-1b	磨石	安山岩	63.1	61.6	27.8	170.5	
第13図10	(5) 072-1	磨石	砂岩	80.9	56.8	28.8	170.3	
第13図11	(2) 9T-2	磨石	砂岩	103.1	67.6	34.4	372.2	
第13図12	(5) 007-2	磨石	安山岩	96.4	49.8	44.8	273.4	
第13図13	(5) 027-1a	磨石	砂岩	73.9	45.1	36.3	147.1	
第14図14	(5) 36FF-1a	凹石	安山岩	127.8	116.5	60.3	984.2	
第14図15	(5) 074-1a	凹石	安山岩	47.8	65.1	31.1	75.2	

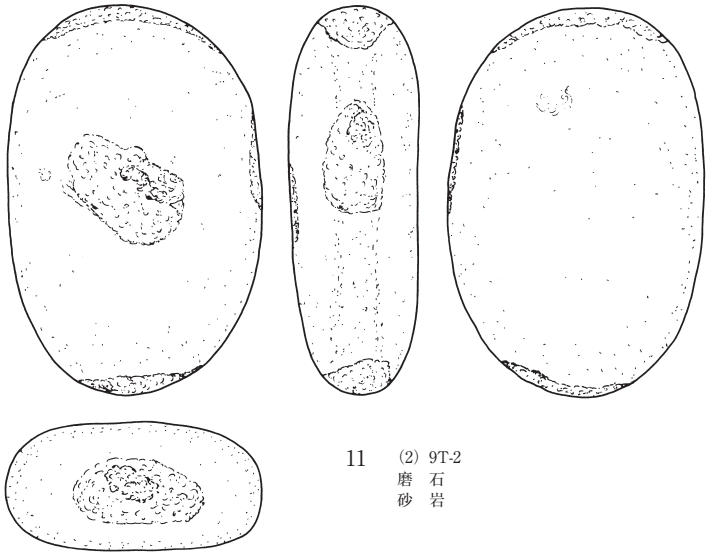


第12図　縄文時代石器（1）

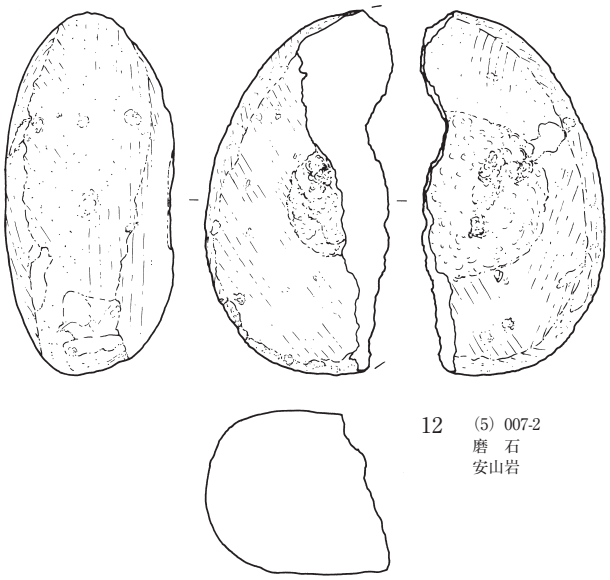


9　(5) 36FF-1b
磨　石
安山岩

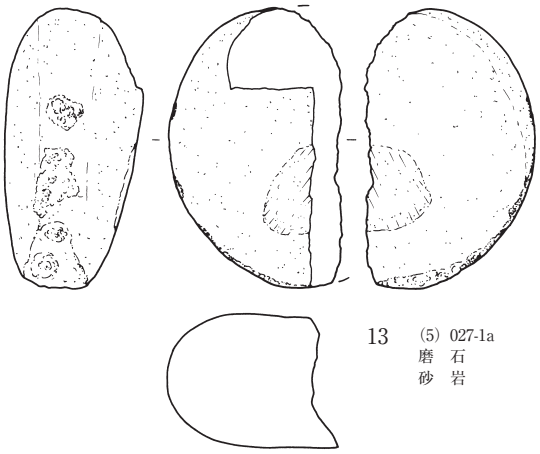
10　(5) 072-1
磨　石
砂　岩



11　(2) 9T-2
磨　石
砂　岩



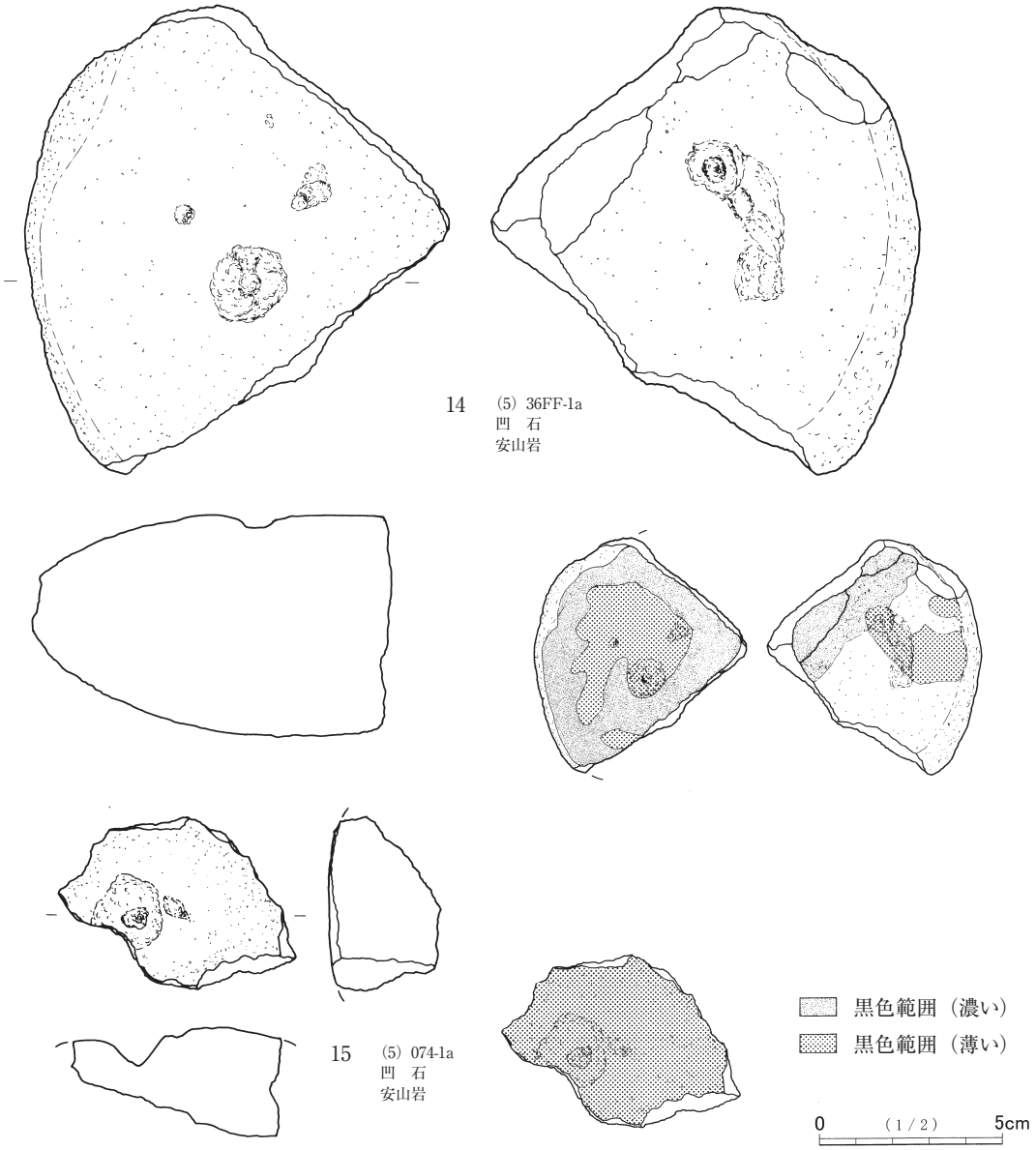
12　(5) 007-2
磨　石
安山岩



13　(5) 027-1a
磨　石
砂　岩

0　(1/2)　5cm

第13図　　縄文時代石器（2）



第 14 図　　縄文時代石器（3）

第３節　中世から近世初頭

調査対象面積30,563㎡のなかで、中世の遺構はほぼ３地点（およそ4,700㎡）に集中する傾向にある。また、その集中地点は調査前には畑の小さな段差として現代にその名残をとどめていたことが結果として分かった。それぞれの集中地点は緩やかに東方向に傾斜するローム地山を整形し、平坦面を造り出し区画し、さまざまな遺構が混在することから、北から順に第1、第２、第３区画と分類し、それぞれの特徴を記述した。

この台地整形区画は基本的には掘立柱建物跡、地下式坑、井戸、火葬施設（墓）ほか多数の土坑から構成される。各調査年次全般にいえることであるが、総じて中世のころに比べて現在の地下水位が高いのか、斜面の低い地点から検出された遺構は、掘り上がり後またはその途中で湧水して水没することが多かった。

遺物には、国産陶器である常滑窯産の甕・片口鉢、瀬戸窯産の平碗・卸目皿・折縁深皿・天目茶碗、輸入磁器の龍泉窯産青磁碗、在地産の香炉･焙烙や被熱して砕けた石製品、銭貨、金属製品などがみられるが、調査面積および遺構の規模からみるとかなり少量である。

１　第１区画（第６・15・16図、図版３）

北限は南西から北東に延びる（8）SD001の南８ｍにある（8）SK001（地下式坑）を、西限は（8）SK034（地下式坑）と（5）087（地下式坑）を結ぶ線、東は調査区外まで延び、限界が不明である。南は南西から北東方向に延びる道路遺構（調査年次により呼称法が異なる）に囲まれる範囲とする。

この区画内には、幾筋かの溝状遺構がみられるが、北側の大きく湾曲するものをはじめ、大半が近世にかかるものと思われる。地下式坑の出入口は北東方向に突き出すものが３基、南東方向が２基、ほぼ真東が１基である。この方向の違いが、その造られた時期差なのかは、出土遺物が少ないため極めて判断が難しい。いずれにしても、地下式坑が区画の外縁に沿って造られている。井戸は合計３基検出されているが、位置は分散している。おおよそ1,750㎡の範囲になる。

当区画では、西側に台地整形による段差がみられる。段差上と下では最大40㎝の比高差が認められるが、本来はさらに大きな段差であったと思われる。この地点では、斜面の下り方向の傾斜が東側を向いているので、東側地山を掘削している。段差の方向は概ねN-15°～35°-Eである。

掘立柱建物跡が台地整形に伴う段差に平行して建てられているので、この台地整形に伴う遺構であることが容易に推察される。

掘立柱建物跡

（8）SB001（第17図、図版３）

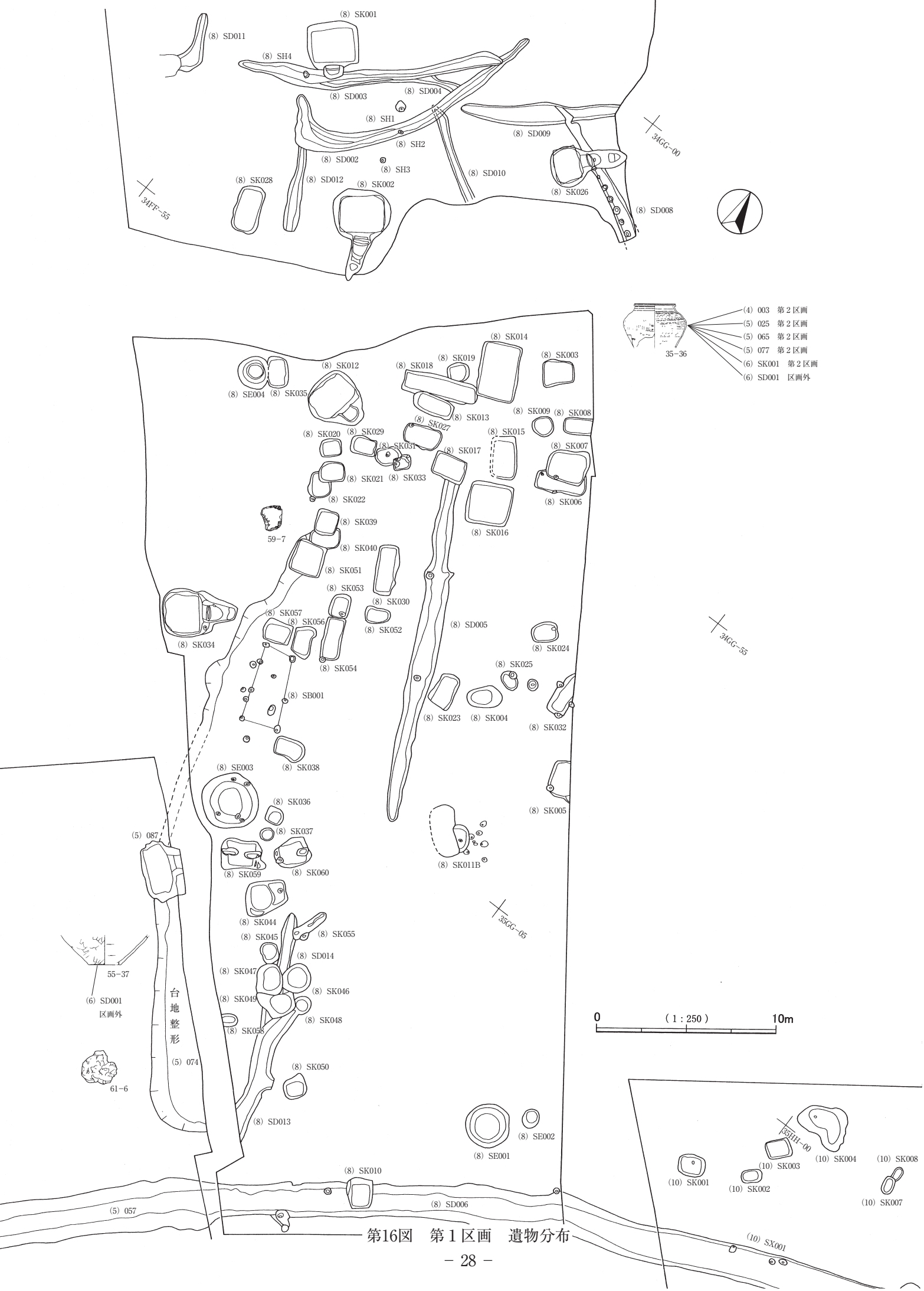
台地整形造成により生じた段差近くの34GG-90グリッドに位置する。合計７本の柱穴の組み合わせからなる南北方向に細長い１間×３間の掘立柱建物跡と判断した。西側の桁行柱穴の並びは北から順に芯々距離で1.04ｍ、1.62ｍ、1.66ｍの間隔になる。一方、東側の桁行並びは北から順に芯々距離で2.42ｍ、1.70ｍの間隔になる。東西で柱穴数も異なるが、それぞれの桁行方位が異なっておりなかなか1棟の建物として組むのが難しいが、周辺のピットを含めて掘立柱建物跡の柱穴群と考えて良さそうである。西側桁行方位はN-20°-Wになる。覆土・充填土の状況に関してはまったく分からない。

井戸

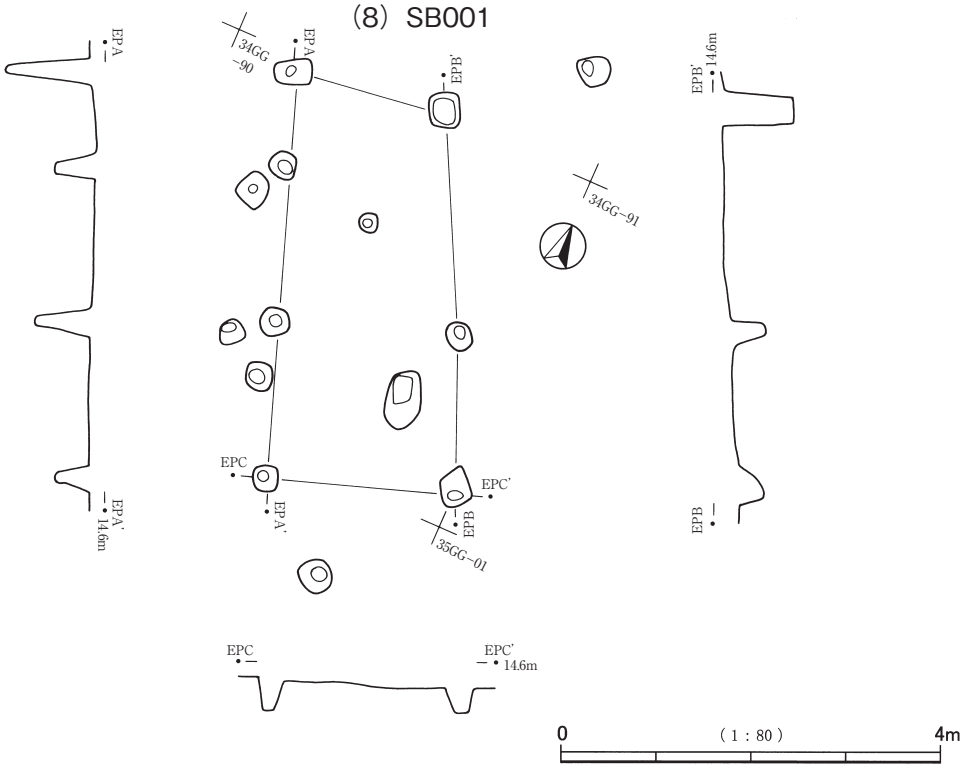
（8）SE001（第18図、図版３）

第１区画南端の35GG-26グリッドに位置する。確認面が最も幅広で最大径が2.40ｍ～2.50ｍ、1.40ｍの深さまで掘削して調査したが、その深さでの直径が1.40ｍになる。断面は、傾斜面が直線的なので逆台形になる。

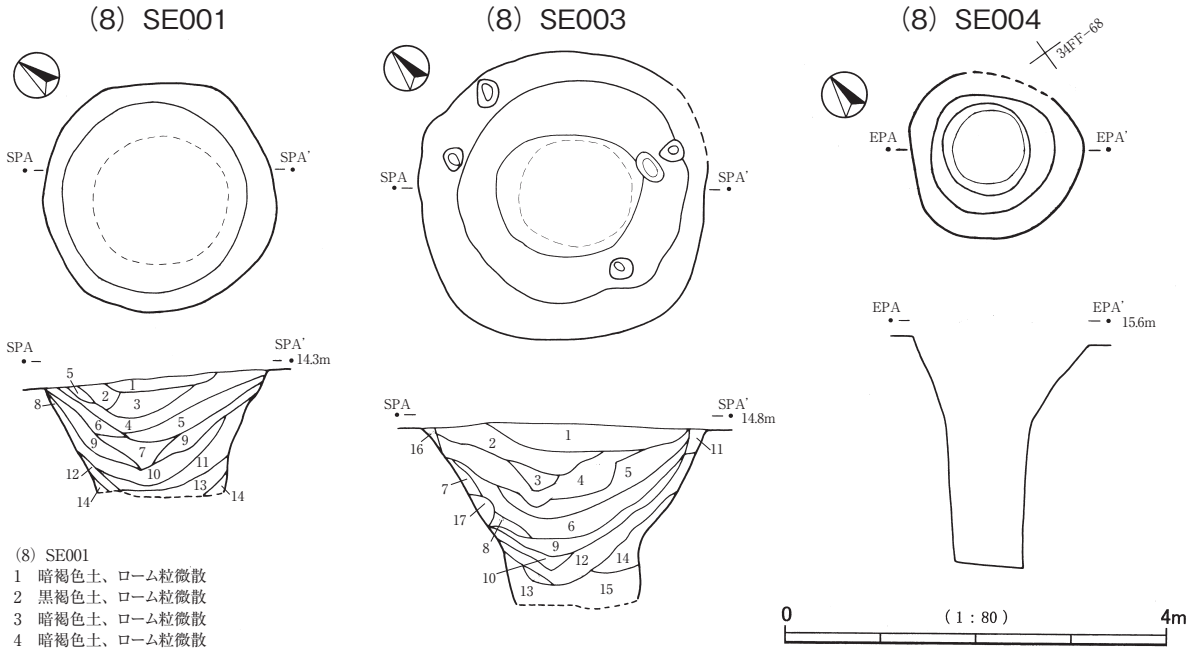
第15図　第１区画　遺構配置



第16図　第1区画　遺物分布



第 17 図　第1区画　掘立柱建物跡



(8) SE001
1　暗褐色土、ローム粒微散
2　黒褐色土、ローム粒微散
3　暗褐色土、ローム粒微散
4　暗褐色土、ローム粒微散
5　褐色土、暗褐色土がブロック状に混入
6　褐色土、暗褐色土がブロック状に混入
7　褐色土、ローム粒微散
8　暗黄褐色土、ローム粒中散
9　褐色土、暗褐色土がブロック状に混入
10　褐色土、暗褐色土がブロック状に混入
11　暗黄褐色土
12　暗黄褐色土、丈夫に黒褐色の薄い層あり
13　褐色土、ブロック状
14　褐色土、ブロック状

(8) SE003
1　暗褐色土、ローム粒微散
2　黒褐色土、ローム粒微散、炭化粒少散
3　褐色土、ローム粒少散
4　褐色土、ローム粒微散
5　暗褐色土、ローム粒・ロームブロック微散
6　暗褐色土、ローム粒・ロームブロック少散
7　褐色土
8　暗褐色土、ローム粒少散
9　褐色土、ローム粒微散
10　暗褐色土、ローム粒微散
11　褐色土、ローム粒微散
12　暗褐色土、ローム粒微散
13　黒褐色土、ローム粒微散
14　褐色土、ロームブロック微散
15　暗褐色土、ロームブロック微散
16　暗黄褐色土
17　暗褐色土

第 18 図　第1区画　井戸

おそらくまだ最終底面までは検出しておらず、この下は筒状に掘られていたと考えられる。覆土は自然堆積になる。

(8) SE003（第 18 図、図版３）

第１区画中央よりやや南寄りの、台地整形段差に近い35GG-11グリッドに位置する。遺構確認面での直径は3.10mで、深くなるにつれ次第にすぼみ、深さ1.3m辺りで筒状に変わる。この深さで直径1.40mである。調査はこの後湧水したため、深さ２mの辺りで断念した。この逆台形型に開いた斜面に計５本のピットが検出された。大きさは直径20㎝～ 30㎝で、うち４本が南北２本ずつ対になっており、ここに柱材を差し込み、屋根を作り井戸を保護し、釣瓶を作り付けた東屋的な上屋を保持していたと考えられる。

(8) SE004（第 18 図、図版３）

第１区画中央やや北寄りの34FF-67グリッドに位置する。すぐ東側で、(8) SK035と重なる。確認面で最大径1.80m、深さ80㎝辺りから下は直線的な筒状になり、70㎝～ 80㎝の直径になる。遺構の最深部は確認面からおよそ2.40mである。なお、覆土は不明である。

断面形態からみると３基は同様の井戸である。

地下式坑

(8) SK001（第 19 図、図版３）

第１区画の北辺の34FF-15グリッドに位置する。主室底面は長軸2.35m、直交する短軸で1.82m、深さは1.40mを測る。平面形態はほぼきれいな長方形で、四隅ははっきりしている。長短軸交点からみて出入口方向は、N-138° -Eになる。出入口は南東側長辺のほぼ中央に位置し、半円形に張り出している。その張り出しは0.70mほどである。また底面から60㎝ほどの高さに奥行き0.15mほどの、極狭のステップが造り出されている。本来の地下式坑がどの深さから掘削が始まったかは、上層が削平されていて不明である。堀方断面図をみる限り、壁は底面から斜め方向に直線的に掘られていて、オーバーハングした形跡がない。また、覆土の状況からもローム壁の崩壊土の堆積や、出入口部からの土砂の流入が確認できず、ほぼ全面自然堆積のように見受けられる。したがって、ロームの地山天井はなかった可能性が高い。

(8) SK002（第 19 図、図版３）

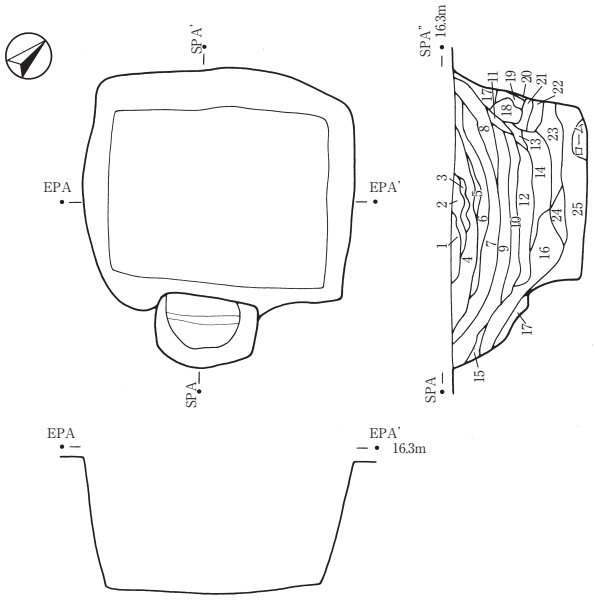
(8) SK001から南東へ９mほどの、34FF-37グリッドに位置する。主室底面は長軸2.40m、直交する短軸で1.91m、深さ2.05mを測る。平面形態はほぼきれいな長方形で、四隅ははっきりしている。長短軸交点からみて出入口方向は、N-143° -Eになる。出入口は南東側長辺のほぼ中央に位置し、南南東方向に長く張り出している。出入口の方向は、主室の軸方向とは異なり、N-161° -Eになる。張り出し長は2.58mで、３段のステップと、最も主室に近いところに、幅0.40m、長さ1.00m、深さ１㎝ほどの溝を伴うのが大きな特徴である。この溝をもつものは他にいくつかある。出入口の高さは、主室底面から82㎝ほどになる。覆土観察から、ローム壁・天井が崩れて堆積した状況が明瞭に分かる。また、断面図からも、地山天井を造り出していたことが分かる。

(8) SK012（第20図、図版３）

第１区画北よりの34FF-58グリッドに位置する。主室底面は長軸2.4m、短軸1.65m、深さ1.82mを測る。平面形態はおおむね長方形であるが、各辺がうねった感じである。長短軸交点からみて出入口方向はN-99° -Eになる。出入口は東側長辺のほぼ中央に位置し、東方向に半円形に張り出している。その張り出しは1.00mほどになる。出入口の高さは主室底面から80㎝になる。覆土には、ロームブロックを多数含む層が

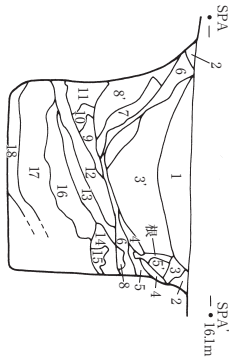
(8) SK001

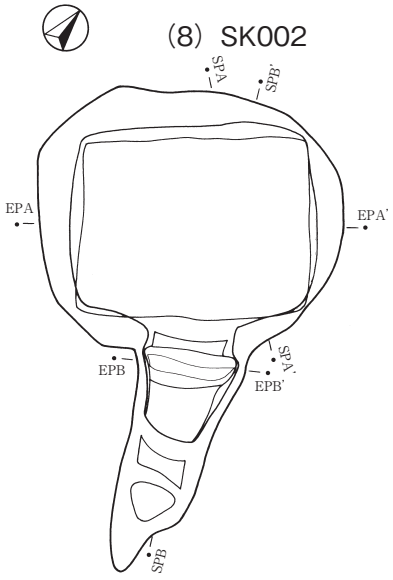
(8) SK-001
1 暗褐色土、黒色粒子含む
2 黒褐色土、暗褐色土微散
3 黒褐色土、暗褐色土微散
4 黒褐色土、暗褐色土がマーブル状に混入
5 黒褐色土、暗褐色土少散
6 黒褐色土、暗褐色土少散
7 黒褐色土、暗褐色土少散
8 黒褐色土、暗褐色土微散、焼土ブロック混入
9 黒褐色土、暗褐色土がマーブル状に混入
10 黒褐色土、暗褐色土がマーブル状に混入
11 暗褐色土
12 暗褐色土、褐色土微少散
13 暗褐色土、褐色土微少散
14 暗褐色土、褐色土微少散
15 褐色土、ローム粒
16 褐色土、ローム微少散
17 褐色土、ローム粒少散
18 褐色土、ローム粒少散、黒色土粒少散
19 暗黄褐色土
20 暗褐色土
21 褐色土、ローム粒中散
22 褐色土、ローム粒多散
23 暗褐色土、ローム粒少散
24 褐色土、ローム粒少散
25 暗黄褐色土、覆土とⅢ層の漸移層

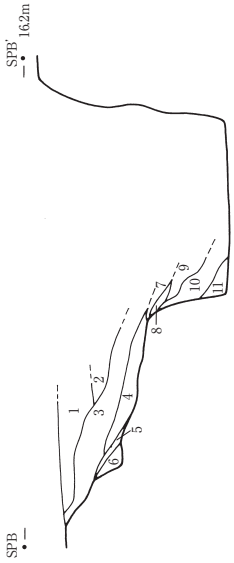


34FF-37

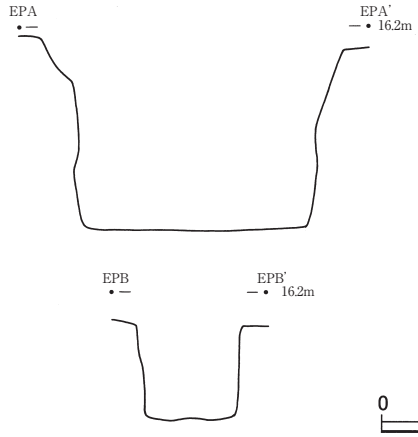
(8) SK002







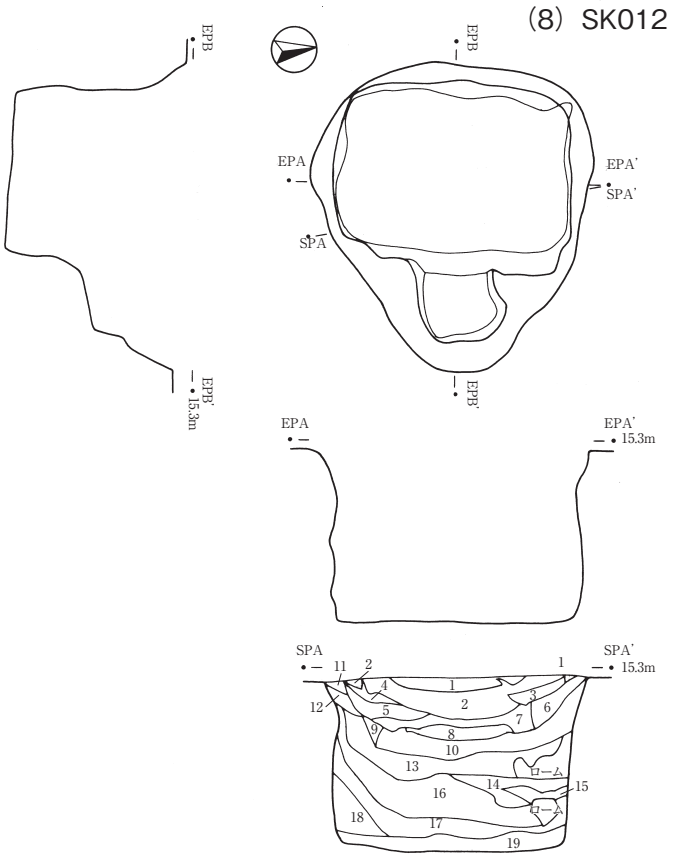
(8) SK002
A−A'
1 暗褐色土、ローム粒少散
2 暗黄褐色土、天井の残存
3 褐色土、暗黄褐色土がマーブル状に混入
3' 褐色土、褐色土がマーブル状に混入
4 褐色土、暗黄褐色土がマーブル状に混入
5 暗黄褐色土、天井崩落土
6 褐色土、暗黄褐色土がマーブル状に混入
6' 褐色土、ローム粒少散
7 明褐色土、ローム粒微散
8 暗黄褐色土、天井崩落土
8' 暗黄褐色土、天井崩落土
9 暗褐色土、ローム粒少散
10 褐色土、ローム粒少散
11 明褐色土、ローム粒中散
12 暗褐色土、ローム粒少散
13 褐色土、ローム粒少散
14 褐色土、暗黄褐色土がマーブル状に混入
15 暗黄褐色土、天井崩落土
16 暗黄褐色土、天井崩落土
17 暗黄褐色土、天井崩落土、ブロック
18 明褐色土、自然蓄積



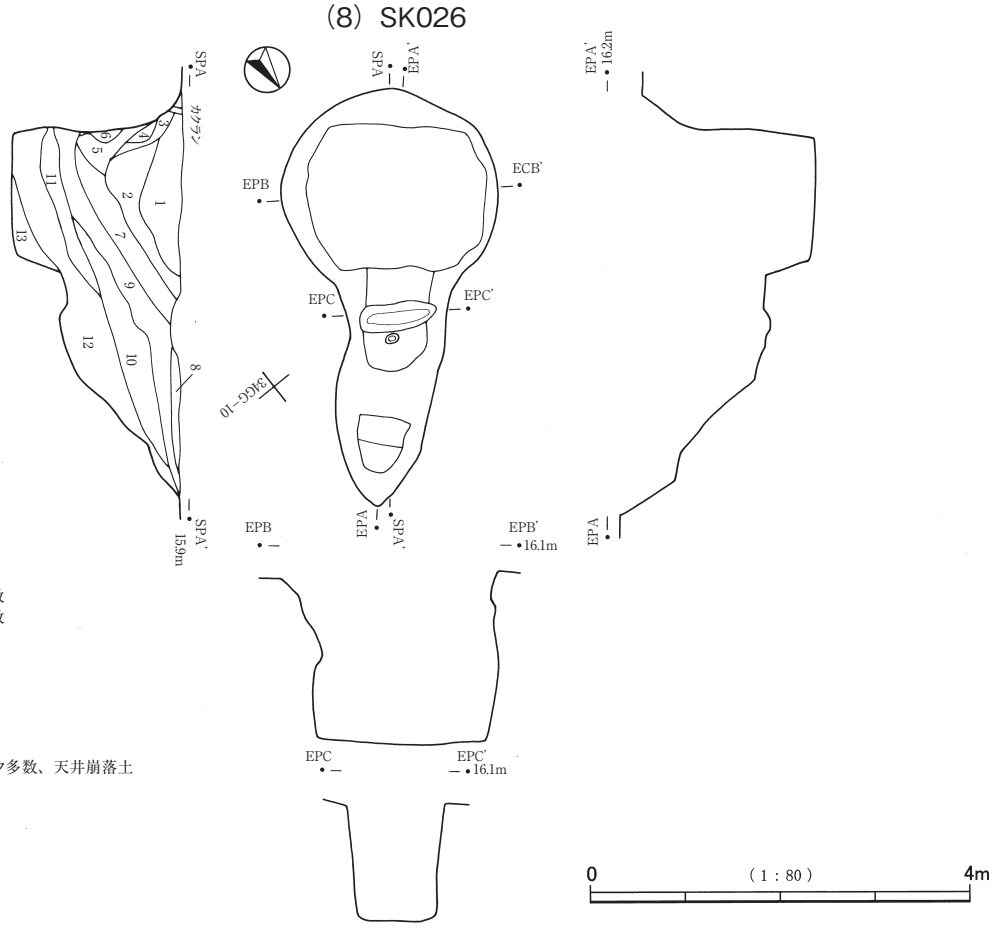
B−B'
1 褐色土、ローム粒少散
2 褐色土、ローム粒少散
3 褐色土、ローム粒微散
4 褐色土、ローム粒微散
5 暗黄褐色土、硬質
6 褐色土、硬質
7 暗黄褐色土、ロームブロック多散、天井崩落土
8 褐色土、ローム微少散、軟質
9 暗黄褐色土、ロームブロック多散、天井崩落土
10 褐色土、ローム粒少散、軟質
11 明黄褐色土、ロームブロック多散、天井崩落土

0 (1：80) 4m

第19図　第1区画　地下式坑（1）



(8) SK-012
1 褐色土、ローム粒微散
2 黒褐色土、ローム粒少散
3 暗褐色土
4 褐色土、ローム粒微散
5 褐色土、ローム粒微散
6 褐色土、ローム粒微散
7 暗褐色土、ローム粒微散
8 黒褐色土、ローム粒微散
9 褐色土
10 褐色土、ローム粒微散
11 暗黄褐色土、ローム粒少散
12 褐色土、ローム粒微散
13 明褐色土
14 明褐色土
15 褐色土
16 褐色土、ロームブロック多数
17 褐色土、焼土粒・炭化物微散
18 褐色土、ロームブロック多数
19 褐色土、ロームブロック多数



(8) SK-026
1 褐色土、ローム粒少散
2 暗褐色土、ローム粒少散
3 褐色土、ローム粒微散
4 暗黄褐色土、ローム粒微散
5 暗黄褐色土、ローム粒微散
6 褐色土、天井崩落土か
7 褐色土、ローム粒少散
8 褐色土、ローム粒微散
9 褐色土、ローム粒微散
10 褐色土、ローム粒少散
11 暗黄褐色土、天井崩落土
12 暗黄褐色土、ロームブロック多数、天井崩落土
13 明黄褐色土

第 20 図　第1区画　地下式坑（2）

みられ、これを壁・天井の崩落土とみれば、削り出しの天井があった可能性がある。ただ、今ひとつ判然としない。

(8) SK026（第20図、図版４）

第１区画北端の34FF-19に位置する。ピットを伴う溝（8）SD008と一部重なっているが、(8) SK026の方が古い。主室底面は長軸1.9m、直行する短軸は1.34m、深さ1.79mと比較的深い。平面形態は概ね長方形であるが、各辺は直線ではなく、ややうねった感じである。長短軸交点からみて出入口方向は、N-45°-Eである。出入口は長辺のほぼ中央に位置し、2.54m北東方向に張り出している。途中２か所に比較的平坦な面があり、主室に近い方で、途中浅い溝が確認できた。幅0.30m、長さ0.80m、深さ８㎝ほどで、出入口の方向と直交する。出入口の高さは、主室底面から45㎝になる。覆土には、ロームの分厚い層が底面近くに堆積していて、おそらく、地山削り出しのローム天井が存在していたのであろう。出入口からの土砂の流入がほとんどみられないことから、廃絶後早期に天井部が崩落したものと思われる。

(8) SK034（第21・56・60図、図版４・28・32）

第１区画中央西寄り、台地整形外側の34FF-99グリッドに位置する。主室底面は長軸2.13m、直交する短軸は1.83m、深さは2.06mと比較的深い。平面形態は北東両側の隅は直角に近いが、南西側両端はかなり丸みを帯びる。長短軸交点からみて出入口方向は、N-52°-Eである。出入口は長辺のほぼ中央に位置し、1.92m北東方向に張り出している。途中２か所にステップ状に平坦面があり、主室に近いほうで、浅い溝が確認できた。幅0.20m、長さ0.86m、深さ３㎝ほどの浅い溝で、出入口の方向と直交する。また、出入口近くの主室肩部には深さ80㎝ほどのピットが掘られていた。出入口の高さは主室底面からおよそ50㎝になる。覆土には厚いローム塊が堆積していて、おそらく地山削り出しのローム天井が存在していたのであろう。出入口や主室底面に流れ込んだような土砂の堆積がみられ、その後一気に天井が崩落したものと思われる。

出土遺物には常滑片口鉢片（56-47）、土師器高坏脚部片（60-5）があるが、いずれも天井崩落後に窪地化したところから出土しているので、この遺構に伴うものではないと考えられる。

(5) 087（第21・55図、図版４・27）

第１区画中央西寄りの、35GG-20グリッドに位置する。台地整形の段差が重なり、その際に上面が削平を受けている。この辺りで、台地整形の段差は40㎝前後になる。主室底面は長軸2.62m、直交する短軸1.30m、深さ1.30mと比較的深い。平面形態は、出入口方向の辺が弧を描くような形態である。長短軸交点からみて出入口方向は、N-40°-Eである。出入口は長辺のほぼ中央に位置し、0.40m以上張り出している。ただし、北東方向には調査時に限界まで調査できなかったので、出入口全体的については不明である。出入口の高さはおよそ30㎝である。覆土は主室最下面にロームブロックの厚い堆積層があり、おそらく地山削り出しのローム天井が存在していたであろう。

出土位置は不明だが、遺物には常滑大甕底部片（55-37）がある。

土坑

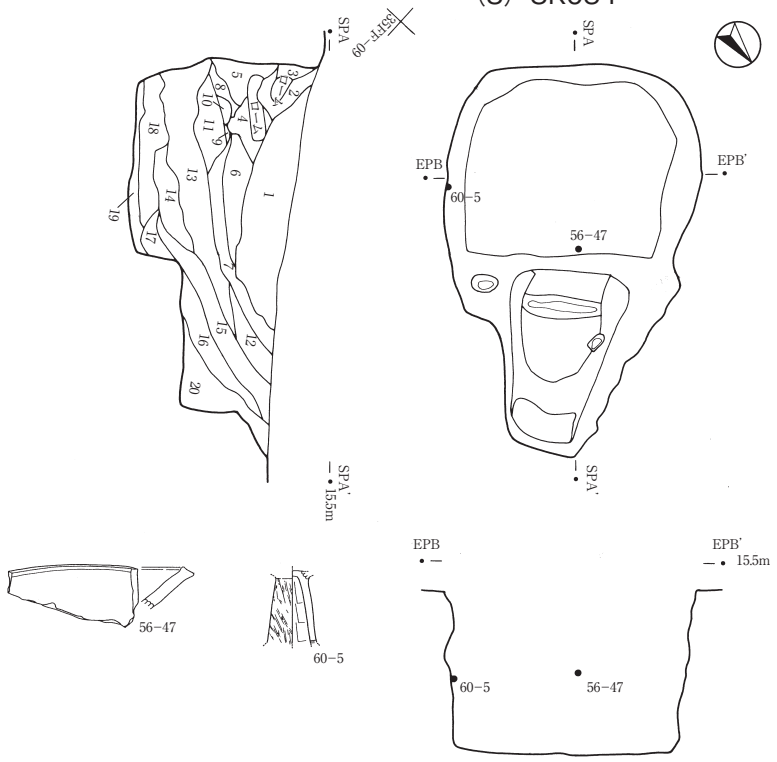
土坑に関しては、遺物の出土している土坑や特徴のある土坑以外は第３表にまとめた。

(8) SK005（第22図、図版４）

調査区境界の34GG-84グリッドに位置する。調査境のため半分が調査できなかった。方形を基本とする形態と考えられ、南北方向の軸は2.00mの長さになる。深さは39㎝で極めて浅い。

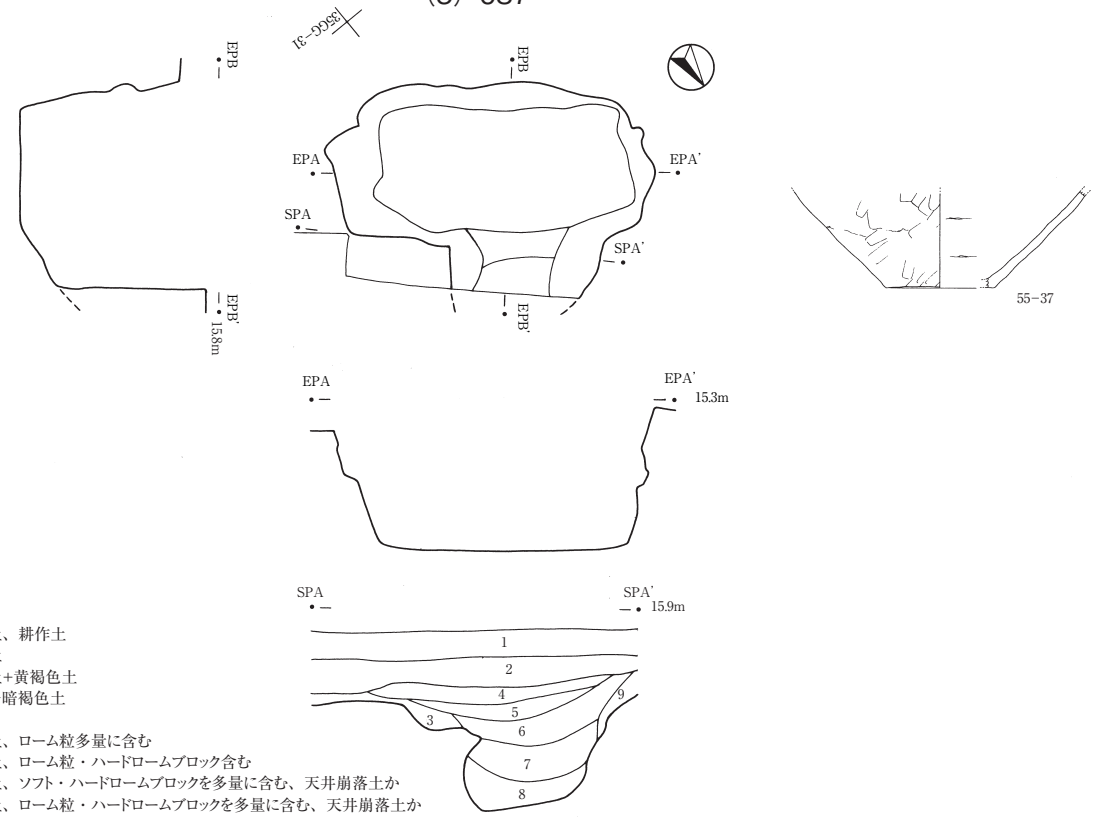
(8) SK006・007（第22図、図版４）

(8) SK034



(8) SK034
1 黒褐色土、ローム粒微散
2 暗褐色土、ローム粒微散
3 褐色土、非常に脆い
4 暗褐色土、ローム粒微散
5 暗黄褐色土、非常に脆い
6 暗褐色土、ローム粒少散
7 褐色土、ローム粒少散
8 暗黄褐色土、ロームブロック、天井崩落土
9 褐色土、ローム粒微散
10 暗褐色土、ローム粒少散
11 暗黄褐色土、ローム粒微散
12 暗黄褐色土、ローム粒微散
13 褐色土、ボロボロ
14 暗黄褐色土、ロームブロック多量、天井崩落土
15 暗黄褐色土、ややボロボロ、天井崩落土
16 褐色土、やや硬い、ローム粒少散
17 褐色土、ボロボロ、ローム粒少散
18 褐色土、ロームブロック、天井崩落土
19 暗褐色土、ローム粒少散
20 暗黄褐色土、ボロボロ

(5) 087



(5) 087
1 暗褐色土、耕作土
2 黒褐色土
3 黒褐色土+黄褐色土
4 黒褐色～暗褐色土
5 黒色土
6 黒褐色土、ローム粒多量に含む
7 茶褐色土、ローム粒・ハードロームブロック含む
8 茶褐色土、ソフト・ハードロームブロックを多量に含む、天井崩落土か
9 黄褐色土、ローム粒・ハードロームブロックを多量に含む、天井崩落土か

0 (1：80) 4m

第21図　第1区画　地下式坑（3）

34GG-42グリッドに位置する。(8) SK006と (8) SK007は一部で重なっているが、断面観察から (8) SK007が埋まってから (8) SK006を掘っていることが判明した。(8) SK006は堀方長軸が2.82m、短軸が推定1.00m、深さは27cmの隅丸長方形になる。長軸の方位はN-64° -Eである。(8)SK007は堀方長軸が2.30m、短軸が1.74m、深さ47cmの隅丸長方形で、長軸の方位はN-64° -Eになる。

(8) SK014（第22・55図、図版５・27）

34GG-40グリッドに位置する。堀方長軸で3.21m、短軸で2.14m、深さ49cmの浅い隅丸長方形の土坑である。長軸の方位はN-28° -Wになる。覆土中層より常滑大甕片（55-36）が出土している。

(8) SK015・016（第22図、図版５）

34GG-41・51グリッドに位置する。(8) SK015は西側半分が撹乱されて残っていない。南北方向の堀方軸で長さ2.33m、深さ38cmで、この軸でN-34° -Wになる。(8) SK016は堀方で2.46m×2.30mのほぼ正方形の形態で、深さは53cmになる。長い方の軸でN-63° -Eになる。

(8) SK011B（第23図）

34GG-93グリッドに位置する。縄文時代の陥穴と中世の土坑が絡んでいて、調査段階では同じ番号を付していたので、整理段階で縄文時代の陥穴を (8) SK011Aとし、中世の土坑をBとした。調査時の断面観察は、いずれも陥穴のみであったので、中世の土坑の状況は不明である。わずかに残る部分から推定すると、一辺が弧を描くような方形ないし、長方形の形態であったろう。一辺は堀方で1.54m、深さ50cmになる。底面に小ピットがあり、またこの土坑の東側にも８つの小ピットが確認されているが、この土坑との関連は不明である。

(8) SK032（第23図、図版７）

調査区境界の34GG-73グリッドに位置し、一部が調査できなかった。短軸で1.06m、長軸で2.50m以上の細長い長方形の平面形態になる。深さは74cmほどで、長軸の方位はN-1° -Wになる。３辺の壁にそれぞれ１か所ずつ計３つの小型ピットを伴うようにみえる。

(8) SK044（第24・59図、図版７・31）

35GG-12グリッドに位置する。２基または３基の土坑が重なり合った形態であるが、断面観察では判断できない。複合した状態で最大長2.32m、直交する軸で1.74m、深さは最深で44cm余りになる。覆土中から近世砥石片（59-8）が出土している。

(8) SK045（第24・55図、図版７・27）

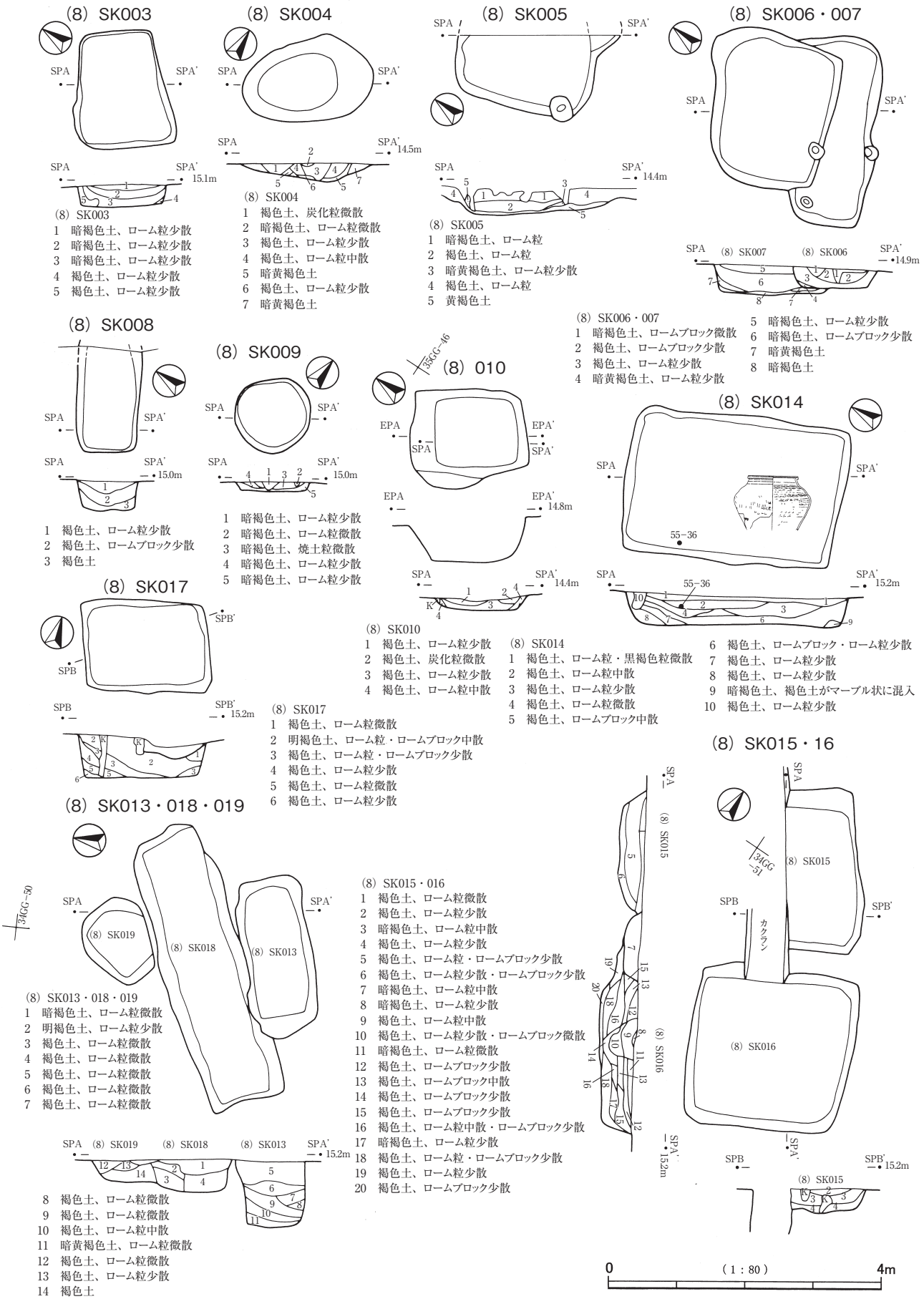
35GG-22グリッドに位置する。堀方長軸は1.19m、短軸は0.94m、深さ40cmの不整な形態である。覆土最上面から常滑大甕底部片（55-37）が出土している。

(8) SK046・047・048・049（第24図、図版７）

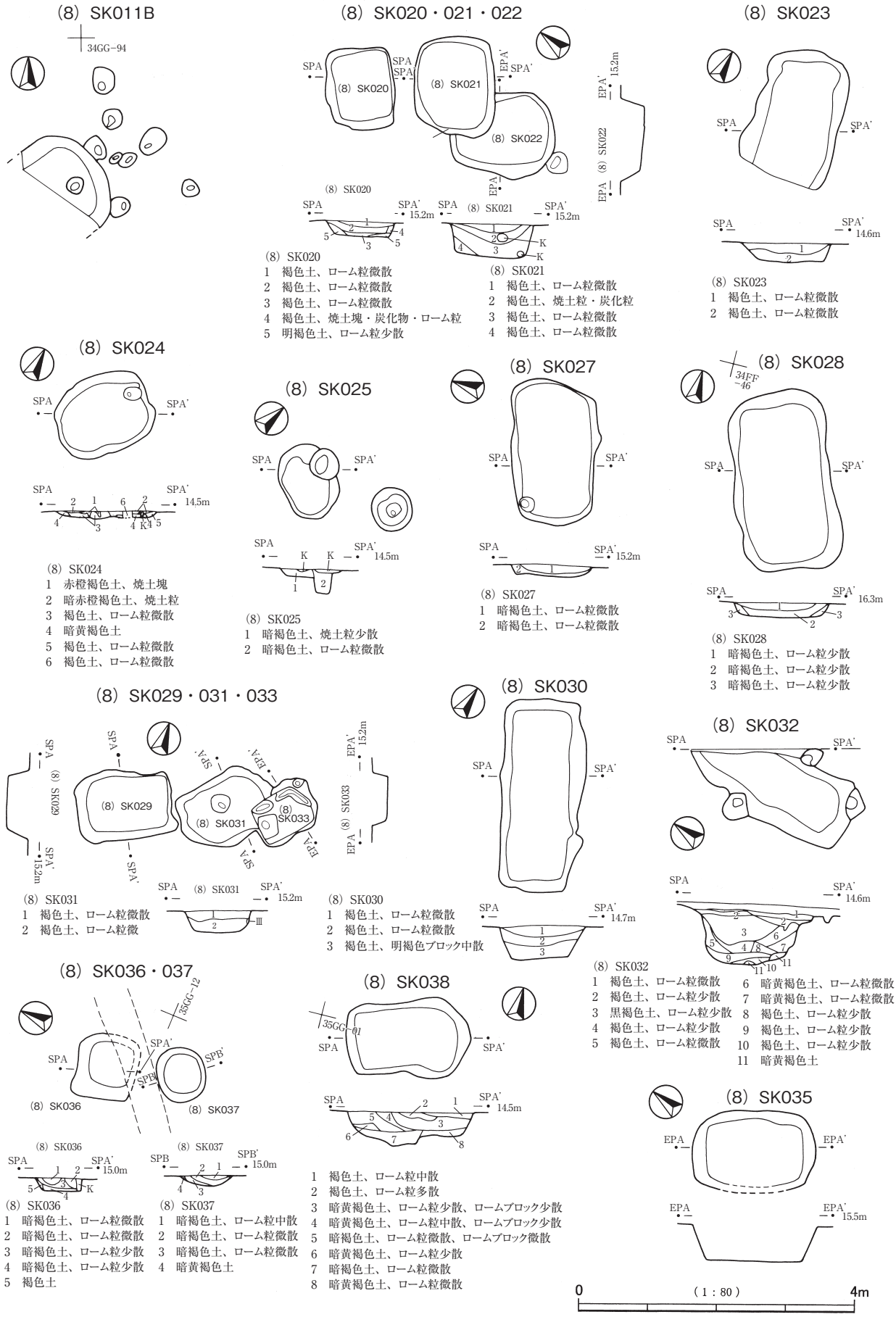
35GG-23グリッドに位置する。４基の土坑が寄り添うように集中していて、これらに溝SD014が絡んでくる。(8) SK49以外は浅くて、堀込み壁が緩やかであるが、(8) SK049は堀込みがしっかりし、底面も平坦ではっきりしている。形態は円形が基本のようにみえるので、それぞれの堀方最大直径と深さは (8) SK049が1.70m、15cm、(8) SK047が1.90m、30cm、(8) SK048が1.06m、14cm、(8) SK049が2.20m、46cmになる。

(8) SK055（第24図、図版８）

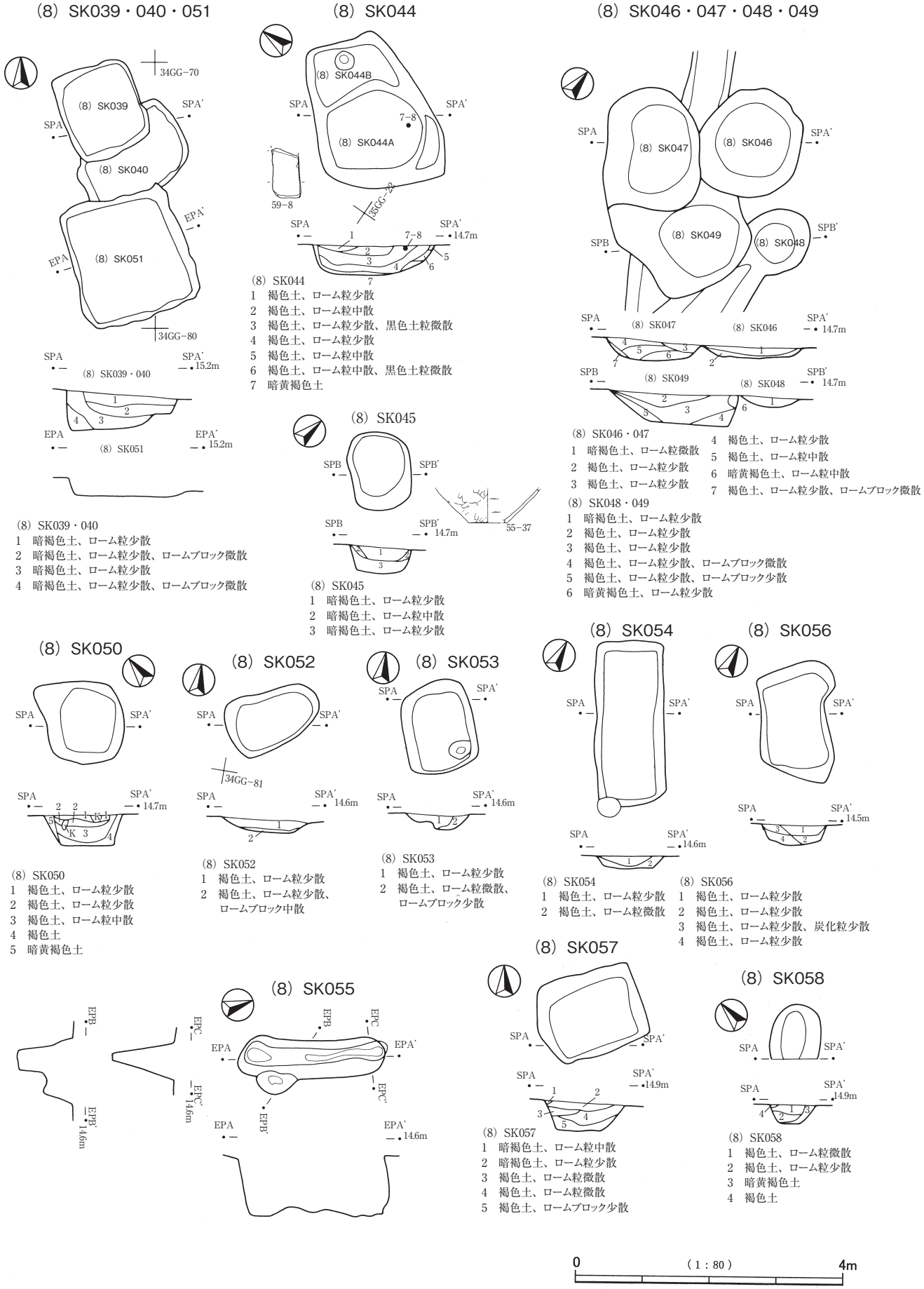
35GG-13グリッドに位置する。堀方長軸が2.16m、短軸は0.64m、深さは最深部で90cmになる。細長く深い遺構で、断面観察せずに調査したため覆土の状況がまったく分からない。主軸はN-22° -Eになる。縄文



第22図　第1区画　土坑（1）



第23図　第1区画　土坑（2）



第24図　第1区画　土坑（3）

時代の陥穴の可能性もある。

(8) SK059（第25図、図版８）

35GG-11グリッドに位置する。堀方長軸2.20m、短軸1.72m、底面までの深さ95cmほどの平面が長方形の形になる土坑である。長軸の方位はN-60°-Eになる。底面は両方の短辺の中央にやや壁を抉るようにピットが掘られている。深さは底面から24cm～28cmになる。また、北東方向隅には、２段の階段状の堀込みが壁に確認できる。これは土坑内への出入口ステップで、壁際の２本のピットは柱穴で、土坑の上に上屋をもつ構造であったかもしれない。

(8) SK060（第25・53図、図版８・25）

35GG-12グリッドに位置する。堀方長軸1.90m、短軸1.60m、底面までの深さ80cm余りの平面が長方形になる土坑である。長軸の方位はN-29°-Eになる。底面は両方の短辺のそれぞれ中央にやや壁を抉るようにピットが掘られている。深さは北側ピットが底面から８cm、南側の細いピットは30cmになる。南側壁には１段の階段状の堀込みが確認できる。(8) SK059に隣接し、同様の機能を持った遺構であると考えられる。覆土中層下位面から土製の香炉（53-22）が出土している。

(8) SE002（第25図、図版８）

35GG-27グリッドに位置する。調査時には井戸としてSEを冠していたが、整理段階で土坑として取り扱った。円形の平面形態で直径1.00m、深さ40cmで底面は鍋底状である。覆土には黄褐色砂、灰白色粘土、黄白色粘質土などが層を成していて、人為的に埋められたものと判断できる。南西側すぐ脇に井戸（8）SE001があり、この（8）SE002自体は井戸とは考えられないものの、井戸（8）SE001と密接に関連した遺構ととらえられる。

(10) SK004（第25図）

34HH-90グリッドに位置する。最大幅2.90mの不整形なアメーバ型になる。深さは最深で50cmほどである。覆土の状況は不明である。

溝

(8) SD002・003・004・010・012（第26図、図版９・10）

区画北端に集中する溝状遺構である。SD002は総延長18mで、南端で大きく直角に折れる。SD003は北端でSD002と重なるが、南西方向に延びる。総延長は15mになる。この２本の溝を結ぶように溝SD004が架かる。SD012とSD010はその北側先端がSD002と重なっている。SD002には部分的に長さ4.2mに渡って硬化面が確認できる。したがってSD002は道路として使われていたと考えられる。どの溝も15cm～40cmほどと堀込みは浅い。底面の立ち上がりははっきりせず、だらだらとした感じである。

遺物が出土していないので断定はできないが、近世の遺構と考えられる。

(8) SD005（第26・61図、図版９・33）

南は34GG-93グリッドからはじまり、直線的に19m北に進み、(8) SK017に当たって終わる。最大幅1.4mで、深さは20cm余りの浅い溝である。断面は丸みを帯びている。覆土は褐色土や暗褐色土を主体とする。覆土中から鉄製品（61-6）が出土しており、近世の遺構と考えられる。

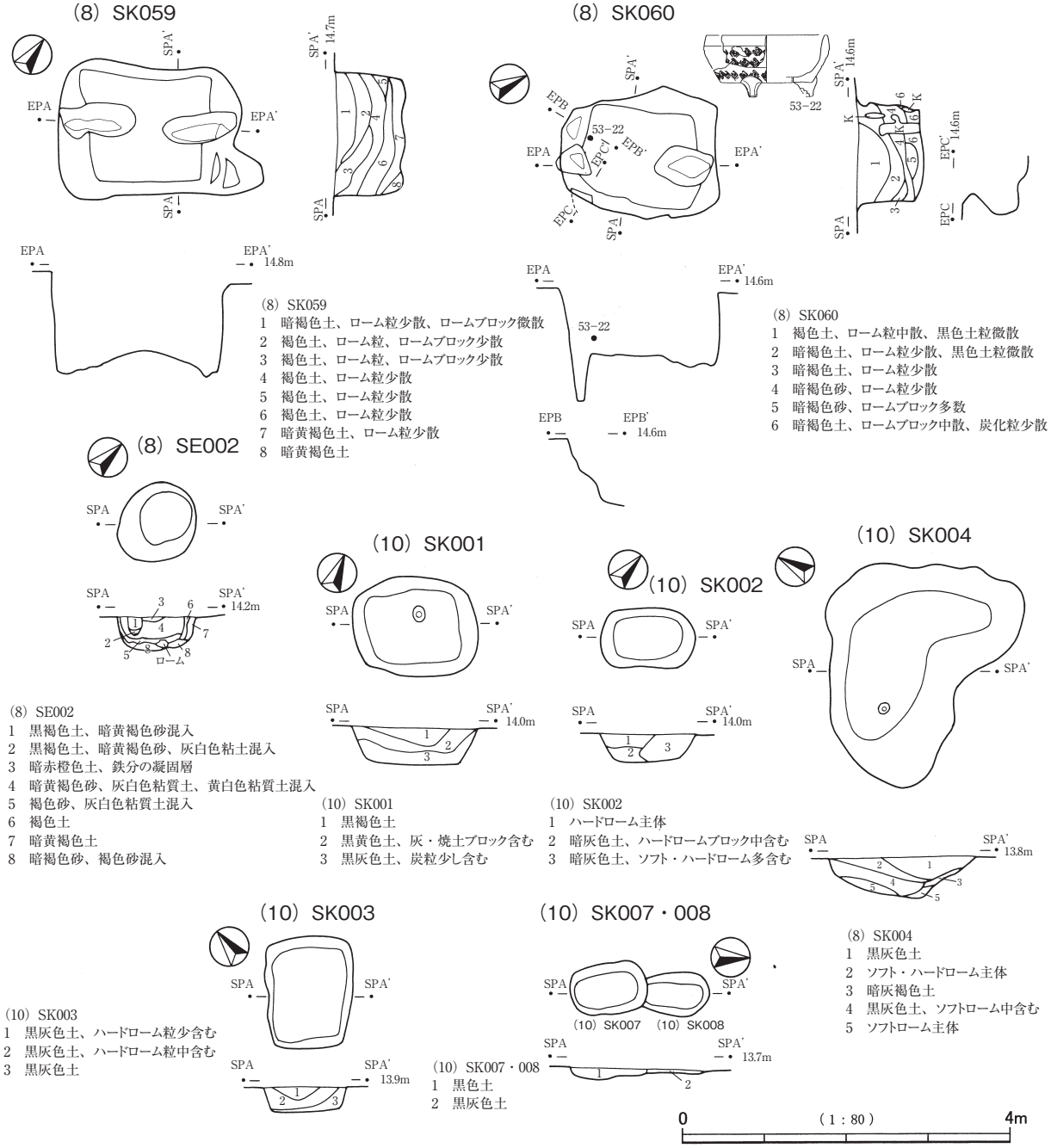
(8) SD008・009（第 26 図、図版 10）

(8) SD009は調査区北寄りの34FF-17から34FF-09グリッドにかけて延びる溝状遺構で、最大幅1.2m、深さは20cmほどで、堀込みは緩やかである。(8) SD008と交わる地点でその硬化面を削平しているので、(8)

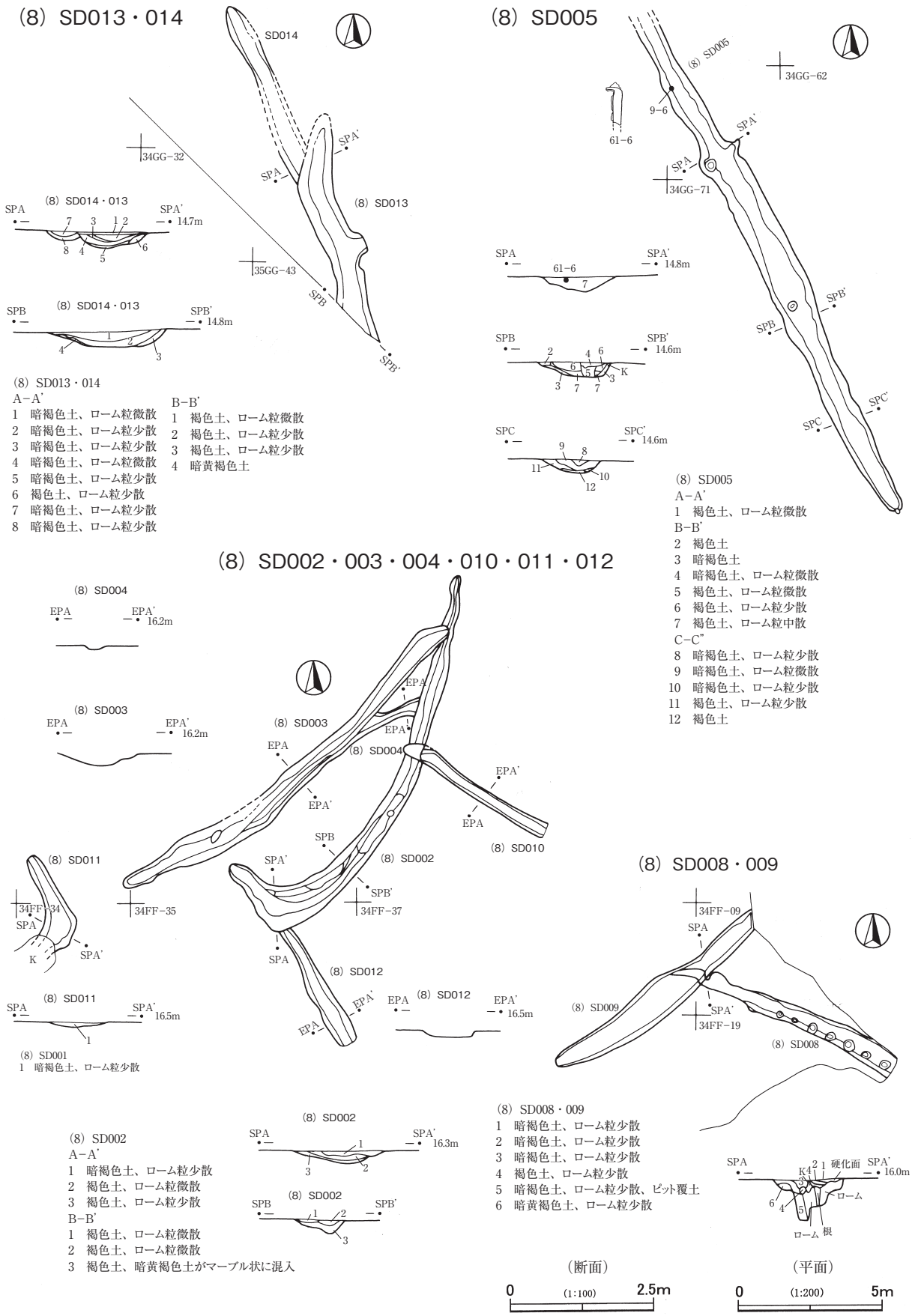
SD009の方が新しい。一方、(8) SD008は34FF-08から34GG-10グリッドにかけて延びる道路遺構で、その硬化面がほぼ底面全面に広がる。最大幅0.8m、深さ70cm前後である。特徴的なのは、底面の南側壁立ち上がりに70cm間隔でピットが７基連続することである。ピットの大きさは直径30cm、深さ６cm前後と浅いものである。

(8) SD011（第26図）

調査区北端の34FF-24・34グリッドに位置する極めて短い溝状遺構である。長さは3.6m、幅は最大1.0m、深さは７cmほどで緩やかな堀方である。南西で撹乱を受けている。



第25図　第1区画　土坑（4）


(8) SD013・014
SD014
SPA
SPA'
(8) SD013
34GG-32
35GG-43
SPB
SPB'
(8) SD014・013
SPA
SPA'
14.7m
SPB
SPB'
14.8m
(8) SD013・014
A-A'
1 暗褐色土、ローム粒微散
2 暗褐色土、ローム粒少散
3 暗褐色土、ローム粒少散
4 暗褐色土、ローム粒微散
5 暗褐色土、ローム粒少散
6 褐色土、ローム粒少散
7 暗褐色土、ローム粒少散
8 暗褐色土、ローム粒少散
B-B'
1 褐色土、ローム粒微散
2 褐色土、ローム粒少散
3 褐色土、ローム粒少散
4 暗黄褐色土
(8) SD005
(8) SD005
34GG-62
9-6
61-6
SPA
SPA'
34GG-71
SPB
SPB'
SPC
SPC'
SPA
SPA'
14.8m
SPB
SPB'
14.6m
SPC
SPC'
14.6m
(8) SD005
A-A'
1 褐色土、ローム粒微散
B-B'
2 褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土、ローム粒微散
5 褐色土、ローム粒微散
6 褐色土、ローム粒少散
7 褐色土、ローム粒中散
C-C"
8 暗褐色土、ローム粒少散
9 暗褐色土、ローム粒微散
10 暗褐色土、ローム粒少散
11 褐色土、ローム粒少散
12 褐色土
(8) SD002・003・004・010・011・012
(8) SD004
EPA
EPA'
16.2m
(8) SD003
EPA
EPA'
16.2m
(8) SD003
(8) SD004
(8) SD010
(8) SD011
34FF-34
SPA
SPA'
K
34FF-35
SPB
SPA'
(8) SD002
SPB'
34FF-37
SPA
(8) SD012
EPA
EPA'
(8) SD012
EPA
EPA'
16.5m
(8) SD011
SPA
SPA'
16.5m
(8) SD001
1 暗褐色土、ローム粒少散
(8) SD008・009
34FF-09
SPA
(8) SD009
SPA'
34FF-19
(8) SD008
(8) SD002
A-A'
1 暗褐色土、ローム粒少散
2 褐色土、ローム粒微散
3 褐色土、ローム粒少散
B-B'
1 褐色土、ローム粒微散
2 褐色土、ローム粒微散
3 褐色土、暗黄褐色土がマーブル状に混入
(8) SD002
SPA
SPA'
16.3m
(8) SD002
SPB
SPB'
(8) SD008・009
1 暗褐色土、ローム粒少散
2 暗褐色土、ローム粒少散
3 暗褐色土、ローム粒少散
4 褐色土、ローム粒少散
5 暗褐色土、ローム粒少散、ビット覆土
6 暗黄褐色土、ローム粒少散
SPA
SPA'
16.0m
硬化面
ローム
ローム
根
(断面)
0
(1:100)
2.5m
(平面)
0
(1:200)
5m

第26図　第1区画　溝

(8) SD013・014（第26図、図版10）

(8) SD013は35GG-33・43グリッドに位置する。長さ９ｍ、最大幅1.1ｍ、深さ30㎝ほどの溝状遺構で、堀方は緩やかである。南は調査区境にかかり、さらに南側は分からなくなっている。(8) SD014はこのSD013から派生するように北に延びる溝状遺構である。長さ７ｍ、幅は最大0.80ｍ、深さ30㎝ほどで、堀方は緩やかである。

２　第２区画（第６・27・28図、図版10）

北限は（6）SK002（地下式坑）に、西限を（5）014（地下式坑）と（4）005･(5) 064（地下式坑）と（4）003（地下式坑）を結ぶ線、東限を（6）SK001（地下式坑）と（5）077（地下式坑）を結ぶ線、南限を南西から北東に延びる道路遺構とする。この区画の大きな特徴は、区画を形成する明瞭な段差がみられないということである。傾斜の方向および地下式坑の配置からみて、おそらく西側に段差があったと思われるが、後世の削平により段差が消滅した可能性が考えられる。残存していれば、その段差の方向はN-20°-Eであろう。

この区画には、幾筋かの溝状遺構がみられるが、大半が近世にかかるものと思われる。地下式坑の出入口は東からやや北寄りに向くものが２基、南東に向くものが４基、北東に向くものが１基になる。火葬施設（墓）は西端に２基存在する。井戸は合計４基で、うち１基が区画北端の掘立柱建物跡の西側に寄り添うようにあるが、他の３基は南側に集中する。おおよそ1,500㎡の範囲である。

地下式坑

(4) 003（第 29・53 ～ 55 図、図版 11・25 ～ 27）

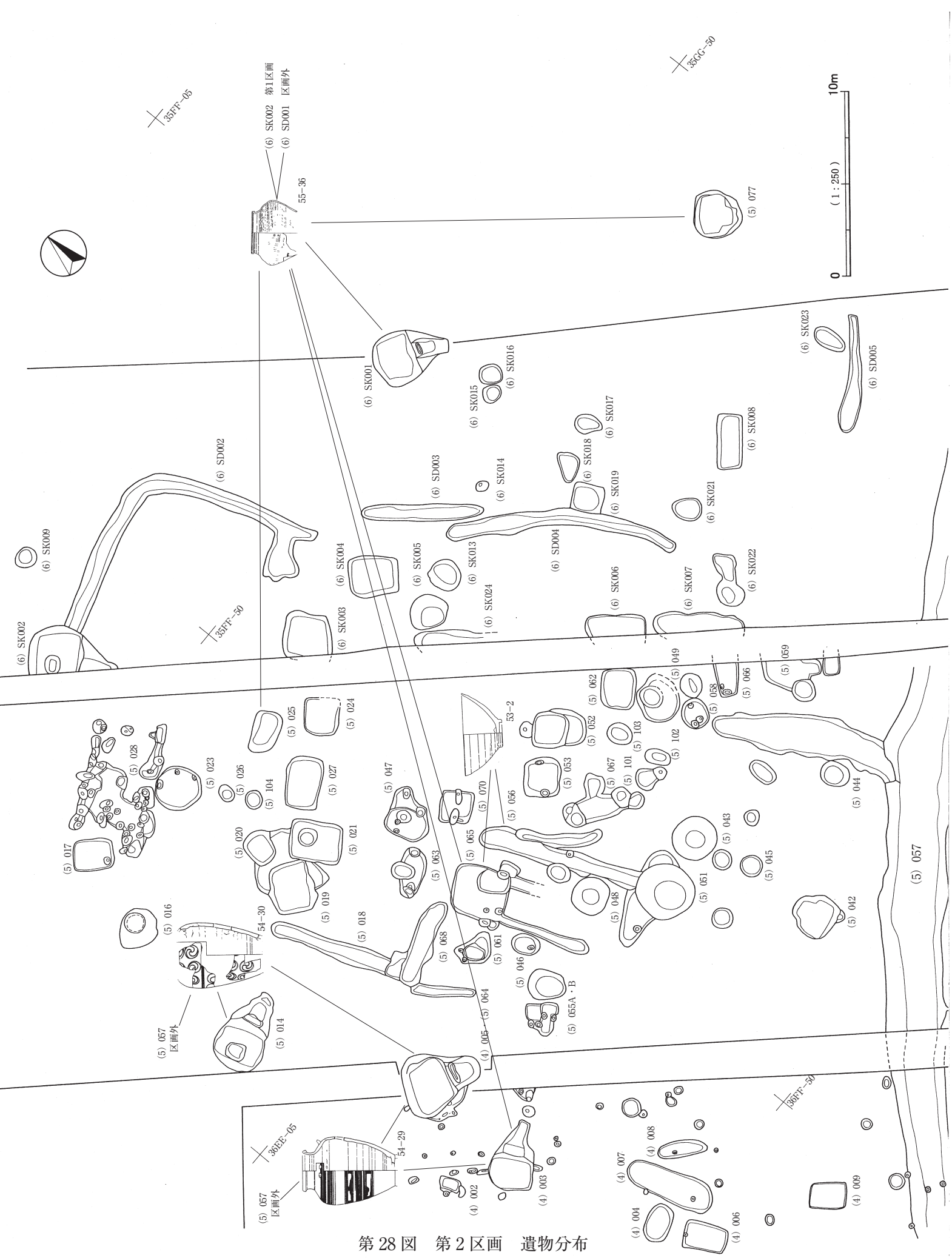
第２区画南西隅の36EE-27グリッドに位置する。主室底面は長軸2.18ｍ、直交する短軸は1.54ｍ、深さ2.00ｍで比較的深い。西の隅だけがいびつな形をした長方形である。長軸の方向は長短軸交点からN-35°-Wになる。出入口は北東側長辺のほぼ中央に位置し、北東方向にちょうど2.00ｍ張り出す。その方向は、主室の長軸と異なり、N-67°-Eになる。出入口の高さは主室底面から72㎝になり、主室に近い面が緩やかな傾斜となっている。主室覆土は下半分がほぼ天井の崩落土で埋め尽くされていて、上半分は大きな穴となった落ち込みに土砂が自然堆積していった様子がうかがえる。つまり、ローム地山を残した天井部があったものと判断される。

出土位置は不明だが、遺物には古瀬戸平碗（53-6)、口広有耳壺（54-29)、常滑大甕（55-36）がある。

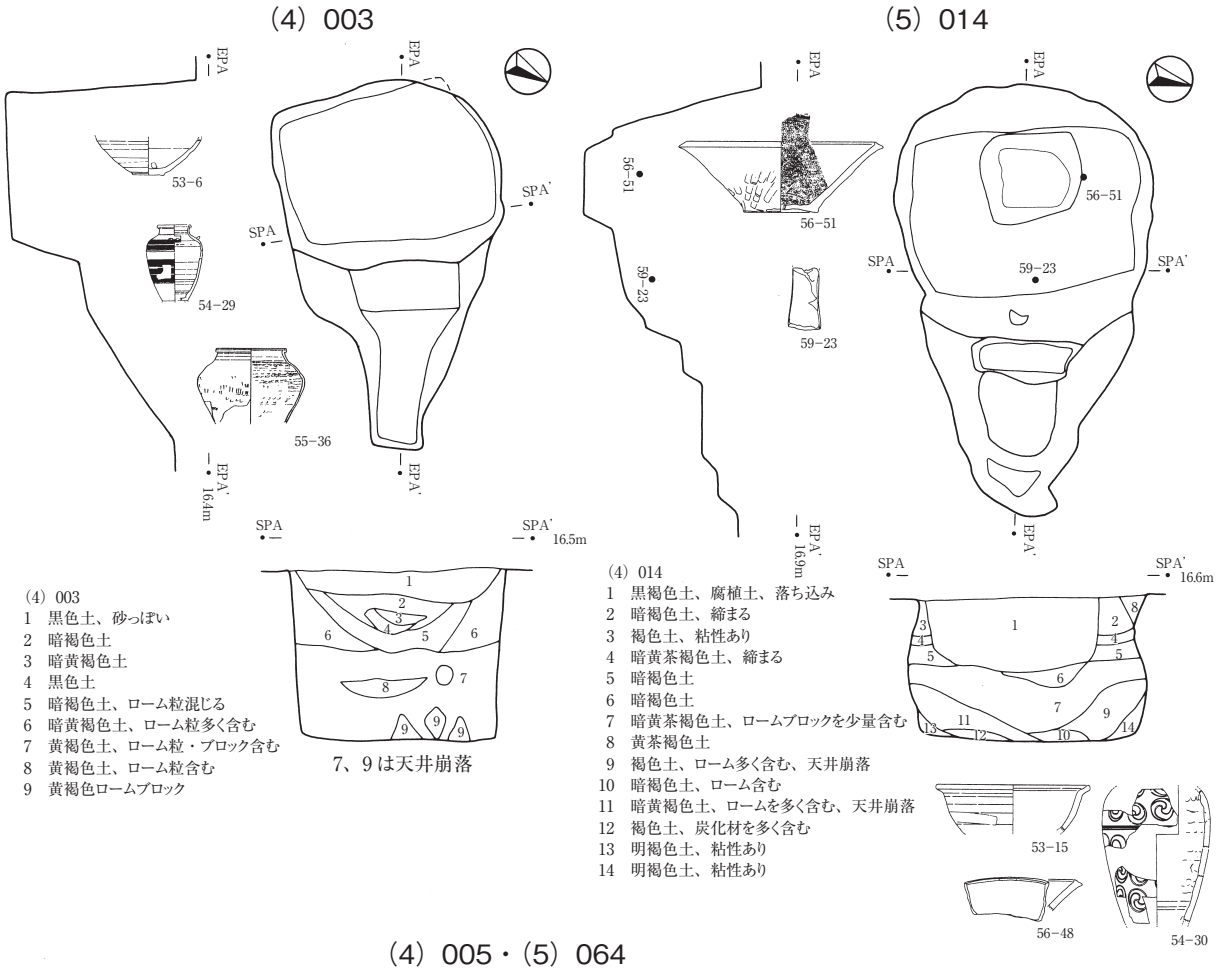
(4) 005・(5) 064（第29・54・56・59 ～ 61図、図版11・26・28・31 ～ 33）

36EE-17グリッドに位置する。調査範囲のちょうど境界線上にある遺構で、第４次調査と第５次調査でそれぞれ南西側と北西側を調査し、図面は整理段階で合成したが、中央幅1.00ｍはいずれの調査次にも調査できなかったものである。したがって、その間には破線で推定線を入れた。また、覆土断面には相互の整合性がとれていない。主室底面の四隅は丸くなるが概ね平行四辺形を呈する。長軸で2.50ｍ、直交する短軸で1.94ｍ、深さは2.10ｍになる。長軸はN-27°-Eになる。出入口は南東側長辺のほぼ中央に位置する。幅1.80ｍ、長さ1.76ｍ張り出している。出入口の主室からの高さはほぼ50㎝で、主室との段差から20㎝ほどのところに、幅0.30ｍ、長さ推定1.10ｍ、深さ10㎝の浅い溝が出入口方向と直交するように掘られている。この溝の覆土は出入口全体の覆土とは別に区分けられる。主室に近い15層は締まりが弱く、廃絶時には溝状になっていたようであるが、主室から遠い16層はロームブロックを含む暗黄褐色土で、硬く絞まっていた。そのような状況から、この溝には（木製の）遮断壁が設置され、それを安定させるものとして溝が掘

第 27 図　第 2 区画　遺構配置

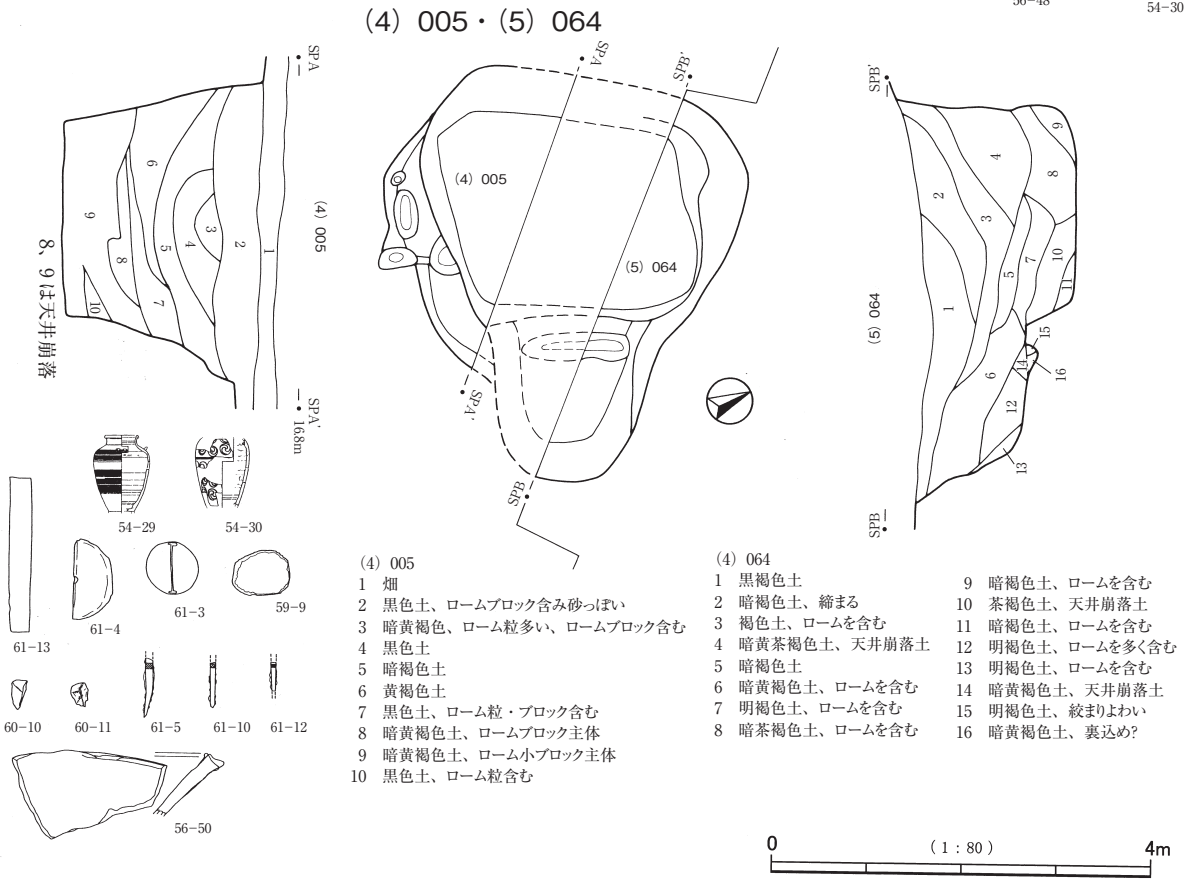


第28図　第2区画　遺物分布



(4) 003
1 黒色土、砂っぽい
2 暗褐色土
3 暗黄褐色土
4 黒色土
5 暗褐色土、ローム粒混じる
6 暗黄褐色土、ローム粒多く含む
7 黄褐色土、ローム粒・ブロック含む
8 黄褐色土、ローム粒含む
9 黄褐色ロームブロック

(4) 014
1 黒褐色土、腐植土、落ち込み
2 暗褐色土、締まる
3 褐色土、粘性あり
4 暗黄茶褐色土、締まる
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 暗黄茶褐色土、ロームブロックを少量含む
8 黄茶褐色土
9 褐色土、ローム多く含む、天井崩落
10 暗褐色土、ローム含む
11 暗黄褐色土、ロームを多く含む、天井崩落
12 褐色土、炭化材を多く含む
13 明褐色土、粘性あり
14 明褐色土、粘性あり



(4) 005
1 畑
2 黒色土、ロームブロック含み砂っぽい
3 暗黄褐色、ローム粒多い、ロームブロック含む
4 黒色土
5 暗褐色土
6 黄褐色土
7 黒色土、ローム粒・ブロック含む
8 暗黄褐色土、ロームブロック主体
9 暗黄褐色土、ローム小ブロック主体
10 黒色土、ローム粒含む

(4) 064
1 黒褐色土
2 暗褐色土、締まる
3 褐色土、ロームを含む
4 暗黄茶褐色土、天井崩落土
5 暗褐色土
6 暗黄褐色土、ロームを含む
7 明褐色土、ロームを含む
8 暗茶褐色土、ロームを含む
9 暗褐色土、ロームを含む
10 茶褐色土、天井崩落土
11 暗褐色土、ロームを含む
12 明褐色土、ロームを多く含む
13 明褐色土、ロームを含む
14 暗黄褐色土、天井崩落土
15 明褐色土、絞まりよわい
16 暗黄褐色土、裏込め?

第29図　第2区画　地下式坑（1）

られ、出入口から直接主室内部がみえない（あるいは光が届かない。温度が上がらない）ようになっていたことが想定される。これは、内部に保管している物品の管理上の手段であったと思われる。このような溝を出入口に設ける地下式坑はこの遺跡内に多くみられる。主室覆土は最下層からローム天井部の崩落土が確認できるので、ローム掘り抜きの天井が存在していたと思われる。なお、出土位置は不明だが、第４次調査の（4）005の覆土上層から貝が出土しており、貝層の土壌を全量採取している。水洗選別を行い、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏に鑑定を依頼したところ、ハマグリが少量検出された。

出土遺物には、常滑片口鉢（56-50）、口広有耳壺（54-29）、古瀬戸瓶子（54-30）、金属製品（61-3～5・10・12・13）、砥石（59-9）、火打石（60-10・11）があり、いずれも地点が不明であるが、金属製品や砥石、火打石などは近世と思われる。

(5) 014（第29・53・54・56・59図、図版11・25・26・28・31）

第２区画の中央西端の35EE-86グリッドに位置する。主室底面は長軸2.30m、直交する短軸は1.72m、深さは1.82mになる。長軸の方位はN-10°-Wになる。主室の形態はほぼ長方形であるが、特徴的なのは西側壁に接するように底面に長さ1.00m、幅0.80m、深さ0.30mの方形の貯蔵穴状のピットが造られている。この底面はほぼ平坦である。この貯蔵穴とは反対側の長辺のほぼ中央に出入口が張り出している。長さ1.82m、最大幅2.20mで、主室との高低差は60cmほどであるが、途中小さな足かけ部を壁に造り出している。出入口にはその小さな足かけ部を含めると、４段の階段面がある。入口から２段目が最も広く、次の３段目は浅く溝状になっている。覆土下層には壁の崩落土と考えられるロームが厚く堆積していて、ロームを削り込んだ天井が存在していたと思われる。

覆土下層から常滑片口鉢（56-51）と砥石（59-23）が出土しているが、天井崩落土の下か上か判然としない。その他に位置は特定できないが、古瀬戸瓶子（54-30）・折縁深皿（53-15）、常滑片口鉢（56-48）が出土している。

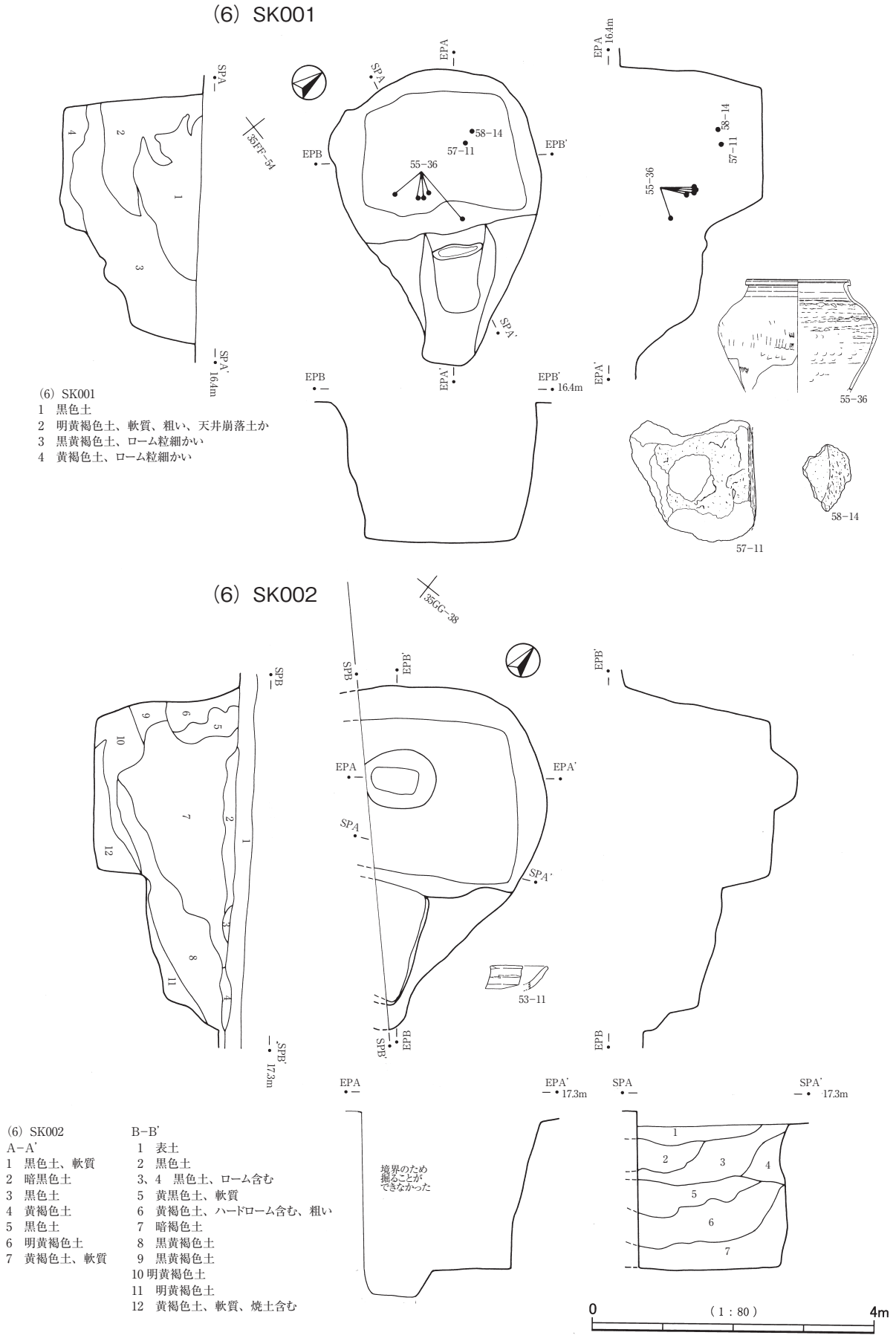
(6) SK001（第30・55・57・58図、図版11・12・27・29・30）

第２区画北東隅の35FF-44グリッドに位置する。主室底面は長軸2.18m、直交する短軸は1.59m、深さは2.00mになる。長軸の方位は、N-35°-Eになる。主室の形態はほぼ長方形であるが、出入口のところが、内側に張り出している。四隅は丸みを帯びる。出入口は南東側長辺のほぼ中央から長さ1.90m外に張り出している。主室との段差は80cmになり上り下りにはハシゴが必要な段差である。その段差から20cmほどのところに、幅0.20m、長さ0.75m、深さ４cm前後の浅い溝が、出入口方向と直交するように掘られている。出入口の平坦面は奥行き1.15mほどである。

主室内の覆土は、出入口から土砂が流入した後、ローム天井部が崩落した状況を現している。この天井部崩落の前の土砂流入に伴う遺物に常滑大甕片（55-36）や石造物の破片（57-11、58-14）など比較的多くの遺物があるのがこの遺構の特徴である。

(6) SK002（第30・53図、図版12・25）

第２区画北端の35EE-38グリッドに位置する。ちょうど調査区の境界線上にあったため、ほぼ西側半分が調査できなかった。ただ、出入口も半分調査することができたので、規模の復元は可能である。主室底面の長軸は推定3.44m、直交する短軸は2.16mで、表土除去後の深さは2.02mである。長軸の方位は長短軸の交点を基準にN-58°-Eになる。主室の形態はほぼ隅丸の長方形になると思われる。主室底面中央から北寄りに幅0.80m、長さ推定1.20m、深さ40cmほどの貯蔵穴がある。出入口は主室南側長辺のほぼ中央から南



第30図　第2区画　地下式坑（2）

東方向に2.10m張り出している。主室との段差は70㎝になり上り下りにはハシゴが必要な段差である。出入口の平坦面は１段で長さ1.65mになり比較的広い。覆土断面をみると、主室底面上に出入口から流れ込むように焼土を含む土砂が流入している。一部ローム壁の崩壊土がみられるが、天井を支えていたであろうローム塊の分厚い堆積が断面図では判然としない。

遺物には一括資料として古瀬戸小皿片（53-11）が出土している。

(5) 042（第31図、図版12）

第２区画南寄りの36FF-32グリッドに位置する。主室底面は長軸2.00m、短軸は1.00m、深さは1.10mほどである。長軸の方位は長短軸交点を基準にN-80°-Eになる。主室平面形態は隅丸長方形になる。出入口は北よりの主室長辺のほぼ中央から0.70m～1.00m張り出しているが、特徴的なのは主室と出入口の段差がまったく無いことである。したがってこの孔に入るには、地上面から最低1.1mの段差を解消するため、出入口にハシゴを設置して入るというかたちになる。出入口の幅は主室との接続部で1.20m前後になり、主室の規模に比べ大きくみえる。覆土の堆積状況観察からは、壁や天井部の崩落土の分厚い堆積がみられるようであるが、この場合主室の高さが非常に低くなり、這いつくばっていなければならないほど低くなると考えられる。

(5) 077（第31・55図、図版27）

第２区画東端の35FF-68グリッドに位置する。主室底面は長軸2.05m、直交する短軸は1.35m、深さは1.50mになる。長軸の方位はN-48°-Eになる。主室平面形態は長方形になる。出入口は南寄りの長辺のほぼ中央から南東方向に0.80mほど張り出しているが、主室と出入口の段差がまったく無い。接続部で幅1.10mになる。おそらく出入りの際にはハシゴを設置していたであろう。覆土の堆積状況観察からは、壁や天井部の崩落土の分厚い堆積がみられる。形態的には（5）042と同類の地下式坑になる。

出土位置レベルからみて、おそらく天井崩落前に出入口から流入した土砂に混ざって、常滑大甕の大きな破片（55-36）が出土している。

掘立柱建物跡

(5) 028（第31・59・60・62図、図版11・31・32・34）

区画最北端の35EE-57グリッドに位置する。柱の抜き取り痕が明瞭な２間×３間の掘立柱建物跡になる。北側の桁行で西から順に芯々距離1.40m、1.60m、1.85mの間隔になる。同様に南側の桁行で西から順に1.70m、1.50m、1.70mの間隔になる。一方、梁行は西側の並びで北から1.55m、1.70mの間隔になり、東側梁行は北から1.50m、1.80mの間隔になる。各柱穴の堀込みはいずれもしっかりしている。長軸の方位はN-62°-Eである。柱痕が多数あり、何度かの建て替えがあったと思われる。

出土位置は不明だが、寛永通寶（新寛永）３点（62-6～8）、砥石（59-16）、火打石（60-5）が出土している。いずれも近世遺物である。

井戸

(5) 016（第32・58～61図、図版11・30～33）

第２区画の北西端35EE-66グリッドに、掘立柱建物跡（4）028に併設するように造られている。朝顔型に開いた形態で、遺構確認面で直径1.90m～2.40mの不整円形で、下位にいくに従ってすぼまってゆき、1.5mほどの深さから下は、直径1.10mの円筒形をなす。2.2m以下は調査していないが、さらに1.5m以上深くなるようである。覆土は自然堆積である。

出土位置は不明だが、遺物には鉄製品（61-11・14・15）、砥石（59-4・17）、石臼（58-17）、火打石（60-3）があり、総じて近世遺物のため、この井戸は近世遺構と考えられる。

(5) 043（第32・53図、図版11・25）

36FF-12グリッドに位置する。朝顔型に開いた形態で、遺構確認面で直径2.46mになる。下位にいくに従ってすぼまって、深さ1.4mから下は、直径1.25mの円筒形になる。それ以下は調査できなかったが、さらに深くなると思われる。覆土は自然堆積である。

出土位置は不明だが、遺物には東海系鍔釜（53-20・21）がある。

前述した井戸の内、(5) 016を除く（5）043、(5) 048、(5) 051はいずれも狭い範囲にまとまっている。

(5) 048（第32・60図、図版11・32）

36FF-10グリッドに位置する。朝顔型に開いた形態で、遺構確認面で直径2.20mのほぼ円形で、下位にいくに従ってすぼまり、深さ1.4mで直径1.10mになる。それ以下は調査できなかったが、さらに深くなると思われる。覆土中には、白色の粘土や砂が含まれる層があるが、その層に関しては人為的に埋められたものと判断される。

土製の丸玉（60-1）が出土しているが、出土位置は不明で、この遺構に伴うものではないと考えられる。

(5) 051（第32・53・56・61図、図版11・25・28・33）

36FF-11グリッドに位置する。朝顔型に開いた形態で、遺構確認面で直径約3.00mになる。下位にいくに従ってすぼまって、深さ1.5mで直径1.80mになる。浅い不定形の落ち込みと重複しているが、その新旧関係が定かではない。覆土の土層堆積状況は北から南に傾斜しており、北側から土砂で埋め戻しているのであろうか。出土位置は不明だが、遺物には古瀬戸天目茶碗底部（53-10）、常滑片口鉢（56-43）、鉄製品（61-8）がある。また、図示していないが、後述する（5）065出土の古瀬戸広口壺の蓋（53-18）と同一個体と考えられる破片が出土している。

火葬施設（墓）

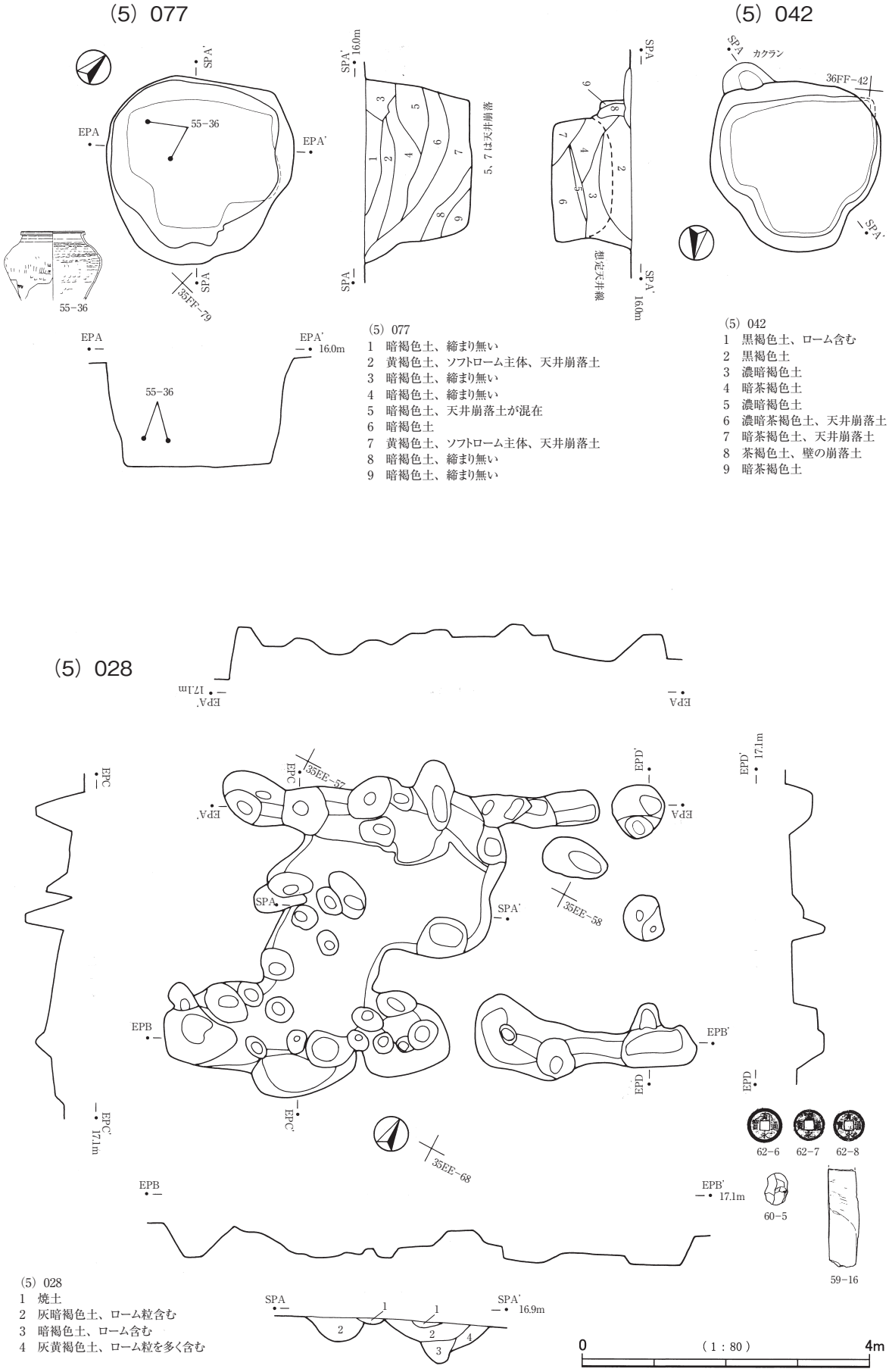
(4) 002（第 34 図、図版 12）

36EE-26グリッドに位置する。長軸は1.15m、短軸は0.71m、深さは18cmほどしかない。長軸の方位はN-39°-Wになる。底面直上覆土中から焼土・木炭・骨片が出土している。被熱面があるかどうかは不明であるが、とりあえず火葬施設（墓）とする。

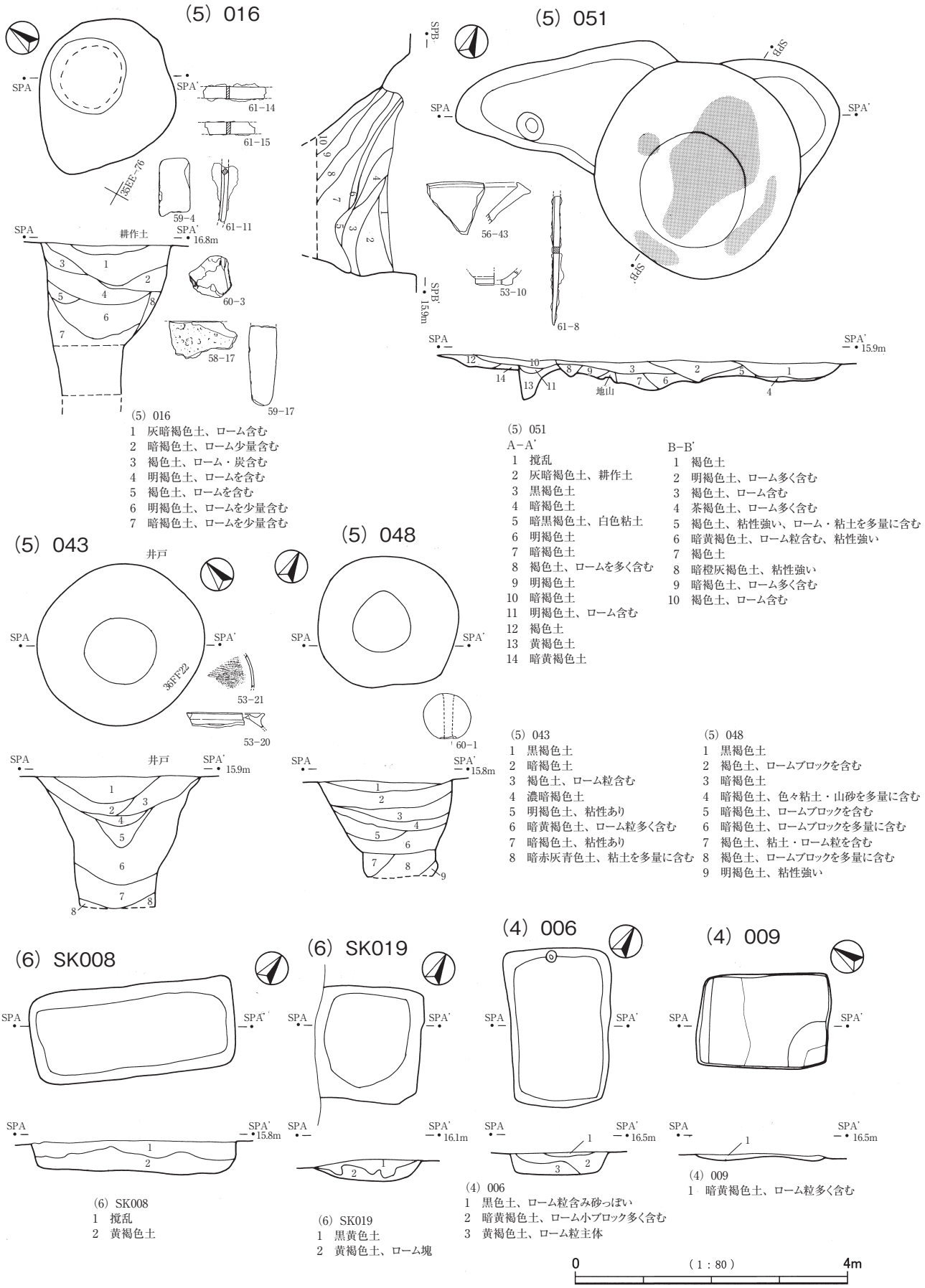
(5) 055 A・B（第 34・53・54・57・59・61・62 図、図版 12・25・26・29・31・33・34）

調査時には二つの異なる土坑を一つの番号で調査していたが、整理段階でＡとＢに分けた。まずＡの方であるが、Ｔ字型の土坑に長方形の土坑やピットが４つ重なる形で図示されている。Ｔ字型の特異な形の部分は、長軸1.85m、北側短軸が1.00mで深さが45cmほどになる。北側中心に覆土中に焼土や炭が確認できた。焼骨の存在が不明確だが底面が一部焼けており、火葬施設（墓）の可能性がある。その場合、炭に接する位置の２つのピットはこの火葬遺構に伴うと考えられる。逆に他の２つのピットと方形の土坑は関連しない別個の遺構と考えたい。Ｂは堀方長軸2.02m、短軸1.65m、深さ40cmほどの比較的大きな楕円形土坑である。

覆土最上層から古瀬戸平碗片（53-4）、壺口頸部（54-27）、輸入銭貨（62-12）、石造物片（57-4）が出土しており、これらのみならば確実に中世土坑と考えられるが、他に砥石（59-13・15）や銅製飾り金具（61-1）が一括遺物として取り上げられているなど、年代が不明確のものもあることから一概に中世と言いづらい。



第31図　第2区画　地下式坑（3）・掘立柱建物跡



(5) 016
1 灰暗褐色土、ローム含む
2 暗褐色土、ローム少量含む
3 褐色土、ローム・炭含む
4 明褐色土、ロームを含む
5 褐色土、ロームを含む
6 明褐色土、ロームを少量含む
7 暗褐色土、ロームを少量含む

(5) 051
A−A'
1 撹乱
2 灰暗褐色土、耕作土
3 黒褐色土
4 暗褐色土
5 暗黒褐色土、白色粘土
6 明褐色土
7 暗褐色土
8 褐色土、ロームを多く含む
9 明褐色土
10 暗褐色土
11 明褐色土、ローム含む
12 褐色土
13 黄褐色土
14 暗黄褐色土

B−B'
1 褐色土
2 明褐色土、ローム多く含む
3 褐色土、ローム含む
4 茶褐色土、ローム多く含む
5 褐色土、粘性強い、ローム・粘土を多量に含む
6 暗黄褐色土、ローム粒含む、粘性強い
7 褐色土
8 暗橙灰褐色土、粘性強い
9 暗褐色土、ローム多く含む
10 褐色土、ローム含む

(5) 043
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土、ローム粒含む
4 濃暗褐色土
5 明褐色土、粘性あり
6 暗黄褐色土、ローム粒多く含む
7 暗褐色土、粘性あり
8 暗赤灰青色土、粘土を多量に含む

(5) 048
1 黒褐色土
2 褐色土、ロームブロックを含む
3 暗褐色土
4 暗褐色土、色々粘土・山砂を多量に含む
5 暗褐色土、ロームブロックを含む
6 暗褐色土、ロームブロックを多量に含む
7 褐色土、粘土・ローム粒を含む
8 褐色土、ロームブロックを多量に含む
9 明褐色土、粘性強い

(6) SK008
1 撹乱
2 黄褐色土

(6) SK019
1 黒黄色土
2 黄褐色土、ローム塊

(4) 006
1 黒色土、ローム粒含み砂っぽい
2 暗黄褐色土、ローム小ブロック多く含む
3 黄褐色土、ローム粒主体

(4) 009
1 暗黄褐色土、ローム粒多く含む

第32図　第2区画　井戸・土坑（1）

土坑

土坑に関しては、遺物の出土している土坑や特徴のある土坑以外は第３表にまとめた。

(5) 019・020・021（第33・53・58 ～ 60・62図、図版13・25・30 ～ 32・34）

35EE-78グリッドに位置する。この３基はそれぞれが重複することはないが、この３基の土坑と重複する落ち込みがある。

調査は３基同時に行った。019の堀方長軸は2.81m、短軸2.35m、深さ86cm余りで隅丸長方形になる。020の堀方長軸は1.91m、短軸1.68m、深さ55cmの隅丸長方形である。021の堀方長軸は2.85m、短軸2.27m、深さは70cmほどの非常に整った隅丸長方形になる。この大きな範囲の調査では、多数の遺物が出土しているが、019から出土した火打石（60-2）を除いて、ほとんどが019 ～ 021の一括遺物として取り上げられており、その所属が不明となっている。

遺物には龍泉窯系青磁片（53-23）が1点含まれているものの、他は火打石（60-1・2）、砥石片（59-10）、石臼片（58-21）、寛永通寶（62-3）と図示していないが焙烙片多数が出土しており、総じてほぼ近世のもので占められる。ただ、これをもって３基の土坑がすべて近世とは言えないが、少なくともこれらの土坑と重複する落ち込みは近世になるであろう。

(5) 065（第33・53・55・57・59・61図、図版25・27・29・31・33）

36EE-09グリッドに位置する。基本は隅丸方形で、それに凧の尻尾のように長い溝２本が付いているようにみえて、調査段階ではこれらをまとめて一つの番号で調査している。まず隅丸方形の土坑であるが、長軸3.05m、短軸2.80m、深さ20cmで長軸の方位はN-23°-Wになる。覆土断面観察はしてないが、覆土中には焼土が集中するところがある。凧の尻尾のような溝のうち西側の長い溝は、北側の接続部で幅0.50m、南の先端部で0.85m、長さ5.00mになる。深さは20cmに満たず浅い。この溝の方向は (5) 056溝状遺構とまったく同じである。

一括遺物として古瀬戸広口壺の蓋 (53-18)・平碗 (53-2)・卸皿片 (53-13)、常滑大甕 (55-36)、金属製品 (61-17・19)、石造物片（57-7)、砥石（59-22）が出土している。

(5) 027（第33・59 ～ 61図、図版31 ～ 33）

35EE－79グリッドに位置する。堀方長軸2.91m、短軸2.01m、深さ50cmほどの隅丸長方形の土坑である。長軸の方位はN-56°-Eになる。覆土には炭化材やローム粒を多く含んでいる。覆土中からルツボ（60-1 ～ 3）や金属片（61-16・18)、砥石（59-1）をはじめ図示していないが焙烙片多数出土しており、近世の遺構と考えたい。この複数のルツボには緑青が付着しており、銅を溶解したものと思われる。

覆土の状況や出土遺物などから、銅製品の製作に関係する遺構か、あるいは被熱面がないことから銅製品の製作に関連した遺物を廃棄した遺構と考えられる。

(5) 052A・B（第33図）

35FF-91グリッドに位置する。２基の土坑が重なっているようにみえる。北側のほぼ隅丸方形の土坑（A）は長軸2.00m、短軸1.90m、深さは50cmになる。長軸の方位はN-55°-Eになる。南側の土坑（B）は北側土坑に比べて16cmほど浅くなる。二つの土坑の新旧関係は不明である。

(5) 023（第34図）

35EE-58グリッドに位置する。円形の土坑で直径は2.39m～ 2.52m、深さは28cmになる。壁際３か所にピットがある。

(5) 025（第34・55・59・60・62図、図版27・31・32・34）

35EE-69グリッドに位置する。堀方長軸2.36m、短軸1.50m、深さ15cmほどの浅い不整形の土坑で、長軸の方位はN-71°-Eになる。覆土の状況は不明である。この浅い土坑内から常滑大甕（55-36）、石製丸玉（60-2）が出土しているが、この遺構に伴うものではないと考えられる。他に寛永通寶（62-4･5）、砥石（59-18）が出土しているので近世土坑としたい。

(5) 047（第34・53・62図、図版25・34）

35EE-89グリッドに位置する。アメーバ型の不整形な落ち込みで、最大幅3.02mになる。深さは20cmほどで非常に浅い。それに大小５つのピットが絡んでいる。一部断面の複数の切り合いの観察から、なんども埋まっては掘り返す状況がうかがえる。覆土中には炭や焼土は確認できない。この覆土中から古瀬戸小皿片（53-12）、輸入銭貨（62-11）が出土しており、おそらく中世の遺構であろう。

(5) 046（第34・62図、図版34）

36EE-19グリッドに位置する。堀方長軸は1.51m、短軸は1.18m、深さは最深25cmほどの楕円形土坑になる。底面は平坦ではない。長軸の方位はN-32°-Wになる。底面南には小ピットがある。覆土には焼土粒や炭化材を含んでいる。覆土中から輸入銭貨（62-10）が出土している。

(5) 049（第34図）

36FF-03グリッドに位置する。大型楕円形土坑と小型円形土坑が重なっている。断面観察では小型の土坑が大型土坑の覆土を切っているように見受けられるので、小型の方が新しいと言える。大型土坑の長軸が2.62m、短軸は2.34m、深さは13cmで、小型土坑は直径1.20m、深さ30cmになる。大型土坑の長軸方位はN-39°-Eになる。

(5) 070（第34・54図、図版13・26）

35FF-90グリッドに位置する。堀方長軸1.90m、短軸1.80m、深さ90cmほどになり比較的深い。そのためか南側壁に出入口用のステップ状の堀込みがみられる。長軸の方位はN-60°-Eになる。東西両辺のそれぞれ中央に1か所ずつピットが掘られている。深さは南側が40cm、北側が20cmになる。西隅の底面から灰混じり焼土の分布がみられた。覆土中から鉄釉古瀬戸瓶子片（54-31）が出土している。

(6) SK005（第35図）

35FF-72グリッドに位置する。いびつな方形土坑のようにみえる。底面は平坦で壁の立ち上がりが明瞭であるが、壁自体斜めに直線的である。堀方長軸で2.10m、短軸で2.03m、深さ60cmになる。長軸の方位はN-59°-Wである。

(6) SK006（第35図）

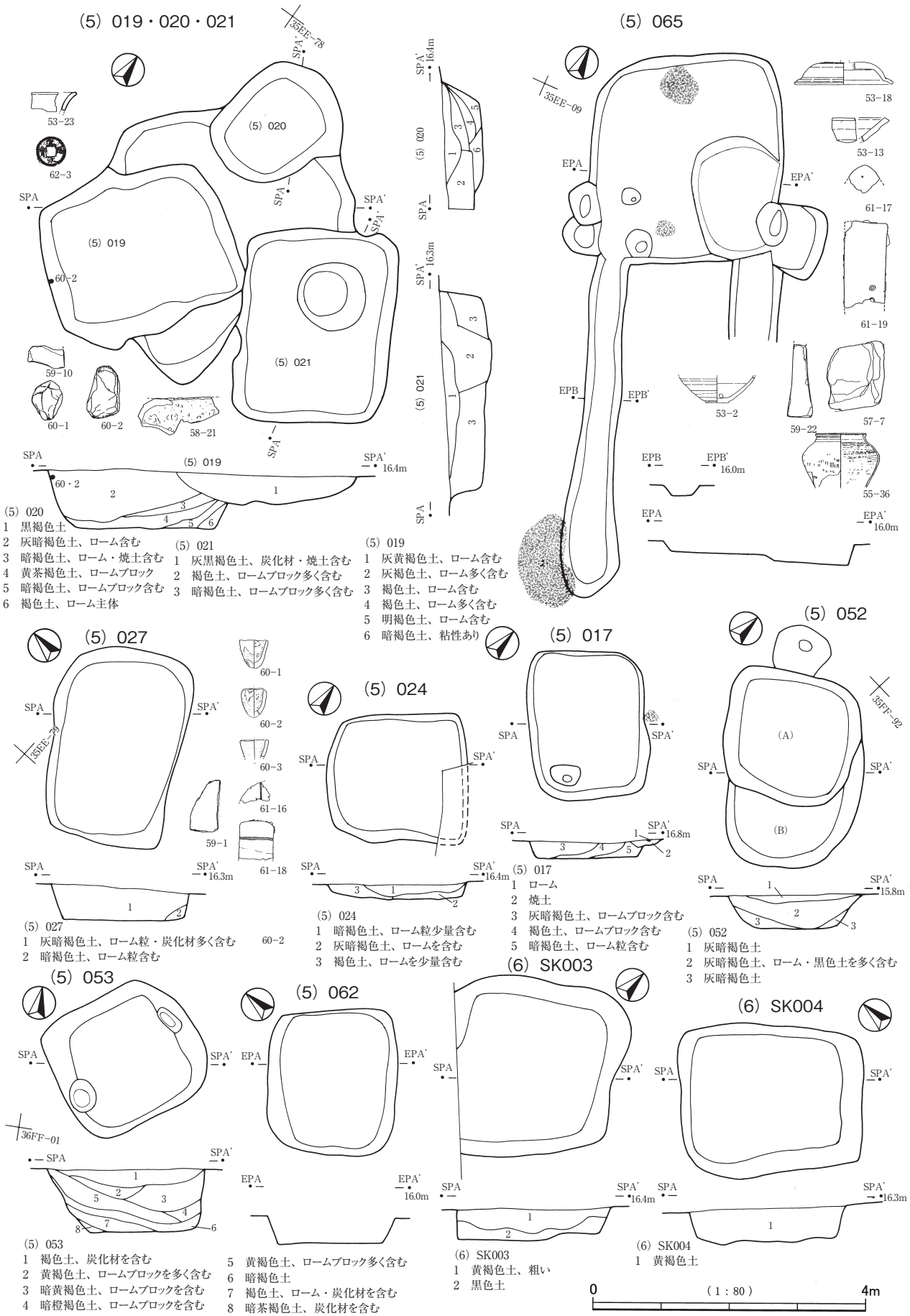
35FF-93グリッドに位置する。調査境界に位置し、一部は調査できなかったが、調査をした部分からみて、おそらく隅丸長方形の形態となるであろう。北東側の辺の長さは3.10mで、深さは25cmになる。

(6) SK007（第35図）

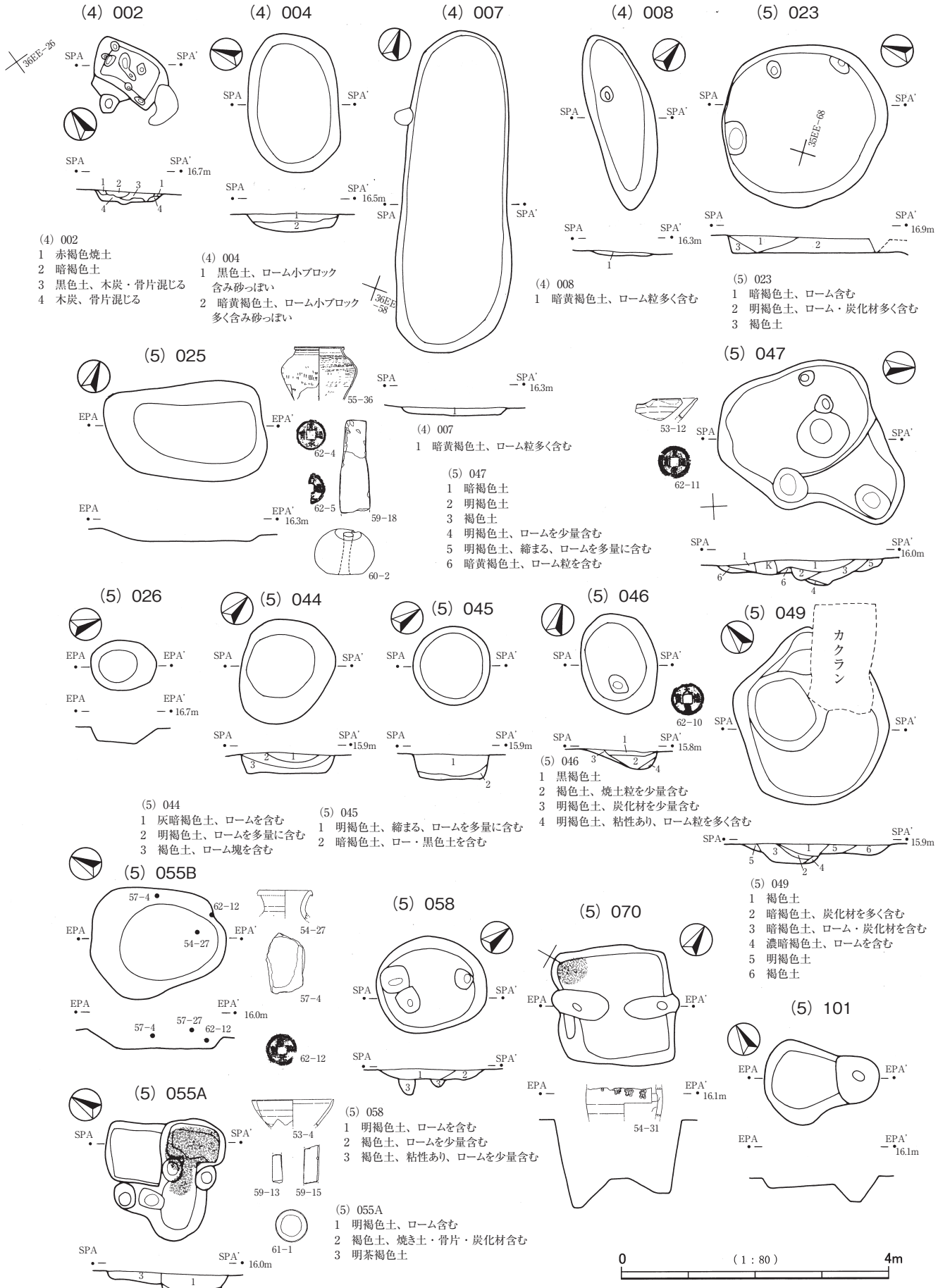
35FF-94グリッドで（6）SK006の南側に位置し、同様に一部調査ができなかったが、(6) SK006と異なり、調査実施した箇所はプランのラインが不安定で直線的を基調とする長方形ではなくアメーバ状の形になっている。長軸で4.90m、深さ20cm前後のようである。

(6) SK024（第35図、図版13）

35FF-72グリッドに位置する。一部調査ができなかった箇所がある。概観すると不整形の土坑であるが、



第33図　第2区画　土坑（2）



(4) 002
1 赤褐色焼土
2 暗褐色土
3 黒色土、木炭・骨片混じる
4 木炭、骨片混じる

(4) 004
1 黒色土、ローム小ブロック含み砂っぽい
2 暗黄褐色土、ローム小ブロック多く含み砂っぽい

(4) 008
1 暗黄褐色土、ローム粒多く含む

(5) 023
1 暗褐色土、ローム含む
2 明褐色土、ローム・炭化材多く含む
3 褐色土

(4) 007
1 暗黄褐色土、ローム粒多く含む

(5) 047
1 暗褐色土
2 明褐色土
3 褐色土
4 明褐色土、ロームを少量含む
5 明褐色土、締まる、ロームを多量に含む
6 暗黄褐色土、ローム粒を含む

(5) 044
1 灰暗褐色土、ロームを含む
2 明褐色土、ロームを多量に含む
3 褐色土、ローム塊を含む

(5) 045
1 明褐色土、締まる、ロームを多量に含む
2 暗褐色土、ロー・黒色土を含む

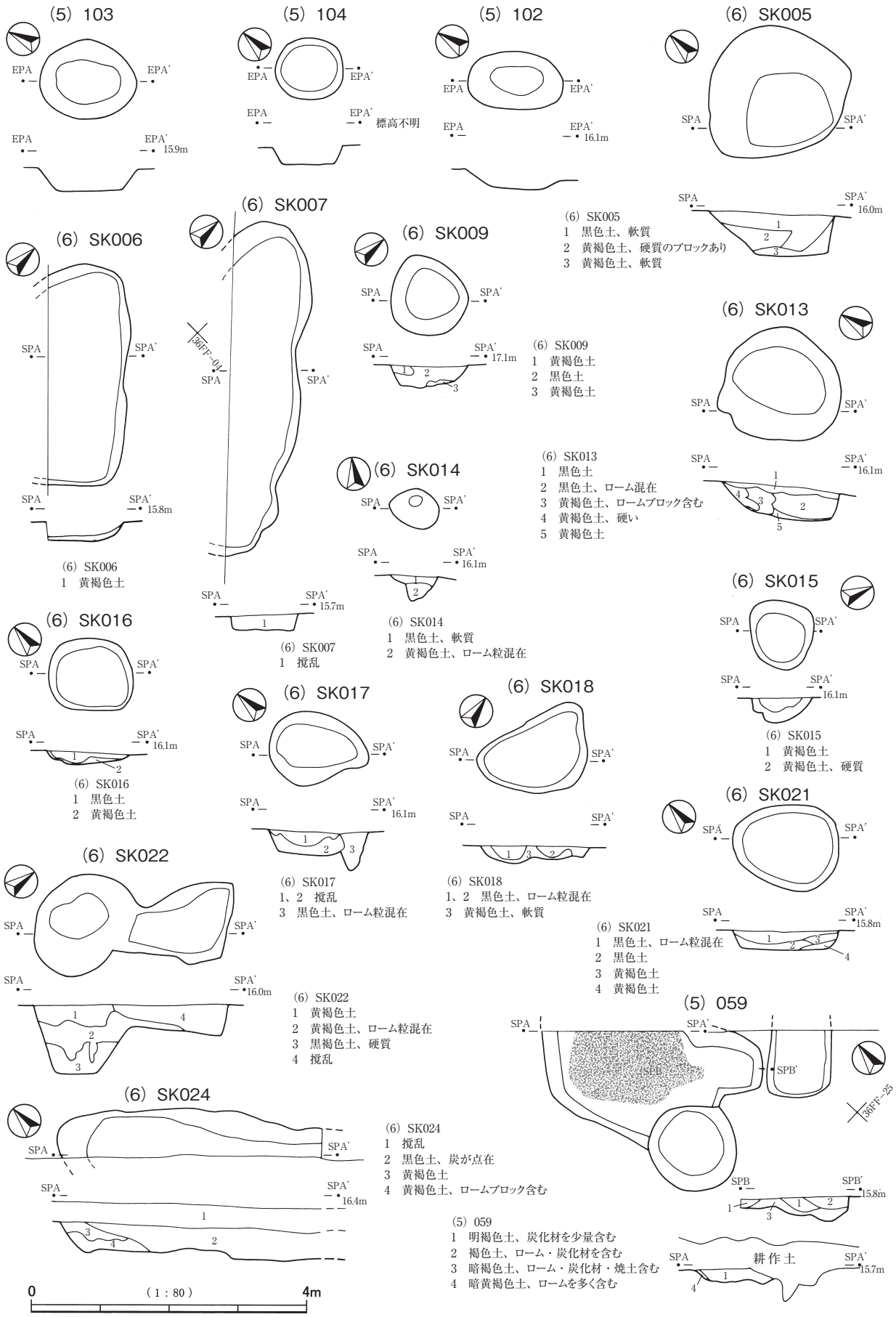
(5) 046
1 黒褐色土
2 褐色土、焼土粒を少量含む
3 明褐色土、炭化材を少量含む
4 明褐色土、粘性あり、ローム粒を多く含む

(5) 049
1 褐色土
2 暗褐色土、炭化材を多く含む
3 暗褐色土、ローム・炭化材を含む
4 濃暗褐色土、ロームを含む
5 明褐色土
6 褐色土

(5) 058
1 明褐色土、ロームを含む
2 褐色土、ロームを少量含む
3 褐色土、粘性あり、ロームを少量含む

(5) 055A
1 明褐色土、ローム含む
2 褐色土、焼き土・骨片・炭化材含む
3 明茶褐色土

第34図　第2区画　土坑（3）・火葬施設



第35図　第2区画　土坑（4）

深さは40㎝あり、底面は平坦である。残存長3.80mになる。

(5) 059（第35図、図版13）

36FF-14グリッドに位置する。概観すると円形土坑と方形土坑がいくつか重なっているようにみえる。もっとも大きな方形にみえる土坑の覆土には底面上に広く焼土が分布していた。円形部分の堀方直径は1.30mである。深さは円形部で46㎝、方形部で20㎝になる。

(5) 067（第36・58図、図版30）

36FF-01グリッドに位置する。５基の円形土坑と１基の楕円土坑の複合体のように見受けられる。断面観察されていないので新旧関係や覆土の状況は不明である。遺物は石造物（58-16）が出土している。

(5) 068（第36図）

35EE-98グリッドに位置する。細長い土坑に不整形の小型の土坑と細長い溝状の土坑が重なっているようにみえる。最も大きな細長い土坑の長さは4.90m、最大幅1.10m、深さ15㎝である。覆土の状況は不明である。

(5) 061（第36図）

36EE-08グリッドに位置する。不整形の土坑であるが、深さは40㎝になり、堀込みはしっかりしている。最大長2.20mを測る。覆土中には焼土を含む層がある。

(5) 063（第36・58図・図版30）

35EE-99グリッドに位置する。楕円形の土坑に、円形の小型の土坑が合体したような形態であるが、それぞれどのように関連するのか不明である。最大幅2.7m、深さ20㎝ほどで非常に浅い。長軸の方位はN-58°-Eになる。この大きな楕円形の両端にピットが掘られている。覆土中からは石臼の破片（58-20）が出土している。

(5) 066（第36図、図版13）

36FF-03グリッドに位置する。長方形の土坑であるが、一部調査できなかった箇所がある。深さは60㎝あり、底面も平坦で堀方はしっかりしている。残存長1.85m、最大幅1.36mになる。

溝

(5) 056（第37・53・60・61図、図版25・32・33）

35FF-90、36FF-00･10グリッドに位置する。北北西から南南東に直線的に９mほど延びて井戸状遺構（5）051にぶつかり消滅する。（5）051と一連の遺構かは不明である。幅は1.0m～1.2m、深さは最大でも30㎝で、断面は緩やかに弧を描く。覆土中には炭化材や焼土を含むところもある。東側で小型の溝に接する。覆土中一括遺物で古瀬戸折縁小皿（53-1）・平碗（53-2・3）、金属製品（61-2）、火打石（60-7）が出土している。

(5) 018（第37図、図版14）

35EE-87・97グリッドに位置する。北北西から南南東に直線的に８mほど延びて（5）068にぶつかり消滅する。（5）068と一連の遺構かは不明である。幅は最大1.1mで深さは20㎝ほどである。堀方は緩やかである。

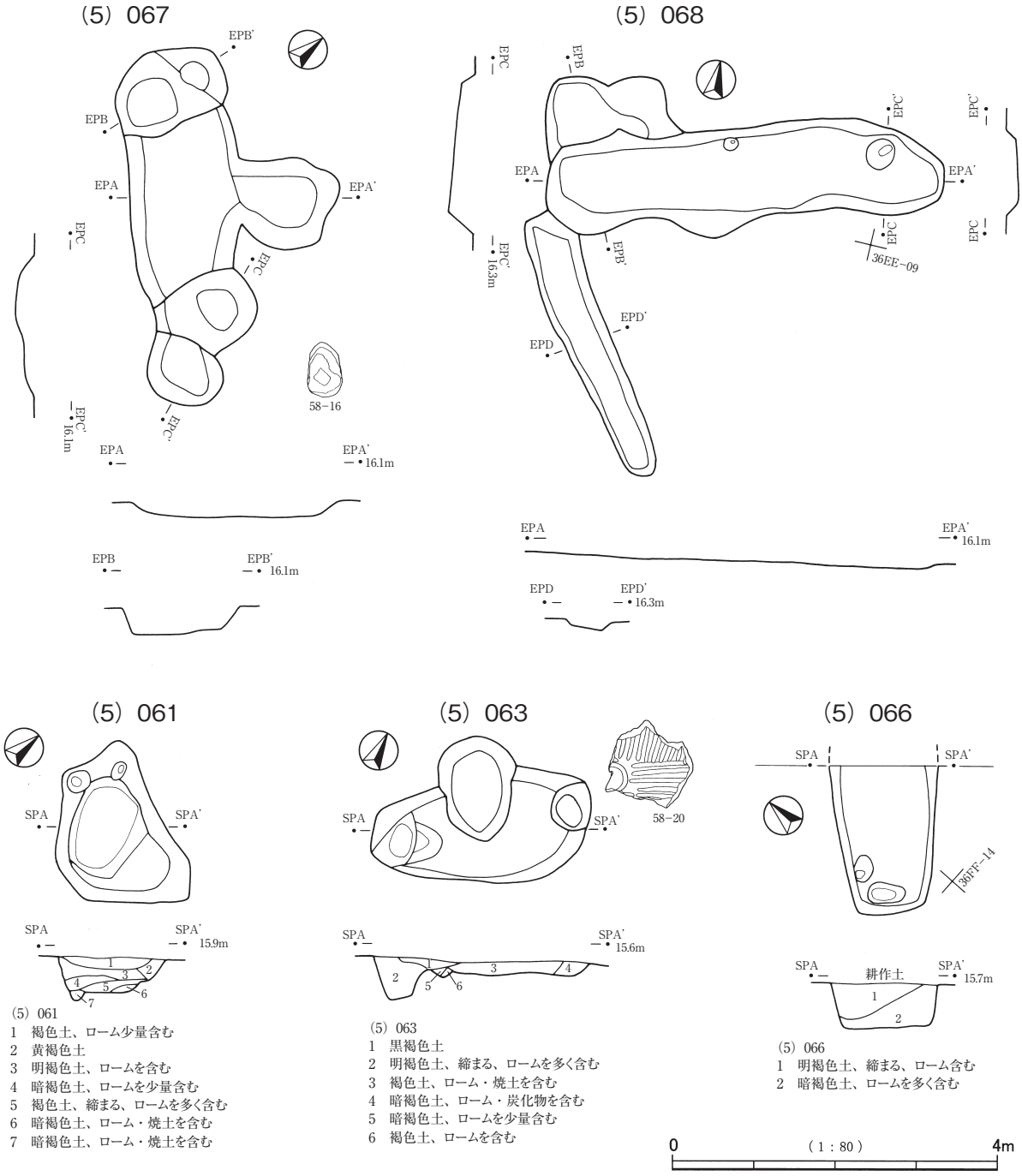
(6) SD002（第37図）

35FF-51グリッドから始まり、35FF-41・31・30と続き、35EE-39から（6）SK002（地下式坑）と重なるようにして消滅する。直線的に北進して途中大きく西方向に折れ曲がる溝状遺構である。総延長は18.5m、最大幅1.2m、深さは30㎝と浅い。（6）SK002（地下式坑）とは時期が異なり溝状遺構が古いと思われる。

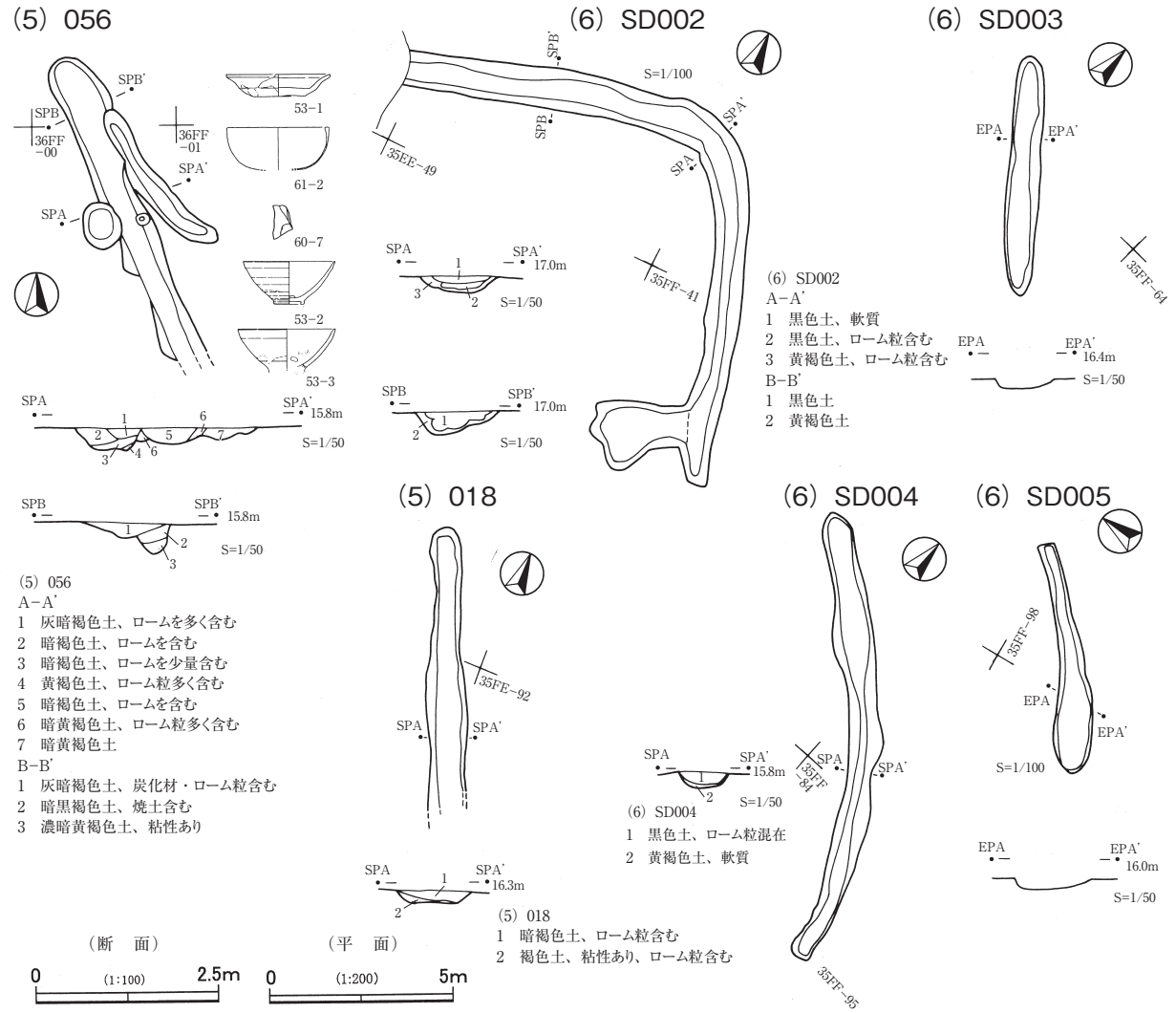
この溝の覆土中から多数の近世焙烙が出土している。したがって、近世以降と考えられる。

(6) SD004（第37図、図版14）

35FF-63・73・74・84グリッドに位置する。小さく弧を描く細長い溝で、長さ13m、最大幅1.1m、深さ20cmと浅い。



第36図　第2区画　土坑（5）



第37図 第2区画 溝

3 第3区画（第6・38・39・49図、図版14）

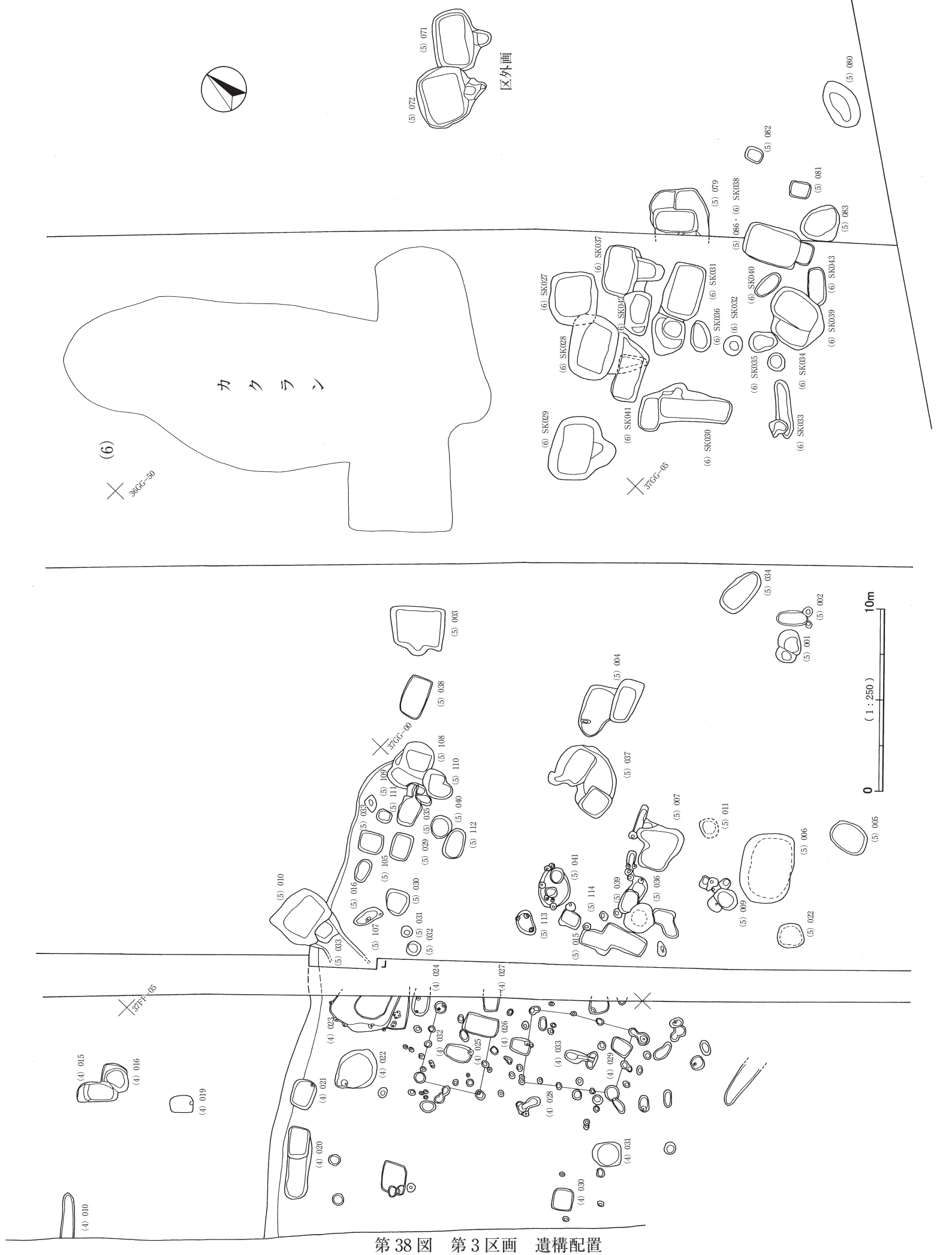
北限は南西から北東方向に延びる台地整形の段差とそれに絡む（5）010（地下式坑）と（5）003（地下式坑）から（6）027・037を結ぶ線で、西限は調査区外にまで、東限は調査区に隣接する道路下まで、南限は遺構が希薄になる地点までである。この範囲から北東に離れて（5）071・072・073（地下式坑）があるが、その距離からみて、この区画とは別個のものとした。区画の上下段差が北西側で明瞭にみられ、最大40㎝の比高差があり、その段差の方向はN-35°-Eになる。この段差と遺構の調査中に輸入銭貨が出土している。なお、第5次調査では台地整形に対して、（5）033の遺構番号を付けている。

また、標高が低いために遺構調査時に湧水のため冠水する遺構が多い。第6次調査時に検出された大型の土坑群（地下式坑の一種）が集中している地点は、第5次、第4次調査地点と様相を異にする。

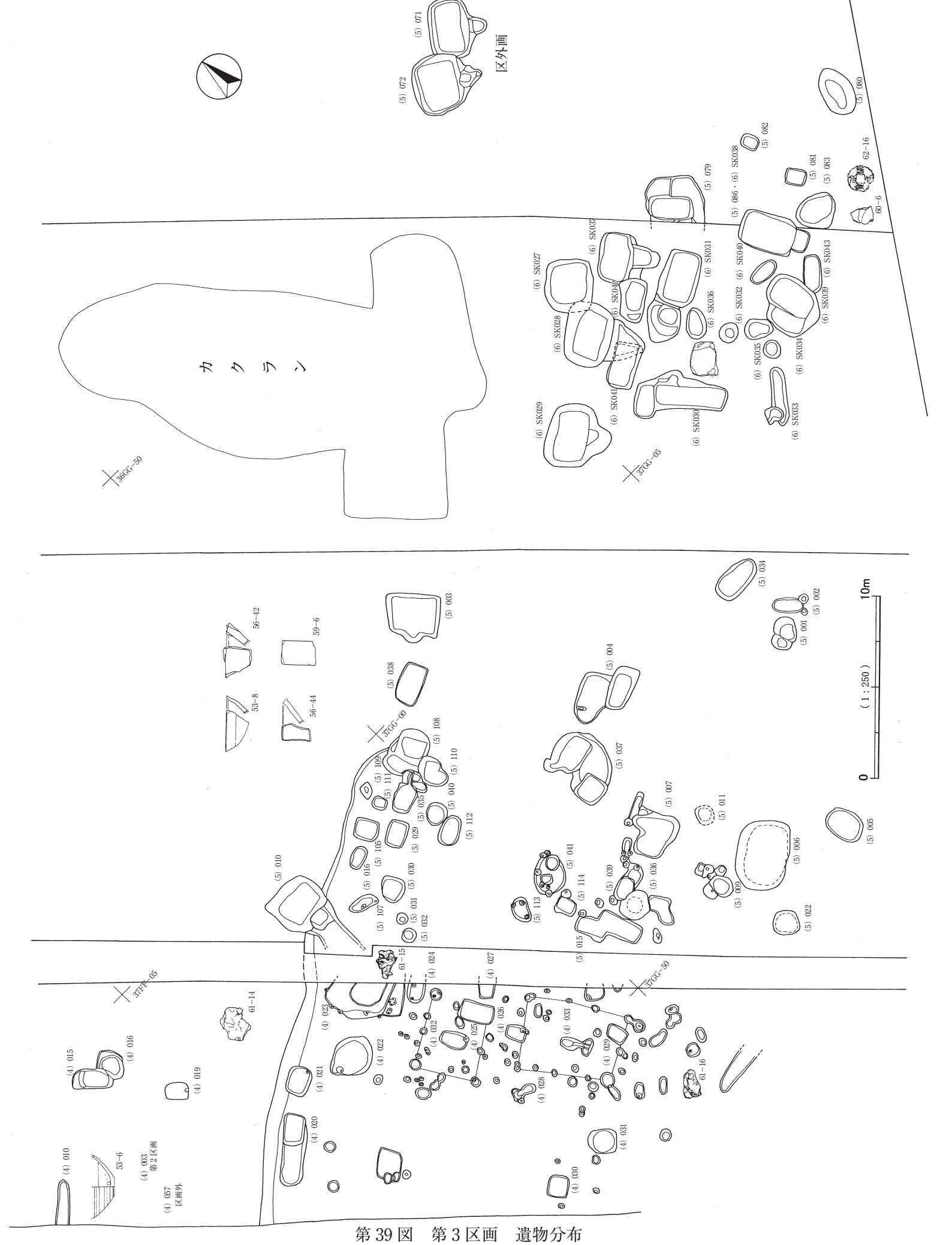
明瞭に突き出した出入口をもつ地下式坑はわずかに4基で、出入口の方向は真南が1基、南西が1基、南東が2基になる。第4次調査時には掘立柱建物跡が2棟以上検出された。また、他の区画でみられた溝が確認されなかった。おおよそ1,440㎡の範囲である。

掘立柱建物跡

以下の2軒の掘立柱建物跡周辺には、組み合わせの不可能な柱穴ピットが多数存在する。このことから、



第38図　第3区画　遺構配置



第39図　第3区画　遺物分布

この辺りに集中的に掘立柱建物が建てられたものと判断される。

(4) 032（第40図）

37FF-37グリッドに位置する。台地整形の段差から南に６ｍほどの地点に、その台地整形の方向とほぼ同じ方向に並ぶように建てられている。掘立柱建物跡の東半分は他の遺構が重なっていたり、また調査範囲の境界であったりしてはっきりしない。ここでは一応東西方向に長い２間×３間の規模としておく。また、個々の柱穴の大きさに隔たりが大きいのも組み合わせる際に困難の一因となっている。規模は北側桁行が芯々距離で西から2.00m、2.00mになる。南側桁行は1.80mである。一方、西側の梁行は北から1.60m、1.75mになる。柱穴の堀込みは最も深い北西端で80cmほどになるが、覆土の状況はまったく分からない。長軸の方位はN-61°-Eになる。

(4) 033（第40図）

(4) 032から南側に２ｍの地点の37FF-48グリッドに位置し、(4) 032とは直角方向に向きを変えた南北方向に長い２間×３間の掘立柱建物跡になる。この関係する柱穴も規模に大きな隔たりがある。西側の桁行き芯々距離が北から順に2.00m、1.90m、1.30mになる。対する東側の桁行は北から順に2.20m、1.50m、1.90mになる。一方、北側梁行は西から2.00m、2.00mになり、南側梁行は西から1.70m、1.80mになる。図面で分かるように南東側でかなりいびつな形になる。柱穴の堀込みは最も深い南東端で49cmほどになるが、覆土の状況はまったく分からない。長軸の方位はN-36°-Wになる。

(4) 032と033の周辺と東側第５次調査地点にかけて、広範囲に柱穴がみられるので、現状では組み合わせができない掘立柱建物が多数存在していたであろう。

地下式坑・大型土坑

(5) 010（第41・56～58・61図、図版14・28・29・30・33）

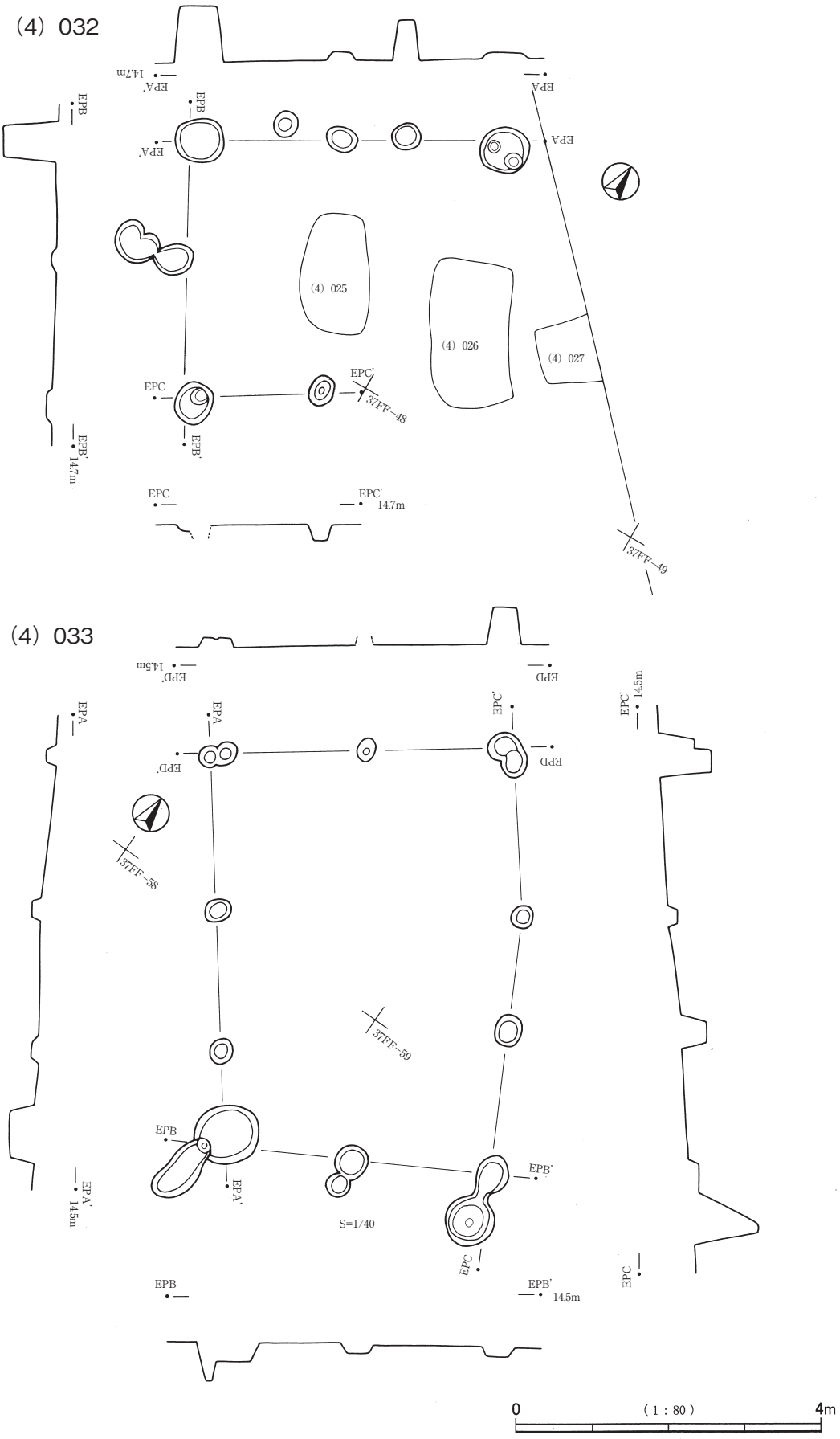
第３区画北寄りの37FF-07グリッドに位置し、台地整形段差と交錯する。この地下式坑が機能した時期と台地が段整形された時期との時間的関係は調査では分からなかったようである。主室底面は長軸で2.20m、直交する短軸で1.45m、深さは確認面から1.80m前後である。主室底面は隅丸の長方形になる。長短軸交点を基点に長軸の方位はN-85°-Eになる。主室南側長辺中央から南方向へ出入口が設けられている。張り出しは1.00mほどになる。出入口の平坦面は主室底面との段差が40cmで、その接続部で幅0.80m、奥行き0.80m弱のほぼ正方形になる。この出入口をさらに広げたような溝が南側調査区境方向に延びているが、この遺構が (5) 010地下式坑に伴うかどうかは不明である。

覆土観察からローム天井の崩落土の堆積が確認でき、この崩落土直上から常滑片口鉢片（56-53)、被熱した茶臼片（57-1・2)、その他石造物片（57-3・8、58-15)、鉄滓（61-4）が出土している。

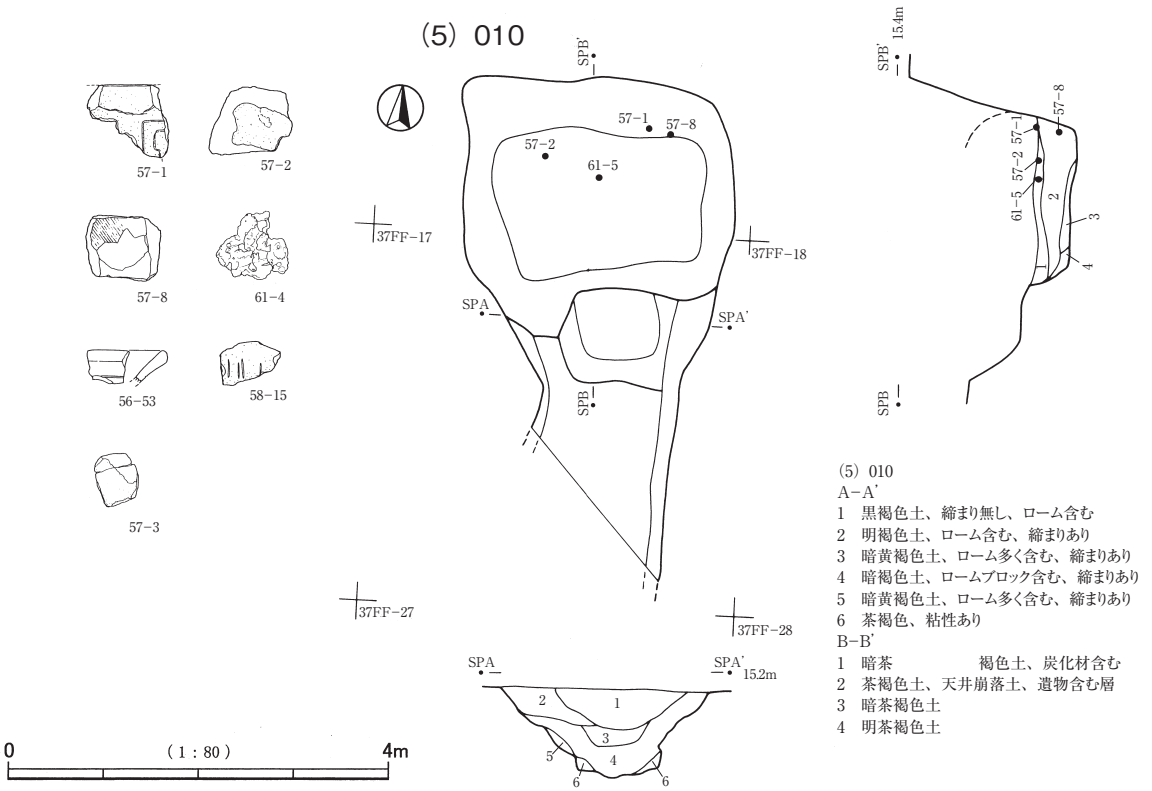
(5) 003（第42・54・57図、図版15・26・29）

第３区画北寄りの台地整形段差の延長線上36GG-91グリッドに位置する。主室底面の長軸は2.40m、直交する短軸は1.80m、深さは90cmほどである。長軸の方位は長短軸交点を基点にN-51°-Wになる。主室の平面形態はほぼ長方形になる。主室西側の長辺中央に出入口が設けられていて、およそ0.70m突き出ている。その平面形態は円筒形に近く、主室との間に段差は無い。調査開始時点では、大きな不定形の落ち込みを呈していたが、それが調査過程で天井部の崩落後に埋まった穴に流入した土砂であることが判明した。覆土断面観察でも天井部の崩落土を確認しているので、ローム天井を残した地下式坑であることが分かる。

遺物は常滑片口鉢底部片（54-33)、陶器壺口縁部破片（54-26)、石造物片（57-5・10）が出土してい



第 40 図　第 3 区画　掘立柱建物跡



第41図　第3区画　地下式坑（1）

るが、いずれもローム天井部崩落後の堆積土中からの出土である。

(6) SK029（第42・54・57・59図、図版15・26・29・31）

第3区画東寄りの36GG-94グリッドに位置する。主室底面の長軸は2.80m、直交する短軸は1.65m、深さは1.20mほどになる。長軸の方位は長短軸交点を基準にN-60°-Eになる。主室の平面形態は長方形である。主室南東側の長辺のほぼ中央に出入口が設けられていて、1.30mほど張り出している。ただし、出入口は平坦ではなく傾斜している。覆土観察から平面形態の似た（5）003が壁の立ち上がりが急であるのとは対照的に壁に傾斜があり、覆土中にローム壁・天井部の明瞭な崩落土を確認できないことから、ローム天井は無かったのではなかろうか。

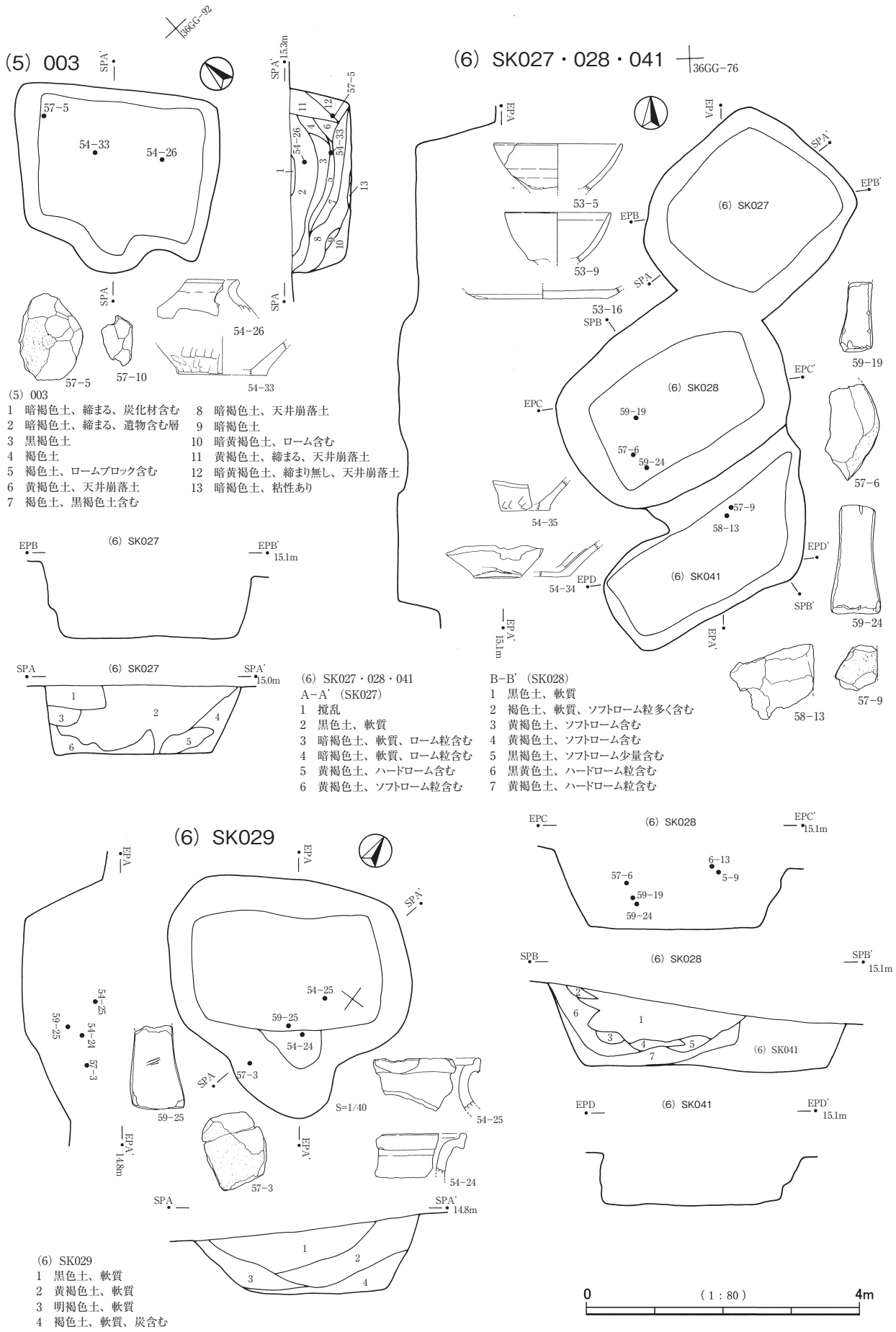
常滑甕の口縁破片（54-24・25）、砥石（59-25）、石造物片（57-3）が出土しているが、いずれも覆土上部の出土で、この遺構に伴うものではない。

(6) SK027・028・041（第42・53・54・57～59図、図版15・25・26・29～31）

SK027、SK028、SK041はそれぞれ接する配置で、重複し合っていて本来の個々の形態が不明であるが、関連し合っているのかは不明である。第3区画北東寄りの36GG-76・85・86グリッドに位置する。

おそらく、SK028はローム天井部があったかなかったかの問題は残るが、地下式坑であった可能性がある。北側の正方形プランのSK027については、コーナーで偶然SK028と接してしまったものと思われる。一方、南側のSK041の東側半分が当初図面で歪んでいたのは、本来長方形であったSK041と地下式坑SK028の出入口張り出し部が重複して、その認識がないまま結果としてこのようないびつな形に掘り上がってしまったのではなかろうか。それぞれの新旧関係は不明と言わざるを得ない。

SK028の主室底面の長軸は2.62m、直交する短軸は1.54m、深さ1.30mになる。長軸の方位は長短軸交点



(5) 003
1 暗褐色土、締まる、炭化材含む
2 暗褐色土、締まる、遺物含む層
3 黒褐色土
4 褐色土
5 褐色土、ロームブロック含む
6 黄褐色土、天井崩落土
7 褐色土、黒褐色土含む
8 暗褐色土、天井崩落土
9 暗褐色土
10 暗黄褐色土、ローム含む
11 黄褐色土、締まる、天井崩落土
12 暗黄褐色土、締まり無し、天井崩落土
13 暗褐色土、粘性あり

(6) SK027・028・041
A−A'（SK027）
1 撹乱
2 黒色土、軟質
3 暗褐色土、軟質、ローム粒含む
4 暗褐色土、軟質、ローム粒含む
5 黄褐色土、ハードローム含む
6 黄褐色土、ソフトローム粒含む

B−B'（SK028）
1 黒色土、軟質
2 褐色土、軟質、ソフトローム粒多く含む
3 黄褐色土、ソフトローム含む
4 黄褐色土、ソフトローム含む
5 黒褐色土、ソフトローム少量含む
6 黒黄色土、ハードローム粒含む
7 黄褐色土、ハードローム粒含む

(6) SK029
1 黒色土、軟質
2 黄褐色土、軟質
3 明褐色土、軟質
4 褐色土、軟質、炭含む

第42図　第3区画　地下式坑（2）・大型土坑（1）

を基準にN-65°-Eになる。主室の平面形態はやや不整形な隅丸長方形で、主室南東側の長辺側に出入口が設けられている。その張り出しは1.90mになる。この方向の復元エレベーション図では、主室との段差はまったくみられない。断面観察でははっきりしないが、おそらくローム天井は無かったのではなかろうか。覆土上層から中層にかけて古瀬戸平碗片（53-5）・天目茶碗（53-9）・折縁深皿底部片（53-16）、常滑甕底部片（54-34・35）、砥石（59-19・24）が出土している。また、SK041との重複地点から石造物破片（57-9、58-13）が出土しているが、どちらに所属するか不明である。

SK027は底面長軸2.20m、直交する短軸は1.90m、深さは1.20mになる隅丸長方形の形態である。

SK041は底面長軸推定2.20m、直交する短軸で1.20m、深さは70cmになる隅丸長方形の形態である。

(6) SK037・042（第43図、図版15）

SK037は36GG-77グリッドに、SK042は36GG-86グリッドに位置する。それぞれ別遺構であるが一部重複してしまっている。SK037は地下式坑で、主室底面の長軸は2.50m、直交する短軸は1.40m、深さは1.35mになる。長軸の方位は長短軸交点を基準にN-138°-Eになる。主室底面は隅丸長方形で、南東側長辺のほぼ中央に出入口が張り出す。張り出し長は1.44mほどになる。主室との段差は30cmである。

SK042は南西側に一段高いテラスをもつ隅丸長方形の土坑で、低い方の底面長軸が1.60m、直交する短軸が1.00m、深さ60cmになる。

火葬施設（墓）

(4) 022（第44図、図版16）

37FF-26グリッドに位置する。底面で直径1.70m前後、確認面で直径2.08mを基本とする、深さ45cmの円形土坑であるが、西側が小さく張り出して、ここに直径35cmで深さ30cmほどの小さなピットが掘られている。そのピットを中心とした1.0m～1.2mの範囲に木炭・焼土・人骨片がまとまって検出された。ただし、この堆積物の直下に被熱面があったかどうかは定かでは無いが、とりあえず火葬墓とした。

(4) 028（第44図、図版15）

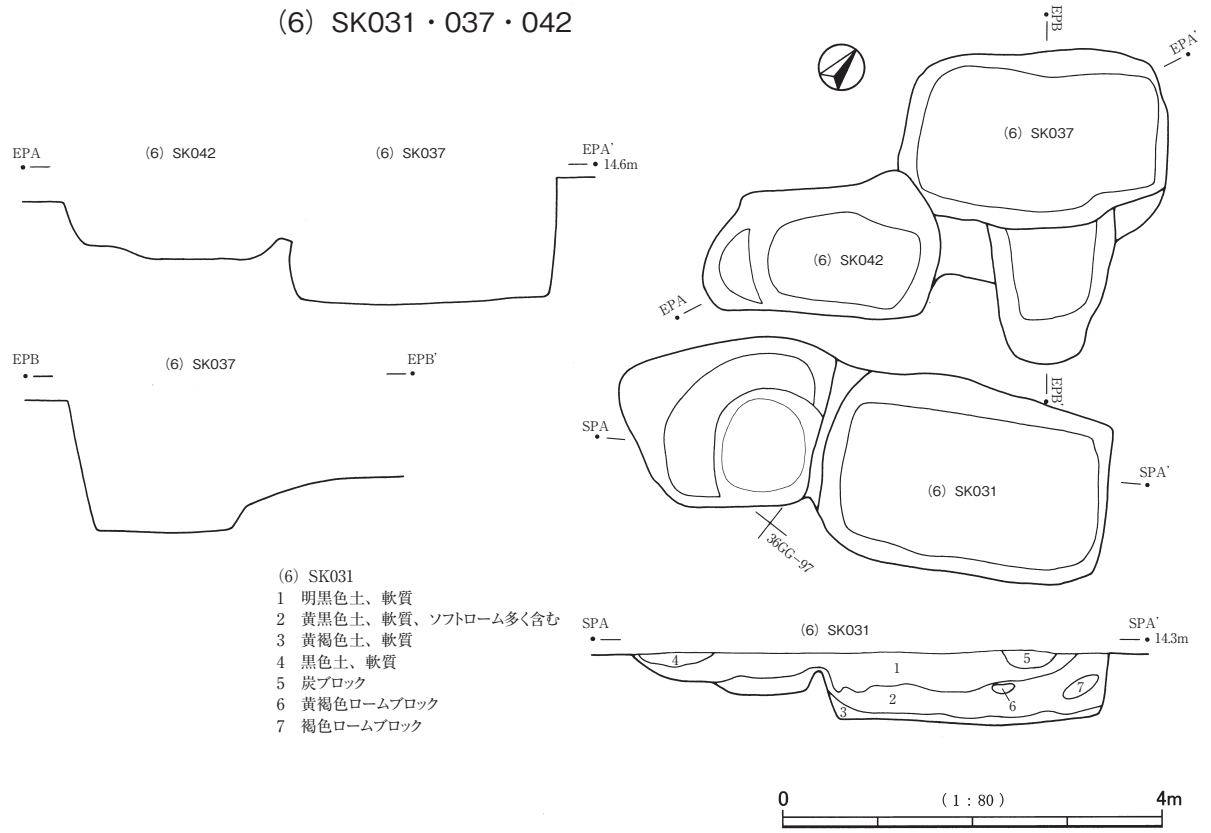
37FF-47グリッドに位置する。外観はT字型と呼ばれる火葬施設である。堀方は長軸で1.35m、直交する短軸のうち西側の膨らみは長さ0.95mで、東側の小さな膨らみは長さ0.55mである。深さは浅く、最大でも30cmである。長軸の方位はN-105°-Eになる。通常西側の膨らみが燃焼室、東側が焚き口となる。覆土観察では、下位から上位にかけてまんべんなく炭化材を含んでいる。ただし、骨の遺存、底面に残るであろう被熱面などについては不明である。火葬後きれいに骨を取り上げていれば骨は残らないので、とりあえず火葬施設とした。

(4) 029（第44図、図版15）

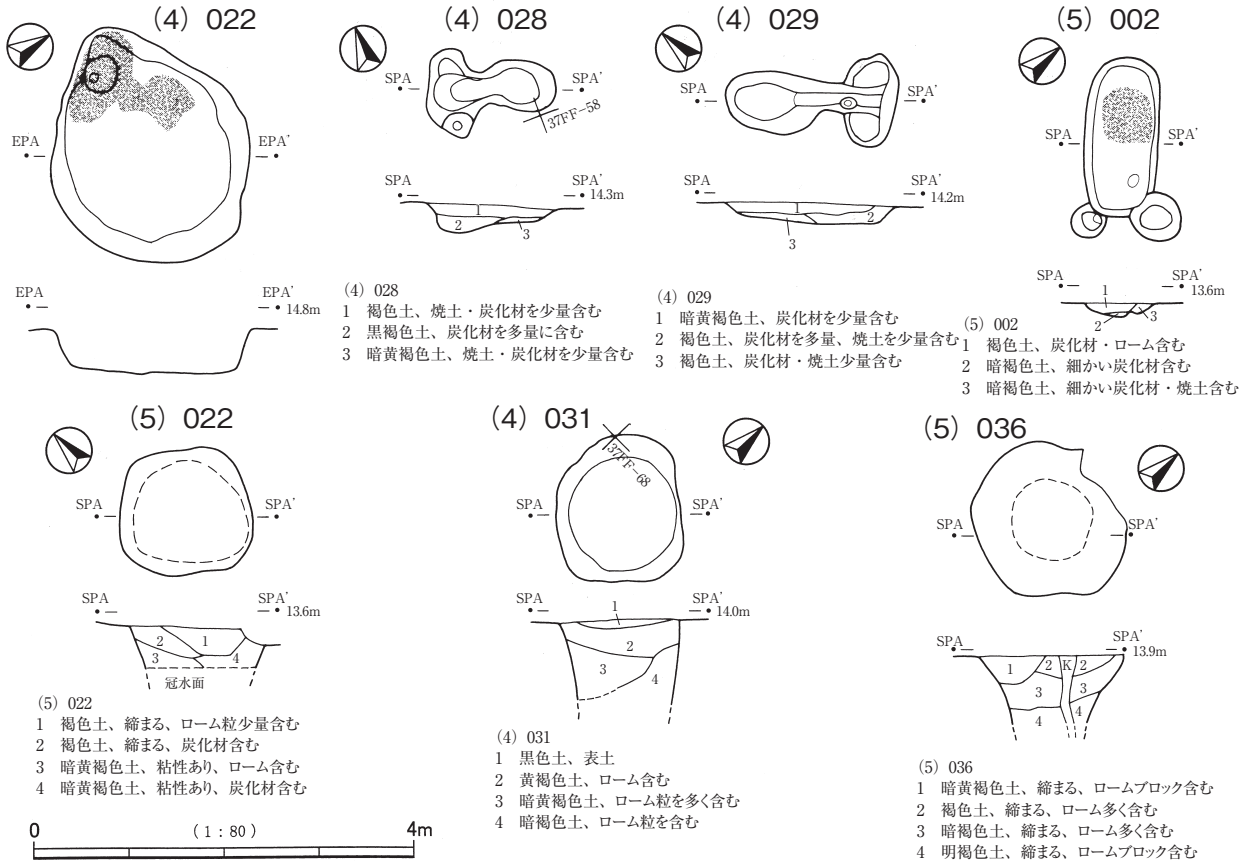
37FF-48グリッドに位置する。外観はT字型と呼ばれる火葬施設である。堀方は長軸で1.80m、直交する短軸のうち北側の膨らみは長さ0.62mで、南側の大きな膨らみは長さ0.95mである。深さは最大で20cmとなり浅い。長軸の方位はN-145°-Eになる。通常北側の膨らみが焚き口、南側の膨らみが燃焼室になる。覆土観察では、下位から上位にかけてまんべんなく炭化材・焼土を含んでいる。骨の遺存や被熱面については不明である。

(5) 002（第44図、図版16）

37GG-25グリッドに位置する。外観は長楕円形土坑の南端にネズミの耳のような二つのピットを伴う形態であるが、この二つのピットが本来この長楕円形土坑に伴うものかは断定できない。堀方長軸で1.70m、



第43図　第3区画　地下式坑（3）・大型土坑（2）



第44図　第3区画　火葬施設（1）・井戸

直交する短軸で0.80m、深さは15cmと非常に浅い。覆土には炭化材・焼土を含む。特に、北側に集中するようである。長軸の方位は長短軸交点を基準にN-137°-Eになる。骨の遺存や被熱面については不明である。

(5) 035（第49図、図版16）

台地整形の段差に近い37FF-09グリッドに位置する。その長軸の方向も台地整形の方向とほぼ一致する。(5) 109、(5) 108、(5) 110と重複しており、詳細な部分でどの遺構に属するのか判断が難しい部分がある。西側の堀方長軸1.60m、短軸1.10m、深さ40cmの長方形の土坑から東方向に幅0.20m、長さ0.80mの溝状の堀込みが伸びている。この溝の両側に団扇のように広がるものも含めて、一つの遺構と考える。

深さは20cmと残りが浅いが、底面直上の覆土には、焼土・炭化物・骨片が含まれる。被熱面の存在は不明だが、一応火葬施設（墓）とする。長軸の方位はN-61°-Eになる。

井戸

(5) 022（第44図）

第３区画南端37GG-52グリッドに位置する。直径1.40mの円筒形で、確認面からおよそ40cm掘り下げ時点で湧水し始め、それ以下を掘ることはできなかった。この間の覆土には炭化材が含まれる。

(4) 031（第44図）

第３区画南端の37FF-68グリッドに位置する。直径1.30mの円筒形で、確認面からおよそ80cm掘り下げた時点で湧水し始め、それ以下を掘ることはできなかった。

(5) 036（第44図）

第３区画中央の37GG-40グリッドに位置する。確認面で直径1.60m、徐々にすぼまり、深さ70cmで直径80cmになる。

湧水のためこれ以上深くは調査できなかったが、このままの太さの円筒形であったであろう。

土坑

土坑に関しては、遺物の出土している土坑や特徴のある土坑以外は第３表にまとめた。

(6) SK031（第43図、図版15）

36GG-86・87グリッドに位置する。隅丸長方形の主室と円形の出入口とする地下式坑として、調査段階では一つの遺構番号を付与しているが、整理段階では長方形の土坑と円形を基本とする土坑の複合体と考えたい。東側の隅丸長方形は底面の長軸は2.70m、直交する短軸は1.50m、深さ70cmほどである。長軸の方位は長短軸交点を基準にN-62°-Eになる。覆土観察では、両土坑ともほぼ同時に廃絶したようで、ローム主体の覆土である。

(4) 015・016（第45・61図、図版16・33）

37FF-03・04グリッドに位置する。概観すると長方形の土坑（4）015と円形あるいは方形の土坑（4）016の重複であるが、他にもいくつかの形態の異なる土坑が重複し合っている可能性が高い。ただ個々の遺構に分離することは困難で、とりあえず前者については最大長2.20m、それに直交する軸で1.08m、深さは54cmほどになる。後者については最大長1.92m、それに直交する軸で1.44m、深さは54cmほどになる。それぞれの新旧関係は不明である。鉄滓（61-3）が出土している。

(4) 023（第45図、図版16）

37FF-27グリッドに位置する。複数の遺構が重なり合っている状態と考えられる。小型のピットが多数絡んでいる。硬化面があり、調査時は住居跡の可能性もあると判断している。

(4) 024（第45図、図版17）

37FF-27グリッドに位置する。隅丸長方形の土坑である。小型のピットが複数絡んでいる。

(5) 001（第45図、図版17）

37GG-34グリッドに位置する。２基の円形の土坑が重なり合っている状態と考えられる。とりあえず２基をまとめて最大長1.77m、直交する軸で1.04m、深さ40cmほどになる。断面観察からは西側の土坑が新しい。

(5) 004（第45図）

37GG-12グリッドに位置する。不整楕円形と長方形の２基の土坑が重なり合っている状態と考えられる。覆土の断面からは新旧関係は分からない。焼土が確認されることから北側の土坑については火葬墓を想定することも可能である。

(5) 006（第46・61図、図版33）

区画南端に近い37GG-42グリッドに位置する。調査時は井戸と判断していたようであるが、他の井戸と異なり円形を基調としていない点で相違が大きく、一応大型の隅丸長方形土坑とした。堀方長軸で3.80m、短軸で2.84mになる。40cmほど掘り進めたところで湧水し冠水したため、これ以上深く掘ることができなかった。したがって底面までの深さは分からないが、あまり深くない平坦な底面をもつ土坑と考えたい。

遺物には鉄滓（61-8 ～ 13）があるが、出土位置の特定できるものは、覆土最上面からのもので、この遺構に本来伴うものではないが、周辺に鍛冶関連の遺構の存在が想定される。

(5) 007（第46・62図、図版34）

37GG-31グリッドに位置する。概観すると複雑な形態で、いくつかの形態の異なる土坑が重複し合っていると考えられる。そのことは断面観察でもある程度理解することができる。ただ個々の遺構に分離することははなはだ困難で、とりあえず全体を概観して最大幅2.80mで、それに直交する軸で2.40m、深さは55cmほどになる。覆土中には炭や焼土の塊が確認でき、底面近くから輸入銭貨（62-2）が出土しているので、焼土・炭化材・輸入銭貨から火葬墓を想定することも可能である。

(5) 009（第46図、図版17）

37GG-41グリッドに位置する。概観すると複雑な形態で、いくつかの形態の異なる土坑が重複し合っていると考えられる。ただ個々の遺構に分離することははなはだ困難である。

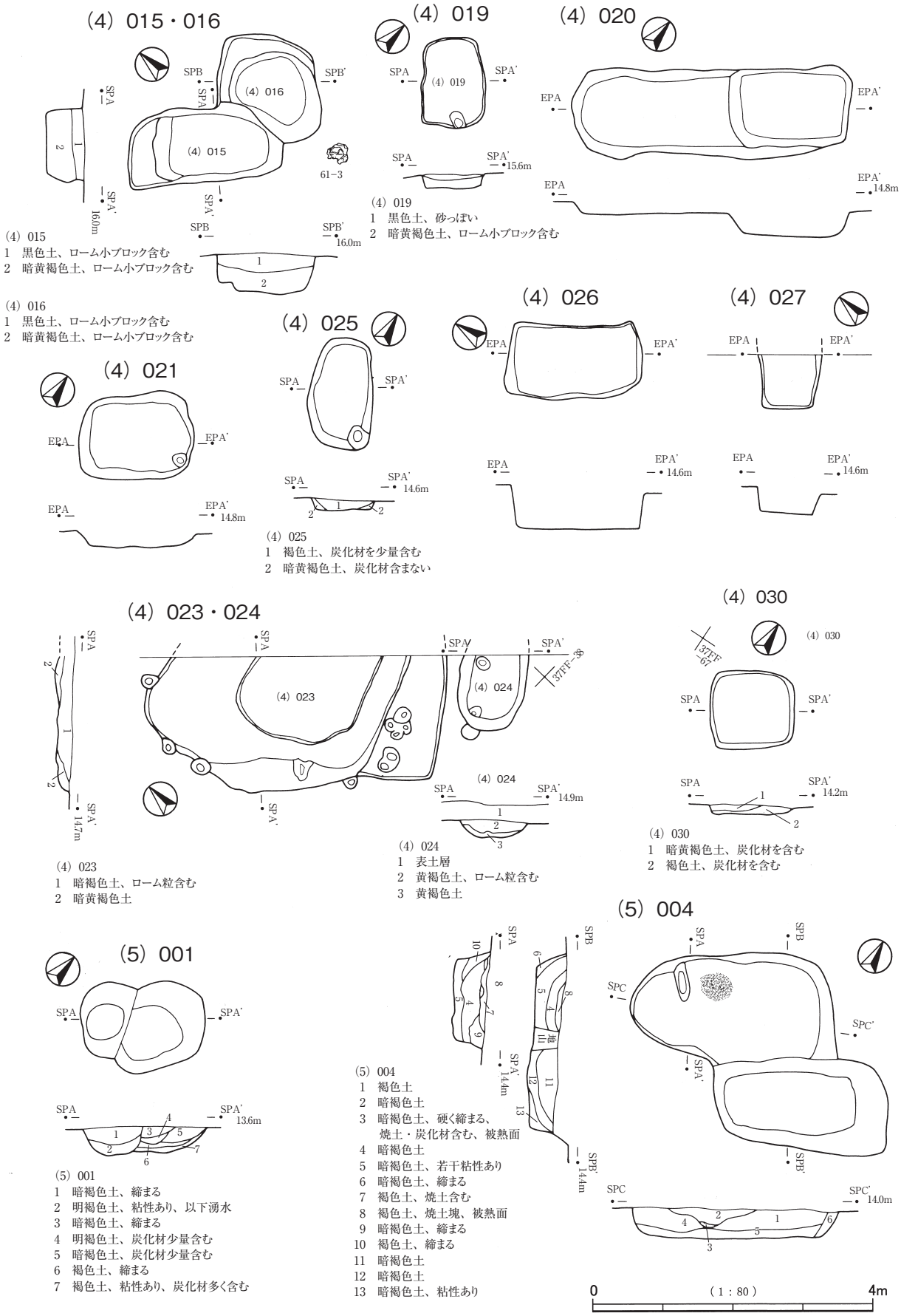
(5) 037（第46・56・59・62図、図版18・28・31・34）

37GG-21グリッドに位置する。複数の遺構が重なり合っている状態である。そのうち北側の土坑には覆土中に炭化材を含んでいて、この部分の深さは65cmで、底面は平坦になる。一方、南側の土坑は確認面で一辺1.40m、深さ70cmの正方形の土坑となる。出土位置は不明だが、常滑片口鉢片（56-38・39・41）、輸入銭貨か（62-9）、砥石（59-14）が出土している。

(5) 015・039（第46・60・61図、図版32・33）

37GG-30・40グリッドに位置する。(5) 015は長方形の２基の土坑が一部重複している状態である。とりあえず２基をまとめて最大長3.56m、直交する軸で1.80m、深さ30cmほどになる。一方、(5) 039としたのは３基の小型のピットである。規模は直径0.45m、深さは40cm～ 60cmになる。同一図中に他にピットが描かれており、これらはみな柱穴の可能性が高く、総じてみればこの地点に掘立柱建物跡が存在していたことが考えられる。

遺物には鉄滓（61-5）、フイゴの羽口片（60-4）が出土しているので、鍛冶関連の遺構と考えられる。



(4) 015
1 黒色土、ローム小ブロック含む
2 暗黄褐色土、ローム小ブロック含む

(4) 016
1 黒色土、ローム小ブロック含む
2 暗黄褐色土、ローム小ブロック含む

(4) 019
1 黒色土、砂っぽい
2 暗黄褐色土、ローム小ブロック含む

(4) 025
1 褐色土、炭化材を少量含む
2 暗黄褐色土、炭化材含まない

(4) 023
1 暗褐色土、ローム粒含む
2 暗黄褐色土

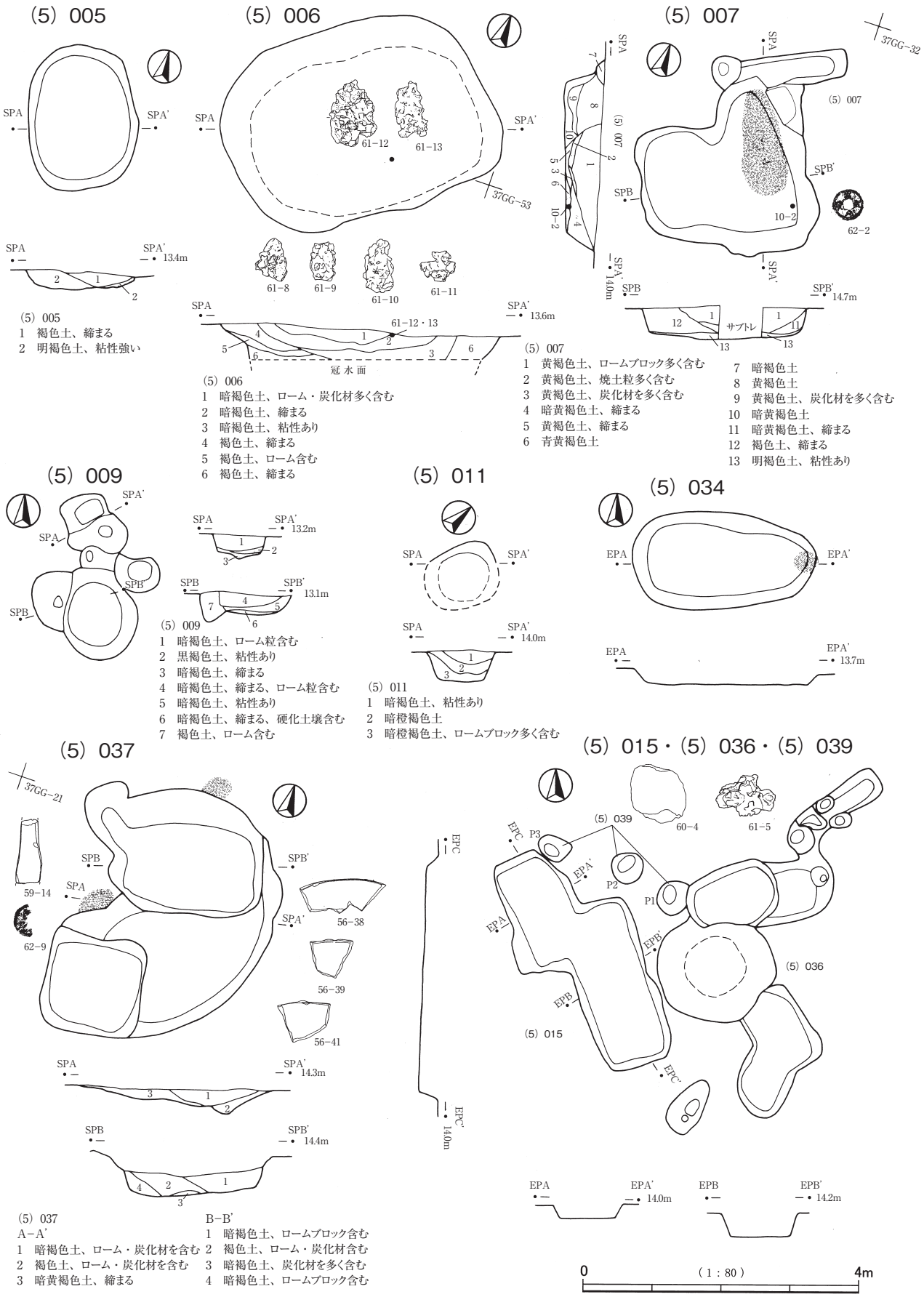
(4) 024
1 表土層
2 黄褐色土、ローム粒含む
3 黄褐色土

(4) 030
1 暗黄褐色土、炭化材を含む
2 褐色土、炭化材を含む

(5) 001
1 暗褐色土、締まる
2 明褐色土、粘性あり、以下湧水
3 暗褐色土、締まる
4 明褐色土、炭化材少量含む
5 暗褐色土、炭化材少量含む
6 褐色土、締まる
7 褐色土、粘性あり、炭化材多く含む

(5) 004
1 褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土、硬く締まる、焼土・炭化材含む、被熱面
4 暗褐色土
5 暗褐色土、若干粘性あり
6 暗褐色土、締まる
7 褐色土、焼土含む
8 褐色土、焼土塊、被熱面
9 暗褐色土、締まる
10 褐色土、締まる
11 暗褐色土
12 暗褐色土
13 暗褐色土、粘性あり

第45図　第3区画　土坑（1）



(5) 005
1 褐色土、締まる
2 明褐色土、粘性強い

(5) 006
1 暗褐色土、ローム・炭化材多く含む
2 暗褐色土、締まる
3 暗褐色土、粘性あり
4 褐色土、締まる
5 褐色土、ローム含む
6 褐色土、締まる

(5) 007
1 黄褐色土、ロームブロック多く含む
2 黄褐色土、焼土粒多く含む
3 黄褐色土、炭化材を多く含む
4 暗黄褐色土、締まる
5 黄褐色土、締まる
6 青黄褐色土
7 暗褐色土
8 黄褐色土
9 黄褐色土、炭化材を多く含む
10 暗黄褐色土
11 暗黄褐色土、締まる
12 褐色土、締まる
13 明褐色土、粘性あり

(5) 009
1 暗褐色土、ローム粒含む
2 黒褐色土、粘性あり
3 暗褐色土、締まる
4 暗褐色土、締まる、ローム粒含む
5 暗褐色土、粘性あり
6 暗褐色土、締まる、硬化土壌含む
7 褐色土、ローム含む

(5) 011
1 暗褐色土、粘性あり
2 暗橙褐色土
3 暗橙褐色土、ロームブロック多く含む

(5) 037
A-A'
1 暗褐色土、ローム・炭化材を含む
2 褐色土、ローム・炭化材を含む
3 暗黄褐色土、締まる

B-B'
1 暗褐色土、ロームブロック含む
2 褐色土、ローム・炭化材含む
3 暗褐色土、炭化材を多く含む
4 暗褐色土、ロームブロック含む

第46図　第3区画　土坑（2）

(5) 038（第47・58・59図、図版18・30・31）

36GG-90グリッドに位置する。長方形の土坑で、堀方長軸で2.25m、短軸で1.30m、深さ40cmになる。長軸の方位はN-67°-Eである。覆土中一括遺物で石臼片（58-19）と砥石（59-12）が出土している。

(5) 041（第47・59図、図版18・31）

37GG-30グリッドに位置する。楕円形の土坑に小さな円形の土坑と小型のピットが多数絡んでいる。調査ではまとめて1つの番号を付している。楕円形の土坑の堀方長軸は2.16m、直交する短軸は1.60m、深さ５cm前後と極めて浅い。長軸の方位はN-54°-Eになる。一括遺物で砥石（59-20）が出土している。

(5) 079（第47図、図版18）

36GG-77・78グリッドに位置する。複数の遺構が重なり合っている状態である。

(5) 080（第47図）

36HH-80グリッドに位置する。楕円形の土坑の堀方長軸は2.83m、直交する短軸は1.65m、深さ88cmである。長軸の方位はN-15°-Eになる。

(5) 081（第47・60図、図版18・32）

36GG-89グリッドに位置する。不整楕円形の土坑の堀方長軸は1.11m、直交する短軸は0.92m、深さ26cmである。長軸の方位はN-37°-Wになる。土師器高坏脚部片（60-7）が出土しているが、この遺構に伴うものではない。

(5) 086・(6) SK038（第47図、図版19）

36GG-88・98グリッドに位置する。大型の（5）086・(6) SK038と小型の土坑２基が一部重複している状態である。とりあえず２基をまとめて最大3.84m、直交する軸で2.08m、深さ84cmほどになる。長軸の方位はN-16°-Wになる。

(6) SK030（第48図、図版19）

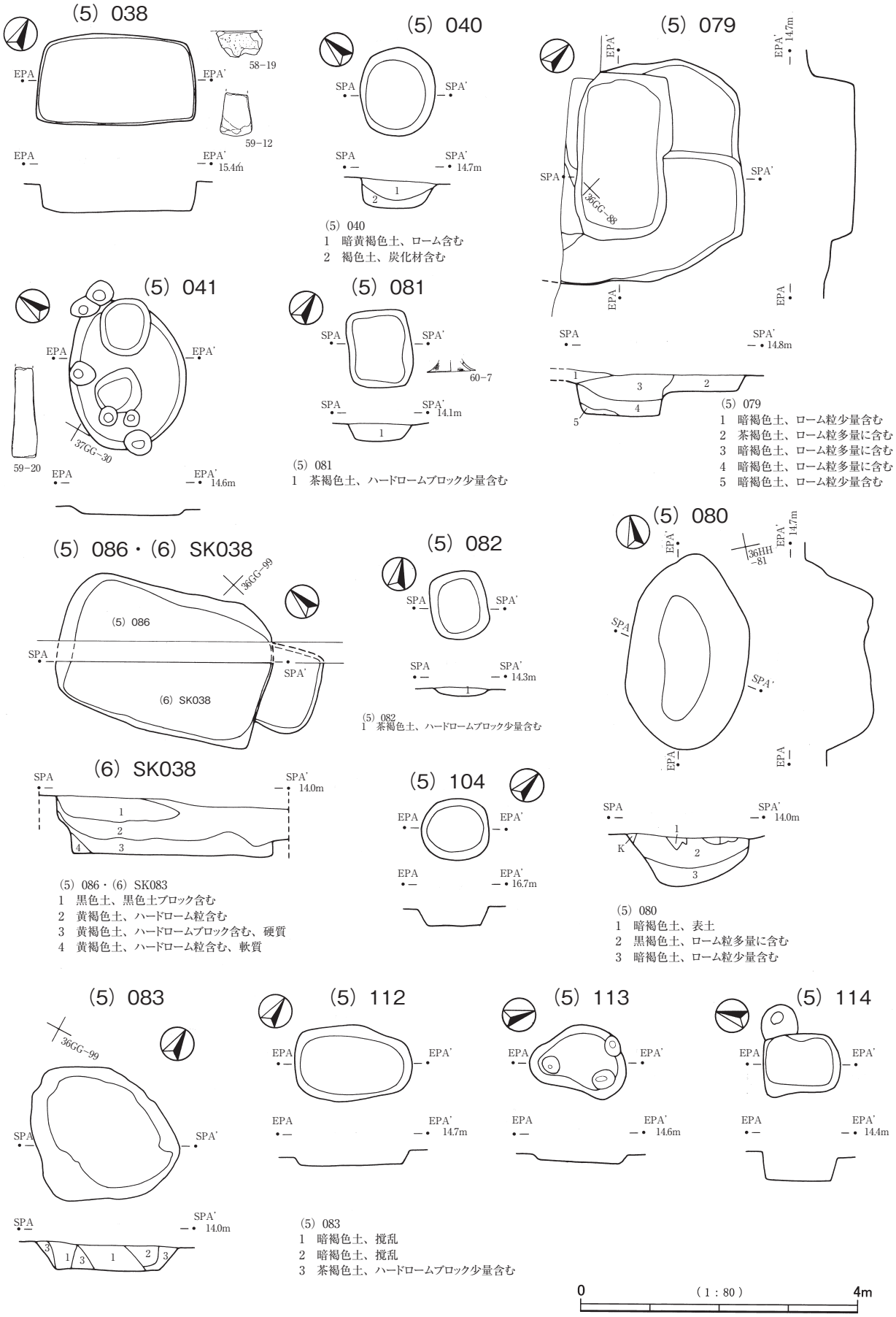
36GG-95・96、37GG-06グリッドに位置する。２基の長方形の土坑が重複している状態である。とりあえず２基をまとめた状態で最大長5.12m、直交する軸で2.16m、深さ46cmほどになる。長軸の方位はN-42°-Eになる。

(6) SK032（第48図、図版19）

36GG-97グリッドに位置する。堀方長軸は1.18m、短軸は0.95m、深さ55cmになる円形土坑である。長軸の方位はN-69°-Eになる。覆土は上下２層に分けることができ、そのうち上層には貝が層を成しており、貝層の土壌を全量採取（64.6リットル）している。水洗選別を行った結果、貝類遺体・骨片・炭化物・石片・土器片・種実・昆虫などが検出された。種実及び昆虫について、千葉県農林総合研究センター森林研究所の小林真生子氏に鑑定を依頼したところ、採取法の問題や採取資料数の少なさ、外見上、新しそうであることから、堆積後の混入の可能性が高いが、「バラ科サクラ属の１種（ヤマザクラ？）」、「イネゾウムシ」、「炭化したシソ科？を含む不明種実」であるとの結果が得られた。また、貝類遺体については、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏に依頼し、分析結果は付章で触れている。

(6) SK034・035・039・043（第48図、図版19）

36GG-97・98、37GG-07グリッドに位置する。(6) SK034・035を除き、３基の遺構が重なり合っている状態である。(6) SK043は覆土に焼土が確認されることから北側の土坑については火葬墓を想定することも可能である。



(5) 040
1 暗黄褐色土、ローム含む
2 褐色土、炭化材含む

(5) 079
1 暗褐色土、ローム粒少量含む
2 茶褐色土、ローム粒多量に含む
3 暗褐色土、ローム粒多量に含む
4 暗褐色土、ローム粒多量に含む
5 暗褐色土、ローム粒少量含む

(5) 081
1 茶褐色土、ハードロームブロック少量含む

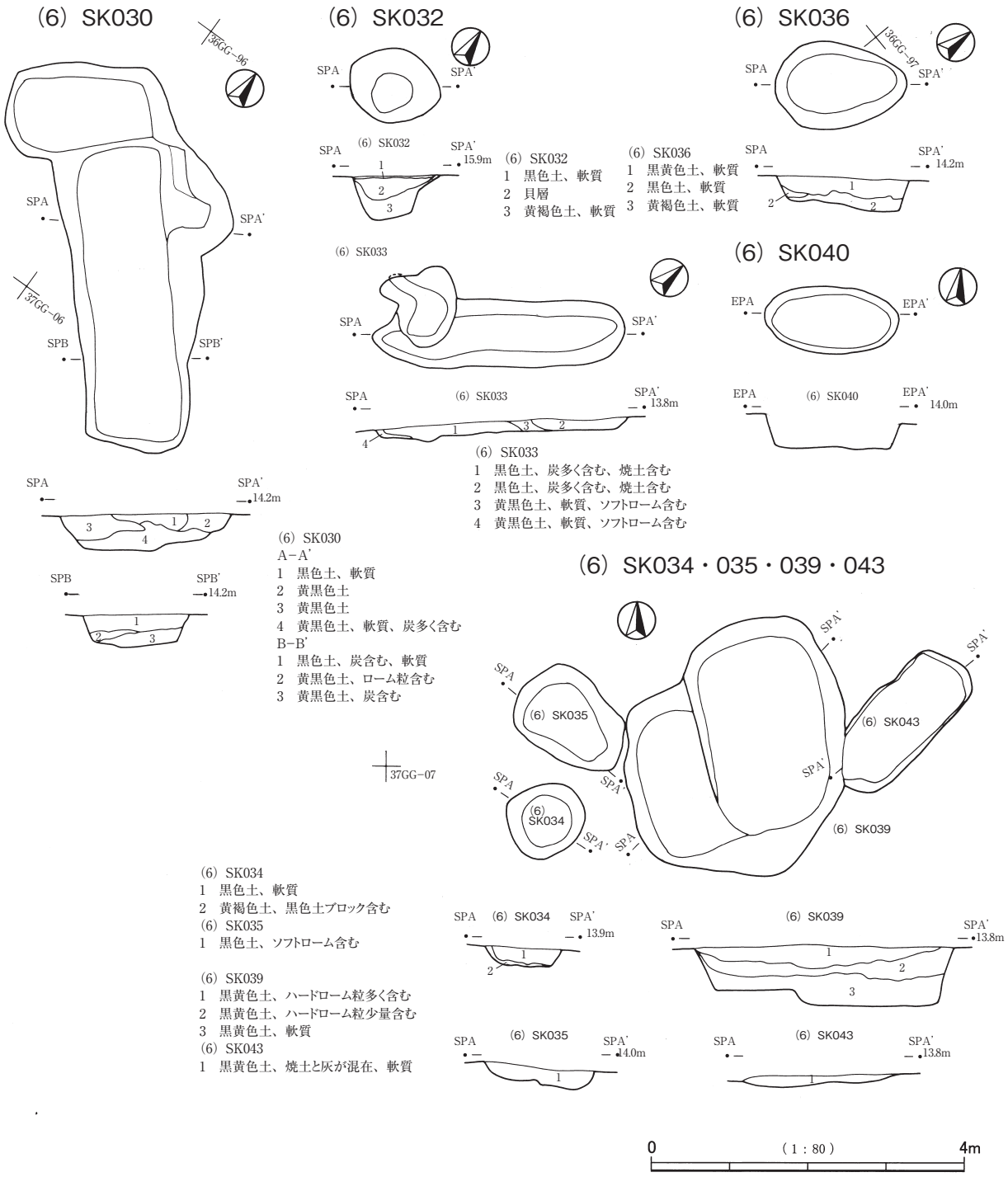
(5) 082
1 茶褐色土、ハードロームブロック少量含む

(5) 086・(6) SK083
1 黒色土、黒色土ブロック含む
2 黄褐色土、ハードローム粒含む
3 黄褐色土、ハードロームブロック含む、硬質
4 黄褐色土、ハードローム粒含む、軟質

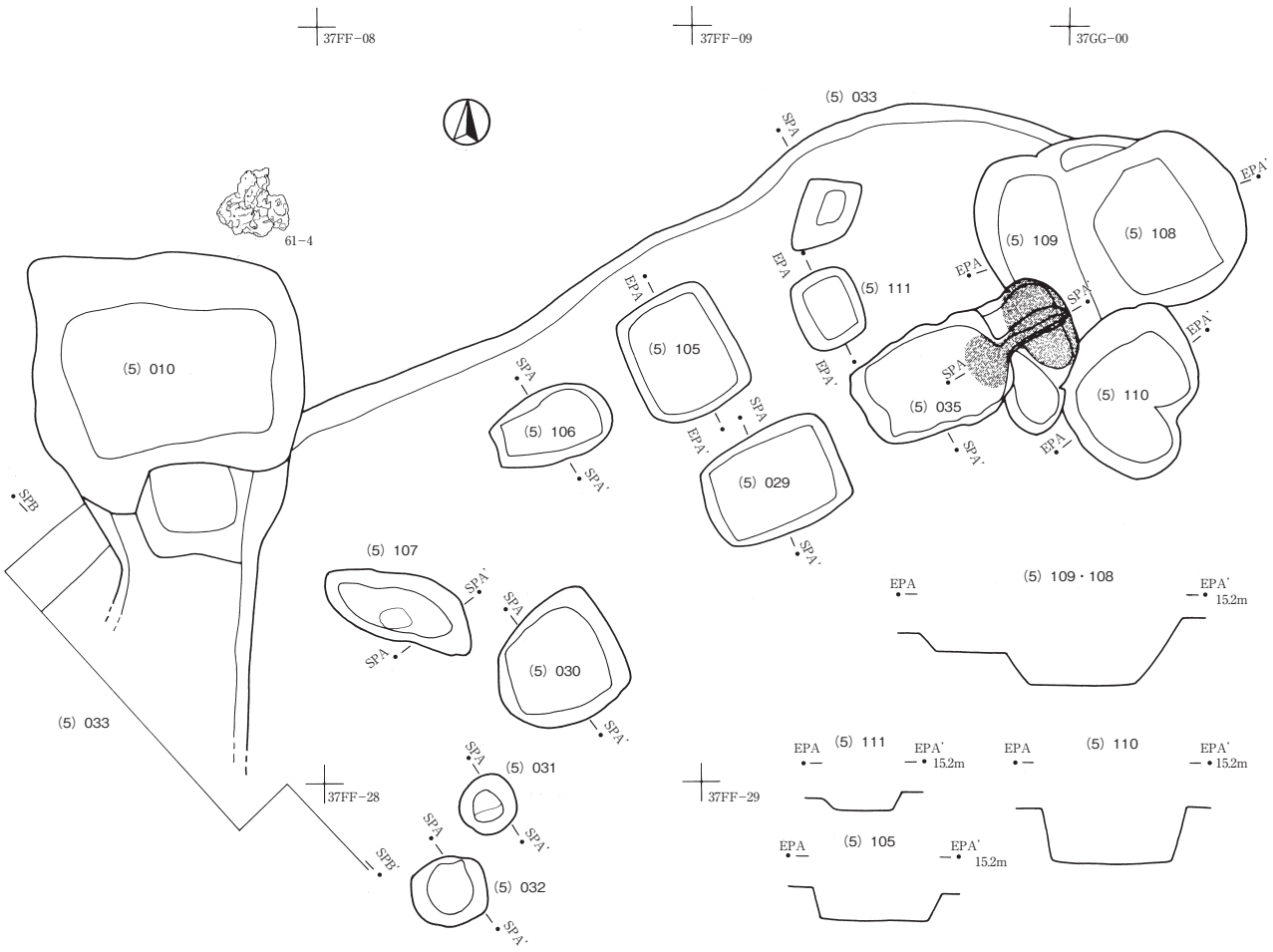
(5) 080
1 暗褐色土、表土
2 黒褐色土、ローム粒多量に含む
3 暗褐色土、ローム粒少量含む

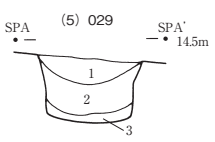
(5) 083
1 暗褐色土、撹乱
2 暗褐色土、撹乱
3 茶褐色土、ハードロームブロック少量含む

第47図　第3区画　土坑（3）

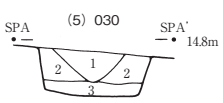


第48図　第3区画　土坑（4）

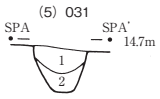




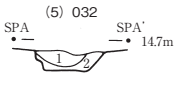
(5) 029
1 明褐色土、締まる
2 褐色土、ローム含む
3 褐色土、ローム多く含む



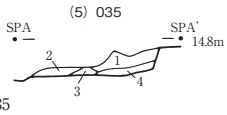
(5) 030
1 褐色土、締まる
2 明褐色土、ローム含む
3 褐色土、ローム含む



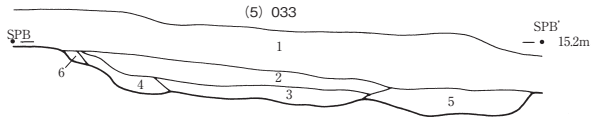
(5) 031
1 明褐色土、締まる
2 褐色土、粘性あり



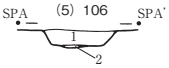
(5) 032
1 暗褐色土、炭化物含む
2 褐色土、焼土含む



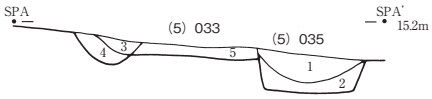
(5) 035
1 黄褐色土、ロームブロック・炭化材を含む
2 黄褐色土、ロームブロック含む
3 暗褐色土、焼土・炭化物・骨片を含む
4 暗褐色土、焼土・炭化物・骨片を含む



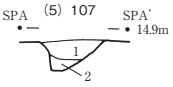
(5) 033
1 灰暗褐色土、耕作土
2 黒褐色土、締まる、ローム粒多く含む
3 暗黄褐色土、締まる、ローム粒含む
4 褐色土
5 褐色土、炭化材少量含む
6 明褐色土



(5) 106
1 褐色土、ロームを多く含む
2 褐色土、黒色土を含む



(5) 033・035
1 暗黄褐色土、ロームを多く含む
2 褐色土、ロームを含む
3 褐色土、ロームを含む
4 褐色土、ロームを含む
5 明褐色土、ロームを多く含む



(5) 107
1 暗黄褐色土、締まる、ロームを含む
2 明褐色土、ロームを含む

0 (1：80) 4m

第49図　第3区画　土坑（5）・火葬施設（2）

4　区画外

上記３区画に該当しない遺構をこの項目でまとめた。そのうち地下式坑３基は狭い範囲に集中している。

地下式坑

(5) 071（第50図）

36GG-37･47グリッドに位置する。(5)072と一部接している。主室底面の長軸は2.63m、直交する短軸は1.39m、確認面から底面までの深さは1.58mになる。長軸の方位は長短軸の交点を基点にN-128°-Eになる。主室の平面形態はほぼ長方形で、南東側長辺のほぼ中央に出入口が設けられている。外側への張り出しは0.95mで、幅は最大長0.90mになる。平面形態はほぼ楕円形である。主室との段差は1.02mで平坦面は２段となる。主室覆土断面では、ローム天井の崩落土と考えられる土砂の分厚い堆積がみられたので、ローム地山の天井部があったのであろう。ローム天井が崩壊した後、窪地に自然に土砂が堆積していった状況が観察される。

(5) 072（第50・56図、図版28）

36GG-46・47グリッドに位置する。(5) 071と一部接している。主室底面の長軸は2.60m、直交する短軸は2.00m、確認面から底面までの深さは1.40mになる。長軸の方位は長短軸の交点を基点にN-121°-Eになる。主室の平面形態はほぼ長方形で、南東側長辺のほぼ中央に出入口が設けられている。外側への張り出しは1.00m、最大幅1.20mになる。平面形態はほぼ三角形になる。主室との段差は40cmほどで平坦面は１段である。主室覆土断面では、ローム天井の崩落土と考えられる土砂の分厚い堆積がみられたので、ローム地山の天井部があったのであろう。ローム天井が崩壊後窪地になったところに土砂が自然に堆積した状況がある。覆土の下部から人骨と思われる骨片が出土しており、一括遺物には常滑片口鉢（56-45・49）がある。

(5) 073（第50図、図版19）

36GG-16グリッドに位置する。主室底面の長軸は2.12m、直交する短軸は1.90m、確認面から底面までの深さは1.35mになる。長軸の方位は長短軸の交点を基点に出入口方向がN-88°-Eになる。主室の平面形態はほぼ長方形で、南東側長辺のほぼ中央に出入口が設けられている。外側への張り出しは0.80mで、幅は南東側壁幅と同じになっている。平面形態は大きな半円形になる。主室との段差は70cmほどで、平坦面が造られておらず、緩やかに傾斜する。主室覆土断面からローム天井部の崩落土の堆積がみられたが、天井部崩落前に出入口から土砂が流れ込んだ様子がうかがえる。

土坑

土坑に関しては、遺物の出土している土坑や特徴のある土坑以外は第３表にまとめた。

(5) 008（第51図、図版20）

36FF-87グリッドに位置する。方形の土坑の堀方長軸は3.00m、直交する短軸は2.85m、深さ19cmである。長軸の方位は長短軸の交点を基点にN-49°-Eになる。

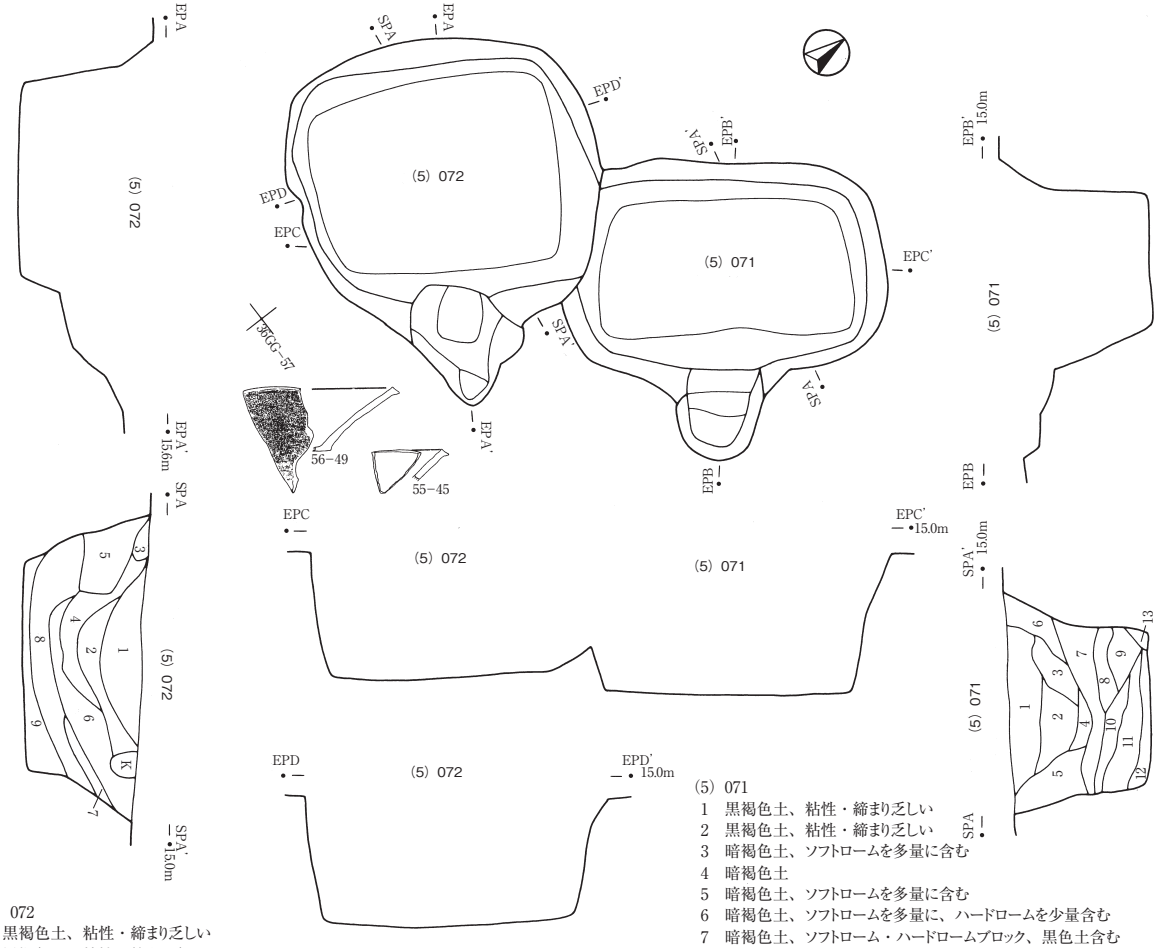
(5) 060（第51・53・61図、図版25・33）

36FF-63グリッドに位置する。一部未調査のため詳細は不明だが、長方形を呈すると思われる。覆土は浅いが、古瀬戸折縁深皿（53-17）、鉄滓（61-7）が出土している。

(10) SK005・006（第51図、図版20）

35HH-12グリッドに位置する。２基の土坑が重複している状態である。断面観察からは（10）SK005が新しい。

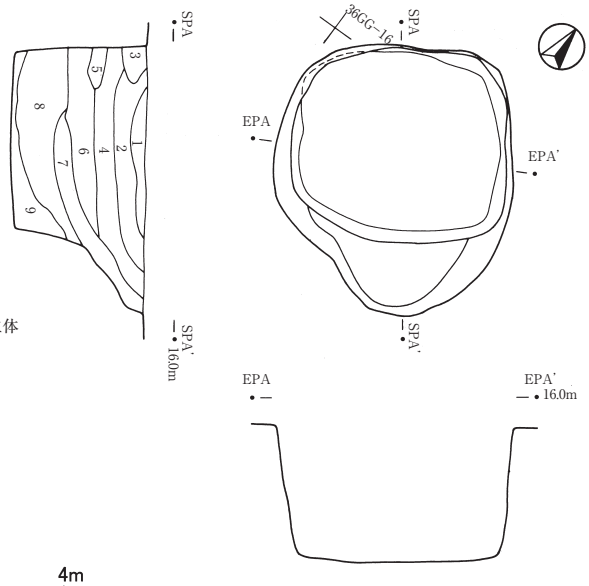
(5) 071・072



(5) 072
1 黒褐色土、粘性・締まり乏しい
2 黒褐色土、粘性・締まり乏しい
3 暗褐色土、ソフトローム主体、残存天井か?
4 暗褐色土
5 暗黄褐色土、ソフトロームを多量に含む
6 暗黄褐色土、ソフトロームを多量に含む
7 暗褐色土
8 暗黄褐色土、ソフトローム・ハードロームブロック多量に含む
9 暗褐色土、ハードロームブロック含む

(5) 071
1 黒褐色土、粘性・締まり乏しい
2 黒褐色土、粘性・締まり乏しい
3 暗褐色土、ソフトロームを多量に含む
4 暗褐色土
5 暗褐色土、ソフトロームを多量に含む
6 暗褐色土、ソフトロームを多量に、ハードロームを少量含む
7 暗褐色土、ソフトローム・ハードロームブロック、黒色土含む
8 暗褐色土、ハードロームブロック主体
9 暗褐色土、ハードロームブロック主体
10 暗褐色土、ハードロームブロック主体
11 暗褐色土、ハードロームブロックと黒色土含む
12 暗褐色土、淡褐色ローム混じる
13 暗褐色土、淡褐色ローム混じる

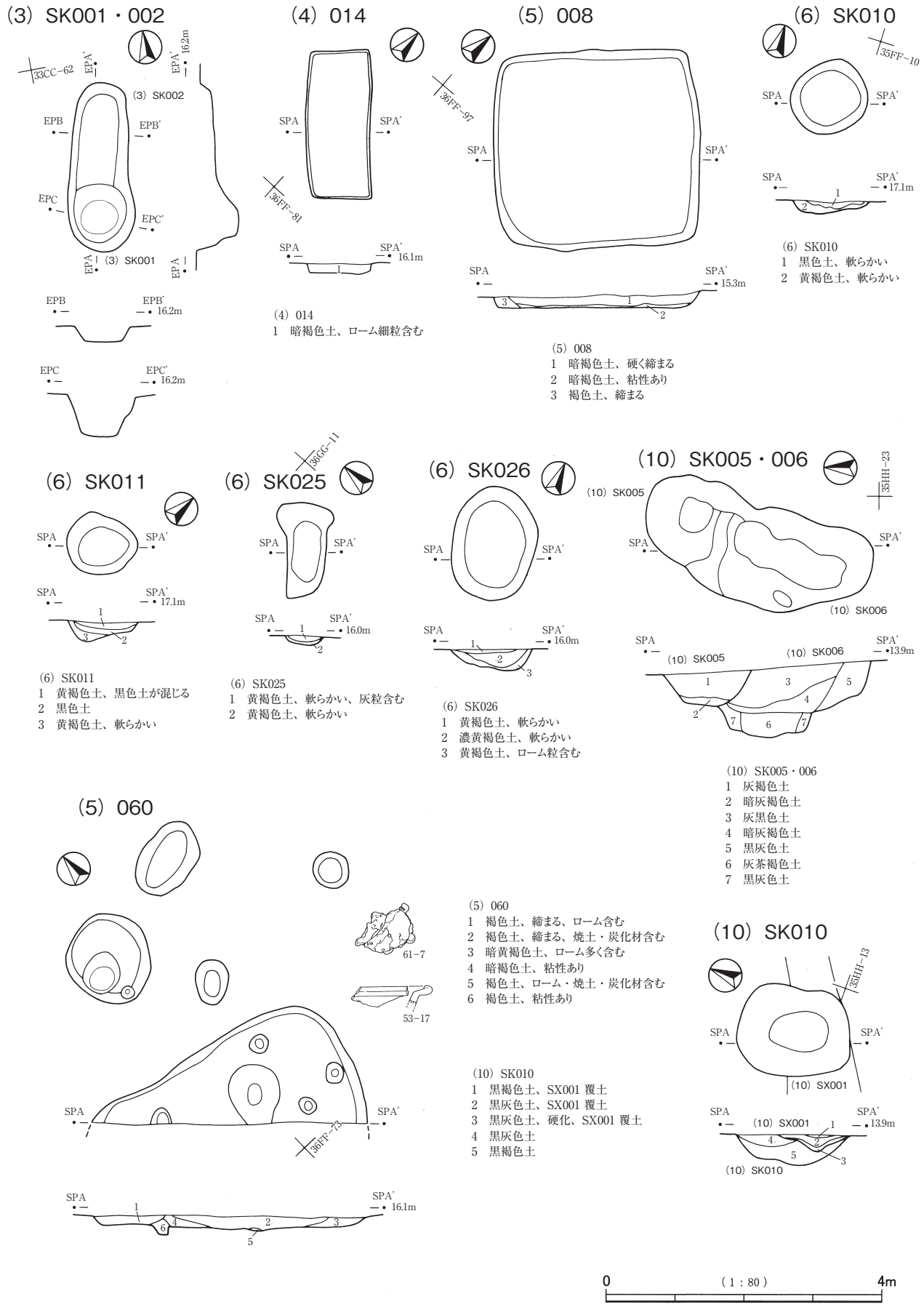
(5) 073



(5) 073
1 黒褐色土、粘性・締まり乏しい
2 黒褐色土、粘性・締まり乏しい
3 黄褐色土、天井部の残存
4 黒褐色土、粘性・締まり乏しい
5 黄褐色土、ソフトローム主体、天井の崩落土
6 暗褐色土、粘性・締まり乏しい
7 暗褐色土、ソフトロームが混じる
8 黄褐色土、ソフトローム・ハードロームブロック主体
9 暗褐色土、黒褐色土、粘性・締まり乏しい

0 (1:80) 4m

第50図 区画外 地下式坑


(3) SK001・002
33CC−62
(3) SK002
(3) SK001
EPA
EPA'
16.2m
EPB
EPB'
EPC
EPC'
(4) 014
36FF−81
SPA
SPA'
16.1m
(4) 014
1 暗褐色土、ローム細粒含む
(5) 008
36FF−97
15.3m
(5) 008
1 暗褐色土、硬く締まる
2 暗褐色土、粘性あり
3 褐色土、締まる
(6) SK010
35FF−10
17.1m
(6) SK010
1 黒色土、軟らかい
2 黄褐色土、軟らかい
(6) SK011
17.1m
(6) SK011
1 黄褐色土、黒色土が混じる
2 黒色土
3 黄褐色土、軟らかい
(6) SK025
36GG−11
16.0m
(6) SK025
1 黄褐色土、軟らかい、灰粒含む
2 黄褐色土、軟らかい
(6) SK026
16.0m
(6) SK026
1 黄褐色土、軟らかい
2 濃黄褐色土、軟らかい
3 黄褐色土、ローム粒含む
(10) SK005・006
35HH−23
(10) SK005
(10) SK006
13.9m
(10) SK005・006
1 灰褐色土
2 暗灰褐色土
3 灰黒色土
4 暗灰褐色土
5 黒灰色土
6 灰茶褐色土
7 黒灰色土
(5) 060
61−7
53−17
36FF−73
16.1m
(5) 060
1 褐色土、締まる、ローム含む
2 褐色土、締まる、焼土・炭化材含む
3 暗黄褐色土、ローム多く含む
4 暗褐色土、粘性あり
5 褐色土、ローム・焼土・炭化材含む
6 褐色土、粘性あり
(10) SK010
35HH−13
(10) SX001
13.9m
(10) SK010
1 黒褐色土、SX001 覆土
2 黒灰色土、SX001 覆土
3 黒灰色土、硬化、SX001 覆土
4 黒灰色土
5 黒褐色土
0
(1 : 80)
4m

第51図　区画外　土坑

溝（道路）

(8) SD001・007（第52図、図版20）

第８次調査区の北で検出した溝状遺構で、SD007がSD001より新しい。SD001は北東端で幅1.3m、深さ20cmと浅く、堀方も明瞭でない。しかし、SD007と交わる地点から南西側では、底面が一段深く掘り込まれ深さは40cmに変わる。縄文時代の遺構が近接するため、覆土中には縄文土器が多く混入する。総延長30.5mになる。SD007は交点から北方向に延びる。SD001以上に堀込みが浅い。総延長はトレンチ内で検出した部分を考慮して35m以上になると思われる。おそらくどちらも近世遺構と考えられる。

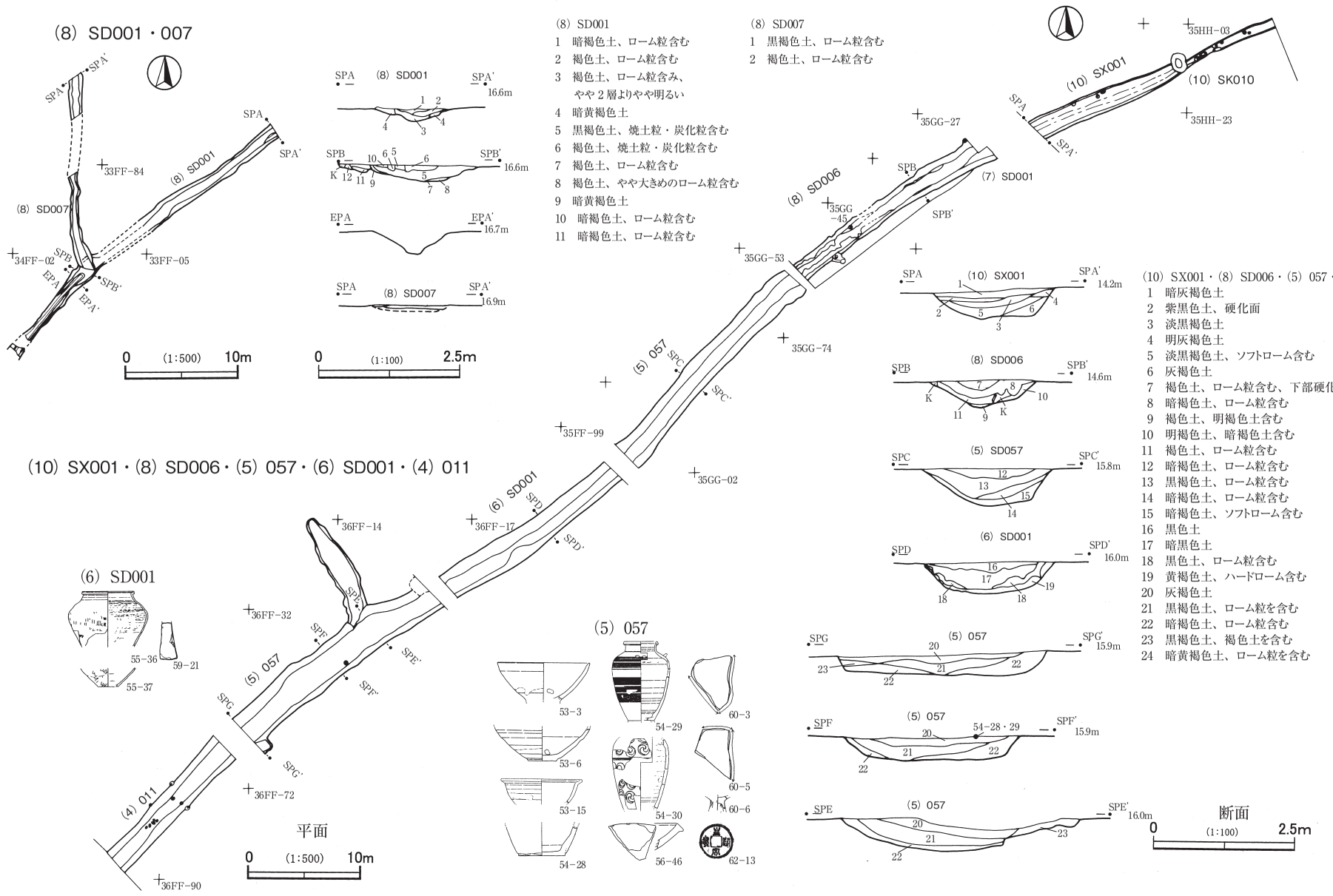
(4) 011・(5) 057・(6) SD001・(7) SD001・(8) SD006・(10) SX001

（第52～56・59・60・62　図、図版14・20・25～28・31・32・34）

調査区全体を貫く溝状遺構で、硬化面の存在から道路遺構であることが判明した。第４次から第10次に渡って各調査次に前年度の方法を踏襲せずに個別に記号・番号を付しているので、呼称に関してはまったくバラバラの状態であるが、すべて同一遺構である。全体を概観すると、調査区南西端では、幅2.88m、深さ50cmで始まり、途中第５次調査地点でもっとも幅広で深く規模が大きくなり、北東に延びるに従い徐々に幅狭になってゆき、北東端では消滅寸前である。断面観察では、底面は決して平坦ではなく、中央部がもっとも低くなるような緩やかな弧を描いている一方で、壁の立ち上がりははっきりしていて、壁は直線的に大きく開く。この遺構の規模は堀方上端の最大幅3.75m、最大底面幅2.35m、最大深さ60cm、総延長130mになる。

確認面の地山が硬化しているのは、最も北東寄りの第10次調査時の断面で観察でき、ここでは覆土途中にも硬化面がみられ、当初道路として使われていたものが、機能しなくなり埋没する途中で再び道路として使われていたのが分かる。この覆土中の硬化面が平面および断面で観察できるのは第８次調査範囲までで、それより南には明瞭な硬化面はなかったようである。中世遺構と考えられる。

遺物は、第５次調査地点で突出して多く出土している。いずれも覆土中と考えられ、古瀬戸瓶子（54-30）・折縁深皿（53-15）・平碗（53-3・6）、常滑大甕（55-36・37）・片口鉢（56-46）、壺底部（54-28）、口広有耳壺（54-29）、砥石（59-21）、転用砥石（60-3・5）、輸入銭貨（62-13）などがあげられる。他に土師器高坏脚部片（60-6）が出土しているが、(5) 057に伴うものではない。


(8) SD001・007
(8) SD001
(8) SD007
33FF-84
34FF-02
33FF-05
0 (1:500) 10m
0 (1:100) 2.5m
(10) SX001・(8) SD006・(5) 057・(6) SD001・(4) 011
(6) SD001
(5) 057
(4) 011
36FF-14
36FF-17
36FF-32
36FF-72
36FF-90
35FF-99
35GG-02
35GG-53
35GG-74
35GG-27
35GG-45
35HH-03
35HH-23
(10) SX001
(10) SK010
(7) SD001
平面
0 (1:500) 10m
断面
0 (1:100) 2.5m
(8) SD001
1 暗褐色土、ローム粒含む
2 褐色土、ローム粒含む
3 褐色土、ローム粒含み、やや２層よりやや明るい
4 暗黄褐色土
5 黒褐色土、焼土粒・炭化粒含む
6 褐色土、焼土粒・炭化粒含む
7 褐色土、ローム粒含む
8 褐色土、やや大きめのローム粒含む
9 暗黄褐色土
10 暗褐色土、ローム粒含む
11 暗褐色土、ローム粒含む
(8) SD007
1 黒褐色土、ローム粒含む
2 褐色土、ローム粒含む
(10) SX001・(8) SD006・(5) 057・(6) SD001
1 暗灰褐色土
2 紫黒色土、硬化面
3 淡黒褐色土
4 明灰褐色土
5 淡黒褐色土、ソフトローム含む
6 灰褐色土
7 褐色土、ローム粒含む、下部硬化面
8 暗褐色土、ローム粒含む
9 褐色土、明褐色土含む
10 明褐色土、暗褐色土含む
11 褐色土、ローム粒含む
12 暗褐色土、ローム粒含む
13 黒褐色土、ローム粒含む
14 暗褐色土、ローム粒含む
15 暗褐色土、ソフトローム含む
16 黒色土
17 暗黒色土
18 黒色土、ローム粒含む
19 黄褐色土、ハードローム含む
20 灰褐色土
21 黒褐色土、ローム粒を含む
22 暗褐色土、ローム粒含む
23 黒褐色土、褐色土を含む
24 暗黄褐色土、ローム粒を含む

第52図　区画外　溝

第３表　土坑計測表　※単位：m

遺構番号	図版番号	長軸（直径）	短　軸	深　さ	長（主）軸方位	位置（主グリッド）	備　考
(8) SK003	4	1.74	1.48	0.35	N-57° -E	34GG-31	第１区画
(8) SK004	4	1.91	1.22	0.28	N-61° -E	34GG-73	第１区画
(8) SK008	5	(1.54)	0.96	0.45	N-57° -E	34GG-31	第１区画
(8) SK009	5	1.11	0.99	0.15	N-57° -E	34GG-41	第１区画
(8) SK010	5	1.71	1.42	0.66	N-32° -W	34GG-45	第１区画
(8) SK013	5	2.32	1.21	0.97	N-72° -E	34GG-40	第１区画
(8) SK017	5	1.85	1.36	0.63	N-77° -E	34GG-50	第１区画
(8) SK018	5	4.15	1.20	0.99	N-65° -E	34FF-49	第１区画
(8) SK019	5	1.25	0.95	0.33	N-60° -E	34FF-49	第１区画
(8) SK020	6	1.18	1.01	0.22	N-48° -E	34FF-69	第１区画
(8) SK021	6	1.43	1.17	0.49	N-55° -E	34FF-69	第１区画
(8) SK022	6	1.50	1.26	0.36	N-42° -E	34FF-69	第１区画
(8) SK023	6	(1.93)	1.37	0.27	N-7° -W	34GG-82	第１区画
(8) SK024	6	1.36	1.08	0.11	N-47° -E	34GG-63	第１区画
(8) SK025	6	1.08	0.80	0.11	N-65° -W	34GG-73	第１区画
(8) SK027	6	2.08	1.27	0.17	N-72° -E	34GG-50	第１区画
(8) SK028	6	2.56	1.46	0.21	N-24° -W	34FF-46	第１区画
(8) SK029	6	1.38	1.03	0.33	N-68° -E	34FF-59	第１区画
(8) SK030	6	2.83	1.25	0.50	N-26° -W	34GG-70	第１区画
(8) SK031	6	1.44	0.99	0.33	N-41° -E	34FF-59	第１区画
(8) SK033	6	0.96	0.76	0.21	N-42° -E	34GG-50	第１区画
(8) SK035	3	1.79	(1.15)	0.54	N-40° -W	34FF-58	第１区画
(8) SK036	7	(0.94)	0.86	0.20	N-75° -E	35GG-01	第１区画
(8) SK037	7	0.80	0.72	0.15	N-54° -E	35GG-11	第１区画
(8) SK038	7	1.83	1.16	0.49	N-14° -W	35GG-01	第１区画
(8) SK039	7	1.35	1.23	0.59	N-21° -W	34FF-79	第１区画
(8) SK040	7	1.70	(1.20)	0.33	N-56° -E	34FF-79	第１区画
(8) SK050	7	1.25	1.16	0.45	N-26° -E	34GG-44	第１区画
(8) SK051	7	(1.85)	1.80	0.59	N-19° -W	34FF-79	第１区画
(8) SK052	8	1.45	0.94	0.18	N-60° -E	34GG-71	第１区画
(8) SK053		1.36	1.07	0.21	N-22° -W	34GG-70	第１区画
(8) SK054	8	2.49	1.05	0.19	N-25° -W	34GG-80	第１区画
(8) SK056	8	1.71	1.16	0.31	N-19° -W	34GG-80	第１区画
(8) SK057	8	(1.62)	1.26	0.43	N-19° -W	34GG-80	第１区画
(8) SK058	8	(1.64)	1.36	0.44	N-65° -E	34GG-42	第１区画
(10) SK001	9	1.54	1.23	0.45	N-66° -E	35GG-19	第１区画
(10) SK002	9	1.15	0.73	0.33	N-47° -E	35HH-00	第１区画
(10) SK003		1.37	1.05	0.31	N-44° -W	35HH-00	第１区画
(10) SK007	9	0.92	0.62	0.15	N-11° -W	34HH-91	第１区画
(10) SK008	9	(0.88)	0.54	0.05	N- 3° -W	34HH-91	第１区画
(8) SH001	9	0.62	0.52	0.84	N-35° -W	34FF-17	第１区画
(8) SH002	9	0.29	0.19	0.40	N-76° -E	34FF-27	第１区画
(8) SH003		0.30	0.26	0.40	N-28° -W	34FF-27	第１区画
(8) SH004	12	0.32	0.26	0.73	N-68° -W	34FF-25	第１区画
(4) 004	12	2.05	1.34	0.51	N-13° -W	36EE-47	第２区画
(4) 006	12	2.32	1.57	0.33	N-25° -W	36EE-57	第２区画
(4) 007	12	4.81	1.75	0.11	N-17° -W	36EE-48	第２区画
(4) 008	13	2.63	0.92	0.07	N-48° -W	36EE-48	第２区画
(4) 009	13	1.92	1.40	0.09	N-42° -W	36EE-69	第２区画
(5) 017	13	2.18	1.72	0.25	N-45° -W	35FF-10	第２区画
(5) 024		2.09	1.90	0.22	N-47° -E	35FF-60	第２区画
(5) 026		0.96	0.69	0.19	N-19° -E	35EE-68	第２区画、 板碑片・近世焙烙
(5) 044		1.54	1.40	0.16	N-38° -W	36FF-23	第２区画
(5) 045		1.17	1.14	0.31	(N-56° -W)	35FF-22	第２区画
(5) 053		2.17	1.93	0.93	N-56° -E	35FF-91	第２区画
(5) 058		1.64	1.45	0.17	(N-30° -E)	36FF-03	第２区画
(5) 062		2.17	1.85	0.40	N-52° -E	36FF-92	第２区画

遺構番号	図版番号	長軸（直径）	短　軸	深　さ	長（主）軸方位	位置（主グリッド）	備　考
(5) 101		1.72	1.22	0.20	N-65° -W	36FF-02	第 2 区画
(5) 102		1.35	0.82	0.25	N-27° -W	36FF-02	第 2 区画
(5) 103		1.40	1.15	0.30	N-18° -W	36FF-02	第 2 区画
(5) 104		0.97	0.89	0.28	N-49° -E	36FF-02	第 2 区画
(6) SK003		2.60	(2.57)	0.48	N-62° -E	35FF-60	第 2 区画
(6) SK004		2.69	2.29	0.52	N-46° -W	35FF-62	第 2 区画
(6) SK008		2.99	1.35	0.49	N-50° -E	35FF-86	第 2 区画
(6) SK009		1.21	1.10	0.31	N-71° -W	35EE-29	第 2 区画
(6) SK013		1.75	1.65	0.45	N-15° -E	35FF-62	第 2 区画
(6) SK014		0.71	0.60	0.38	N-65° -W	35FF-63	第 2 区画
(6) SK015		1.05	0.96	0.37	N-86° -E	35FF-54	第 2 区画
(6) SK016		1.29	1.20	0.19	N- 7° -W	35FF-55	第 2 区画
(6) SK017		1.42	1.06	0.33	N-33° -W	35FF-75	第 2 区画
(6) SK018		1.55	1.54	0.25	N- 8° -E	35FF-74	第 2 区画
(6) SK019		(1.66)	1.56	0.33	N-28° -W	35FF-74	第 2 区画
(6) SK021		1.56	1.25	0.28	N-38° -W	35FF-85	第 2 区画
(6) SK022		2.81	1.50	1.00	N-40° -E	35FF-95	第 2 区画
(6) SK023	14	1.86	1.00	0.34	N- 7° -W	35FF-88	第 2 区画
(4) 019	16	1.30	0.89	0.19	N-49° -W	37FF-24	第 3 区画
(4) 020	16	3.91	1.30	0.15	N-51° -E	37FF-35	第 3 区画
(4) 021	16	1.63	1.22	0.26	N-63° -E	37FF-25	第 3 区画
(4) 025		1.55	0.92	0.17	N-27° -W	37FF-37	第 3 区画
(4) 026		1.92	1.06	0.36	N-31° -W	37FF-38	第 3 区画
(4) 027		(0.79)	0.86	0.36	N-44° -E	37FF-38	第 3 区画
(4) 030	17	1.20	1.11	0.14	N-57° -E	37FF-67	第 3 区画
(5) 005	17	2.10	1.60	0.27	N-20° -W	37GG-42	第 3 区画
(5) 011		-	-	-	-	37GG-87	第 3 区画
(5) 029		1.52	1.10	0.65	N-64° -E	37FF-19	第 3 区画
(5) 030		1.40	1.22	0.47	N-57° -E	37FF-18	第 3 区画
(5) 031		0.61	0.57	0.51	N-64° -E	37FF-28	第 3 区画
(5) 032		0.79	0.71	0.21	N-73° -E	37FF-28	第 3 区画
(5) 034	18	2.66	1.42	0.35	N-89° -W	37GG-24	第 3 区画
(5) 040		1.29	1.07	0.41	N-46° -E	37FF-19	第 3 区画
(5) 082		0.96	0.80	0.15	N-19° -W	36GG-89	第 3 区画
(5) 083	18	2.25	1.99	0.55	N-89° -W	36GG-99	第 3 区画
(5) 105		1.34	1.16	0.29	N-85° -W	36GG-91	第 3 区画
(5) 106		1.26	0.79	0.18	N-70° -E	37FF-18	第 3 区画
(5) 107		1.72	0.75	0.34	N-60° -W	37FF-18	第 3 区画
(5) 108		-	1.82	0.78	-	37GG-00	第 3 区画
(5) 109		-	-	-	-	37FF-09	第 3 区画
(5) 110		1.90	1.48	0.39	N- 2° -E	36GG-00	第 3 区画
(5) 111		0.81	0.71	0.51	N-19° -W	37FF-09	第 3 区画
(5) 112		1.70	1.10	0.18	N-61° -E	37FF-19	第 3 区画
(5) 113		1.37	1.15	0.17	N-220° -E	37FF-39	第 3 区画
(5) 014		1.10	0.86	0.39	N-19° -W	37GG-30	第 3 区画
(6) SK033		3.22	0.86	0.24	N-40° -E	37GG-07	第 3 区画
(6) SK036		1.67	1.14	0.44	N-42° -E	36GG-95	第 3 区画
(6) SK040		1.74	0.87	0.47	N-88° -E	36GG-98	第 3 区画
(3) SK001 (3) SK002	19	2.45	0.96	0.60	N-14° -E	34CC-62	区画外
(3) SK004		-	-	-	-	35DD-25	区画外
(4) 014	20	2.13	0.95	0.15	N-42° -W	36FF-71	区画外
(5) 060	20	-	-	-	-	36FF-63	区画外
(6) SK010	20	1.10	1.10	0.17	N- 5° -W	35EE-09	区画外
(6) SK011		1.02	0.90	0.30	N-41° -E	35FF-60	区画外
(6) SK025		1.35	0.83	0.15	N-49° -E	36GG-10	区画外
(6) SK026		1.62	1.21	0.31	N-12° -W	36FF-18	区画外
(10) SK010		1.61	1.26	0.46	N-20° -W	35HH-02	区画外

5　遺物

ここでは中世の遺物を中心に古墳時代以降の遺物について説明する。

陶磁器類（第53～56図、第４表、図版25～28）

１～19は瀬戸窯産で、１は折縁小皿、２～７は灰釉平碗で完形品はない。２は付け高台で、底面には回転ヘラケズリ痕が明瞭である。３、６を含めて内面には重ね焼き痕がある。８は平底末広碗か天目茶碗、９・10は天目茶碗で、９は垂れた鉄釉が分厚く露胎部は回転ヘラケズリ痕を残す。10の底部は残存する外面には回転ヘラケズリ痕が残り、内面には鉄釉が掛かる。いずれも古瀬戸中期にあたる。11は小皿の破片で、中期または後期になる。12は縁釉小皿口縁部片で、古瀬戸後期になる。13・14は卸皿で灰釉を掛けている。いずれも古瀬戸中期にあたる。15～17は古瀬戸中期の折縁深皿で、17は中Ⅲ期になる。18は広口壺の蓋でつまみは残存しない。櫛描文、蕨手文を施しており、内面はていねいにナデられている。釉薬は暗緑色を呈しており、鉄釉の可能性が高いと考えられる。古瀬戸中Ⅱ期か。なお、図示しなかったが、他に同一個体と考えられる破片が２点ある。19は壺の蓋と思われるが、器面はにぶい黄橙色に発色し、無釉なのか薄く鉄釉を掛けているのか判然としない。

20、21は東海系鍔釜の口縁端小片と同一個体と考えられる胴部小片になる。22は在地産の素焼きの三足土器香炉で外面に縦３段に、角形雷文押印を施している。器面はていねいに磨かれている。

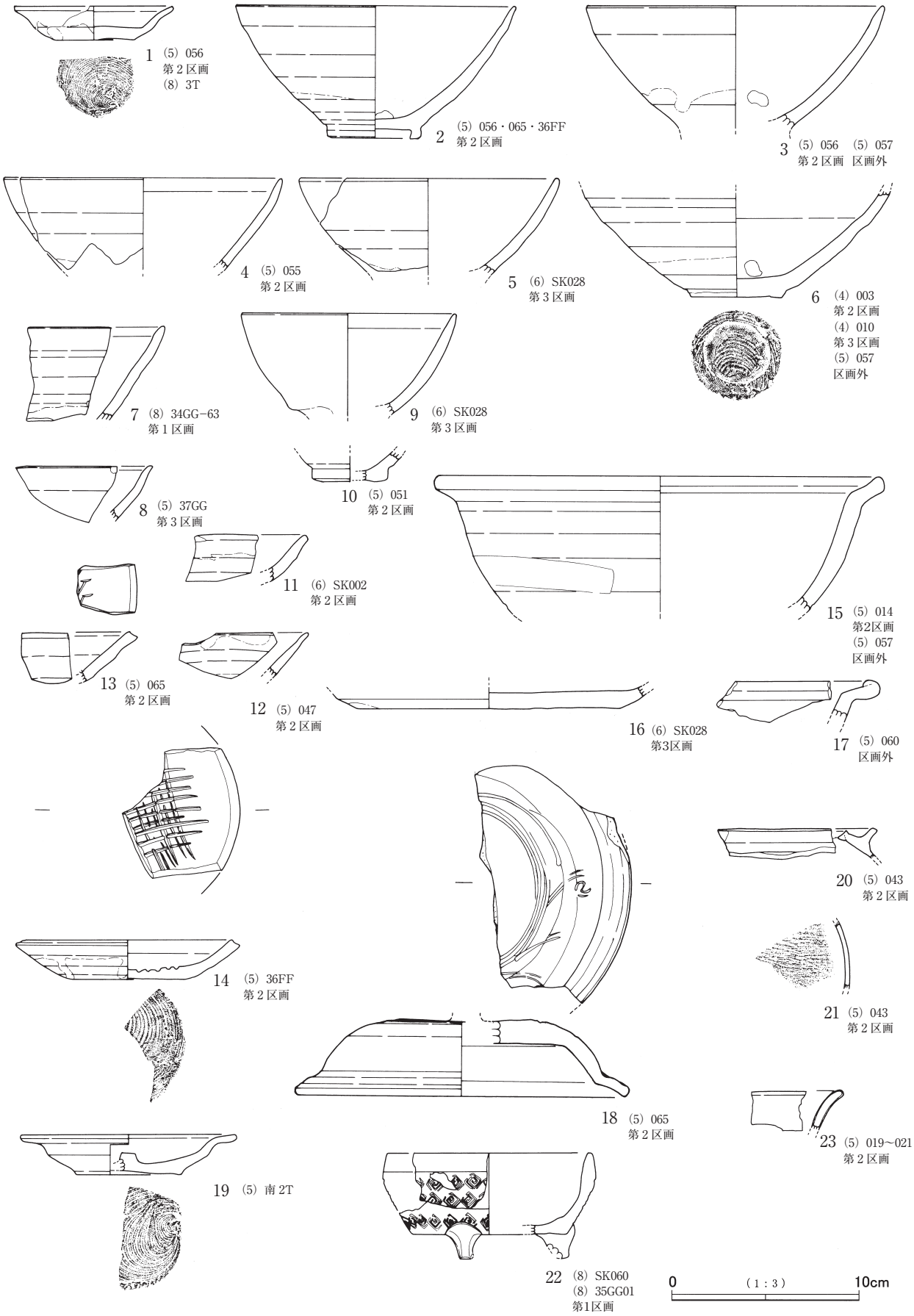
23は龍泉窯系青磁端反碗か皿Ⅳ類の口縁部小片である。破片には文様は認められない。

24・25は常滑甕口縁部片で24が５型式、25が６型式になる。

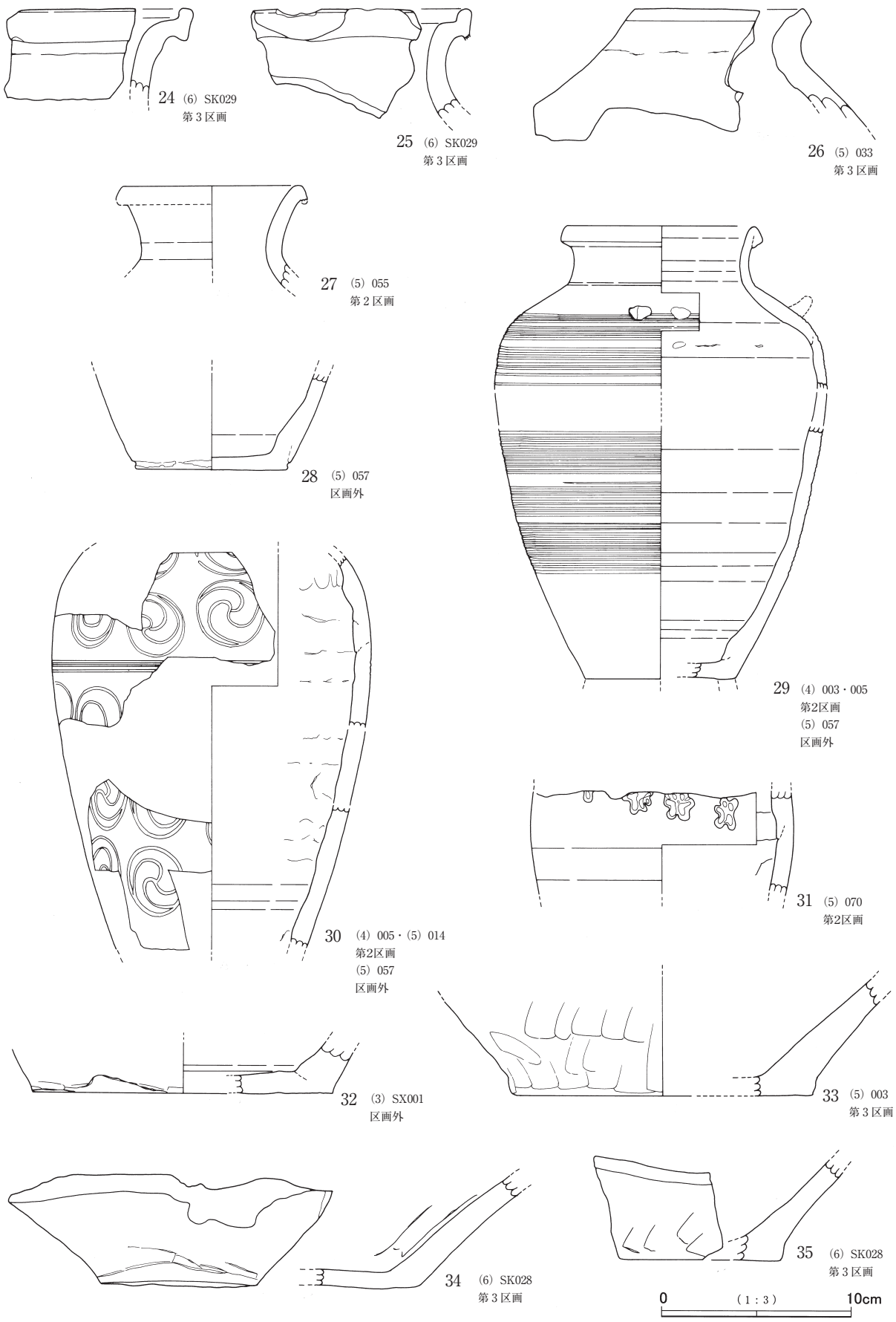
26は産地不明の陶器短頸壺で素焼き、内面がボロボロに剥離している。釉薬の掛かった痕跡が認められない。27・28は産地不明の同一個体と考えられる壺の口頸部と底部片になる。内外面に自然釉が剥離した痕跡がみられる。胎土は灰色で須恵器のような感じにみえる。底部の調整は不明だが、高台は付かない。胎土は砂っぽく、礫は含まない。

29は口広有耳壺で、図上で同一個体と考えられる４点・３個体の破片を合成した。口縁部は折り返されて断面が三角形状になる。耳自体は残存しないが肩には細い耳の接合痕が残る。肩から腰部にかけて櫛状工具で、ロクロの回転を利用して沈線を巡らしている。腰から底部にかけては回転ヘラケズリで、底面には灰白色の釉薬剥離痕がみられるが、ちょうど外縁部だけが橙色になっていて、ここに付け高台があった可能性が高い。口縁から肩にかけて明黄褐色の釉薬が残る。また腰には釉薬が流れた痕跡がある。古瀬戸中Ⅲ期か。30は古瀬戸瓶子Ⅱ類。これも同一個体と考えられる４点・２個体の破片を図上で合成した。縦方向に５段の巴文を押印する。２段目と３段目の間の胴部最大径の位置に三筋の沈線を巡らす。外面は全面鉄釉で内面には粘土紐接合痕やユビ圧痕がはっきりと残る。一部の破片は断面が摩滅しており、転用砥と考えられる。なお、図示しなかったが、他に同一個体と考えられる破片が７点ある。31は同じく鉄釉を施す古瀬戸瓶子胴部片である。外面には花柄文を押印する。30・31は古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期か。

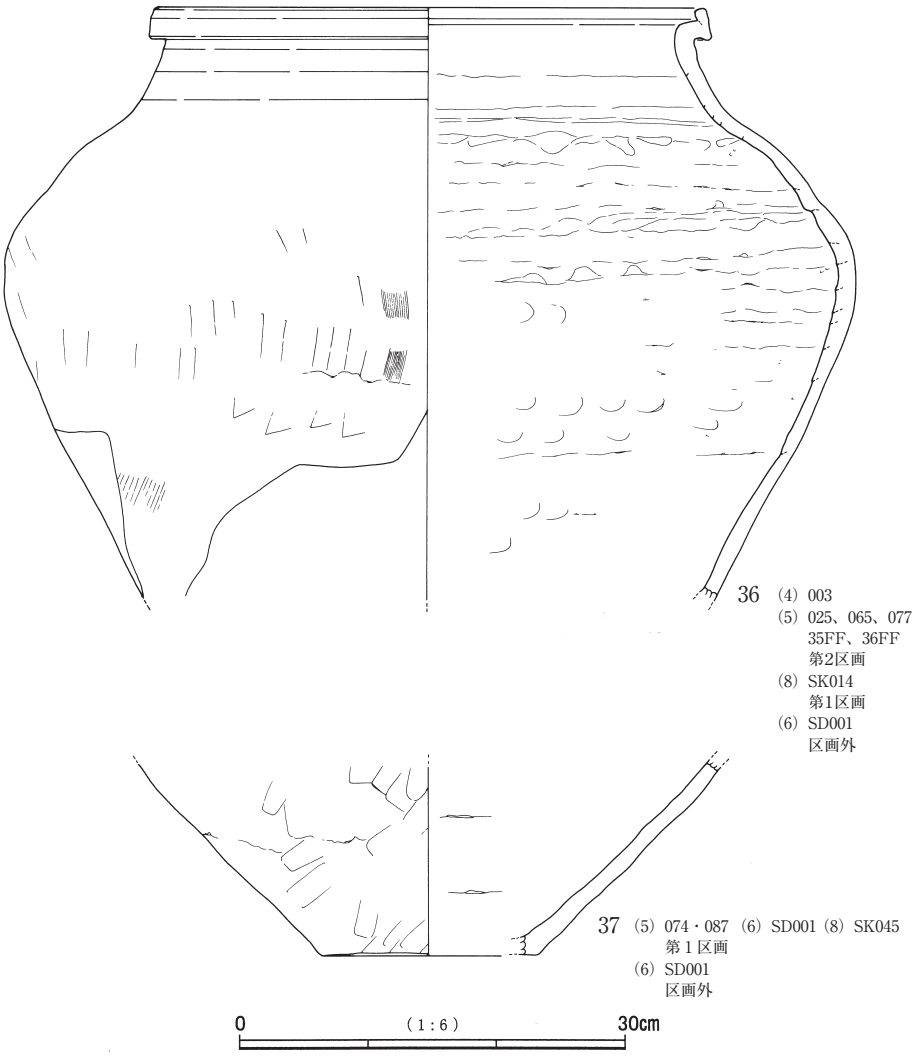
32は常滑甕の底部片、33は常滑片口鉢の底部片である。双方とも成形方法は同一である。33の内面は摩滅が著しく、調整痕は残らない。底面は砂目。34・35も常滑甕底部片になる。36・37はそれぞれ常滑大甕の破片を接合したもので、36は図上で同一個体と考えられる15点・２個体の破片を合成した。なお、36と37は相互で接合していないので、同一個体かどうかの判断は困難である。口径は44.2㎝、肩部の最大径は67.8㎝、底径は推定17.0㎝、残存高は36が47.3㎝、37が15.0㎝になる。36・37の内面には粘土紐輪積み接合痕や手のひら圧痕、外面にはハケかヘラ状の工具による調整痕がみられる。36は外面には自然釉が付着す



第53図　古瀬戸・青磁・土器



第54図　常滑・古瀬戸・産地不明陶器

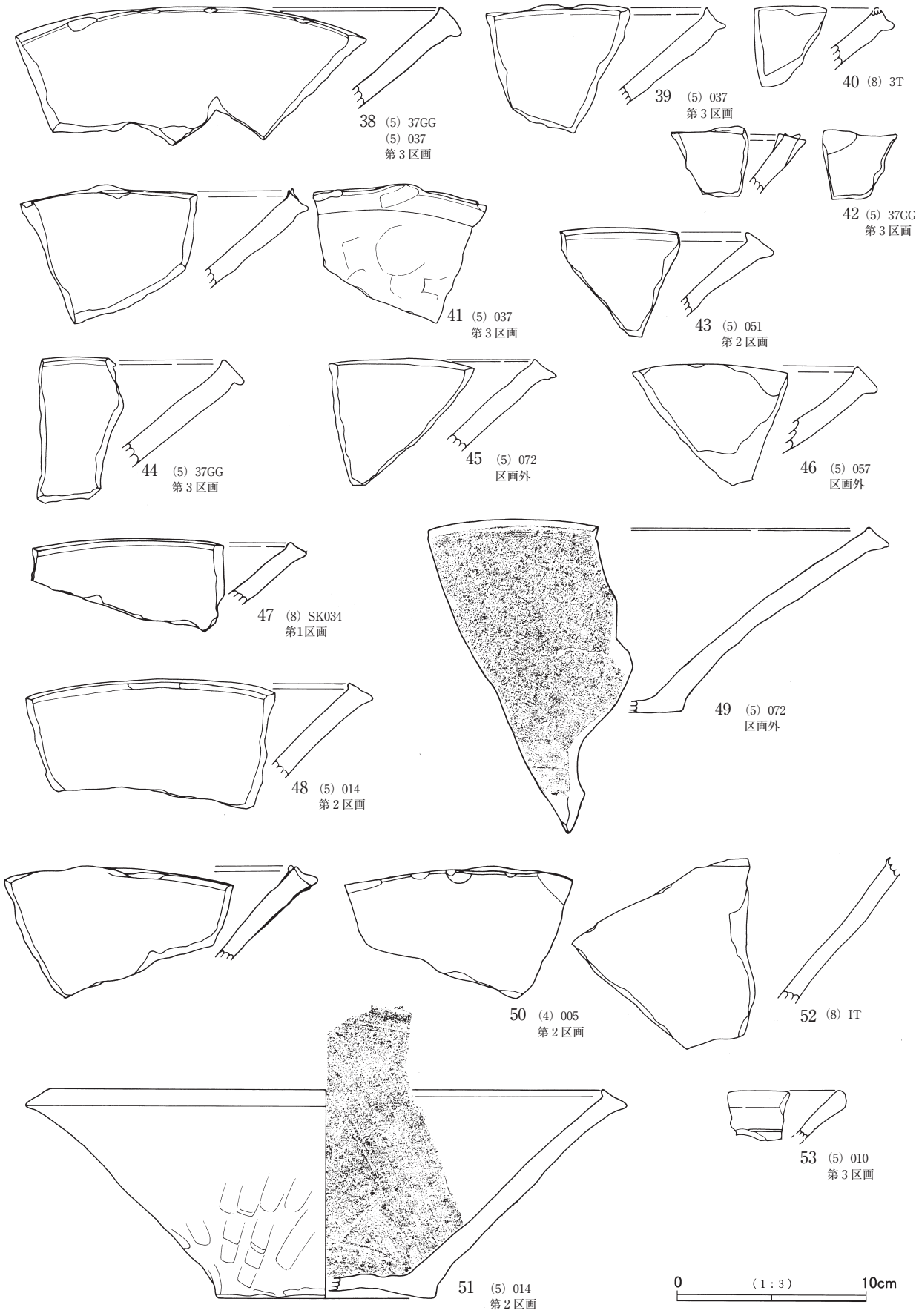


第55図　常滑大甕

る。37は底部を擂鉢として使用していた可能性がある。38～52はいずれも常滑片口鉢Ⅱ類である。８型式～11型式の片口鉢になる。片口は41・42、50にみられ、39は41と同一個体か。53は常滑片口鉢Ⅰ類の口縁部小片で、５または６ａ型式になる。

石製品・石造物（第57・58図、第５表、図版29・30）

１・２は石英安山岩あるいはデイサイトの茶臼である。１は上臼で、内面（上面図上の上部）と挽き手用の孔の部分（断面図上の下部）がススにより黒色に変色している。２は表面・割れ面ともに黒色に変色していることから破損後に被熱したものである。３～16は不明の石製品あるいは石造物である。３・10・15は曲面で、３は黒色に変色していることから被熱していると考えられる。10は残存面の全体が滑らかに加工されている。15は黒色に変色していることから被熱していると考えられる。４は多角柱形で、黒色に変色していることから被熱していると考えられる。５は球形、６は鏡餅形、７・11～13は板状で、11は扁平な破片で、風化しているようにもみえることから石造物の可能性がある。12は黒色に変色しているこ

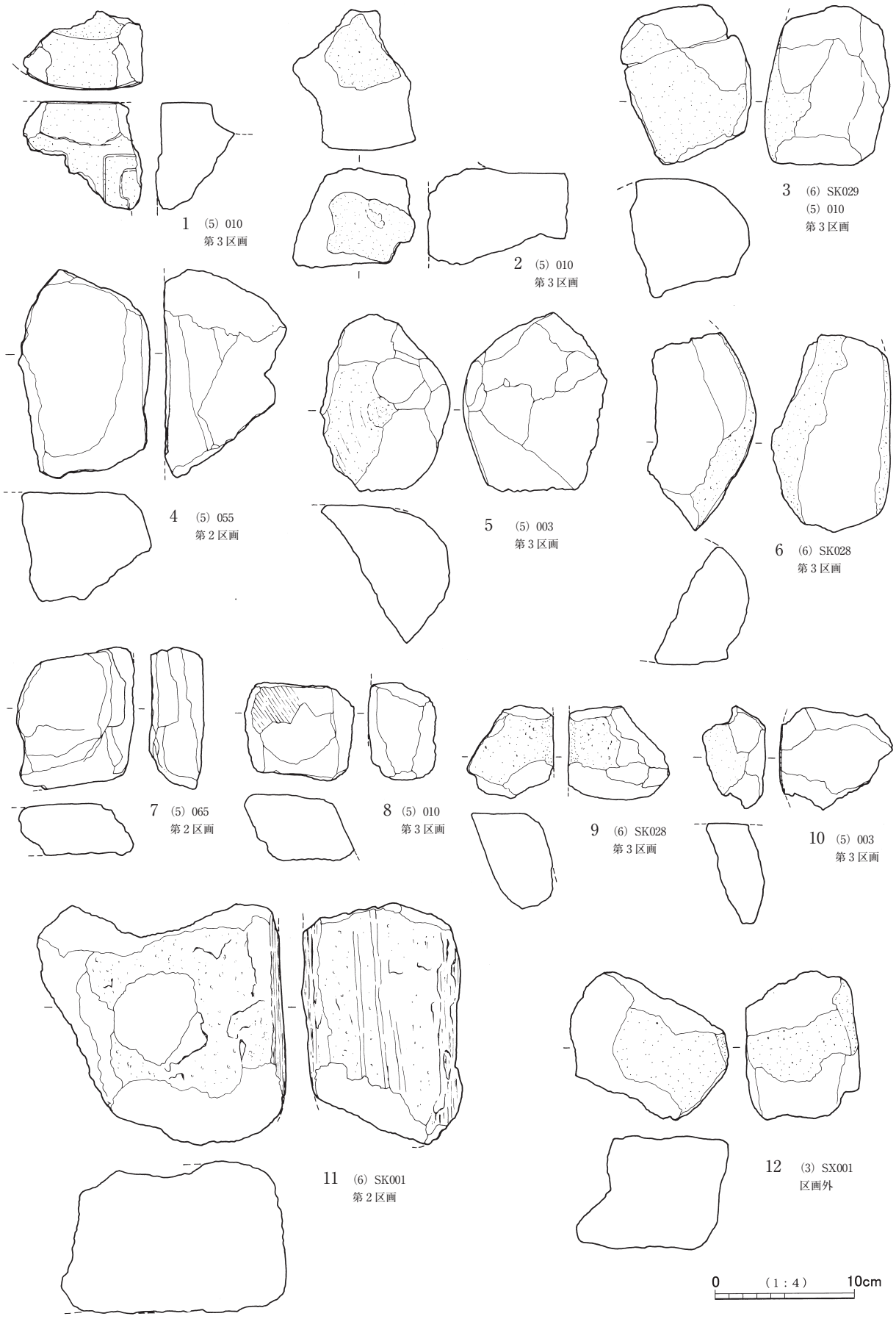

38 (5) 37GG
(5) 037
第3区画
39 (5) 037
第3区画
40 (8) 3T
42 (5) 37GG
第3区画
41 (5) 037
第3区画
43 (5) 051
第2区画
44 (5) 37GG
第3区画
45 (5) 072
区画外
46 (5) 057
区画外
47 (8) SK034
第1区画
49 (5) 072
区画外
48 (5) 014
第2区画
50 (4) 005
第2区画
52 (8) IT
53 (5) 010
第3区画
51 (5) 014
第2区画
0 (1:3) 10cm

第56図　常滑片口鉢

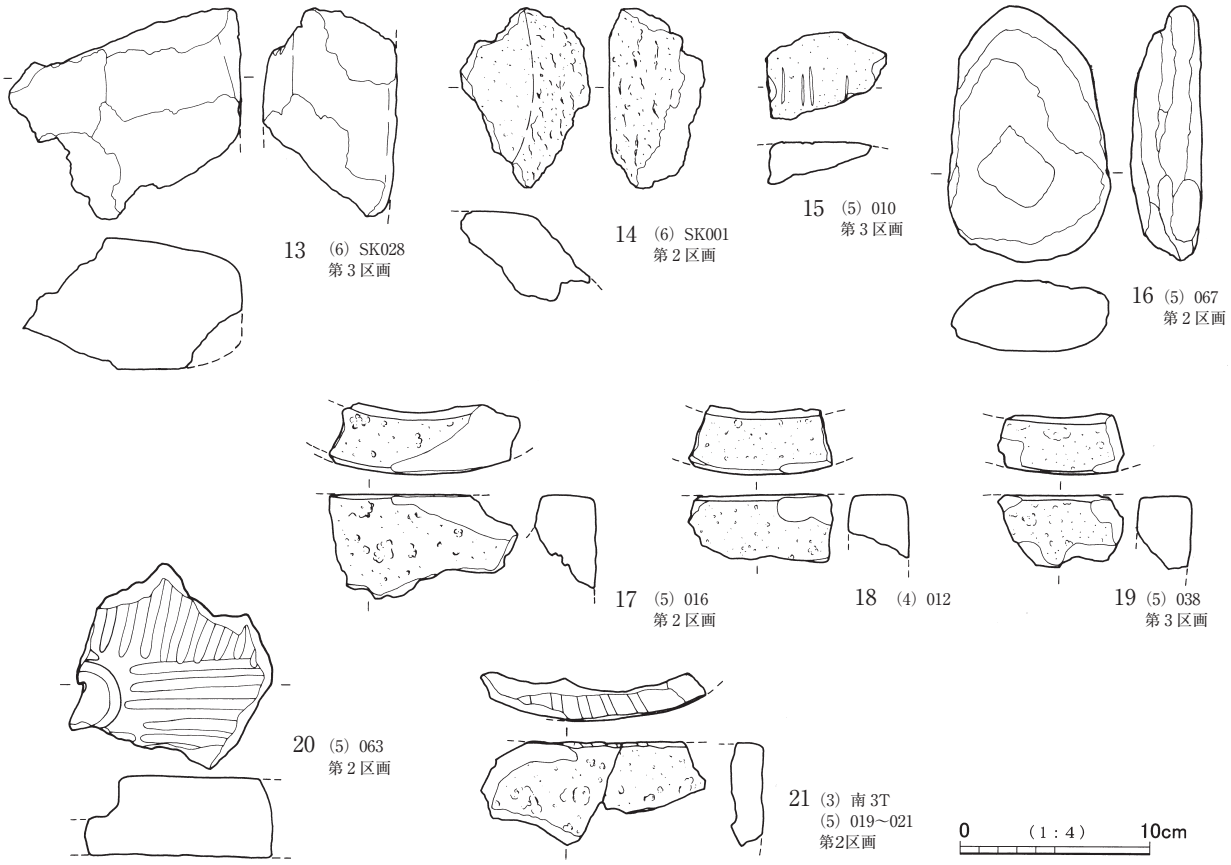
第４表　中世陶磁器観察表

挿図番号		産地	器種	部　位	編　年	遺構 グリッド	遺物 番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	破片 数	備　考
第53図	1	瀬戸	折縁小皿	全体の1/2残存	古瀬戸後期	(5) 056	1	(8.5)	4.0	1.8	2 (1)	内面全面灰釉
						(8) 3T	3					
第53図	2	瀬戸	平碗	全体の1/4残存	古瀬戸後Ⅰ期	(5) 056・065	1	(15.0)	(5.0)	7.1	3 (1)	
						(5) 36FF	1					
第53図	3	瀬戸	平碗	全体の1/8残存	古瀬戸後期？	(5) 056・057	1	(16.0)			3 (1)	内面に重ね焼き痕。灰釉
第53図	4	瀬戸	平碗	全体の1/10残存	古瀬戸	(5) 055	1	(15.0)			2 (1)	灰釉
第53図	5	瀬戸	平碗か 平底末広碗	全体の1/8残存	古瀬戸	(6) SK028	11	(14.0)			1	
第53図	6	瀬戸	平碗	全体の1/4残存	古瀬戸後Ⅲ期？	(4) 003・010	1		4.9		4 (1)	内面に重ね焼き痕。灰釉。削り出し高台
						(5) 057	1					
第53図	7	瀬戸	平碗	口縁部小片	古瀬戸後期？	(8) 34GG-63	1				3 (1)	内外面灰釉
第53図	8	瀬戸	平底末広碗か 天目茶碗	口縁部小片	古瀬戸後期？	(5) 37GG	1				1	内外面灰釉
第53図	9	瀬戸	天目茶碗	口縁から体部にかけて 1/3残存	古瀬戸中期？	(6) SK028	11	(11.5)			1	明赤褐色～赤黒色の分厚い鉄釉。胎土は灰白色
第53図	10	瀬戸	天目茶碗	底部片	古瀬戸中期？	(5) 051	1		(4.0)		1	内面鉄釉。外面回転ヘラ削り。
第53図	11	瀬戸	小皿	口縁部小片	古瀬戸中期・後期	(6) SK002	1				1	薄手硬質。礫含まず精選。灰釉
第53図	12	瀬戸	小皿	口縁部小片	古瀬戸後期	(5) 047	1				1	外面はタタキ目、内面には筋状のハケ目痕。 薄手硬質。緑釉
第53図	13	瀬戸	卸皿	口縁から体部にかけての 小片	古瀬戸中期	(5) 065	1				1	灰釉
第53図	14	瀬戸	卸皿	全体の1/4残存	古瀬戸中期	(5) 36FF	1				1	内面卸目。灰釉
第53図	15	瀬戸	折縁深皿	口縁から体部にかけて 1/4残存	古瀬戸中期	(5) 014・057	1	(24.0)			3 (2)	
第53図	16	瀬戸	折縁深皿	底部片	古瀬戸	(6) SK028	11		(14.0)		1	全面灰釉後一部拭い取る
第53図	17	瀬戸	折縁深皿	口縁部小片	古瀬戸中Ⅲ期	(5) 060	1				2	全面灰釉
第53図	18	瀬戸	広口壺蓋	全体の1/3残存	古瀬戸中Ⅱ期？	(5) 065	1	(19.0)			3	口縁端から外面全面鉄釉か。 外面にはヘラで渦巻き文様。
第53図	19	瀬戸	壺蓋	全体の1/3残存		(5) 南２Ｔ	1	(11.5)	5.7	2.1	2 (1)	外面の中央に小型つまみ。硬質。 器面はにぶい黄橙色。器面剥落。施釉不明
第53図	20	東海系	鍔釜	口縁部と鍔の小片		(5) 043	1				2 (1)	同一個体
第53図	21	東海系	鍔釜	胴部小片		(5) 043	1				1	
第53図	22	在地	三足土器香炉	全体の1/10残存	古瀬戸中Ⅲ期	(8) SK060	3	(11.0)	(8.2)	(5.7)	3 (2)	外面には三段で、四角い渦巻き文スタンプを 一周押印。
						(8) 35GG-01	1					灰褐色～黒色。スコリア・長石を若干含むが精選 された胎土
第53図	23	龍泉窯	青磁碗か 皿Ⅳ類	口縁部小片		(5) 019 ～ 021	1				1	
第54図	24	常滑	甕	口縁部小片	５型式	(6) SK029	6				1	内外面とも自然釉付着
第54図	25	常滑	甕	口縁部小片	６型式	(6) SK029	4				1	
第54図	26	不明	短頸壺			(5) 003	5				1	
第54図	27	不明	壺	口頸部1/4残存		(5) 055	4	(10.2)			1	胎土は砂っぽい。礫含まず、灰色で硬質。須恵器 似
第54図	28	不明	壺	底部1/8残存		(5) 057	2		(8.0)		1	胎土は灰色で硬質。自然釉剥離痕
第54図	29	瀬戸	口広有耳壺	全体の1/8残存	古瀬戸中Ⅲ期？	(4) 003	1	(10.7)	(7.9)	(24.0)	8 (7)	肩に耳の剥離痕。肩から腰にかけて沈線。鉄釉。 図上復元
						(4) 005	7					
						(5) 057	1,2					
第54図	30	瀬戸	瓶子Ⅱ類		古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期	(4) 005	7				11 (8)	胴部に三巴文を5段に巡らす。鉄釉。一部転用砥 に 使用か？図上復元
						(5) 014	1					
						(5) 057	1					
第54図	31	瀬戸	瓶子	胴部1/3残存	古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期	(5) 070	1				3 (2)	胴径 (14.0) cm。鉄釉。草花文
第54図	32	常滑	甕	底部小片		(3) SX001	1		(16.0)		1	内面に薄く自然釉付着
第54図	33	常滑	片口鉢Ⅱ類	底部	８～10型式？	(5) 003	3				1	
第54図	34	常滑	甕	底部1/6残存		(6) SK028	11				1	内外面ヘラナデ？
第54図	35	常滑	甕	底部小片		(6) SK028	2				1	外面ヘラによるナデ
第55図	36	常滑	大甕	口縁から胴部	５～６a型式	(3) SK005	1	(44.2)			15 (2)	内面粘土紐輪積み接合痕・手のひら圧痕。 外面ハケかヘラ状工具による調整痕･自然釉付 着。 図上復元
						(4) 003	1					
						(5) 025・065	1					
						(5) 077	3,4					
						(5) 35FF	1					
						(5) 36FF	1					
						(6) SK001	1 ～ 3,7,9					
						(6) SD001	1					
						(8) SK014	1					
第55図	37	常滑	大甕	底部1/5残存		(5) 074・087	1		(17.2)		6 (1)	内面粘土紐輪積み接合痕。外面ヘラ状工具による 調整痕。播鉢として使用？
						(6) SD001	1					
						(8) SK045	1					
第56図	38	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部1/4残存	８型式	(5) 37GG	1				2 (1)	内面の使用痕 (摩滅) はほとんどなし
						(5) 037	1					
第56図	39	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	11型式？	(5) 037	1				1	内面使用痕なし。41と同一個体?
第56図	40	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	９型式	(8) 3T	1				1	自然釉
第56図	41	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	11型式？	(5) 037	1				2 (1)	片口部。39と同一個体？
第56図	42	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	８型式	(5) 37GG	1				1	片口部
第56図	43	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	９～10型式	(5) 051	1				1	外面に重ね焼き痕
第56図	44	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	９～10型式	(5) 37GG	1				1	
第56図	45	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	９型式	(5) 072	1				1	
第56図	46	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	８型式	(5) 057	1				1	
第56図	47	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	８型式	(8) SK034	1				1	
第56図	48	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	９型式	(5) 014	1				1	
第56図	49	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部から底部全体の 1/10残存	９型式	(5) 072	1				2 (1)	底面に使用痕 (摩滅) あり
第56図	50	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	９～10型式	(4) 005	8				1	片口部
第56図	51	常滑	片口鉢Ⅱ類	口縁から底部まで復元可	９～10型式	(5) 014	3	(32.0)	(11.8)	11.1	3 (1)	内面にハケの痕跡
第56図	52	常滑	片口鉢Ⅱ類	胴部片		(8) 1T	4				1	使用痕 (摩滅) 少しあり
第56図	53	常滑	片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	５～６a型式	(5) 010	1				2	灰色。自然釉

※破片数の実数は接合前、(　) は接合後の点数



第57図　石製品・石造物（1）



第58図　石製品・石造物（2）

第5表　石製品・石造物

挿図番号		種類	石材	遺構番号	遺物番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
第57図	1	茶臼	石英安山岩	(5) 010	5	7.6	8.5	5.7	246.9	デイサイトか
第57図	2	茶臼	石英安山岩	(5) 010	2	7.2	8.9	10.1	473.3	デイサイトか
第57図	3	石造物	安山岩	(6) SK029 (5) 010	7 1a	11.5	9.4	8.9	1088.0	石製品か
第57図	4	石造物	砂岩	(5) 055	2	15.0	9.5	8.8	1204.1	石製品か
第57図	5	石造物	安山岩	(5) 003	6	12.7	9.3	10.3	1013.7	石製品か
第57図	6	石造物	安山岩	(6) SK028	7	14.2	7.8	8.5	892.1	石製品か
第57図	7	石造物	雲母片岩	(5) 065	1a	10.2	8.5	4.0	467.5	石製品か
第57図	8	石造物	花崗岩	(5) 010	6	7.1	7.9	4.9	377.1	石製品か
第57図	9	石造物	流紋岩	(6) SK028	9	6.8	6.3	7.3	314.4	石製品か
第57図	10	石造物	安山岩	(5) 003	1b	7.4	4.6	8.1	221.1	石製品か
第57図	11	石造物	安山岩	(6) SK001	1	17.4	17.8	11.5	3700.0	石製品か
第57図	12	石造物	安山岩	(3) 001	1	10.7	11.5	8.2	1049.7	石製品か
第58図	13	石造物	流紋岩	(6) SK028	10	11.1	12.2	7.2	864.8	石製品か
第58図	14	石造物	安山岩	(6) SK001	2	9.6	6.8	5.0	260.1	石製品か
第58図	15	石造物	安山岩	(5) 010	1c	4.5	6.3	2.3	82.6	石製品か
第58図	16	石造物	雲母片岩	(5) 067	1	13.6	8.7	3.9	570.3	石製品か
第58図	17	石臼	安山岩	(5) 016	1a	5.5	9.9	3.5	202.5	
第58図	18	石臼	安山岩	(4) 012	1	3.6	7.4	3.3	129.3	
第58図	19	石臼	安山岩	(5) 038	1a	3.7	6.6	3.3	103.2	
第58図	20	石臼	安山岩	(5) 063	1	10.8	10.5	4.1	638.9	
第58図	21	石臼	安山岩	(5) 019・020・021 (3) 南3T	1 1c	5.5	11.9	2.1	118.8	
－	－	板碑	緑泥片岩	(3) SD002 (5) 026・074 (6) 35FF他	－	－	－	－	895.7	総重量

とから被熱していると考えられる。13は被熱により破砕している。８・９・14は形状不明で、９は当初、一部に若干の平滑面がみられることから、砥石的な用途を考えたが、割れ面を除く平滑面が全体的に均一に磨耗していることから、自然面かもしれない。14は断面図上の上部はかなり平滑に、同じく側面側も若干が磨かれている。被熱により破砕している。16は雲母片岩の石斧状の石製品で、あるいは石造物の一部かもしれない。17～21はすべて安山岩の石臼である。20を除いて上臼である。19は表面の一部が赤灰色、20は表面の一部、21は表面及び割れ面が黒色に変色していることから被熱していると考えられる。他に図示しなかったが、第３・５・６次調査で緑泥片岩の板碑の破片が出土している。

砥石（第59図、第６表、図版31）

１～５、９～23･25は凝灰岩、６～８は粘板岩、24は砂岩の砥石である。18は２点が接合して1個体となっているが、接合面に段差があることから、破損後も継続して使用されたことが分かる。４・５、11～14、16・18・19は黒色あるいは灰色に変色しており、被熱していると考えられる。

丸玉・土錘・フイゴ羽口・土師器（第60図、第７表、図版32）

１は中世の井戸から出土した土玉である。２は砥石と同質の凝灰岩の石玉である。あるいは砥石を転用したものであろうか。砥石の一部と同じように全体的に黒灰色に変色している。３は大型の管状土錘である。４はフイゴの羽口である。

５～７は古墳時代前期の土師器で、5・6に比べ、７は時期的に古いと考えられる。すべて高坏の脚部で、５は内外面とも器面が荒れており、調整は不明瞭で、中世の地下式坑からの出土であることから、何らかの形で再利用された可能性がある。

転用砥石（第60図、第７表、図版32）

１～５は常滑の甕の胴部片による転用砥石である。割れ面を除く周縁が磨耗している。

火打石（第60図、図版32）

１～11は玉髄の火打石である。１～５・７～９・11のように擦痕が残るものと６・10のように明瞭でないものがある。

ルツボ（第60図、第７表、図版32）

１～３はルツボである。銅製品を製造していたと考えられ、緑青が付着している。高温にさらされたためか脆弱である。他に３点の破片が出土している。近世と考えられる土坑から出土している。

鉄滓（第61図、第８表、図版33）

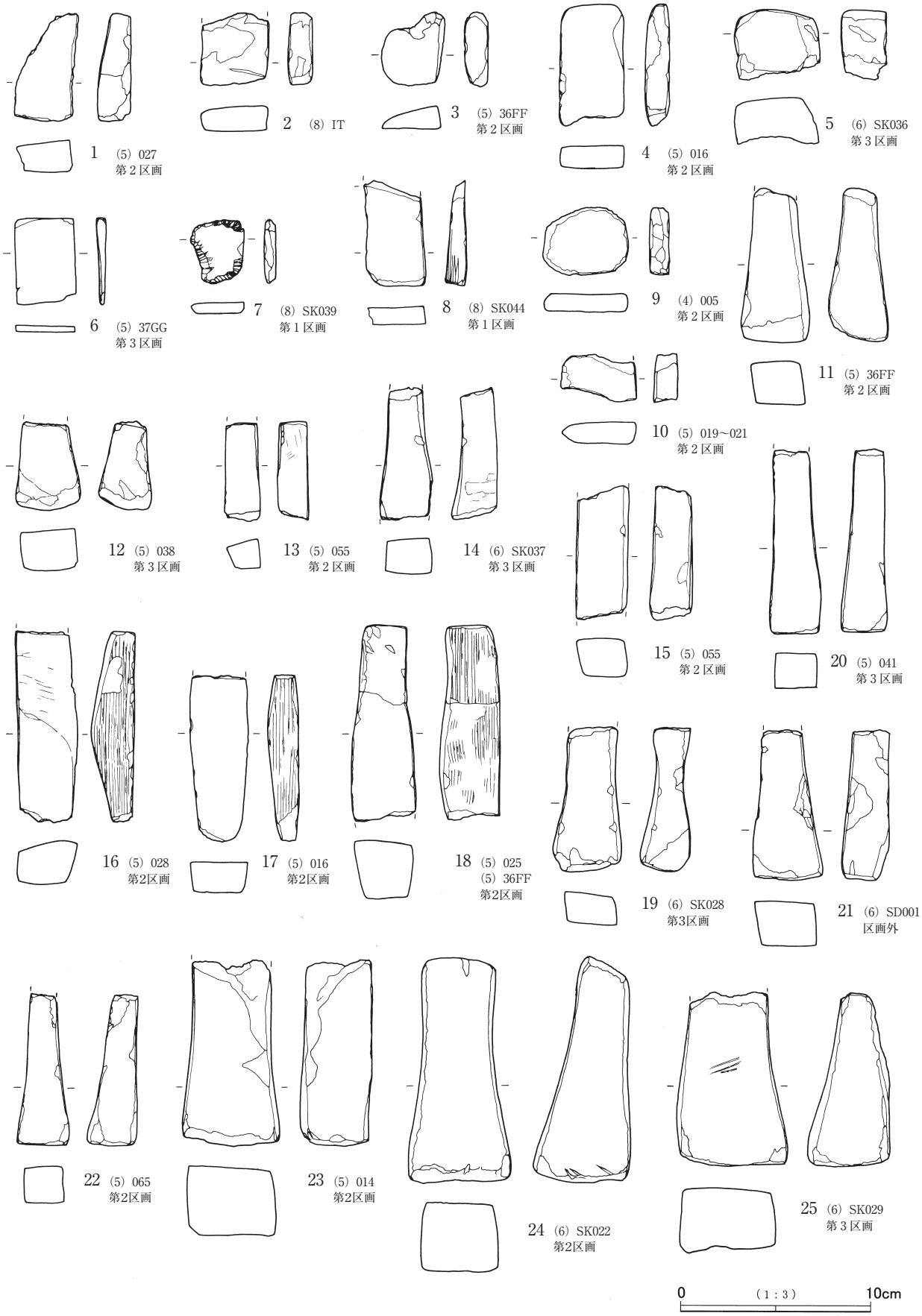
１～17は鉄滓である。４・６～10・12～17は椀形滓で、10には藁、12には藁・小石が付着している。

金属製品（第61図、第８表、図版33）

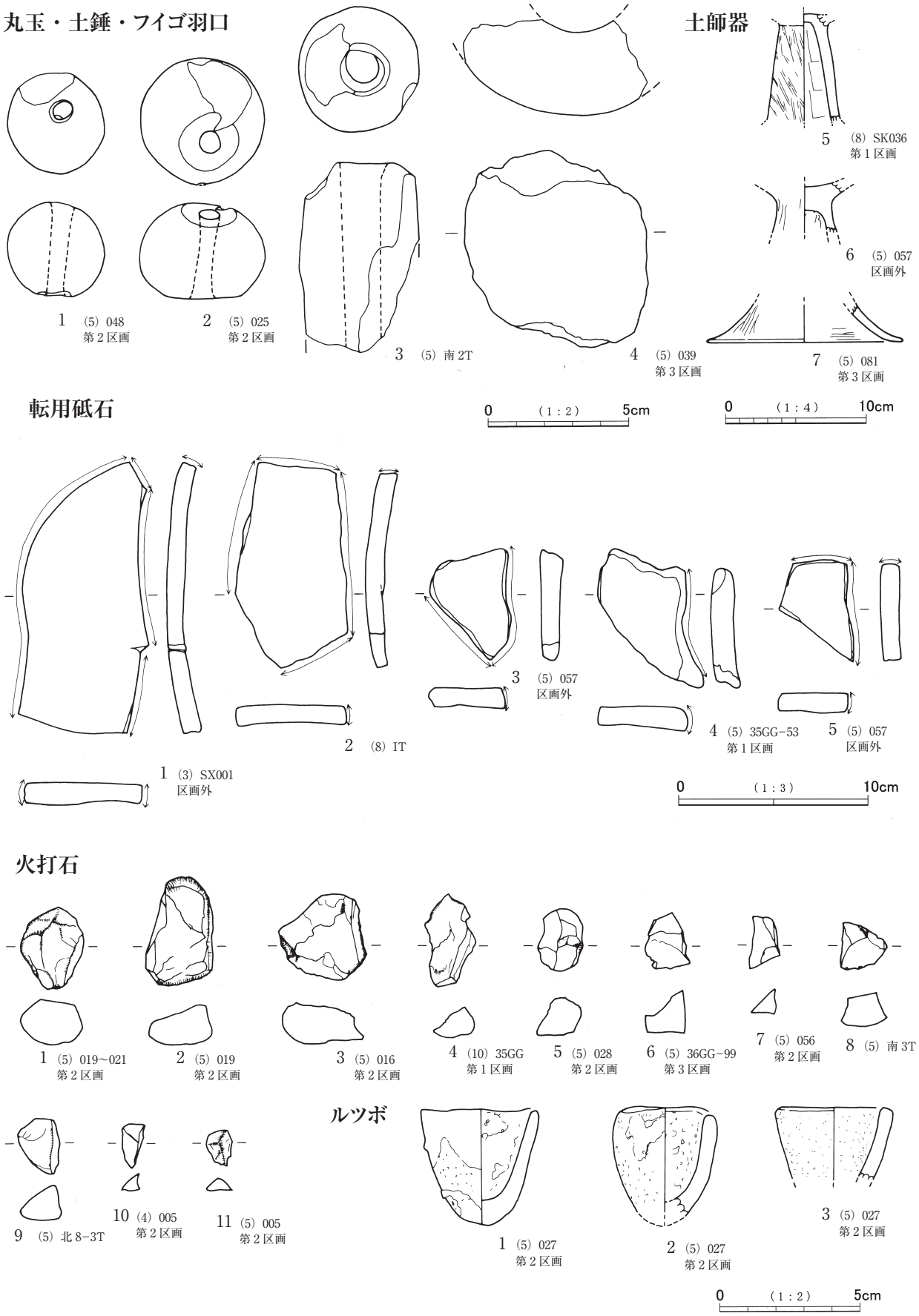
１は銅製の金具、２は銅製の椀、３は銅製の鈴、４・13は銅製の飾り金具、５～12は鉄釘で、７～９は鉄鏃の可能性がある。14・15は鉄製の刀子で刃先がみられないことから茎と考えられる。16は鉄製の円盤状の板の破片、17・19は鉄製の板状金具、18は鉄製の板の破片である。

銭貨（第62図、第９表、図版34）

１～21は中・近世の銭貨である。１・２・10～16・18・21が中世、３～８・17・19・20は近世、９は損傷が激しく時期不明であるが､輸入銭貨であると考えられる。縄文時代の陥穴から出土した１及びグリッドなどから出土した14～21以外は、中・近世の遺構から出土している。


1 (5) 027 第2区画
2 (8) IT
3 (5) 36FF 第2区画
4 (5) 016 第2区画
5 (6) SK036 第3区画
6 (5) 37GG 第3区画
7 (8) SK039 第1区画
8 (8) SK044 第1区画
9 (4) 005 第2区画
10 (5) 019～021 第2区画
11 (5) 36FF 第2区画
12 (5) 038 第3区画
13 (5) 055 第2区画
14 (6) SK037 第3区画
15 (5) 055 第2区画
16 (5) 028 第2区画
17 (5) 016 第2区画
18 (5) 025 (5) 36FF 第2区画
19 (6) SK028 第3区画
20 (5) 041 第3区画
21 (6) SD001 区画外
22 (5) 065 第2区画
23 (5) 014 第2区画
24 (6) SK022 第2区画
25 (6) SK029 第3区画
0 (1:3) 10cm

第59図　砥石



第60図　丸玉・土錘・フイゴ羽口・土師器・転用砥石・火打石・ルツボ

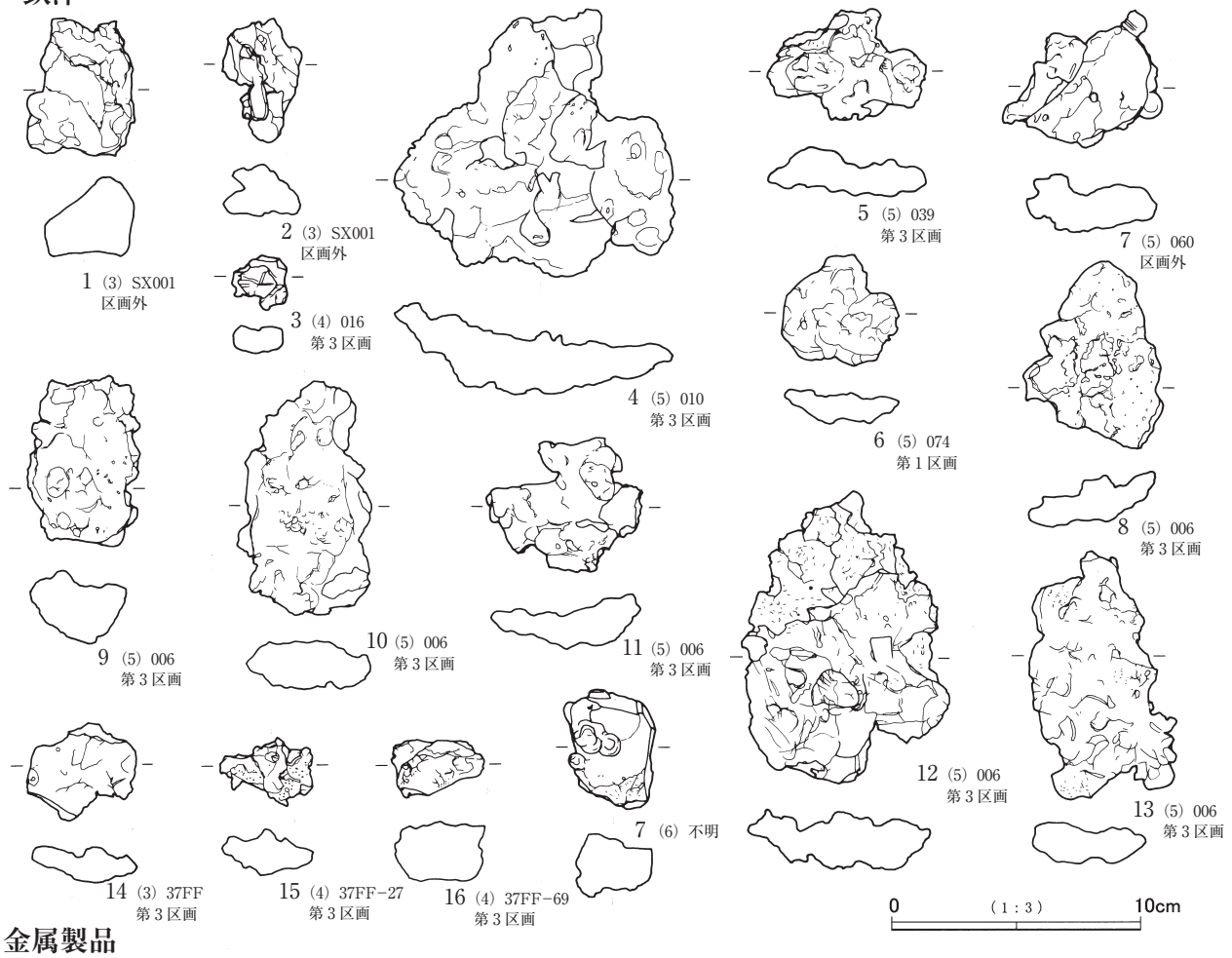
第６表　砥石

挿図番号		石材	遺構番号	遺物番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
第59図	1	凝灰岩	(5) 027	1b	5.6	3.3	1.8	38.4	
第59図	2	凝灰岩	(8) 1T	1	3.9	3.6	1.3	26.4	
第59図	3	凝灰岩	(5) 36FF	1e	4.0	3.4	1.3	15.5	
第59図	4	凝灰岩	(5) 016	1c	6.5	3.4	1.2	45.2	
第59図	5	凝灰岩	(6) SK036	1	3.7	4.5	2.4	51.1	
第59図	6	粘板岩	(5) 37GG	1c	4.5	3.1	0.5	11.1	
第59図	7	粘板岩	(8) SK039	1	3.4	2.9	0.6	7.4	
第59図	8	粘板岩	(8) SK044	2	5.6	3.3	1.2	27.7	
第59図	9	凝灰岩	(4) 005	5a	3.7	4.5	1.1	23.9	
第59図	10	凝灰岩	(5) 019・020・021	1b	3.6	4.0	1.3	14.8	
第59図	11	凝灰岩	(5) 36FF	1c	8.2	3.7	3.2	107.0	
第59図	12	凝灰岩	(5) 038	1b	4.7	3.5	2.9	54.6	
第59図	13	凝灰岩	(5) 055	1b	5.3	1.9	1.7	23.4	
第59図	14	凝灰岩	(6) SK037	1	7.0	2.8	2.5	54.2	
第59図	15	凝灰岩	(5) 055	1a	7.2	2.7	2.3	67.7	
第59図	16	凝灰岩	(5) 028	1a	10.2	3.2	2.3	95.0	
第59図	17	凝灰岩	(5) 016	1b	8.8	3.2	1.7	63.7	
第59図	18	凝灰岩	(5) 025 (5) 36FF	1a 1d	10.4	3.4	2.3	170.7	
第59図	19	凝灰岩	(6) SK028	6	7.7	3.6	2.7	79.0	
第59図	20	凝灰岩	(5) 041	2	9.7	2.6	2.5	89.3	
第59図	21	凝灰岩	(6) SD001	1	8.0	3.7	3.0	89.3	
第59図	22	凝灰岩	(5) 065	1b	7.9	2.8	2.6	59.5	
第59図	23	凝灰岩	(5) 014	2	9.8	5.2	3.9	290.4	
第59図	24	砂岩	(6) SK028	8	12.0	5.4	5.2	418.9	
第59図	25	凝灰岩	(6) SK029	10a	9.3	5.9	4.4	264.3	

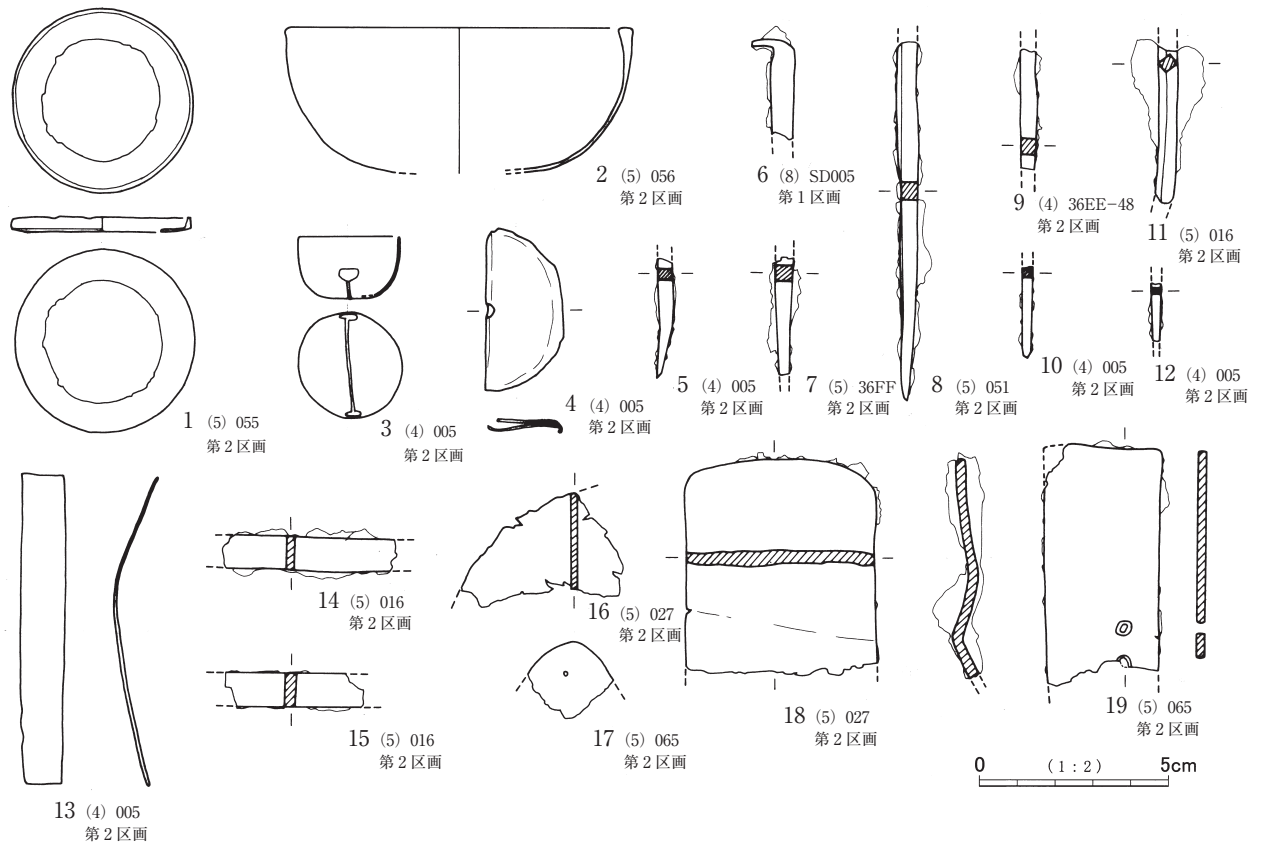
第７表　丸玉・土錘・フイゴ羽口・土師器・転用砥石・火打石・ルツボ

挿図番号		種類	材質	遺構番号	遺物番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
第60図	1	土玉	土製	(5) 048	1	3.4	3.4	-	36.3	
第60図	2	石玉	凝灰岩	(5) 025	1	3.4	4.4	-	74.7	
第60図	3	土錘	土製	(5) 南2T	1	(7.7)	4.2	-	80.8	
第60図	4	フイゴ羽口	土製	(5) 039	2	(7.0)	(6.5)	-	110.0	
第60図	5	高坏	土師器	(8) SK034	2	(7.7)	(4.6)	-	115.6	脚部
第60図	6	高坏	土師器	(5) 057	1	-	-	-	34.8	脚部
第60図	7	高坏	土師器	(5) 081	1	-	-	-	11.1	脚部
第60図	1	転用砥石	常滑甕	(3) 001	1	14.3	7.0	1.2	159.7	
第60図	2	転用砥石	常滑甕	(8) 1T	5	10.9	5.9	1.0	93.9	
第60図	3	転用砥石	常滑甕	(5) 057	1	5.9	4.3	1.1	31.5	
第60図	4	転用砥石	常滑甕	(5) 35GG-53	1	7.3	5.8	1.2	45.5	
第60図	5	転用砥石	常滑甕	(5) 057	1	5.3	3.9	1.0	27.3	
第60図	1	火打石	玉髄	(5) 019・020・021	1d	2.8	2.3	1.6	12.6	
第60図	2	火打石	玉髄	(5) 019	2	3.9	2.4	1.4	16.7	
第60図	3	火打石	玉髄	(5) 016	1e	3.1	3.1	1.4	14.4	
第60図	4	火打石	玉髄	(10) 35GG	1b	3.3	1.8	1.1	5.5	
第60図	5	火打石	玉髄	(5) 028	1c	2.2	1.6	1.4	5.8	
第60図	6	火打石	玉髄	(5) 36GG-99	1	2.1	1.6	1.5	3.9	
第60図	7	火打石	玉髄	(5) 056	1	1.9	1.1	0.9	1.4	
第60図	8	火打石	玉髄	(5) 南3T	1e	1.7	1.6	1.2	4.2	
第60図	9	火打石	玉髄	(5) 北8-3T	1b	2.0	1.5	1.2	4.4	
第60図	10	火打石	玉髄	(4) 005	5b	1.6	0.8	0.6	0.6	
第60図	11	火打石	玉髄	(4) 005	5c	1.3	1.0	0.5	0.4	
第60図	1	ルツボ	土製	(5) 027	1	4.2	(4.1)	-	18.0	
第60図	2	ルツボ	土製	(5) 027	1	(4.3)	3.4	-	22.6	
第60図	3	ルツボ	土製	(5) 027	1	-	(4.2)	-	7.1	

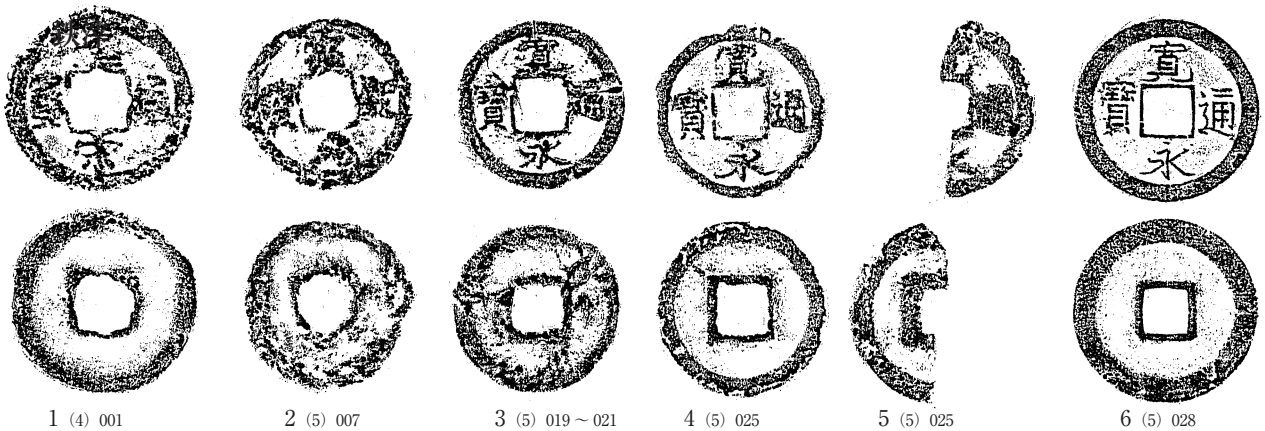
鉄滓



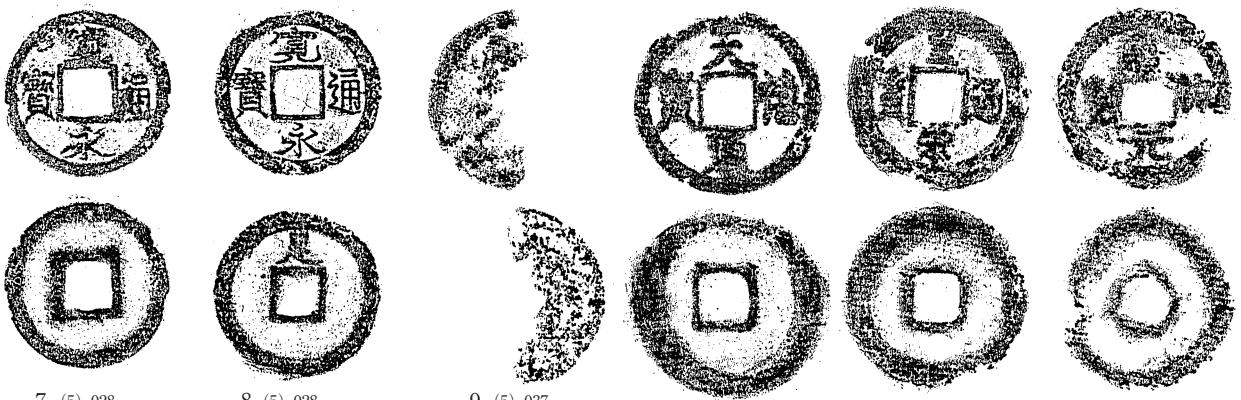
金属製品



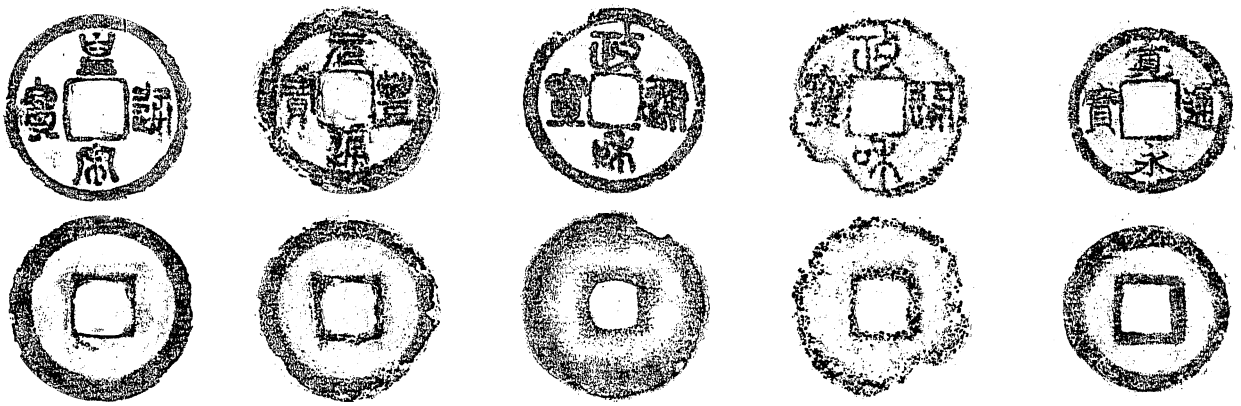
第61図　鉄滓・金属製品



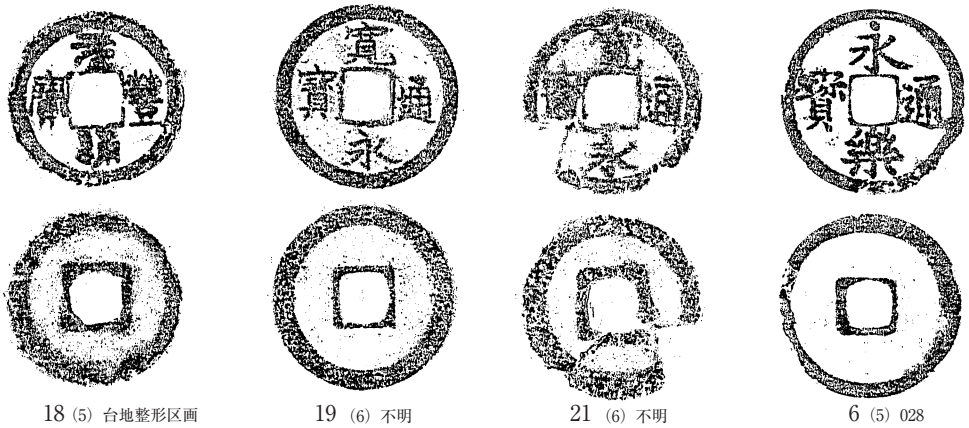
1 (4) 001　2 (5) 007 第3区画　3 (5) 019～021 第2区画　4 (5) 025 第2区画　5 (5) 025 第2区画　6 (5) 028 第2区画



7 (5) 028 第2区画　8 (5) 028 第2区画　9 (5) 037 第2区画　10 (5) 046 第2区画　11 (5) 047 第2区画　12 (5) 055 第2区画



13 (5) 057 区画外　14 (5) 36FF-44 第2区画　15 (5) 36GG-35 区画外　16 (5) 36GG-99 第3区画　17 (5) 表採



18 (5) 台地整形区画　19 (6) 不明　21 (6) 不明　6 (5) 028 第2区画

0 (1:1) 2cm

第62図　銭貨

第８表　金属製品

挿図番号		種類	材質	遺構番号	遺物番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
第61図	1	鉄滓	鉄製	(3) 001	1	6.0	-	3.0	64.2	SKorSD
第61図	2	鉄滓	鉄製	(3) 001	1	5.0	-	2.1	30.8	SKorSD
第61図	3	鉄滓	鉄製	(4) 016	1	2.3	-	1.0	3.7	
第61図	4	鉄滓	鉄製	(5) 010	4	11.5	-	2.4	203.9	椀型滓
第61図	5	鉄滓	鉄製	(5) 039	2	6.4	-	1.6	44.3	
第61図	6	鉄滓	鉄製	(5) 074	1	4.6	-	1.1	36.5	椀型滓
第61図	7	鉄滓	鉄製	(5) 060	1	6.5	-	1.6	58.1	椀型滓
第61図	8	鉄滓	鉄製	(5) 006	1	7.6	-	1.8	76.4	椀型滓
第61図	9	鉄滓	鉄製	(5) 006	1	6.8	-	2.3	95.8	椀型滓
第61図	10	鉄滓	鉄製	(5) 006	1	9.4	-	1.9	122.8	椀型滓
第61図	11	鉄滓	鉄製	(5) 006	1	7.3	-	1.6	56.0	
第61図	12	鉄滓	鉄製	(5) 006	2	11.9	-	2.3	184.9	椀型滓
第61図	13	鉄滓	鉄製	(5) 006	2	10.1	-	1.6	111.2	椀型滓
第61図	14	鉄滓	鉄製	(3) 37FF	1	4.6	-	1.4	25.7	椀型滓
第61図	15	鉄滓	鉄製	(4) 37FF-27	1	3.7	-	1.8	12.3	椀型滓
第61図	16	鉄滓	鉄製	(4) 37FF-69	1	3.6	-	2.3	27.3	椀型滓
第61図	17	鉄滓	鉄製	(6) 不明	3	5.0	-	2.3	74.4	椀型滓
第61図	1	金具	銅製	(5) 055	1	8.0	3.5	1.0	5.6	
第61図	2	椀	銅製	(5) 056	1	(9.2)	(3.9)	-	17.4	
第61図	3	鈴	銅製	(4) 005	3	2.8	1.7	0.1	3.3	
第61図	4	飾り金具	銅製	(4) 005	3	4.3	(2.1)	(2.1)	5.1	
第61図	5	釘	鉄製	(4) 005	4	3.2	0.4	0.4	0.9	
第61図	6	釘	鉄製	(8) SD005	2	2.6	-	-	2.3	
第61図	7	釘	鉄製	(5) 36FF	1	3.1	0.5	0.5	2.4	鉄鏃か
第61図	8	釘	鉄製	(5) 051	1	9.4	0.5	0.5	7.6	鉄鏃か
第61図	9	釘	鉄製	(4) 36EE-48	3	3.2	0.4	0.4	2.2	鉄鏃か
第61図	10	釘	鉄製	(4) 005	3	2.5	0.3	0.3	0.3	
第61図	11	釘	鉄製	(5) 016	1	4.0	0.4	0.5	8.4	
第61図	12	釘	鉄製	(4) 005	4	1.6	0.3	0.3	0.2	
第61図	13	飾り金具	銅製	(4) 005	3	8.5	1.1	1.1	3.7	
第61図	14	刀子	鉄製	(5) 016	1	4.6	0.9	0.3	3.5	茎
第61図	15	刀子	鉄製	(5) 016	1	3.7	0.9	0.3	3.7	茎
第61図	16	板片	鉄製	(5) 027	1	-	-	(0.2)	4.5	
第61図	17	板状金具	鉄製	(5) 065	1	2.0	-	-	1.3	
第61図	18	板片	鉄製	(5) 027	1	(5.6)	5.1	3.0	25.4	
第61図	19	板状金具	鉄製	(5) 065	1	6.4	3.1	2.5	10.6	

第９表　銭貨計測表

挿図番号		出土地点	遺物No.	種類	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	重量(g)	時代	初鋳年
第62図	1	(4) 001	1	皇宋通寶	25.1	19.7	9.5	7.7	1.3	2.7	北宋	1038
第62図	2	(5) 007	2	紹聖元寶	22.9	19.8	8.8	7.4	0.8	1.7	北宋	1094
第62図	3	(5) 019 ～ 021	1	寛永通寶	22.4	17.5	8.8	6.8	1.1	1.7	江戸	1636
第62図	4	(5) 025	1	寛永通寶	23.1	18.9	7.6	6.7	1.1	2.2	江戸	1636
第62図	5	(5) 025	1	寛永通寶	-	-	-	-	1.4	1.4	江戸	1636
第62図	6	(5) 028	1	寛永通寶	24.6	19.7	7.7	6.1	1.2	2.9	江戸	1636
第62図	7	(5) 028	1	寛永通寶	22.1	17.6	8.2	6.5	1.0	2.0	江戸	1636
第62図	8	(5) 028	1	寛永通寶	21.9	17.8	7.8	5.9	1.2	2.0	江戸	1636
第62図	9	(5) 037	1	(不明)	-	-	-	-	1.1	0.8	-	-
第62図	10	(5) 046	1	※天喜通寶	25.1	20.3	7.8	6.4	1.1	2.3	北宋	1017
第62図	11	(5) 047	1	皇宋通寶	24.3	17.2	7.7	6.2	0.9	2.0	北宋	1038
第62図	12	(5) 055	3	嘉祐元寶	23.8	17.7	7.8	6.5	1.2	1.8	北宋	1056
第62図	13	(5) 057	1	皇宋通寶	24.8	21.0	8.7	7.2	1.2	2.4	北宋	1038
第62図	14	(5) 36FF-44	1	元豊通寶	24.7	19.5	8.3	6.9	1.1	2.3	北宋	1078
第62図	15	(5) 36GG-35	1	政和通寶	24.7	20.8	7.8	6.2	1.1	3.2	北宋	1111
第62図	16	(5) 36GG-99	1	政和通寶	-	-	7.5	6.9	1.1	1.4	北宋	1111
第62図	17	(5) 表採		寛永通寶	22.2	17.3	8.1	6.7	1.1	1.9	江戸	1636
第62図	18	(5) 台地整形区画	1	元豊通寶	23.2	17.5	8.1	6.9	1.3	2.6	北宋	1078
第62図	19	(6) 不明	1	寛永通寶	24.7	20.0	7.7	6.7	1.1	2.7	江戸	1636
第62図	20	(6) 不明	1	寛永通寶	24.9	19.8	8.1	6.8	1.0	2.2	江戸	1636
第62図	21	(6) 不明	2	永楽通寶	24.6	21.3	7.2	5.9	1.3	2.9	明	1408

※ネ辺に喜　G：縁外径　N：縁内径　g：郭外径　n：郭内径　T：縁厚

第３章　まとめ

第１節　縄文時代

須賀井遺跡からは前期中葉の黒浜式の竪穴住居跡１軒、ピット群及びピット２か所、陥穴７基が検出されている。遺構の密度は低く、住居はピット群を含めて黒浜式のものが３軒であり、短期的に営まれた遺跡であると考えられる。こうした様相は周辺の遺跡においてもみられ、原山遺跡と大割遺跡で検出された住居は同様に黒浜式期のみである。遺構が利用されたのは短期間であるが、いずれの遺跡も遺構外から出土する土器は早期から後・晩期におよんでおり、これは地域的な特徴であるといえる。遺跡の北部には田畑遺跡や大松遺跡、富士見遺跡、駒形遺跡といった前期から中期までの中心的な集落が広がっている。須賀井遺跡はこうした集落の周縁部で一時的に営まれた小集落にあたると考えられる。

出土した黒浜式土器は、ほとんどが地文に縄文のみを有するものであり、他の文様を施されたものは少数である。地文の縄文は単節縄文が主体であるが、前（々）段多条・附加条・撚糸文などもみられる。縄文のほかにはコンパス文、貝殻腹縁文、竹管文、大型菱形文、葉脈文など少数ながらバラエティに富んだ施文がみられる。黒浜式の時期段階については駒形遺跡が詳しい。駒形Ⅱｄの分類と比較すると、本遺跡の黒浜式土器に関山式の遺制がみられる「より古い部分」はない。そしてコンパス文・菱形文・葉脈文を有するものがみられることから「中頃」から「新しい部分」にあたる土器が主体であるといえる。ただし全体の出土量が少なく、器形がうかがえるものがほとんどないため、分析ではなく比較に留まる。本地域の調査が進行するにつれて、中心的集落の周縁の「短期的小集落」における様相が明らかになるだろう。

第２節　中世から近世初頭

１　出入口に遮断壁を設ける地下式坑について

第2区画の地下式坑（4）005・(5）064の出入口は南東側長辺のほぼ中央に位置し、出入口の主室からの高さはほぼ50㎝で、主室との段差から20㎝ほどのところに、幅30㎝、長さ推定1.1ｍ、深さ10㎝の浅い溝が出入口方向と直交するように掘られている。この溝の覆土は出入口全体の覆土とは別に区分けられる。主室に近い15層は締まりが弱く、廃絶時には溝状になっていたようであるが、主室から遠い16層はロームブロックを含む暗黄褐色土で、硬く絞まっていた。そのような状況から、この溝には（木製か）遮断壁が設置され、それを安定させるものとして溝が掘られ、出入口から直接主室内部がみえない（あるいは光が届かない。温度が上がらない）ようになっていたことが想定される。これは、内部に保管している物品の管理上の手段であったように考えられる。

このような溝を出入口に設ける地下式坑は、この遺構以外に（8）SK002、(8）SK026、(8）SK034、(5）014、(6）SK001など合計６基確認できた。これらに共通することは主室覆土中にローム天井部の崩落土が確認できることで、ローム掘り抜きの天井が存在していたのである。この主室内に納められたもの自体の遺存体は検出できなかったが、(5）014にみられる主室床面に掘られた貯蔵穴状の小型土坑を念頭に置けば、一定の温度・湿度・遮光が必要な食物・植物の貯蔵施設として使われていた可能性が高いのではなかろうか。なお、遺構内からの出土遺物が少なく、これらの構造の地下式坑に一定の時期があてはまるのかどうかは分からなかった。いまだ、地下式坑の機能について諸説ある状況だが、当地域の地下式坑の一つの利用形態として認識しておく必要があろう。また、地下式坑の機能は遺跡ごとに考え、それの使用目的を限定す

る必要もないと思われる。

2　遺構群の時期とその性格

出土遺物を概観すると、器面に装飾を施した瓶子に代表される瀬戸中期様式を主体として後期様式のものや常滑窯の片口鉢、大甕が多い反面、在地産とされる土器の内耳鍋や擂鉢が一点もみられないことがまず理解できる。詳細にみれば、第４表のように瀬戸製品は皿類・瓶類は中期、碗類は後期が主体で、常滑製品は大甕が５、６型式、片口鉢が８から11型式となる。大甕については、その耐久性から使用期間が長くなることが明らかで、使用期間の比較的短いと考えられる碗皿鉢などの小型製品からみると14世紀から15世紀前半の年代が与えられる。一方、在地産の内耳鍋や土器擂鉢の生産は、瀬戸製品でいう古瀬戸後Ⅳ新期の15世紀後半以降急速に生産開始・拡散し、大量に市中に出回りそのモデルの変化も短期間のうちに著しい。この土器製品は陶器と異なり耐久性が著しく劣り、使用期間もかなり短かったことが容易に想像できる。これらのことから、当遺跡の時期は14世紀から15世紀前半と考えてよかろう。

ところで、(5) 065土坑から出土した古瀬戸中Ⅱ期と考えられる広口壺の蓋（第53図18）は、古瀬戸以外では、香取神宮の青磁牡丹唐草文有蓋壺や旧印西町出土の土師器の底部を転用して蓋とした渥美の壺、野田市吉春遺跡の古瀬戸・常滑（身・蓋）、市原市西広出土の常滑・擂鉢（蓋）などがあるが、古瀬戸の蓋としては、関東全般を見渡しても、覚園寺開山塔出土の黄釉草葉文壺に代表されるように珍しいものである。また、古瀬戸中Ⅲ期と考えられる口広有耳壺（第54図29）や古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期と考えられる瓶子（第54図30・31）も珍しいもので、骨壷との関連をうかがわせる。後述するように火葬施設（墓）や他の骨壺を想定させる古瀬戸瓶類や壺類の一定の出土から、この範囲が墓地として機能していたことを想定させるが、これらの貴重な遺物が須賀井遺跡から出土したことについては、単に墓域という認識に留まらず、関連すると考えられる周辺寺院などとの関係の解明が今後の課題である[1)]。

次にこの遺跡の性格であるが、出土遺物の中で特徴的なのが、中世の内耳鍋や土器擂鉢が１点も出土していないこと、さらにカワラケも少量であることである。一般には中世屋敷遺構内にあっては、ハレの場に用いられたり、地鎮具として利用されたり、油煙の付着から灯明皿として使用された。当遺跡でも各区画内に掘立柱建物跡を確認しているが、第２区画の近世掘立柱建物跡（5）028以外は、規模が小さく柱穴の並びが安定しておらず、長期間の建物を想定することはとうてい困難であり、一時的な作業小屋のようなものと考えるのが妥当と思われる。この際に考える必要があるのが、いずれの遺構も同時期に存在していたかの問題である。構造的にみた場合、地下式坑（5）087と重なる台地整形区画造成である。この地下式坑には、ロームをくりぬいた天井があったことが分かっている。天井を残したまま台地整形造成を行えば、天井は保持不可能である。したがって、台地整形造成より地下式坑が早く造られ機能していたことが分かる。他の地下式坑も同様のものがあり、地下式坑が点在して使われていたころには、まだ台地整形造成は受けていなかった。そのころは周辺が畑地として開墾・耕作が行われていた。しかしこれらいくつかの地下式坑が耕作物の保管機能を失うと同時に台地が整形され、平坦になった土地に数々の土坑や、井戸が掘られて何らかの作業空間として使われた。なかにはこの時期に造られた地下式坑があったかもしれない。ただ、具体的にどのような作業をしていたのかまでは分からない。また、点在する火葬施設（墓）や骨壺を想定させる古瀬戸瓶類や壺類の一定の出土は、この範囲が墓地として機能していたことも想定させる。

その後15世紀後半以降の痕跡は途絶えるが、第２区画台地整形の北辺で寛永通寶や近世遺物が集中して

出土している掘立柱建物跡を中心とした遺構群に、近世屋敷形成の萌芽がみられるようになる。具体的な遺構は掘立柱建物跡（5）028、井戸（5）016、土坑（5）027・025、溝（6）SD002などである。掘立柱建物は柱の抜き取り痕が明瞭で、堀込みがしっかりしていることから、常住できる屋敷と判断した。今回の調査範囲全域でみて、このような近世屋敷跡が確認できたのは当地点だけであり、まだここに集落を形成する段階になかったようだ。第63図は、柏市富士見遺跡報告書掲載の中世環境復元図中に、今回の須賀井遺跡と近接する中世後期の屋敷が検出された屋敷内遺跡を組み込んだものである。中世から近世初頭の状況は、現在の江戸川左岸とその支流沿岸、現在の利根川とその支流沿岸、および手賀沼とその支流沿岸を中心に新田開発がすすみ、同時に集落の展開がなされていたことがうかがえる。その中にあって、須賀井遺跡はその３地域とは異なり、手賀沼から奥まった地金堀という小河川の右岸に位置し、背後には水源をもたない広大な台地をひかえる土地であり、大きな開発からは位置的に取り残されていたことが考えられる。のちにこの広大な台地は、江戸幕府直轄の高田台牧として野馬の放牧場になり、近世を通じて環境の大きな変化が無く、台地が開発されるのは近世以降になる。

注１）　古瀬戸の一部については、愛知学院大学の藤澤良祐氏、（公財）千葉県教育振興財団の井上哲朗氏、小高春雄氏、櫻井公子氏に御教示いただいた。

参考文献

鳴田浩司ほか　1998 『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書１-山武郡芝山町古宿・上谷遺跡-』 財団法人千葉県文化財センター調査報告第320集

鳴田浩司ほか　1999 『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書２-山武郡芝山町上宿遺跡-』 財団法人千葉県文化財センター

鳴田浩司ほか　2000 『千葉県文化財センター研究紀要20』 財団法人千葉県文化財センター

島立桂、落合章雄　2012 『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書４-柏市大割遺跡・須賀井遺跡-旧石器時代編』公益財団法人千葉県教育振興財団調査報告第692集

小高春雄ほか　2015 『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書７-柏市富士見遺跡-縄文時代以降編２』 公益財団法人千葉県教育振興財団調査報告第736集

藤澤良祐　1995 「瀬戸古窯址群Ⅲ － 古瀬戸前期様式の編年 － 」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要　第３輯』財団法人瀬戸市文化財センター

藤澤良祐　1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁　第８号』 東洋陶磁学会

藤澤良祐　1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ － 古瀬戸後期様式の編年 － 」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要　10』 瀬戸市歴史民俗資料館

笹生衛ほか　1998 『千葉県の歴史　資料編　中世Ⅰ　考古資料』 千葉県

野村幸希ほか　1975 「関東」『新版　仏教考古学講座　第７巻』 有山閣

山田友治　1977 「房総における中世のやきものについて（３）」『史館　第９号』 史館同人

矢部良明ほか　1999 『香取神宮史料調査報告書-建造物・美術工芸品・考古資料編-』 佐原市教育委員会

〈発掘調査された遺跡〉

1富士見遺跡　2駒形遺跡　3小山台遺跡　4寺前遺跡　5花戸原遺跡
6中馬場遺跡　7日本橋学園遺跡　8上根郷遺跡　9三輪野山第Ⅲ遺跡
10西平井二階畑遺跡　11加地区遺跡群　12市野谷入台遺跡

〈城館〉

①大室城　②松ヶ崎城　③布施城　④法華坊館　⑤根戸城　⑥高田殿内
⑦戸張城　⑧戸張要害　⑨増尾城　⑩猪山城　⑪深井城　⑫花輪城
⑬思井堀ノ内館　⑭前ヶ崎城　⑮名都借城　⑰中金杉城

※囲文字は「本土寺過去帳」・「下総国之図」など中世～近世初めの資料にみられる地名であるが、現在の表記に直している（例：太田→大青田）

第63図　須賀井遺跡中世環境復元図（約1：40,000）

付章　　須賀井遺跡から得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

須賀井遺跡は、千葉県の北部・北総台地の手賀沼の北西部に位置する主に中世の遺跡で、この遺跡の発掘調査により土坑から大量のイシガイ科淡水二枚貝が出土した。このようなイシガイ科の集中した出土は、北総台地の中世期の印旛村・松虫陣屋跡からも報告されている（西野, 2010）。

今回、須賀井遺跡のイシガイ類の多い土坑や他地点の土坑の覆土から土壌サンプルの水洗選別で抽出された貝類遺体を検討する機会を与えて頂いた。ここに、その報告を行う。

第１節　検討資料と処理方法

今回の資料は、平成12年度の第４次調査の地下式坑（4）005の覆土から得られた少量のものと、平成14年度の第６次調査の土坑(6) SK032からの大量のものの２つである。後者では最大約55cmの土坑内貝層（本報告書：第48図）が９つに分割され、両者とも貝層の全てが採取・水洗選別（9.52・4.0・2.0mmメッシュ）された。ただ、(6) SK032の９サンプル（cut）が上から順に採取されたものとの確証はなかった。これらから抽出・一次分類されていた貝類遺体を受取り、今回の検討資料とした。

第６次調査の（6）SK032のサンプルは、イシガイ科淡水二枚貝を除き、各メッシュサイズから得られた種が一括してまとめられており、９サンプルのどれから抽出されたものかは不明であった。

９サンプルのイシガイ科の種は9.52mmメッシュに残ったものが、合せ貝、横長／左･右、横長以外／左･右、蝶番のあるカケラ、カケラに分類されていた。これらについては、各サンプルの区分ごとに、まず全体の重量を計測し、次に時間の都合上①・⑤・⑨の３サンプルに関して左殻のみを対象に分類・重量計測・個体数カウントを行った。ただ、イシガイ科以外の貝類の破片が含まれている可能性もあり、残りの６サンプルの蝶番のあるカケラとカケラをチェックし、イシガイ科以外の破片も抽出・同定した。

第２節　結果及び考察

１　出土貝類

今回の須賀井遺跡から確認された貝類遺体の分類学的位置と生息場所を第10表に示した。海産腹足類１科１種、淡水産腹足類３科３種、陸産腹足類４科５種、海産二枚貝類２科２種、淡水産二枚貝類１科２種の合計11科13種が確認された（第64図１）。これらのうち、食用等の人間の意図的な利用が想定される種はオオタニシ・アカニシ・イシガイ・ヨコハマシジラガイ（以下、ヨコハマシジラ）・バカガイ？・ハマグリの６種と考えられる。

以下に、主だった種に関して簡単にコメントしておきたい。

イシガイ：現在でも千葉県内の農業用水路等で確認できる長楕円形の厚質な殻を有する二枚貝。下記のヨコハマシジラの同定とも関連して、琵琶湖固有亜種のタテボシで有るかどうかの検討を行った。タテボシでは右殻の擬主歯が三角状となり、イシガイでは同部が薄い板状であることで識別され（Kondo, 1997）、タテボシが移入されたとされてきた山梨県の富士五湖でも、この形質によって移入が確認できた（黒住,

2007)。須賀井遺跡のものでは、右殻の擬主歯は薄い板状で、三角状の個体は認められず、イシガイに同定した（第64図２）。

ヨコハマシジラ：イシガイより殻長が短く、楕円形をしており、幼貝の時には殻頂部付近にシワ状の彫刻が目立つ（イシガイでも幼貝ではシワ状の彫刻がある）。殻はかなり厚質。第64図３に本遺跡の個体と、佐倉市で得られたヨコハマシジラを示したが、殻の外形や厚みがかなり異なっていた。本遺跡の群の外形は、むしろ琵琶湖固有の同属種、オトコタテボシに類似した印象を受ける（第64図４）。今回、本遺跡の種をヨコハマシジラに同定した根拠は、１）殻頂部が前縁に寄るヨコハマシジラは関東地方各地で確認されていること、２）オトコタテボシほど擬主歯の発達が良くないこと、３）詳細な分類が進んでいる群であり（例えば近藤, 2010)、琵琶湖固有群が他地域に存在していて数百年で滅んだ例がないこと、４）同時に大量に得られたイシガイ類が琵琶湖固有亜種のタテボシではないと考えたこと、５）類似した殻形態をもち、西日本に分布する別属のオバエボシは鉸歯形態がヨコハマシジラとは異なり、本遺跡の個体を検討した結果、オバエボシは含まれていなかったこと等である。今後、殻の元素分析等から採集地の推定が行えるかもしれない。なお､ヨコハマシジラと同所的に生息するマツカサガイに確実に同定できる成貝は認められなかったので（第64図４）、幼貝の一部にはマツカサガイが含まれている可能性は残るが、今回はヨコハマシジラとして報告する。

バカガイ？：殻頂部を含まない大形の破片が１つのサンプルから５片、抽出された。殻は極めて薄く、ハマグリが溶解したとは考えられず、殻の厚さと推定されるサイズ･端部の角度･周辺海域での生息種等から、バカガイの可能性が高いと考えられた。

２　イシガイ科の出土数の推定

(6) SK032から大量に出土したイシガイ科の個体数を推定するために、上述したように、①・⑤・⑨の３サンプルの左殻を対象にした結果を第11表に示した。貝殻重量を測定後、種の同定・左右殻の確認・それぞれの最少個体数（MNI）と重量を求めた。これにより、各区分に含まれる種の左殻重量比と、１個体当りの重量が産出できる。この重量比と１個体当りの重量から、前記の３サンプル以外のイシガイとヨコハマシジラの左殻最少個体数の推定を行い、その他の貝類の出土量をあわせて第12表に示した。

３　出土貝類の量的組成

イシガイ科の出土数推定が行えたので、本遺跡から出土した貝類遺体の詳細が第13表である。イシガイが約8500個体と最も多く、次にヨコハマシジラが約1300個体で、イシガイが両者の87％を占めていた。淡水貝類では、巻貝のオオタニシも少数発掘されている。

海産貝類も僅かに出土し、ハマグリが別地点の地下式坑覆土を含め、両地点から得られている。推定値を含むハマグリの殻長は、(4) 005で55-60mm、(6) SK032で55-70mmとやや大形のものであった。バカガイ？とアカニシは1個体のみの出土で、前者も通常の大形個体のサイズと思われ、アカニシも殻高11cm程度と大き目であり、死殻ではないようであった。

淡水二枚貝類の多かった松虫陣屋跡では、ハマグリ・バカガイは確認されておらず、多くの地点・遺構からアカニシの劣化した軸唇等が得られており、食用以外の目的でアカニシが利用された可能性も指摘されている（西野, 2010)。本遺跡の個体では、背面が割られており、他生物の穿孔や付着は認められず、食用の可能性が高いと判断しているが、１個体のみの出土で本種の小破片も確認されず、食用後に何らかの意図をもって (6) SK032土坑に置かれた可能性は否定できない。また､海産貝類の出土量は極めて少なく、

全体として単なる日常的な食料ではなく、特別な利用があったのかもしれない。

陸産貝類は５種確認されたものの、ヒダリマキマイマイには殻皮が残存しており、現在のものの可能性も高い。多く抽出されたオカチョウジガイ類には殻皮がなく、中世期のものと考えられる。その生息場所は開けた場所や林縁であり（第10表）、土坑周辺は草地のような環境であったと推定された。千葉県内の中世遺跡で、微小陸産貝類の報告された例としては、大網白里市の小西城跡がある（パリノ・サーヴェイ, 2014）。この報告では、陸産貝類の種数・抽出数は少なく、その理由として“土坑に廃棄した食用貝類を埋めた”可能性を想定している。ウラジロベッコウ（誤同定の可能性が極めて高い）が優占し、オカチョウジガイ類も多い小西城跡の陸産貝類組成は、埋めることによる影響よりも土坑周辺の環境（開けた状況や林からの距離）に起因するものだと考えられる（黒住, 印刷中）。このように、中世期の遺跡では、土坑周辺はかなり開けていた可能性も高い。

淡水産微小貝としてマメタニシの成貝とモノアラガイの幼貝が確認された。これらが土坑から得られた過程として、イシガイ科二枚貝の死殻の殻内にいたものが廃棄されたと考えられる。マメタニシは、北総地域の先史時代遺跡からも確認されている（黒住, 2004）。

４　イシガイ科のサイズと淡水貝類利用

どの程度のサイズの個体を採集していたかを示すために、前述の①・⑤・⑨の３サンプルのイシガイ科２種の出土個体の殻長を計測した。ただ、両種とも後端部には剥離・欠損が認められ（第64図２・４）、残存している完形個体はかなり少ない。サイズにより破損等の状況が異なる可能性も想定され、さらにはヨコハマシジラでは完形個体が少なく、完形個体の計測だけではなく、破損部位を推定復元し、推定値も求めた。推定値は、端部が残存し、全体の2/3以上が残存するものを高い推定と考えて「高推定」、そうではない破損個体は低い推定なので「低推定」と区別した。ヨコハマシジラでは確認個体の全てを、イシガイは第11表で抽出した左殻全てを一括し分割して100個体程度を計測対象とした。

その結果が、第14表である。完形個体の値と推定復元値の関係では、イシガイでは完形で幼貝が多い、低推定で値が僅かに小さくなるといった傾向や、ヨコハマシジラでは高推定が多くを占め、特に大形個体で破損が目立つ等の状況が理解された。以下では、これらを一括して記述を進める。

イシガイでは、16mmから41mmまでの本種としては比較的小形のものからなっており、25-37mmの個体が多く、少数ながら20mm未満の個体も認められている。ヨコハマシジラでは、12mmから43mmまでとイシガイよりも幅広いサイズのものが見られるが、中心となっているのは24-35mmのイシガイと同程度のサイズのものであった。

３つのサンプルのサイズ組成は類似しているものの、必ずしも同一とは考えにくい状況であった。また、第12表に、９つのサンプルのイシガイとヨコハマシジラの割合を示したが、イシガイの割合が81％から91％とやはり類似するものの有る程度の相違が認められている。これらのことから、(6) SK032土坑に集中して廃棄された淡水二枚貝は、ごく短期間にのみ採集されたものではなく、有る程度（数か月程度？）の時間幅をもっている可能性が十分想定される。

北総台地におけるイシガイ科貝類の極めて優占する遺体群は、上述のように中世期の印西市（旧印旛村）松虫陣屋跡から報告されており（西野, 2010）、やはりイシガイが主で、ヨコハマシジラが従となっている。須賀井遺跡と比較して、松虫陣屋跡の両種のサイズはやや大きい傾向が認められた。また松虫陣屋跡のイシガイで認められた同時代の２地点でのサイズの相違は、採集地や季節に基づくものと想定される。

両遺跡とも、この厚質イシガイ類のみが選択されており、カラスガイやドブガイのような薄質イシガイ科は認められていない。今回は、カケラとされた破片まで詳細に検討し、海産二枚貝を抽出することはできたものの、薄質イシガイ科は確認できなかった。カラスガイ等は、イシガイ等と同じ環境にも生息しており、選択的に排除されたものと想定される。

一方、淡水産二枚貝で良く利用されるシジミ類（マシジミ）は、破片も含め確認できず、松虫陣屋跡でも未出土である（西野, 2010）。この松虫陣屋跡の報告も加味して、マシジミはかなり新しい外来種ではないかと考えており（黒住, 2014）、須賀井遺跡のデータは、ここの考えを補強するものと言えよう。今回未出土でありながら、マシジミを中世期には定着していなかったと考え、ドブガイ類等は選択的に採集しなかったとした両者に対する考え方の違いは、ドブガイ類・カラスガイ類が先史時代遺跡から出土していることによる。

5　厚質イシガイ類利用の理由

本遺跡や松虫陣屋跡によって、中世期の北総地域における厚質イシガイ類の大量廃棄の存在が明らかになった。松虫陣屋跡の報告では、イシガイ類とタニシ類は「食材としての利用は中世以降に拡大したものとみられ」、「中・近世遺跡から」出土する例が多いと思われると記されている（西野, 2010）。第64図２・４にイシガイとヨコハマシジラの出土個体を示したが、後部が破損している個体も多いものの、加工痕や定型的な破損形態は認められないと判断した。つまり、これらのことから、貝製品素材として厚質イシガイ類が集められた可能性は否定できるように思われる。一方、日本の中世期における真珠利用は知られていないものの、真珠を目的に採集された可能性も現時点では否定できないと考えている。印旛沼周辺の先史時代遺跡では、殻付着のものであるが真珠が出土しており、真珠採集の意図があった可能性も想定している（黒住, 2004）。今回の須賀井遺跡では2mm未満の土壌サンプルの検討を行えなかったが、1mmメッシュ等で真珠が抽出されるかもしれない。ただ、真珠採集が目的の場合、極めて小さなものでも回収されると考えられ、遺跡に残らない可能性も高い。

真珠採集は否定できないものの、やはり厚質イシガイ類は食用として利用された可能性が高いと考えられた。そして、なぜ中世期の一地域で厚質イシガイ類の集中的な利用が生じたのか？ということは興味深い事例であると思われる。一つの考え方として、茹でて身（＝軟体／肉）を取り出し、干す等して（未だ佃煮は広まっていなかったと考えている）戦国期の保存食として利用されたということもあるのではないだろうか。この考えでは、ア）本地域では先史時代においても淡水産貝類が優占しないこと、イ）体内に泥を多く取り込んでいるドブガイ類やカワニナ等の小形巻貝類が出土していないこと、ウ）比較的短期間に一挙に処理・廃棄されたと考えられること等も傍証になると思われる。今後この想定を検証する方法として、１）北総地域における当時の海産貝類の出土状況を詳細に検討することによって、海産貝類が内陸部には流通しにくかったことを示すこと、２）同様に、魚類を中心とした他の脊椎動物遺体の出土状況（遺跡内および周辺地域）を検討し、通常食（および想定される保存食）の在り方が海岸地域と異なっているかどうかを検討すること、３）厚質イシガイ類の集中的な廃棄の正確な歴年代を示すことによって比較的安定した近世中期まで継続するかどうかを検証すること等が挙げられよう。

いずれにしても、淡水二枚貝類の優占する遺体群を詳細に検討し、比較していくことでしか、この興味深い事象に迫ることはできないと考えられる。

第３節　まとめ

北総台地の柏市・須賀井遺跡から出土した中世期の貝類遺体を報告した。11科13種が確認され、一つの土坑から極めて大量のイシガイと多くのヨコハマシジラの厚質イシガイ類が出土した。これらは真珠のために採集された可能性も否定はできないものの、食用と考えられた。ただ、通常の食用ではないのではないかと想定し、その検証の方向性を示した。

謝辞：本報告の一部には、科学研究費（15H05966　代表：奈良教育大学・金原正明教授）を用いた。

引用文献

Kondo, T. 1997. Taxonomic position and distribution of *Unio biwae*（Bivalvia: Unionidae）, Venus, 56（1）: 41-47.

近藤高貴. 2010. 日本産イシガイ目貝類図譜. 日本貝類学会特別出版物,（3）: v+1-69.

黒住耐二. 2004. 千葉県井野長割遺跡の盛土部貝塚から出土した微小貝類. In 小倉和重（編）, 井野長割遺跡（第５次調査）, pp. 5-8, pl. 37. 佐倉市教育委員会, 千葉.

黒住耐二. 2007. 貝類. pp. 61-71. In 富士北麓生態系調査会（編）, 富士北麓水域（富士五湖）における生態系多様性に関する調査報告書, 富士北麓生態系調査会, 山梨.

黒住耐二. 2014. 淡水二枚貝マシジミは近世期の外来種か－遺跡出土貝類からの証明. In（公財）高梨学術奨励基金（編）, 高梨学術研究基金年報（平成25年度）, pp. 67-73.（公財）高梨学術奨励基金, 東京.

黒住耐二. 印刷中. 微小貝類遺体. In 小林清隆ほか（編）, 東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡 , 千葉県教育振興財団調査報告書 ,（758）

西野雅人. 2010. 貝類. In 井上哲朗（編）, 印旛村松虫陣屋跡, 千葉県教育振興財団調査報告書,（636）: 123-124, pl. 40. 成田高速鉄道アクセス株式会社・（財）千葉県教育振興財団, 千葉.

パリノ・サーヴェイ. 2014. 小西城跡出土炭化種実・微小貝同定. In小高春雄ほか（編）, 大網白里市小西城跡, 千葉県教育振興財団調査報告書,（722）: 192-198, pls. 88-91.

＊＊＊＊＊＊＊

図の説明

第64図１．イシガイ科以外の各種

①オオタニシ　②マメタニシ　③アカニシ　④モノアラガイ　⑤オカチョウジガイ　⑥ホソオカチョウジガイ　⑦ハクサンベッコウ類似属　⑧ニッポンマイマイ

⑨ヒダリマキマイマイ　⑩バカガイ？　⑪ハマグリ

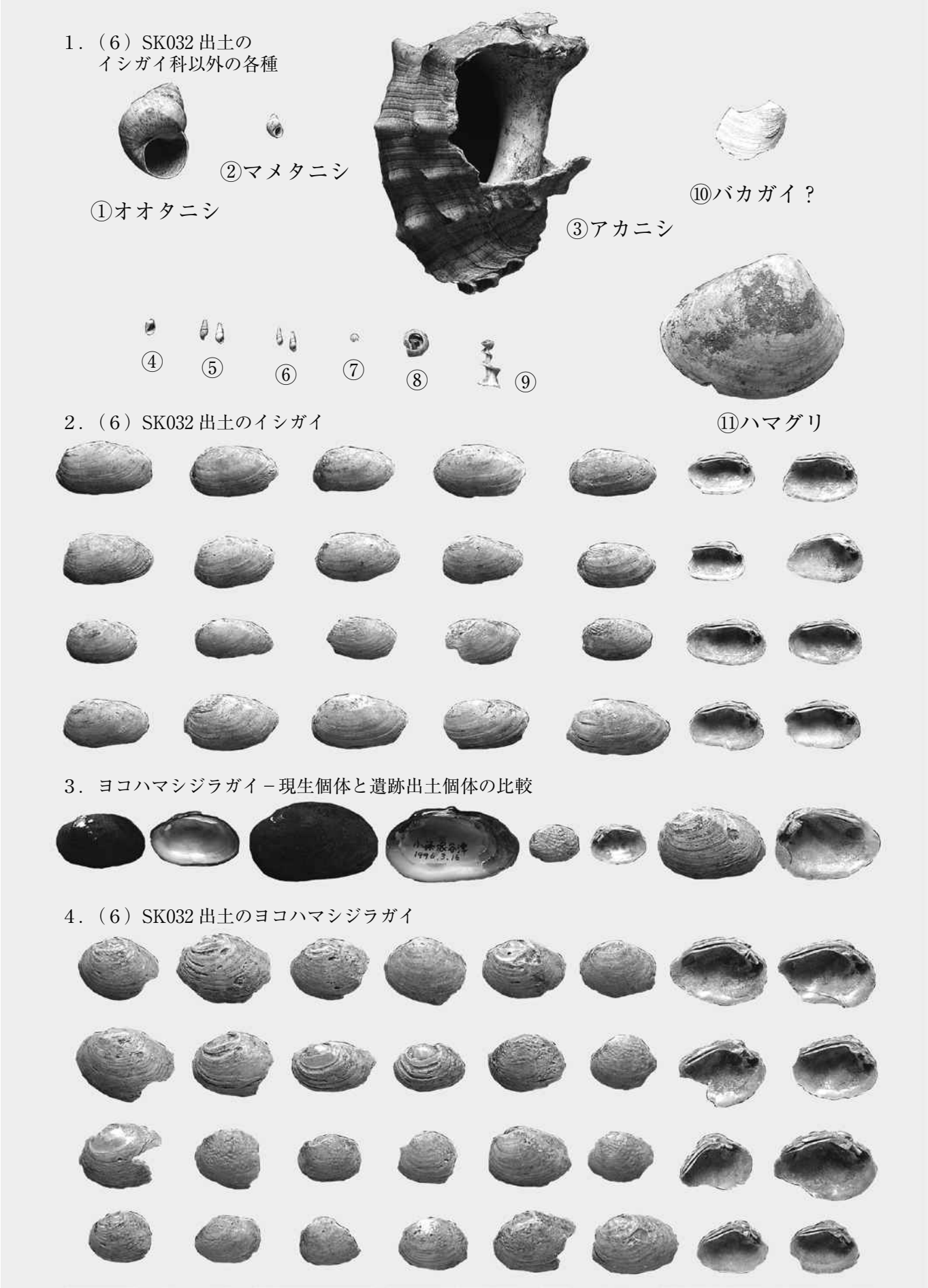
第64図２．（6）SK032出土のイシガイ

第64図３．ヨコハマシジラガイ － 現生個体と遺跡出土個体の比較

左：現生個体（千葉県佐倉市産：CBM-ZM 132910/132909）

右：遺跡出土個体

第64図４．（6）SK032出土のヨコハマシジラガイ



第64図　須賀井遺跡から出土した貝類遺体

第10表　須賀井遺跡から出土した貝類遺体の分類学的位置と生息場所

軟体動物門　Mollusca		ナンバンマイマイ科　Camaenidae	
腹足綱　Gastropoda		ニッポンマイマイ　Satsuma japonica	陸域/開放地
タニシ科　Viviparidae		オナジマイマイ科　Bradybaenidae	
オオタニシ* Cipangopaludina ussuriensis japonica	淡水域/主に湧水起源の水体/止水・緩やかな流水	ヒダリマキマイマイ Euhadra quaesita	陸域/林縁
エゾマメタニシ科　Bithynidae			
マメタニシ Parafossarulus manchouricus japonicus	淡水域/主に池沼/止水・緩やかな流水	二枚貝綱　Bivalvia	
アッキガイ科　Muricidae		イシガイ科　Unionidae	
アカニシ* Rapana venosa	海域/内湾/砂泥底/潮間帯－潮下帯	イシガイ* Unio douglasiae nipponensis	淡水域/主に細流・池沼/止水・緩やかな流水
モノアラガイ科 Lymnaeidae		ヨコハマシジラガイ* Inversiunio yokohamensis	淡水域/主に細流・池沼/止水・緩やかな流水
モノアラガイ Radix auricularia japonica	淡水域/主に池沼/止水・緩やかな流水	バカガイ科？　Mactridae?	
オカクチキレガイ科 Subulinidae		バカガイ？*　Mactra chinensis?	海域/内湾/泥底/潮間帯
オカチョウジガイ　Allopeas kyotoense	陸域/林縁	マルスダレガイ科　Veneridae	
ホソオカチョウジガイ Allopeas pyrgula	陸域/開放地	ハマグリ*　Meretrix lusoria	海域/内湾/泥底/潮間帯
ベッコウマイマイ科　Helicarionidae			
ハクサンベッコウ類似属 Nipponochlamys? sp.	陸域/開放地		
*：食用と考えた種.			

第11表　須賀井遺跡（6）SK032の分類されたサンプルの最少個体数（MNI）と重量の詳細

番号		横長/左			横長/右	横長以外/左			横長以外/右	蝶番のあるカケラ			カケラ			合せ貝
			重量%	1個体重量g			重量%	1個体重量g			重量%	1個体重量g		重量%	1個体重量g	
①	貝殻重量/g	998			1048	296			348	82			110			
	イシガイ/左/MNI	526				94				22			10			
	イシガイ/左/g	998	100.00	1.90		129	43.58	1.37		19	23.17	0.86	7	6.36	0.70	
	イシガイ/右/MNI					4										
	イシガイ/右/g					4										
	ヨコハマシジラガイ/左/MNI					66				6			3			
	ヨコハマシジラガイ/左/g		0.00			157	53.04	2.38		8	9.76	1.33	4	3.64	1.33	
	ｲｼｶﾞｲ/ﾖｺﾊﾏ/MNI									3						
	ｲｼｶﾞｲ/ﾖｺﾊﾏ/g									2						
	MNI対象淡水二枚貝重量/g	998				290				29			11			
	対象外淡水二枚貝重量/g	0				6				53			99			
⑤	貝殻重量/g	888			838	141			151	83			54			
	イシガイ/左	462				33				41			11			
	イシガイ/左/g	882	99.32	1.91		42	29.79	1.27		38	45.78	0.93	8	14.81	0.73	
	ヨコハマシジラガイ/左/MNI	3				46				3			2			
	ヨコハマシジラガイ/左/g	6	0.68	2.00		92	65.25	2.00		2	2.41	0.67	2	3.70	1.00	
	ヨコハマシジラガイ/右/MNI					4										
	ヨコハマシジラガイ/右/g					4										
	MNI対象淡水二枚貝重量/g	0				138				40			10			
	対象外淡水二枚貝重量/g					3				43			44			
	海産二枚貝												5f			
	海産二枚貝/g												2			
⑨	貝殻重量/g	1328			1268	255			226	228			53			50
	イシガイ/左	666				48				59			4			11
	イシガイ/左/g	1315	99.02	1.97		56	21.96	1.17		71	31.14	1.20	2	3.77	0.50	
	ヨコハマシジラガイ/左/MNI	6				83				22						
	ヨコハマシジラガイ/左/g	13	0.98	2.17		188	73.73	2.27		37	16.23	1.68		0.00		
	MNI対象淡水二枚貝重量/g	1328				251				108			1			
	対象外淡水二枚貝重量/g	0				4				120			52			
	海産二枚貝												1f			
	海産二枚貝/g												1			

第12表　須賀井遺跡（6）SK032の各サンプルから抽出された貝類遺体（9.52mmメッシュ）

番号	サンプル重量（g）							イシガイ/左殻		ヨコハマシジラガイ/左殻		バカガイ？	ハマグリ	オオタニシ	タニシ類
	横長/左殻	横長/右殻	横長以外/左殻	横長以外/右殻	蝶番のあるカケラ	カケラ	合せ貝	個体数	%	個体数	%				
①	998	1048	296	348	82	110		652*	89.7	75*	10.3				
②	1998	1848	554	704	151	161		1239	87.3	181	12.7			15g（6,3f）	
③	1728	1678	504	504	394	233		1178	86.4	186	13.6				
④	2258	2138	604	524	188	127		1394	87.6	198	12.4				±0g（1f）
⑤	888	838	141	151	83	54		547*	91.0	54*	9.0	2g（5f）			
⑥	1608	1698	824	724	170	125		1108	81.1	259	18.9				
⑦	1948	1708	604	614	386	167		1305	86.0	213	14.0				
⑧	598	568	94	110	72	15		358	91.1	35	8.9				
⑨	1328	1268	255	226	228	53	50	788*	87.7	111*	12.3		1g（1f）		

＊：実測値、他の個体数は第 11 表に基づいた推定値，ｆ：破片．

第13表　須賀井遺跡から抽出された貝類遺体の状態と最少個体数

	和　　名	(4) 005			(6) SK032			
		9.52mm	4.0mm	MNI	9.52mm	4.0mm	2.0mm	MNI
淡水産種	イシガイ				8569			8569
	ヨコハマシジラガイ				1312			1312
	オオタニシ				6,4f	1u		7
	マメタニシ					2a		2
	モノアラガイ						2mj,1sju	3
海産種	ハマグリ	2u/4u	1u/1u	5	0/1,1u,2f			2
	バカガイ？				5f			1
	アカニシ				1ab			1
陸産種	ホソオカチョウジガイ						4a,2ab,25lj,5ljb,1u	36
	オカチョウジガイ						7a,7lj,2ljb	16
	ハクサンベッコウ属？						1lj	1
	ニッポンマイマイ					1lj		1
	ヒダリマキマイマイ					1clc?		1

詳細　a：成貝，b：体層，c：現生個体，cl：軸唇，f：破片，lj：大形幼貝（成貝の1/2以上），
mj：中形幼貝（成貝の1/4-1/2），sj：小形幼貝（成貝の1/4未満），u：殻頂，二枚貝は左／右

第14表　須賀井遺跡 (6) SK032から出土したイシガイとヨコハマシジラガイの殻長組成

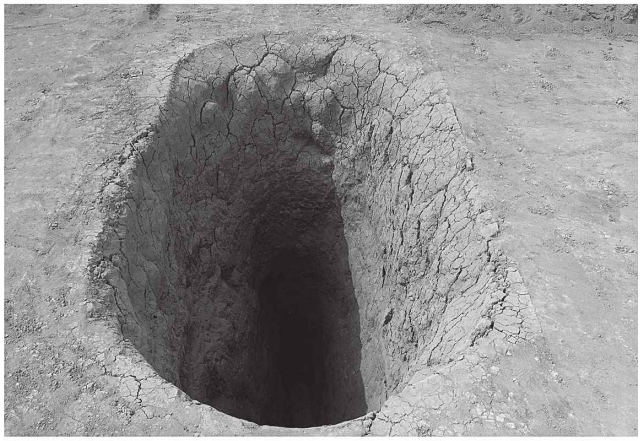
殻長 (mm)	イシガイ											ヨコハマシジラガイ								
	サンプル①			サンプル⑤			サンプル⑨					サンプル①			サンプル⑤			サンプル⑨		
	完形	高推定	低推定	完形	高推定	低推定	完形	合弁/完形	高推定	合弁/高推定	低推定	完形	高推定	低推定	完形	高推定	低推定	完形	高推定	低推定
10-11																				
12-13													2							
14-15																				
16-17				1									1	1	1			1	1	
18-19			1	2					2			1				1				
20-21	1			1			1						2	1				1	2	
22-23	1			1		2	4		3			1	1	2				2	1	1
24-25	1		2	1	3	4	2			1			3	4	2	8	7	4	3	4
26-27	3	3	6	4	6	5	5		8	1	3		9	4	3	4	4	4	5	10
28-29	1	4	4	5	5	4	2	1	2		1	2	2	5	1	4	3	5	8	9
30-31	3	5	2	2	17	3	8	1	10		2	1	4	3		1	2	3	5	2
32-33	9	9	3	4	19	1	10	3	19	1			4	5	3	3	2	5	7	4
34-35	4	7		9	3	2	3		7	1	1	1	4	3		1	1	1	2	3
36-37	3	4	1	1	7		5	2	8				2	1		1			3	5
38-39	1	3		1	1		1		1				3			1		1	1	
40-41	1								2				1					1		
42-43													2							
44-45																				
不能											1			1			1			

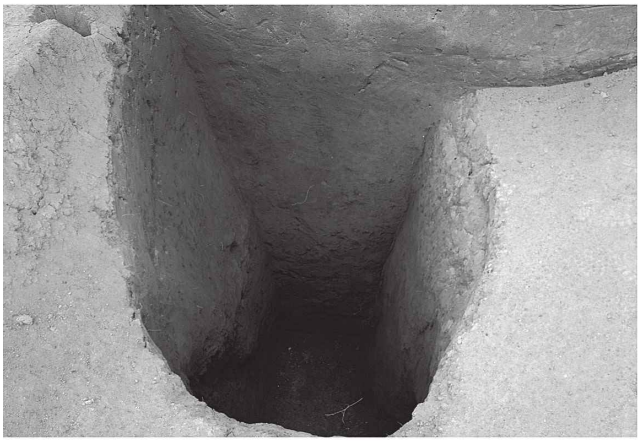
高推定：原則的に端部が存在し、全体の2/3以上程度が残存するもの；　低推定：原則的に端部が欠落し、全体の2/3未満しか残存していないもの．

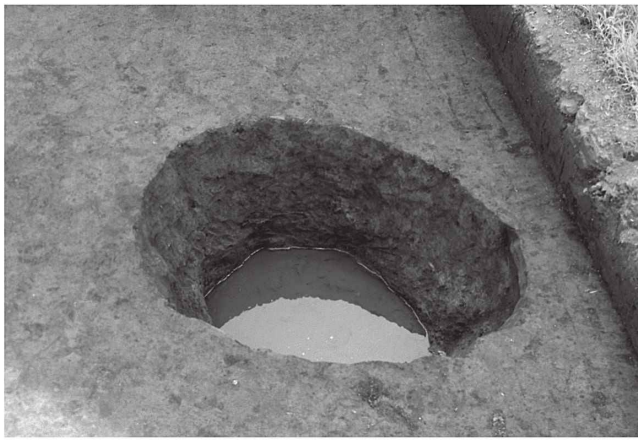
写　真　図　版

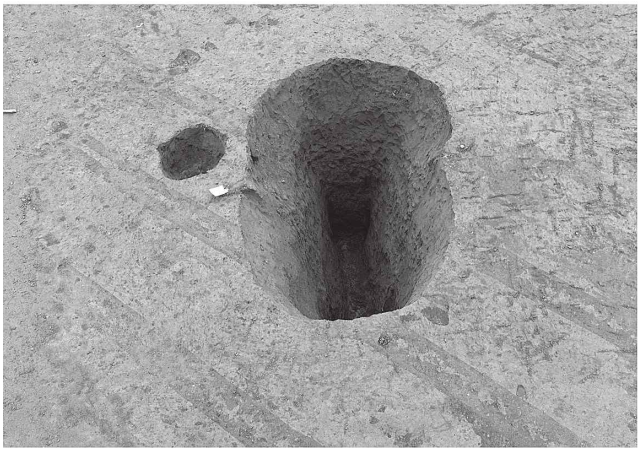
須賀井遺跡周辺航空写真

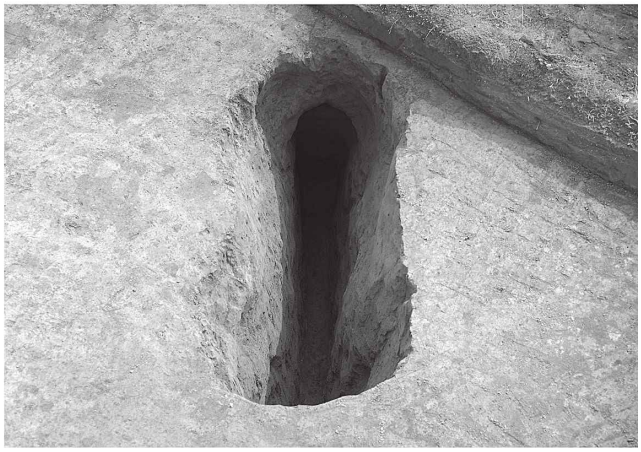
図版２



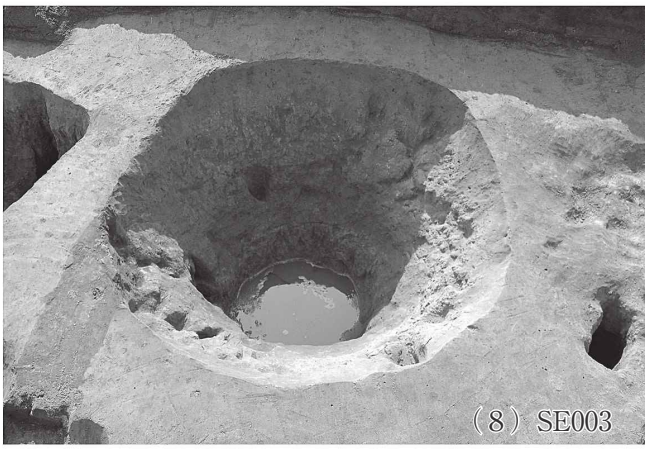


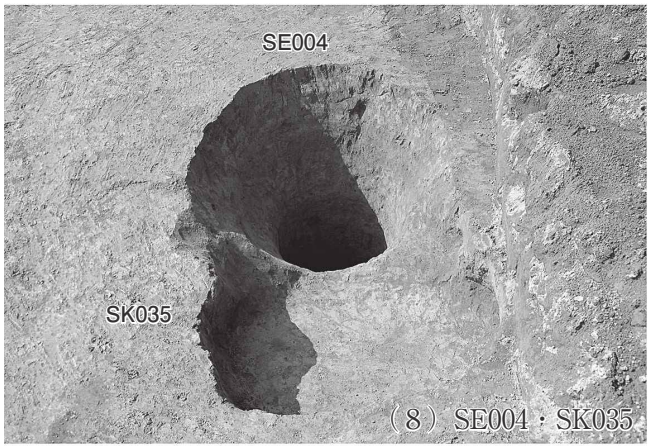


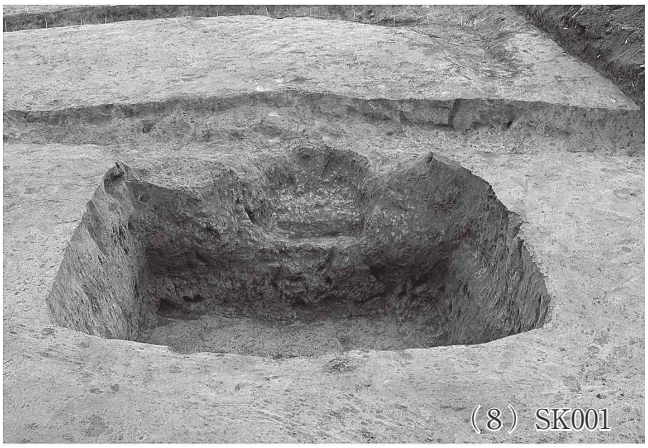




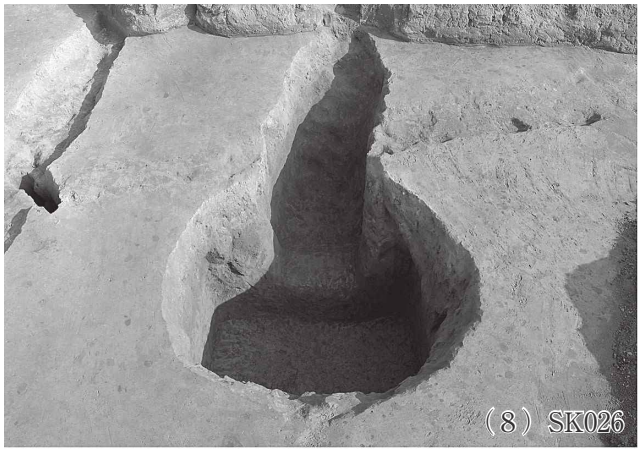
竪穴住居跡・ピット・陥穴

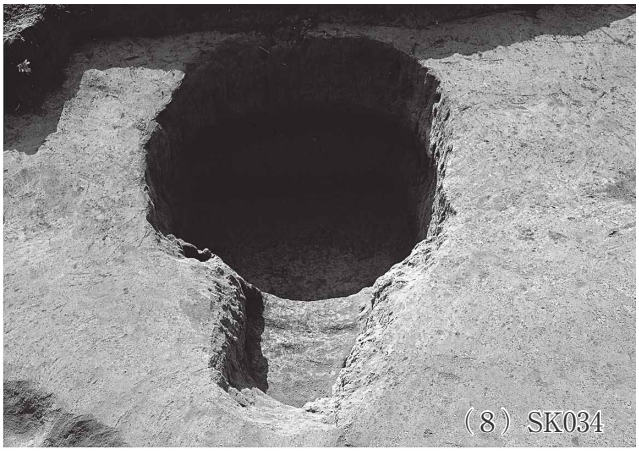


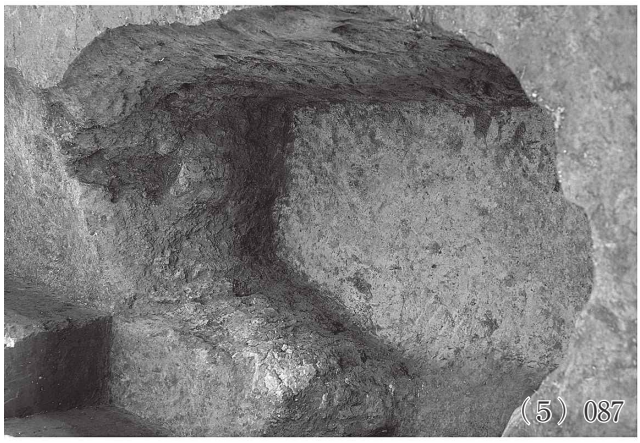


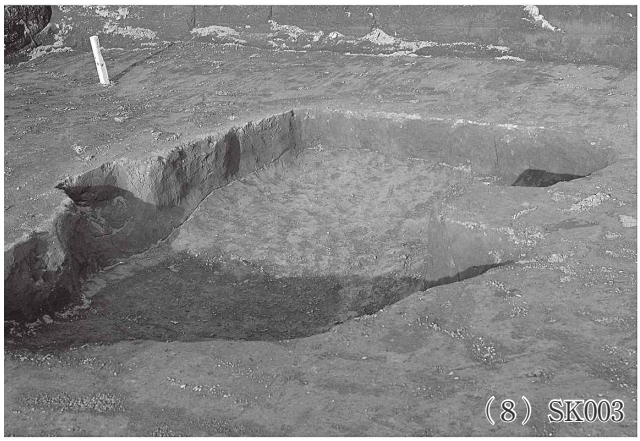


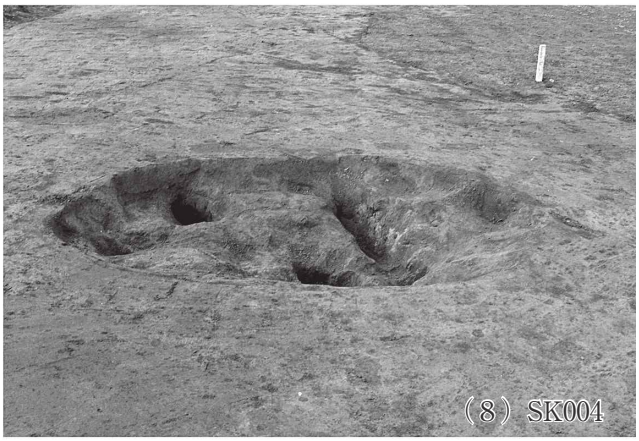
第１区画　台地整形・掘立柱建物跡・井戸・地下式坑（１）



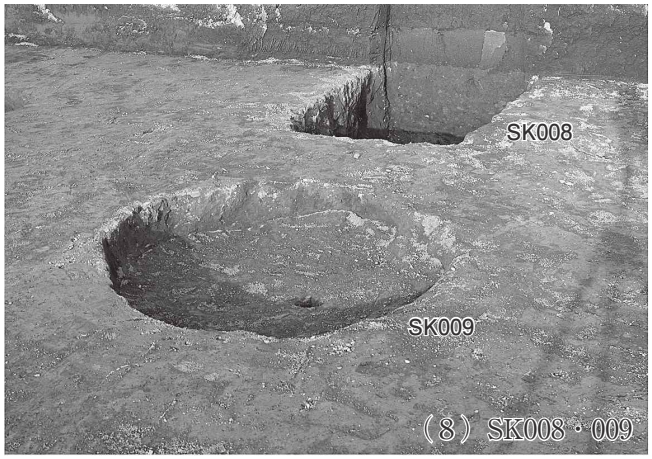






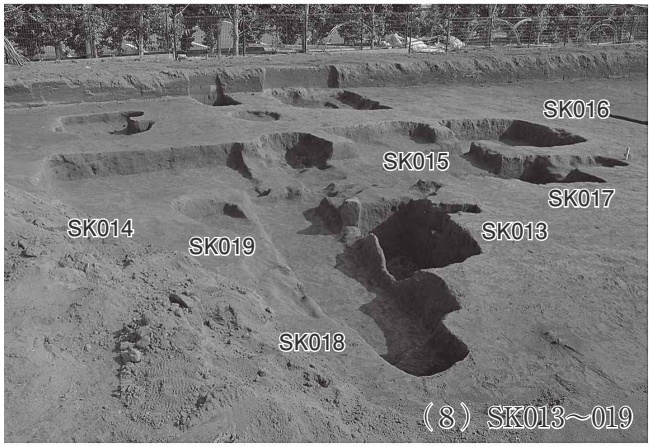


第１区画　地下式坑（２）・土坑（１）

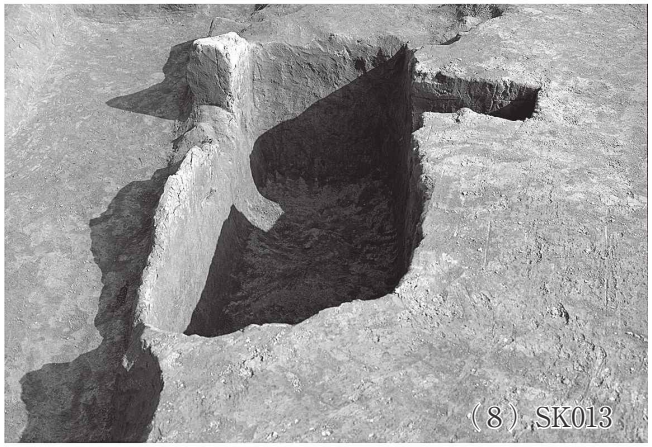


（８）SK008・009

（８）SK010

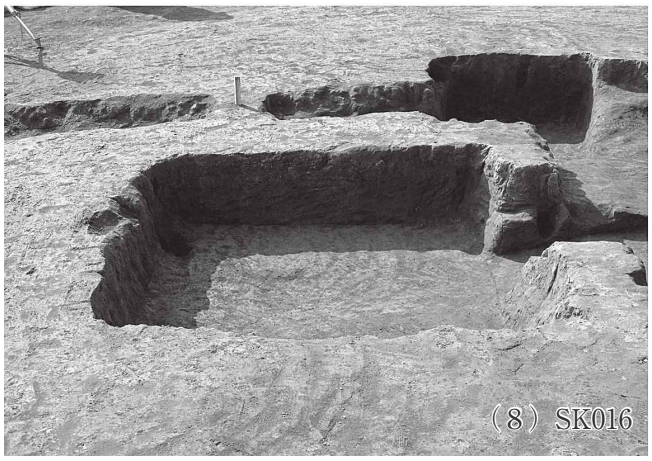


（８）SK013～019


（８）SK013

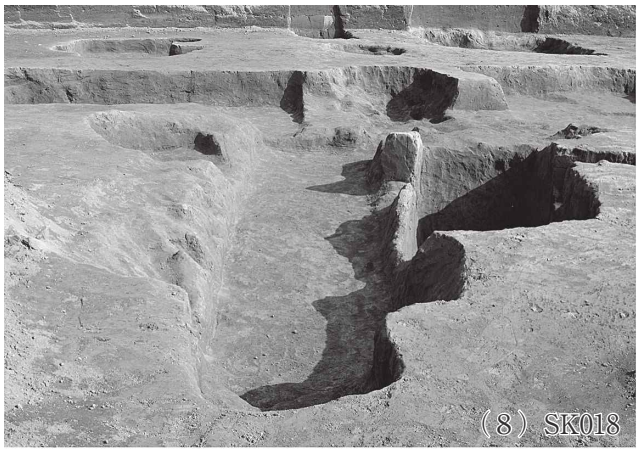
（８）SK014

（８）SK015

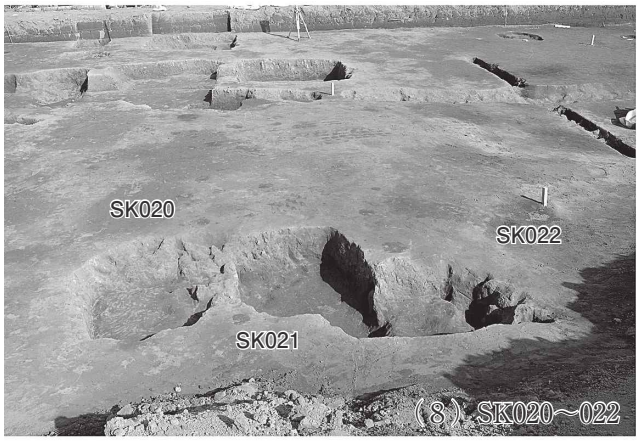

（８）SK016

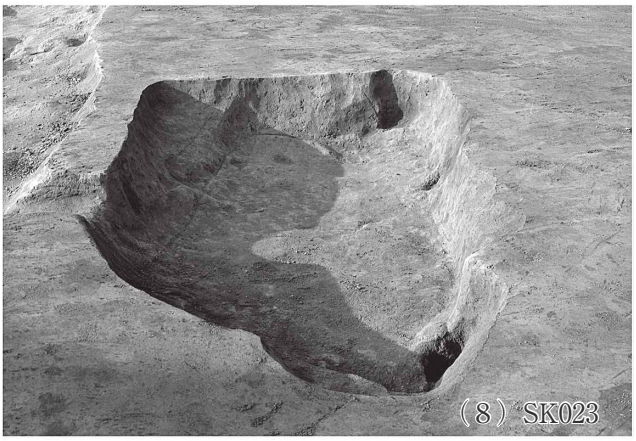
（８）SK017

第１区画　土坑（２）

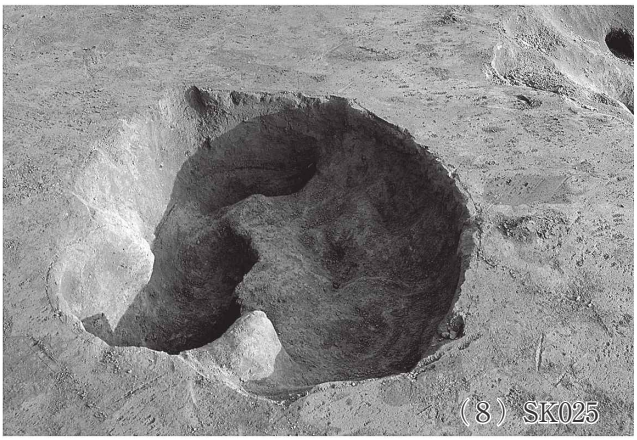

（８）SK018

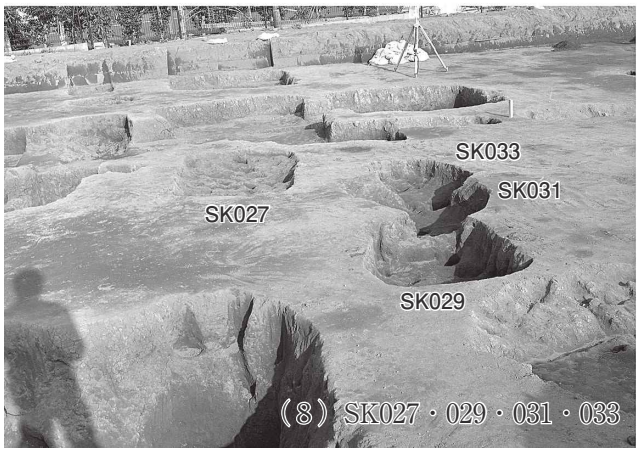
（８）SK019


SK020
SK022
SK021
（８）SK020～022


（８）SK023

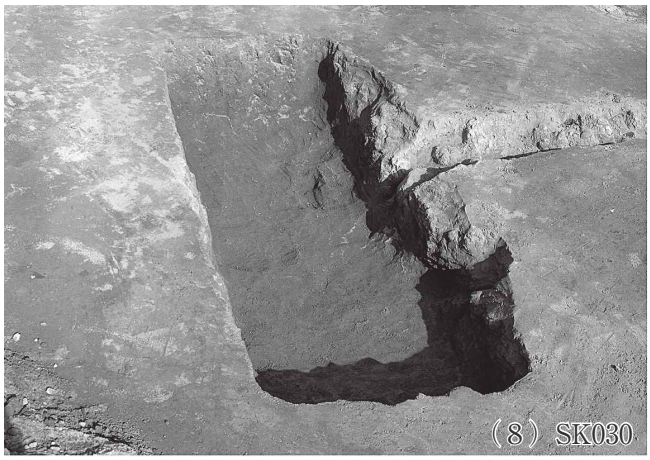
（８）SK024

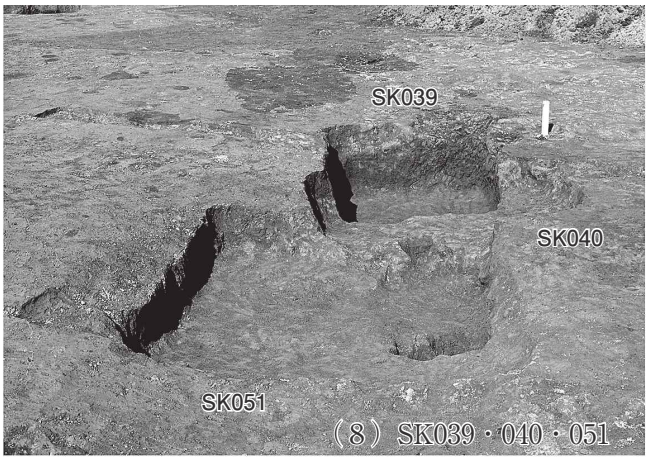

（８）SK025


SK033
SK031
SK027
SK029
（８）SK027・029・031・033

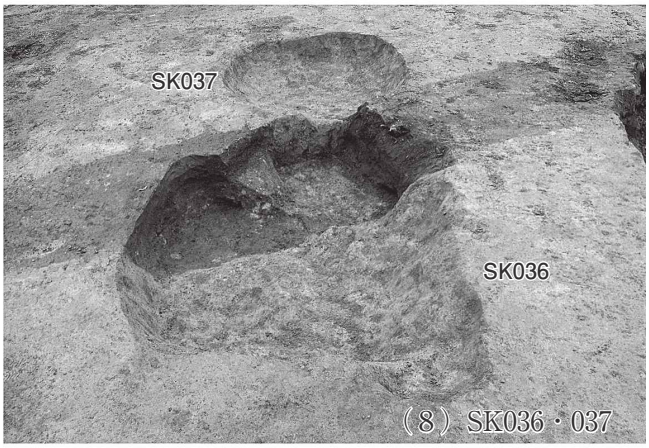
（８）SK028

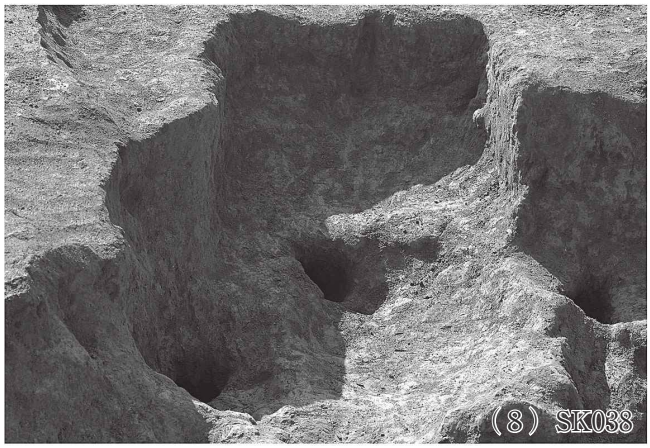
第１区画　土坑（３）

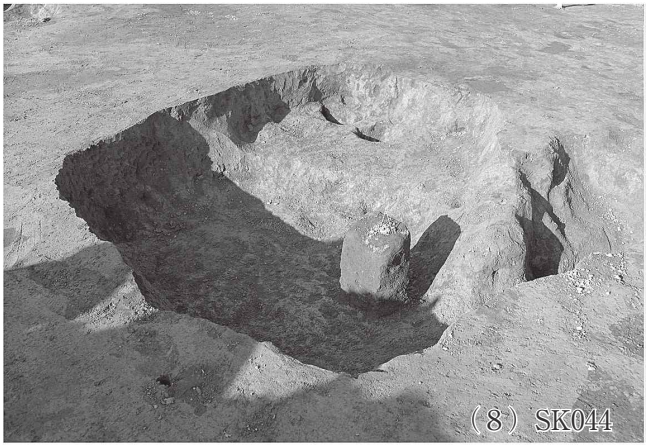

（８）SK030


SK039
SK040
SK051
（８）SK039・040・051

（８）SK032


SK037
SK036
（８）SK036・037


（８）SK038

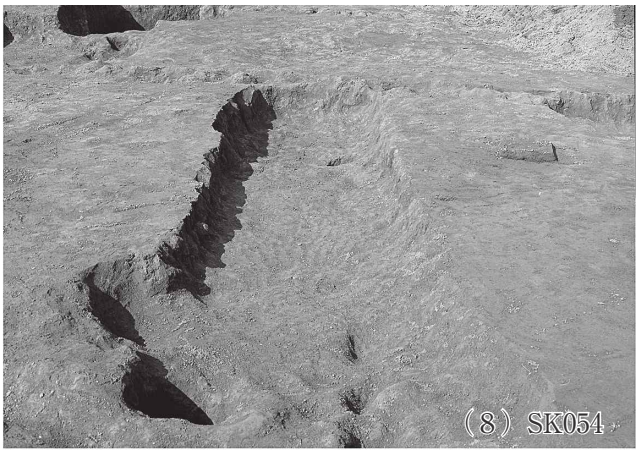

（８）SK044

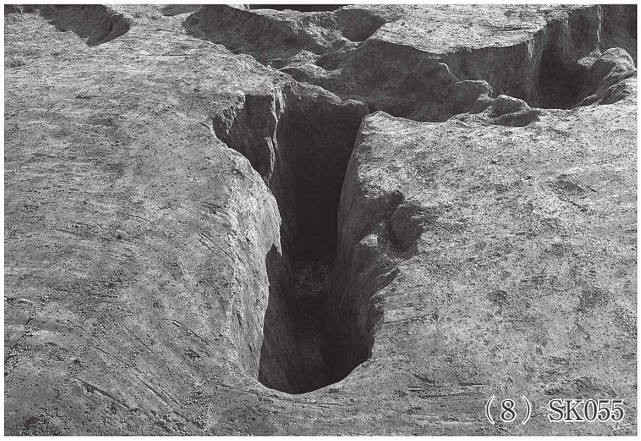
SK045
SK047
SK046
SK048
SK049
SD014
SD013
（８）SD013・014・SK045～049

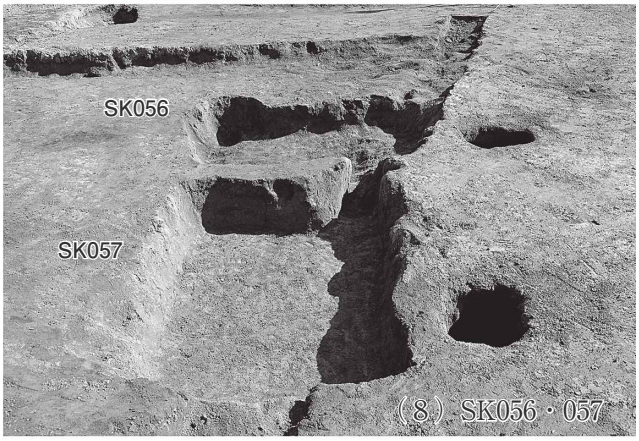
（８）SK050

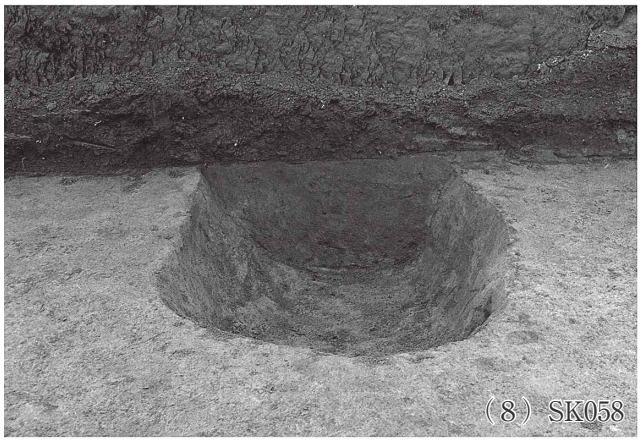
第１区画　土坑（４）

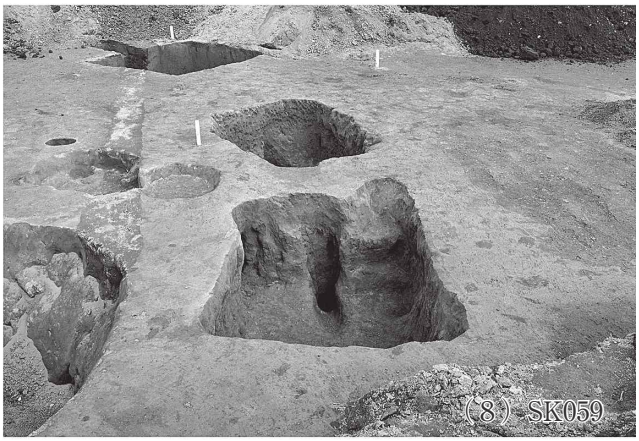
（８）SK052

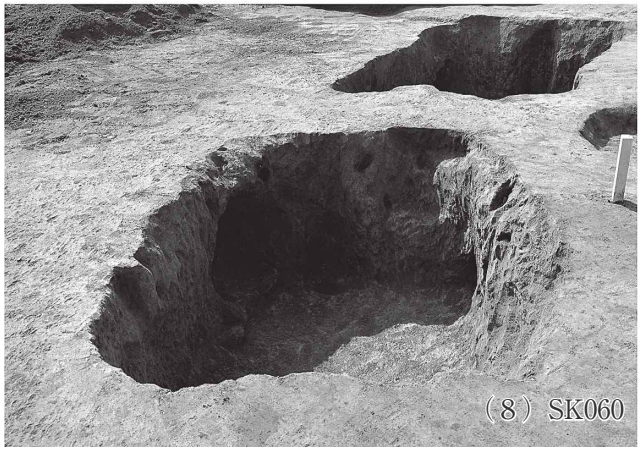

（８）SK054

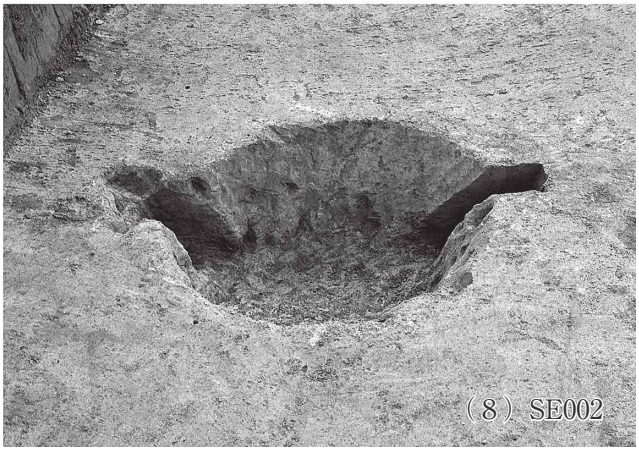

（８）SK055


SK056
SK057
（８）SK056・057

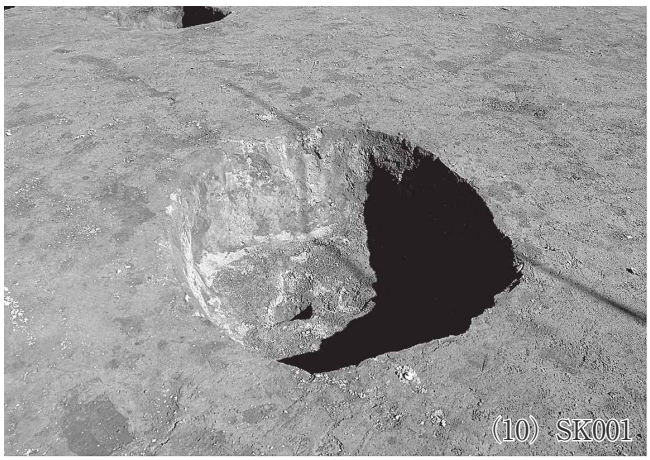

（８）SK058


（８）SK059

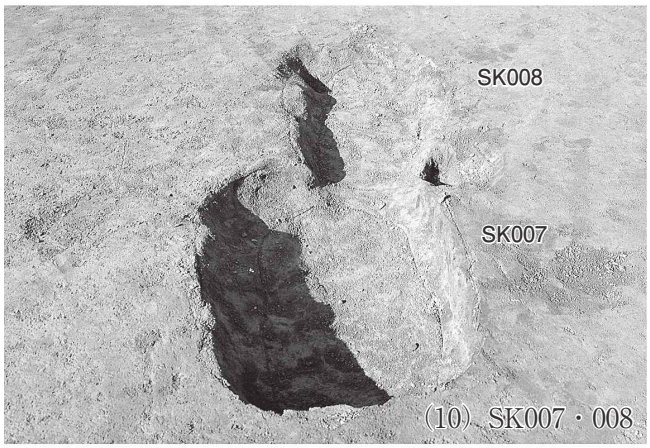

（８）SK060

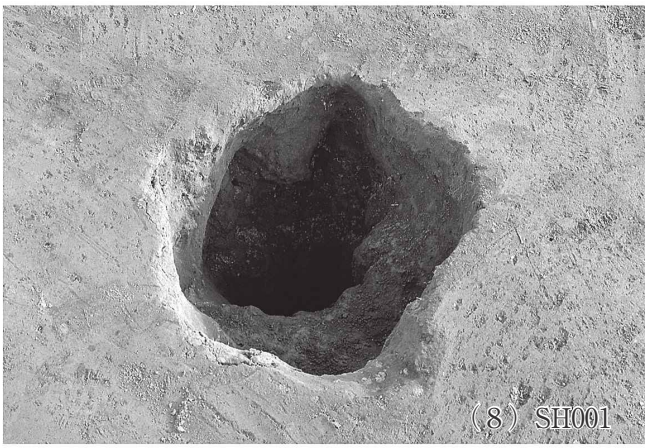

（８）SE002

第１区画　土坑（５）


（10）SK001

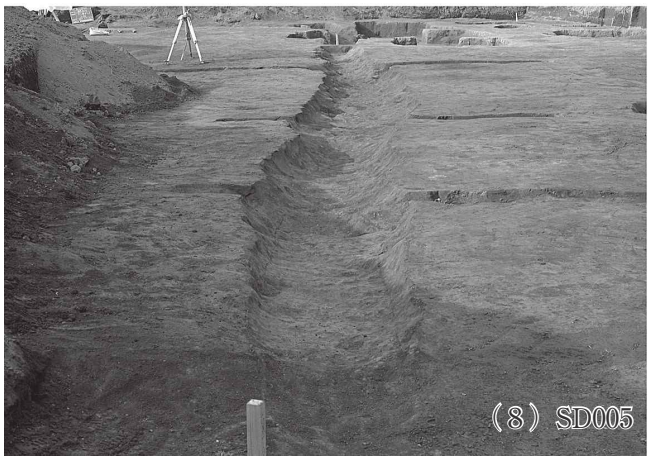
（10）SK002


SK008
SK007
（10）SK007・008


（8）SH001

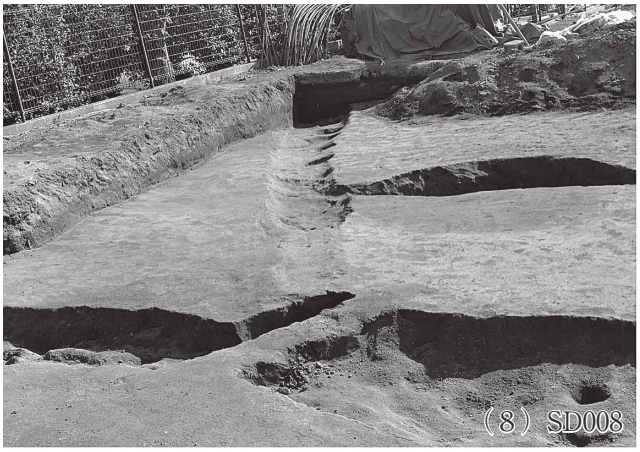
（8）SH002

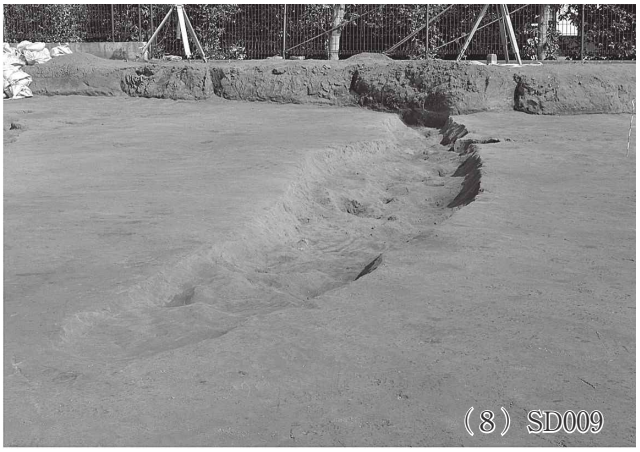
SD003
SD002
（8）SD002・003


（8）SD005

（8）SD006

第１区画　土坑（６）・溝（１）

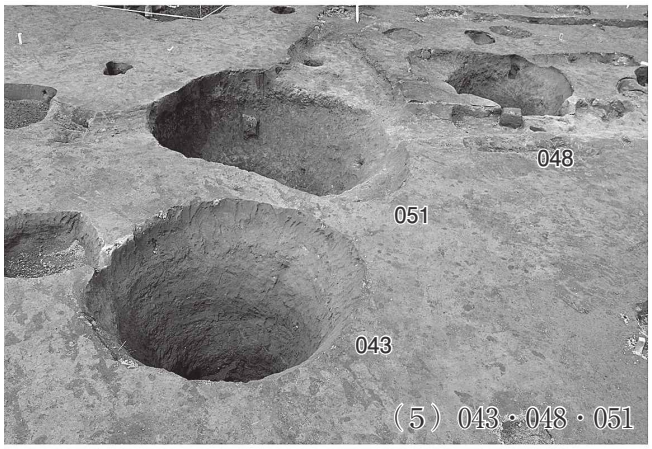




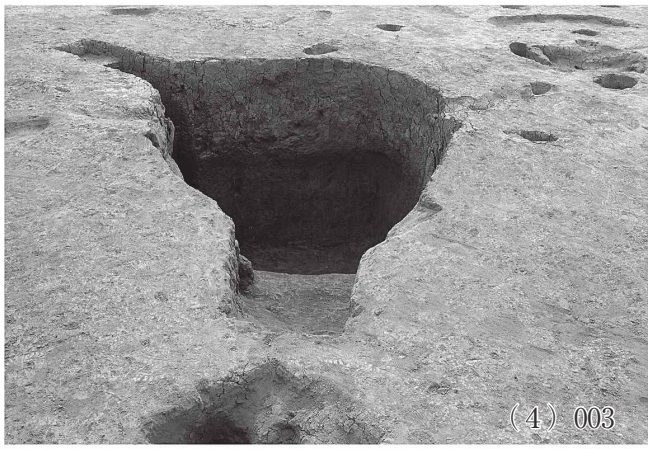
第１区画　溝（２）　第２区画　遠景

（5）028

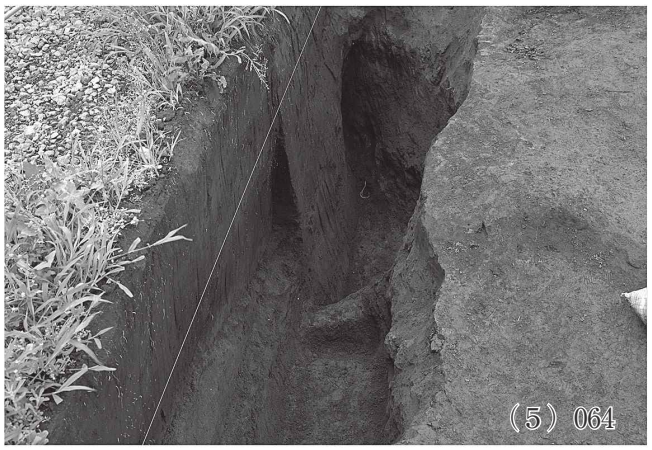
（5）016

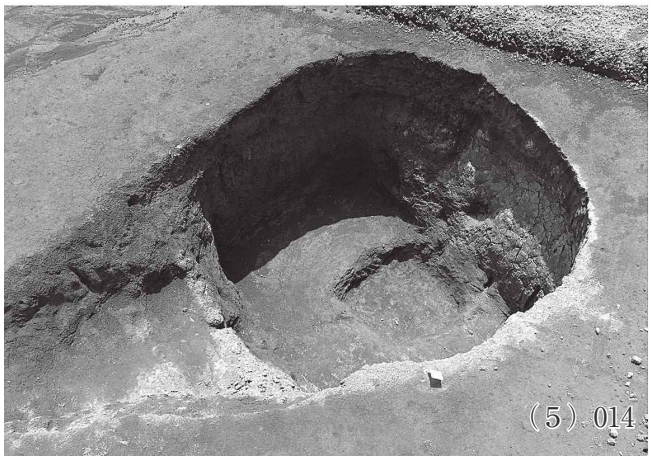


（5）043・048・051


（4）003

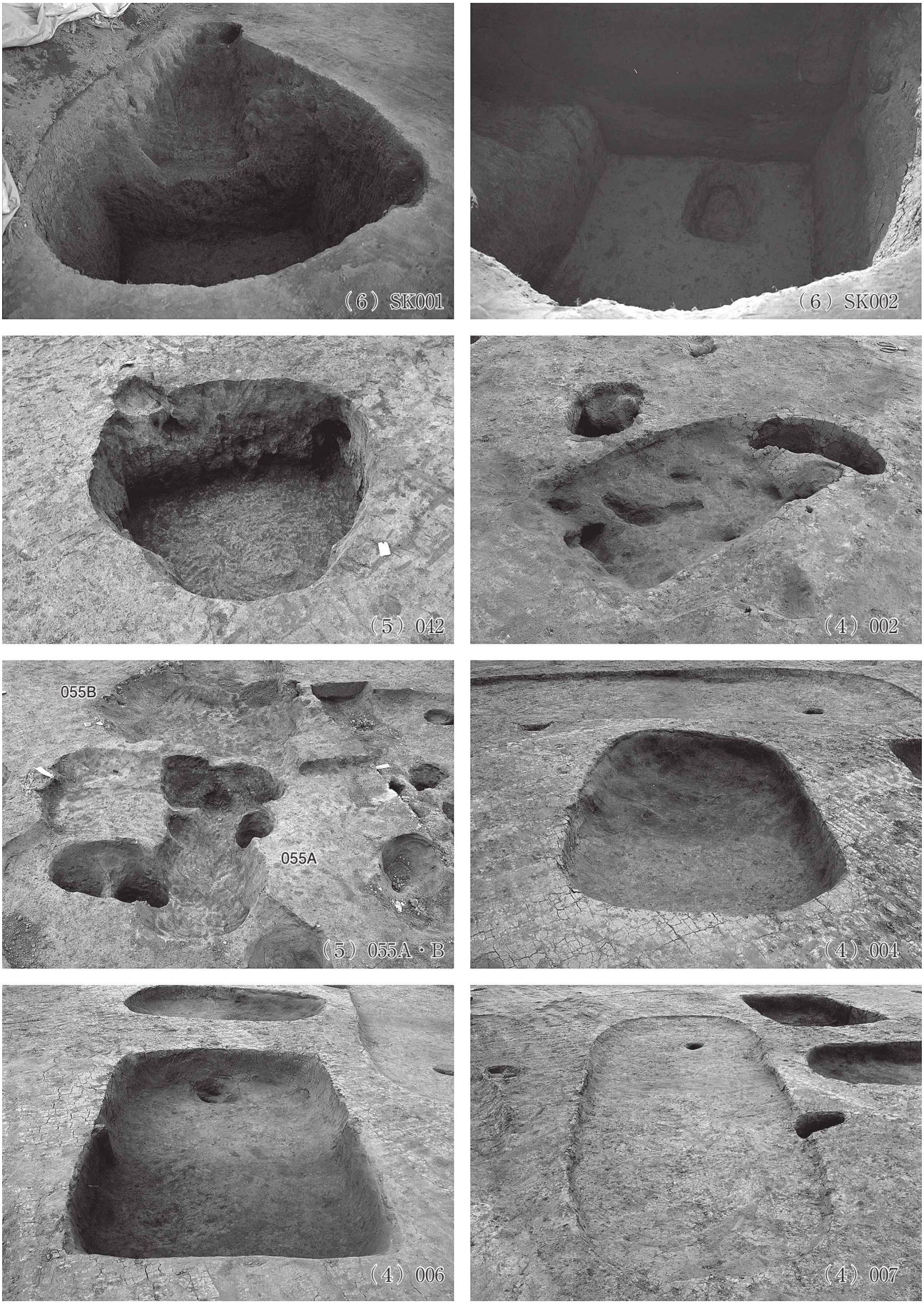
（4）005


（5）064

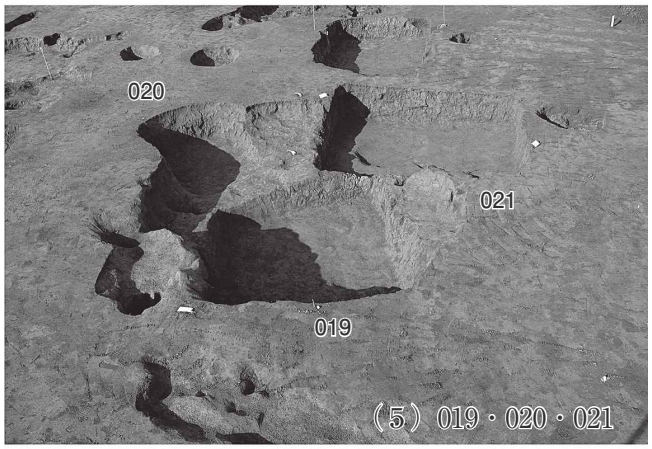

（5）014

（6）SK001

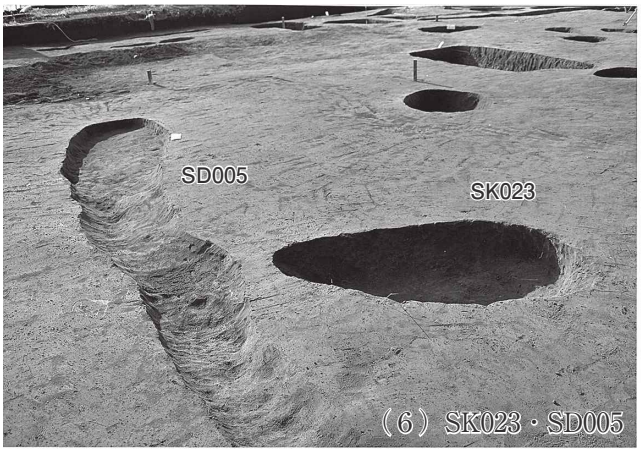
第２区画　掘立柱建物跡・井戸・地下式坑（1）

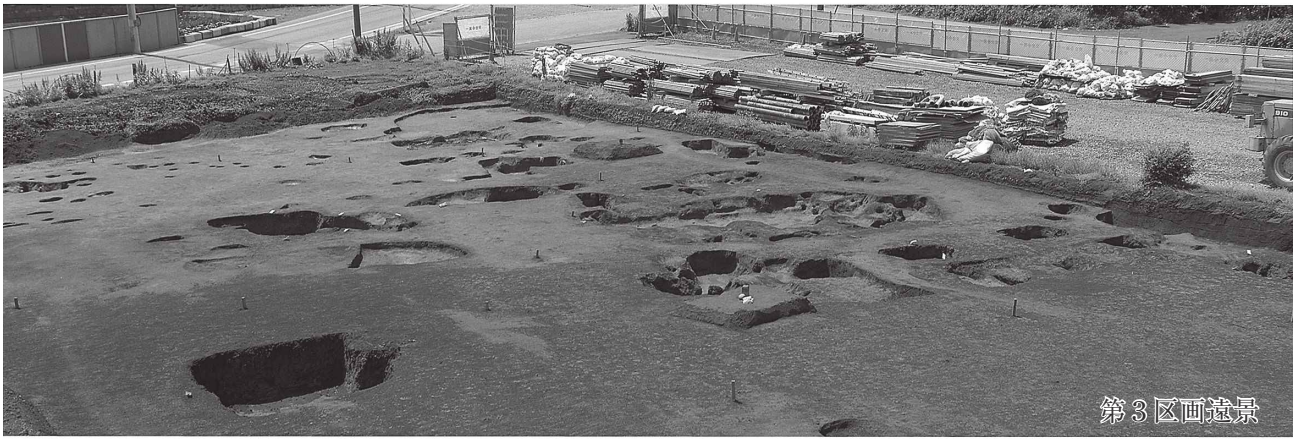


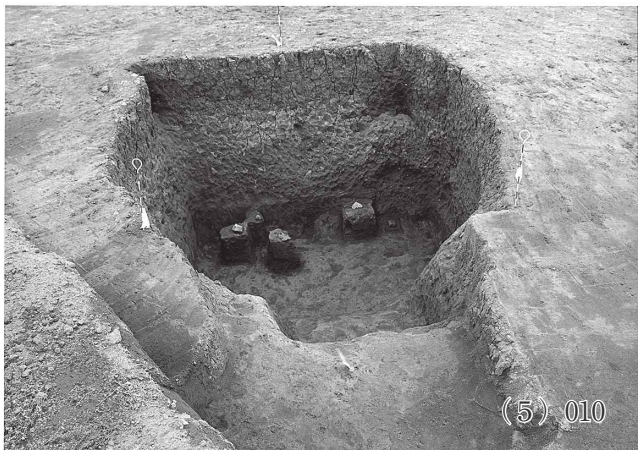
第２区画　地下式坑（２）・火葬施設・土坑（１）



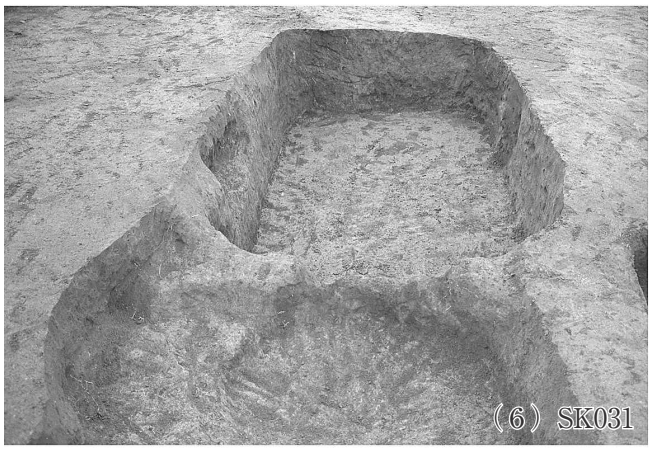
第２区画　土坑（２）

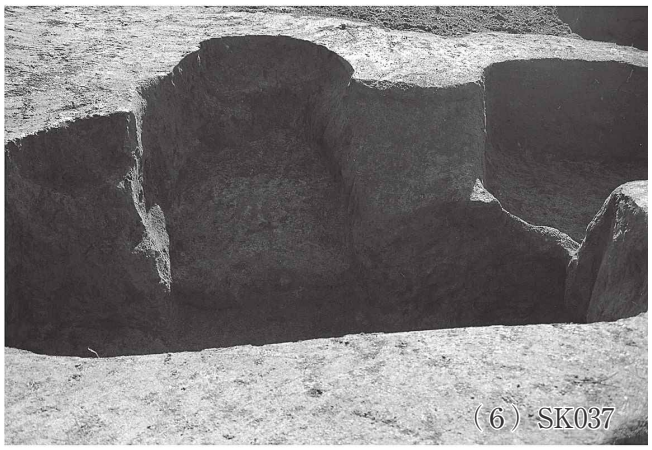


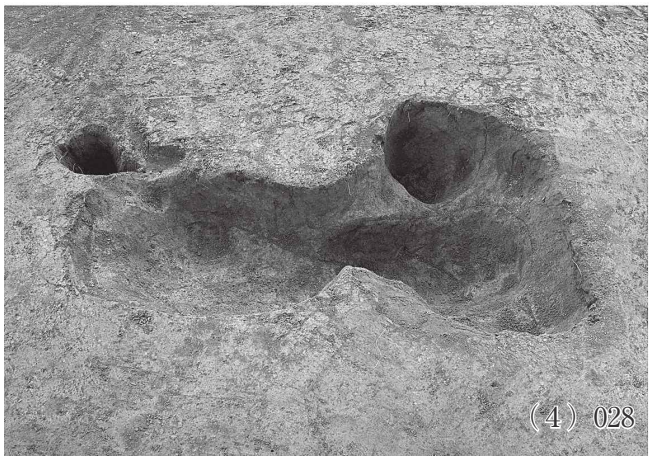




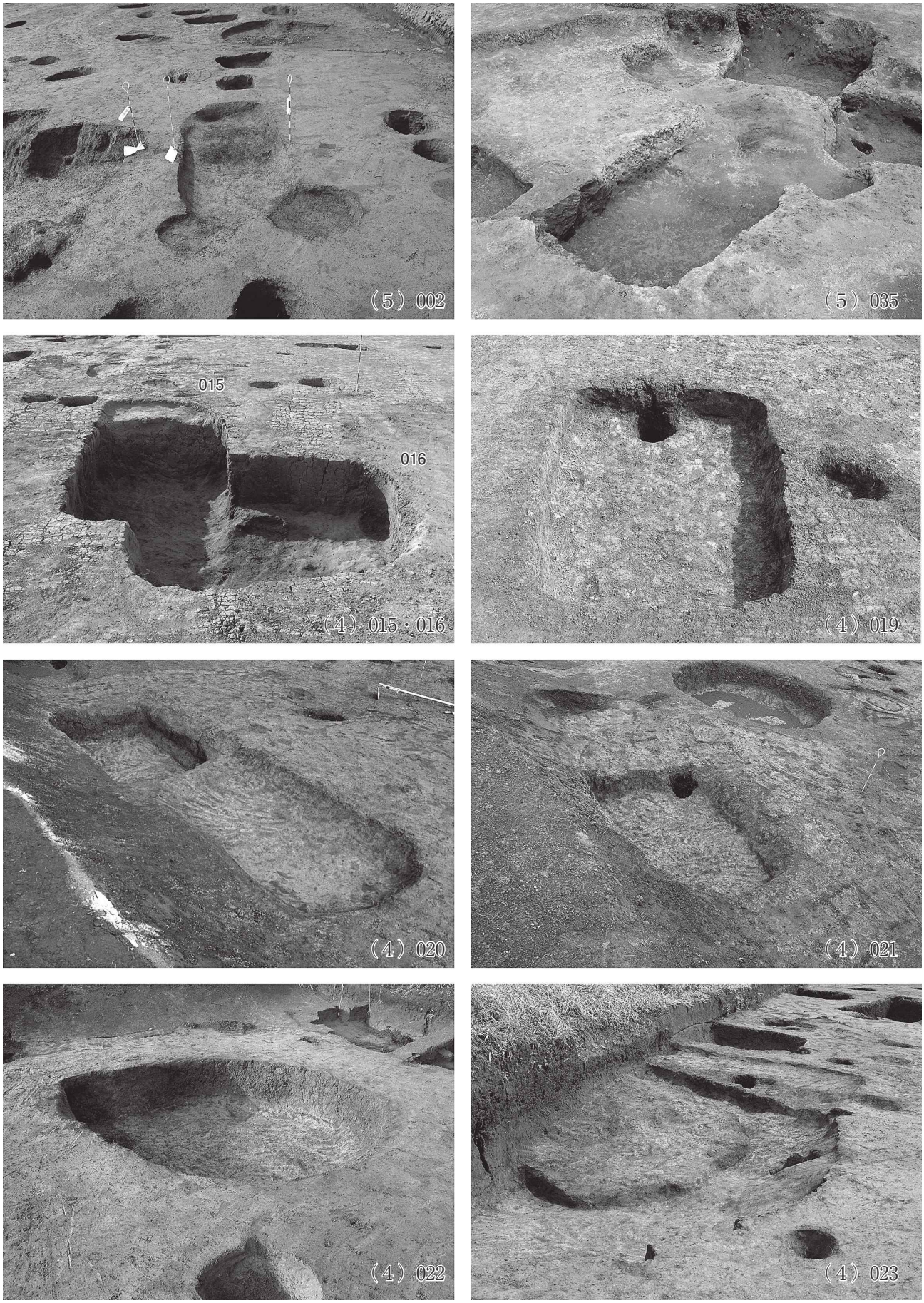
第２区画　土坑（３）・溝　第３区画　遠景・地下式坑（１）



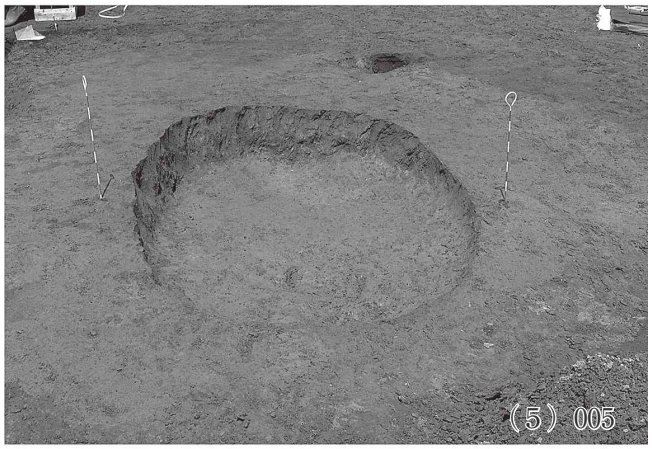


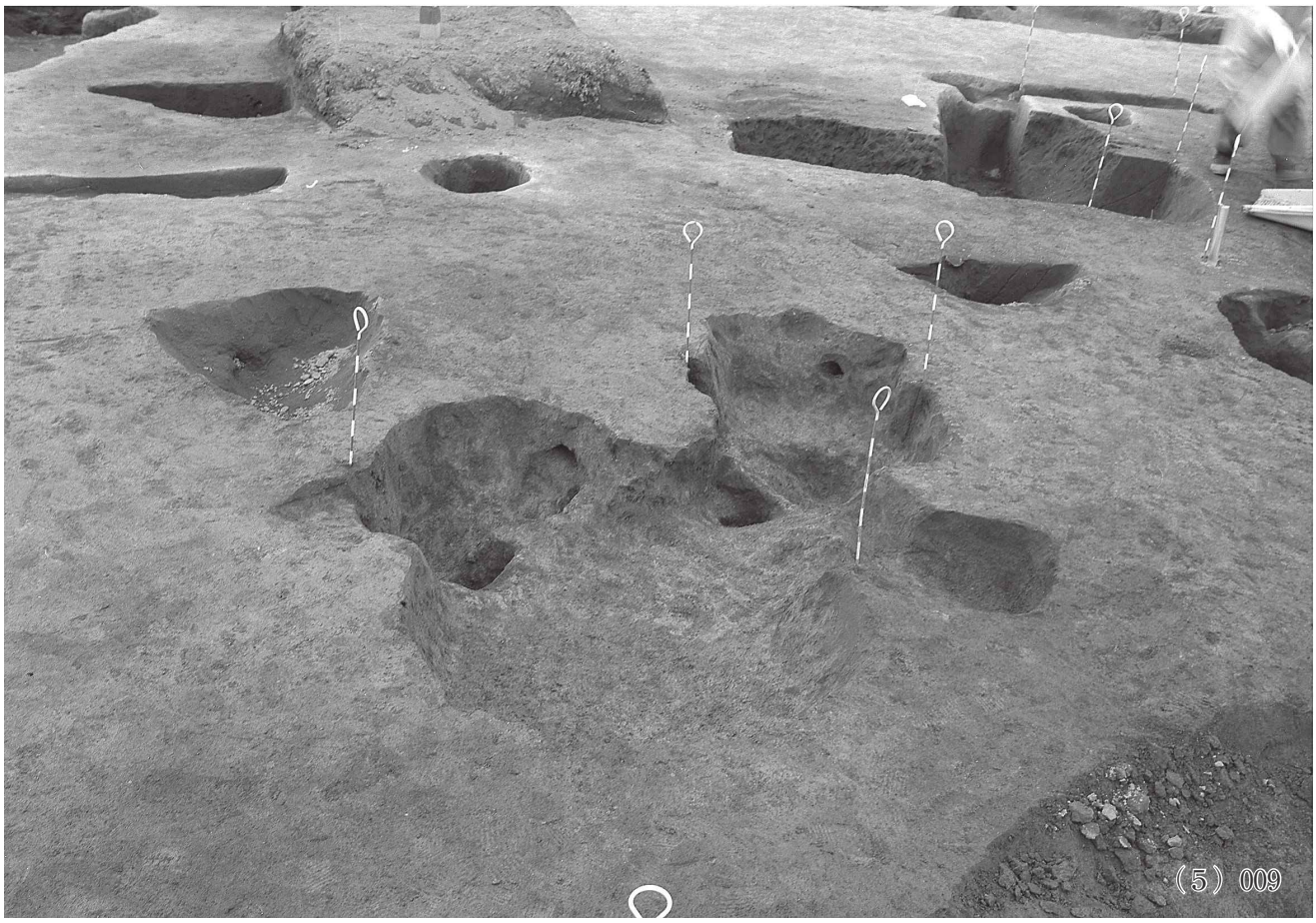


第３区画　地下式坑（２）・火葬施設（１）

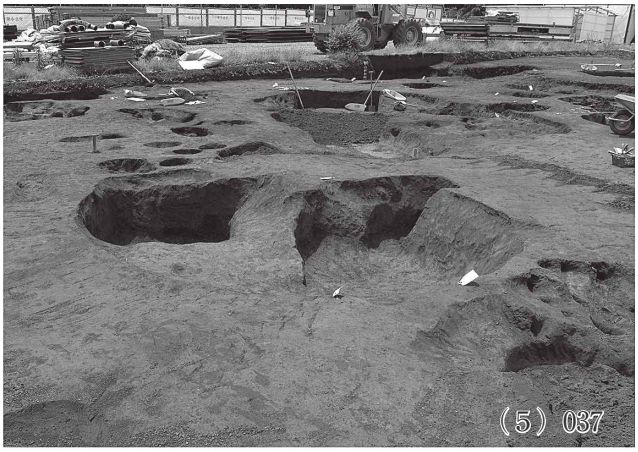


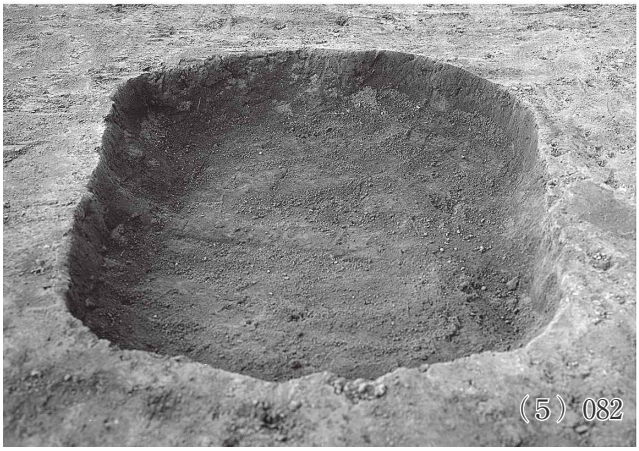
第３区画　火葬施設（２）・土坑（１）



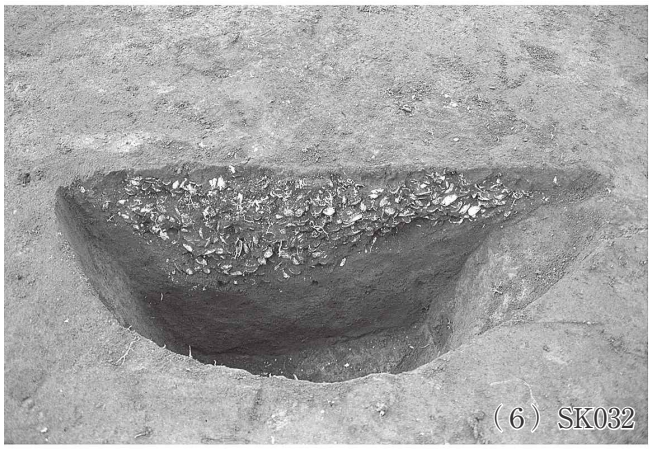


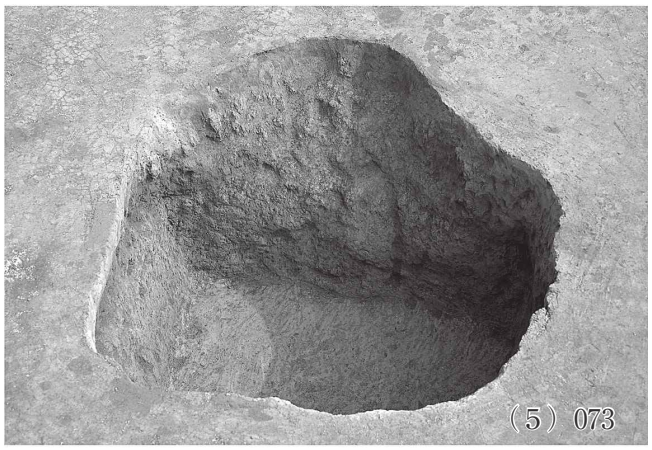
第３区画　土坑（２）



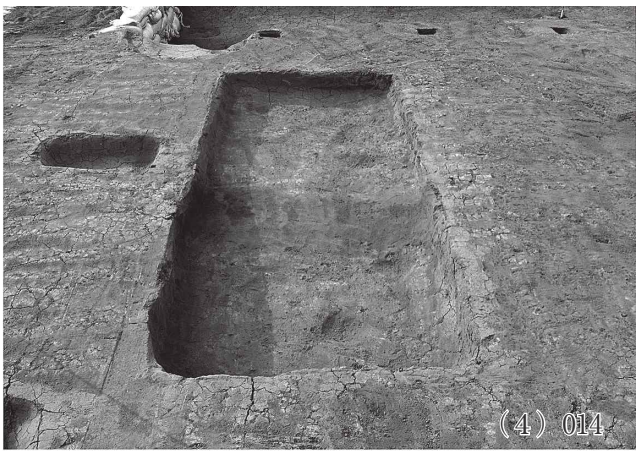


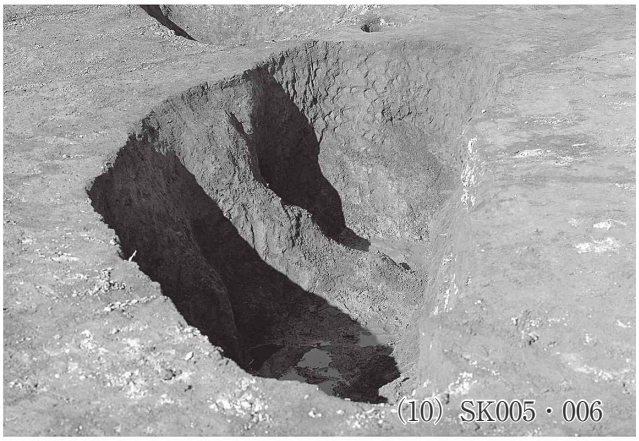
第３区画　土坑（３）



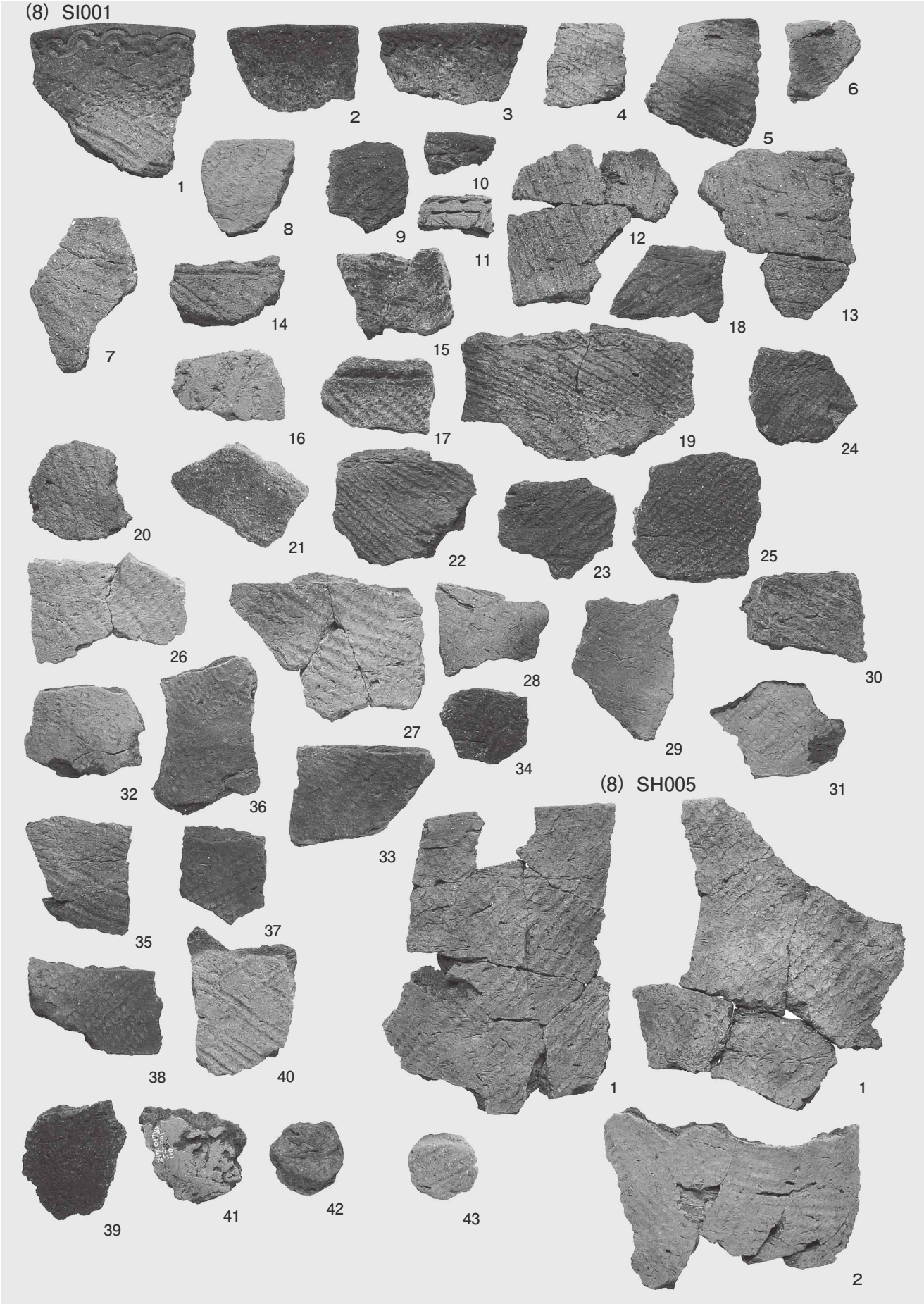


第３区画　土坑（４）・溝　区画外　土坑（１）

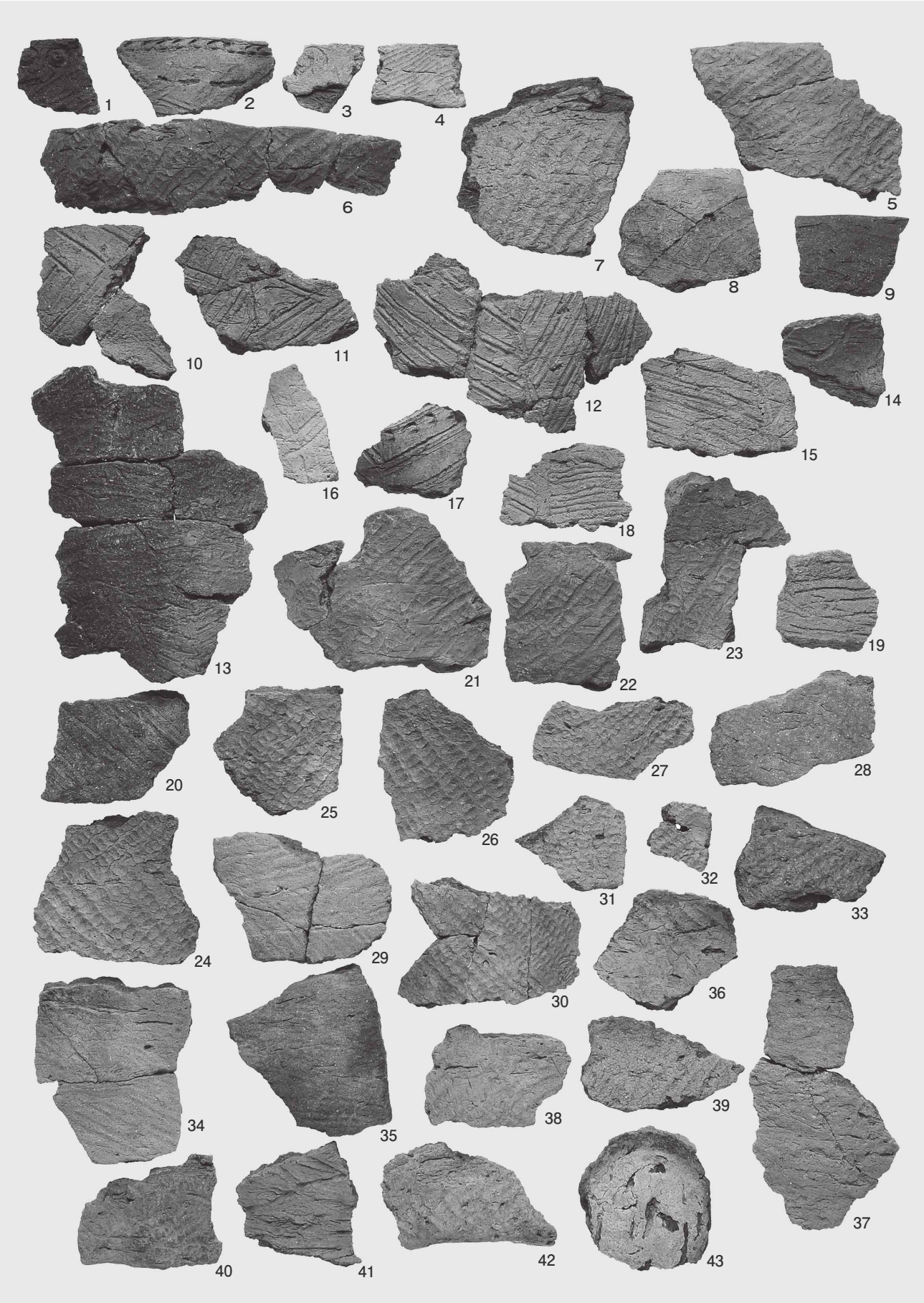




区画外　土坑（2）・溝


(8) SI001
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
(8) SH005
1
1
2

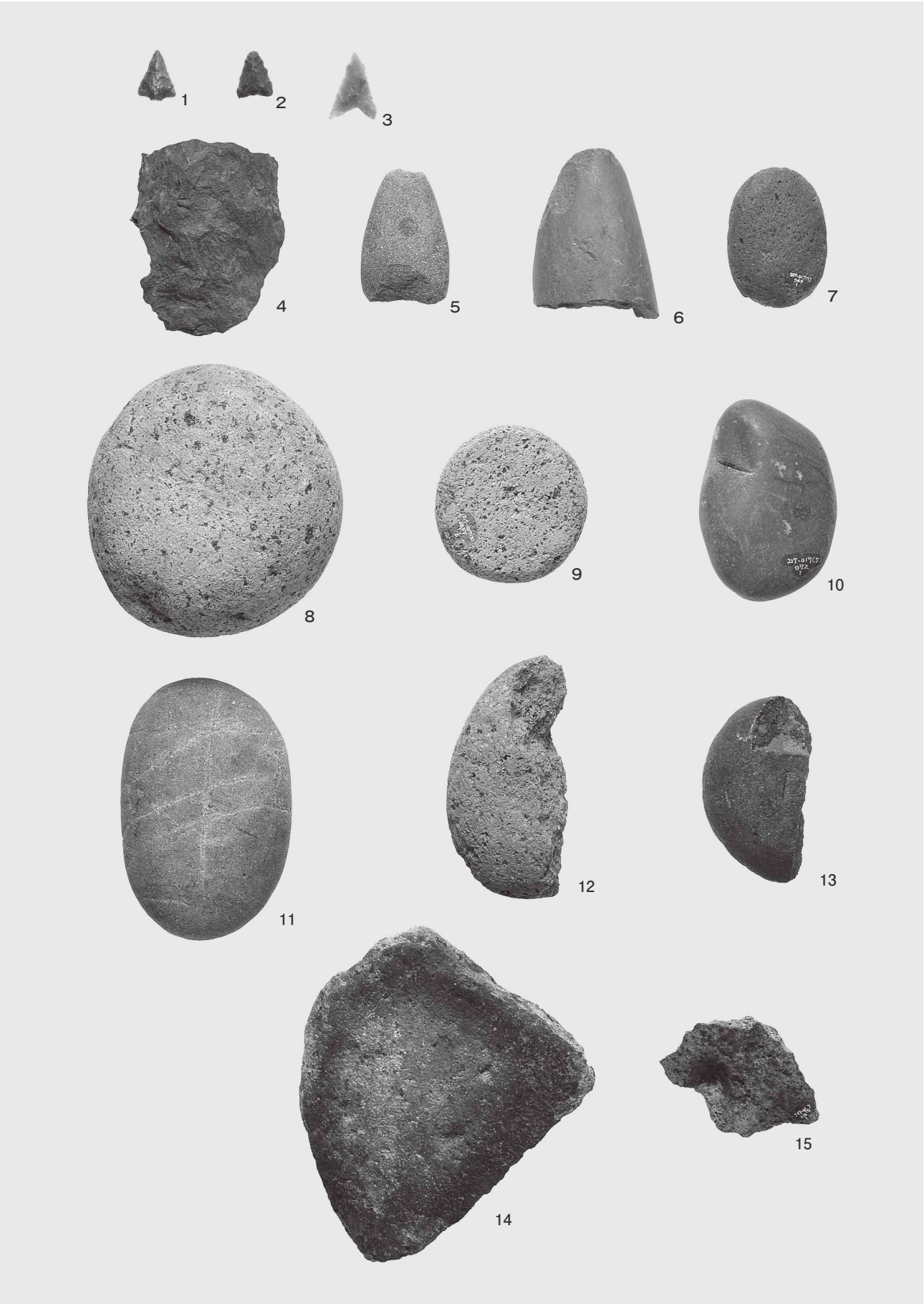
遺構出土縄文土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

遺構外出土縄文土器（1）

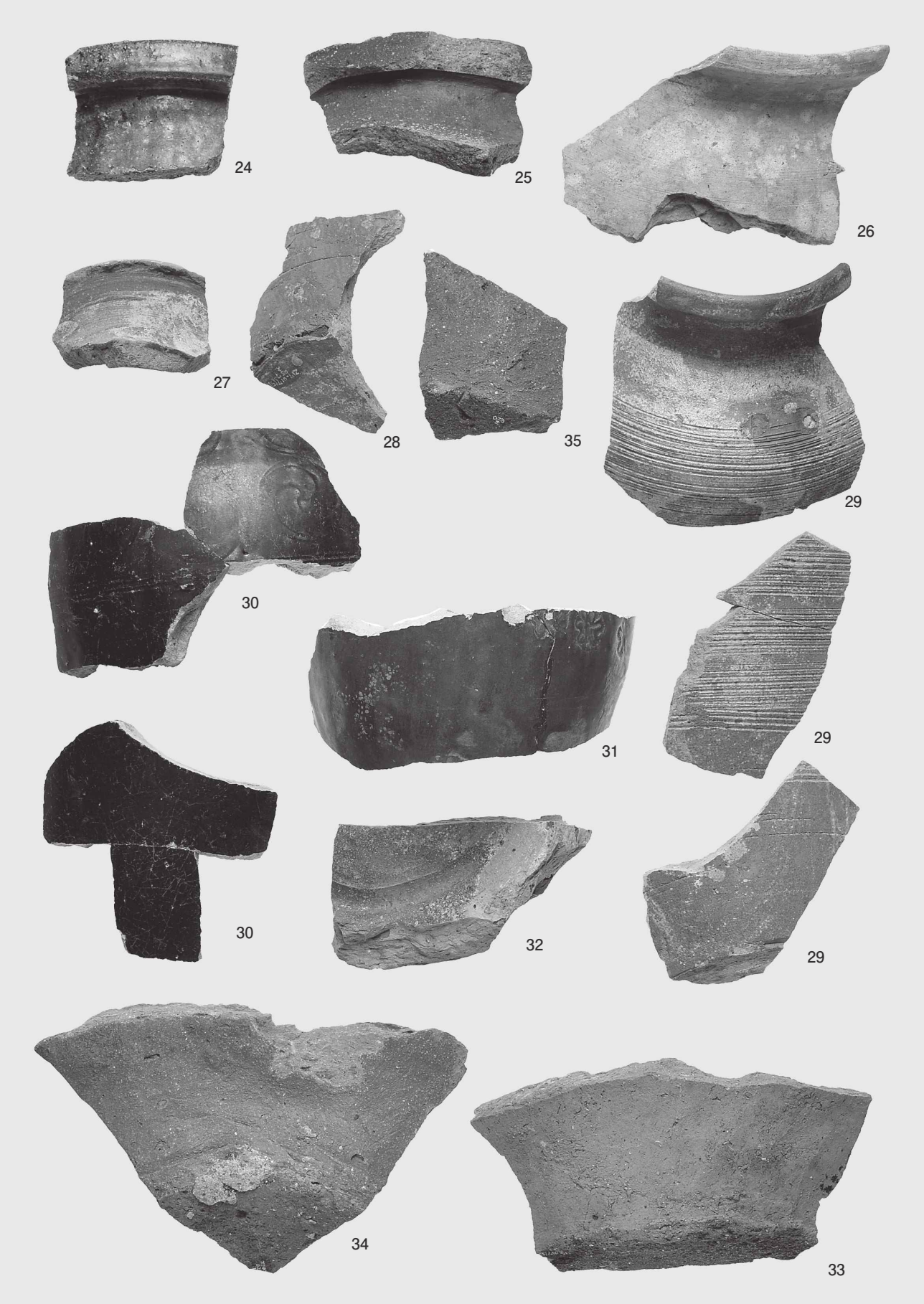
44
44
45b
45a
48
48
44
44
46
47
45c
45d
50
51
49
49
53
54
55
56a
52
57
58
59
60
56b
61
62
63
64
56c
66
67
68
69
65
70
71
72
73
74
75
76
77
78

遺構外出土縄文土器（2）

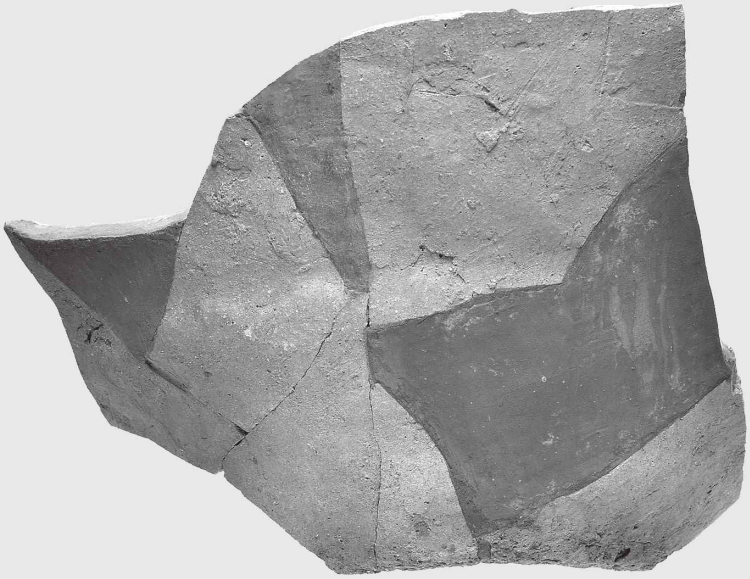


縄文時代石器

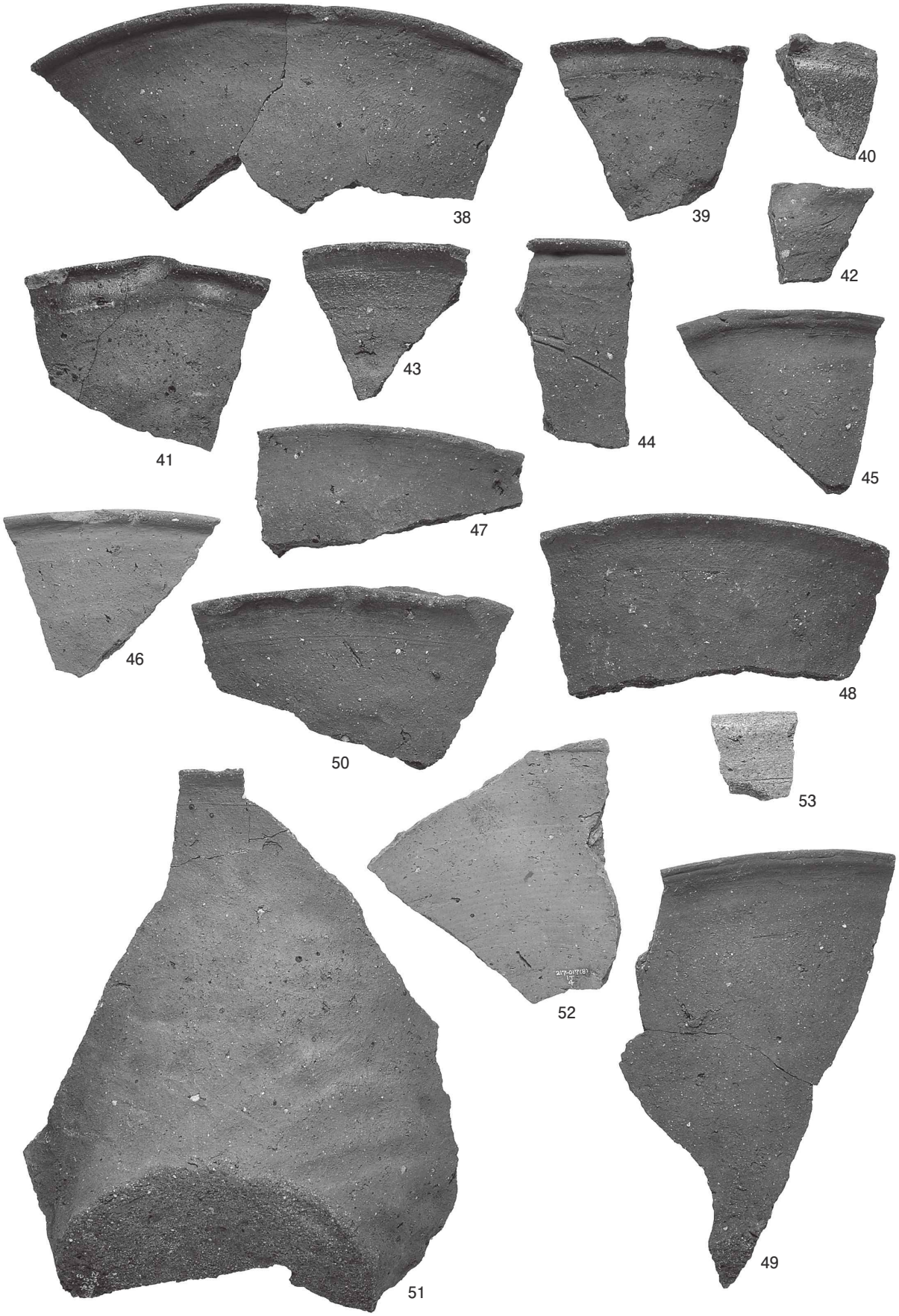
陶磁器類（1）



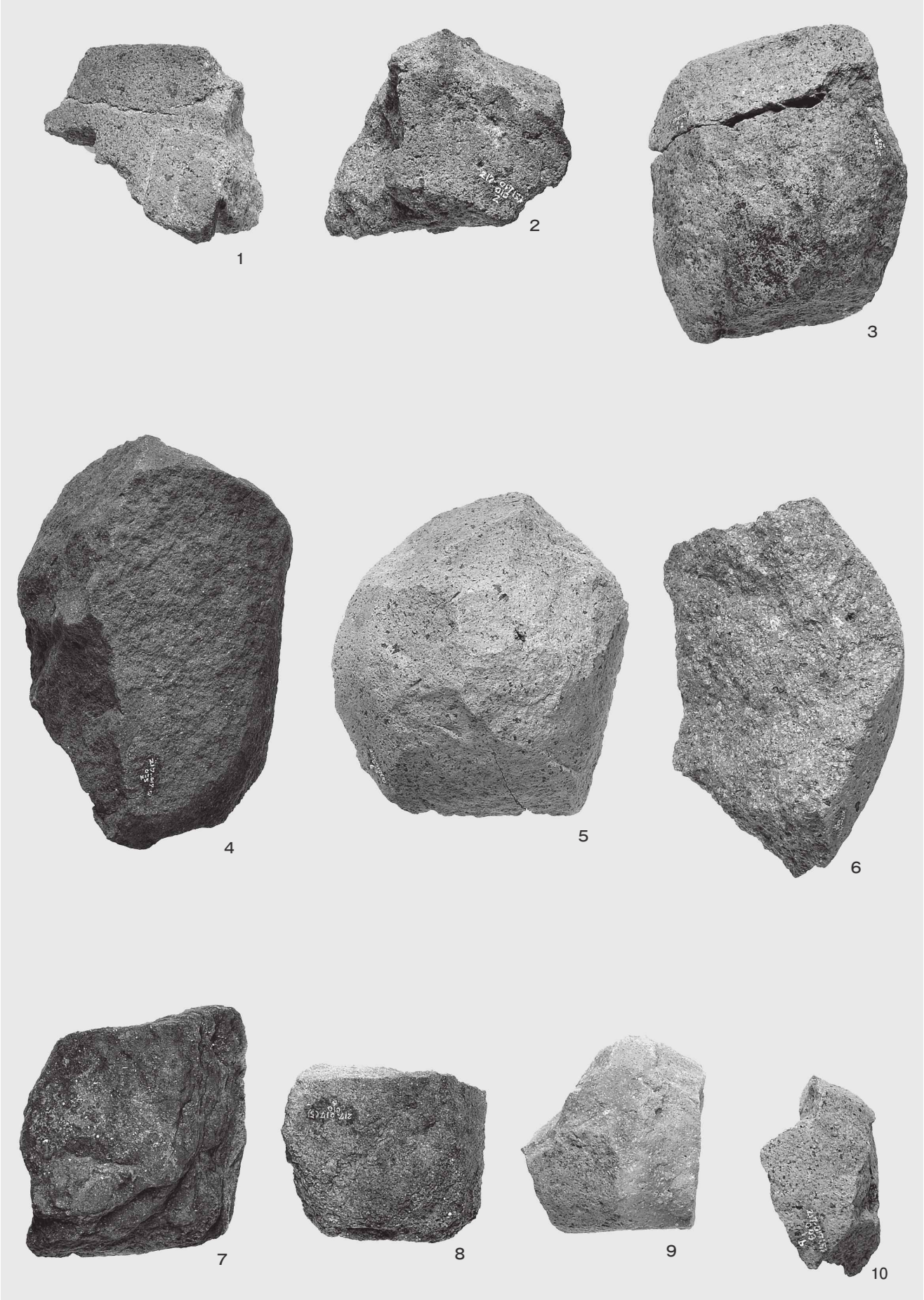
陶磁器類（2）



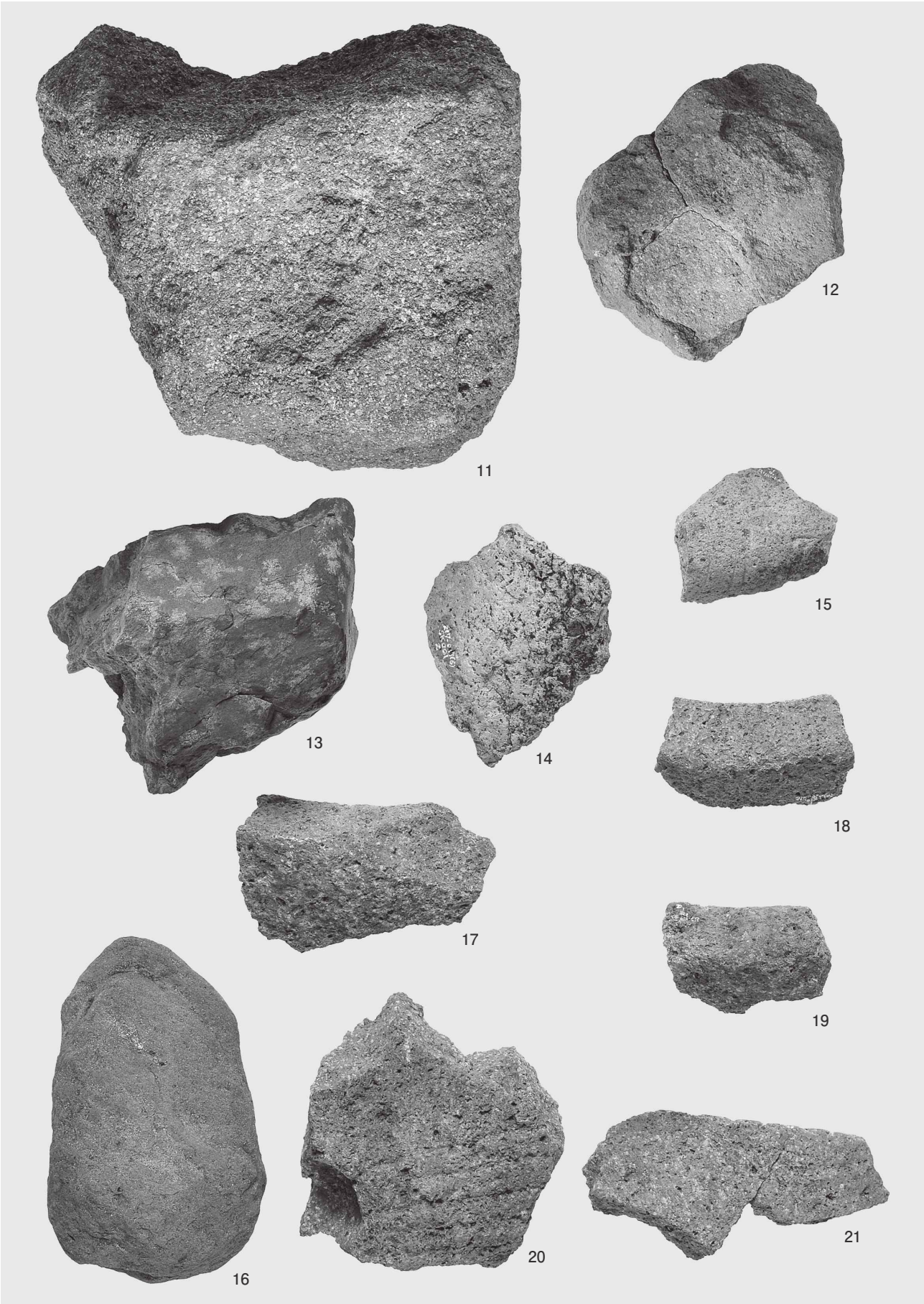
陶磁器類（3）



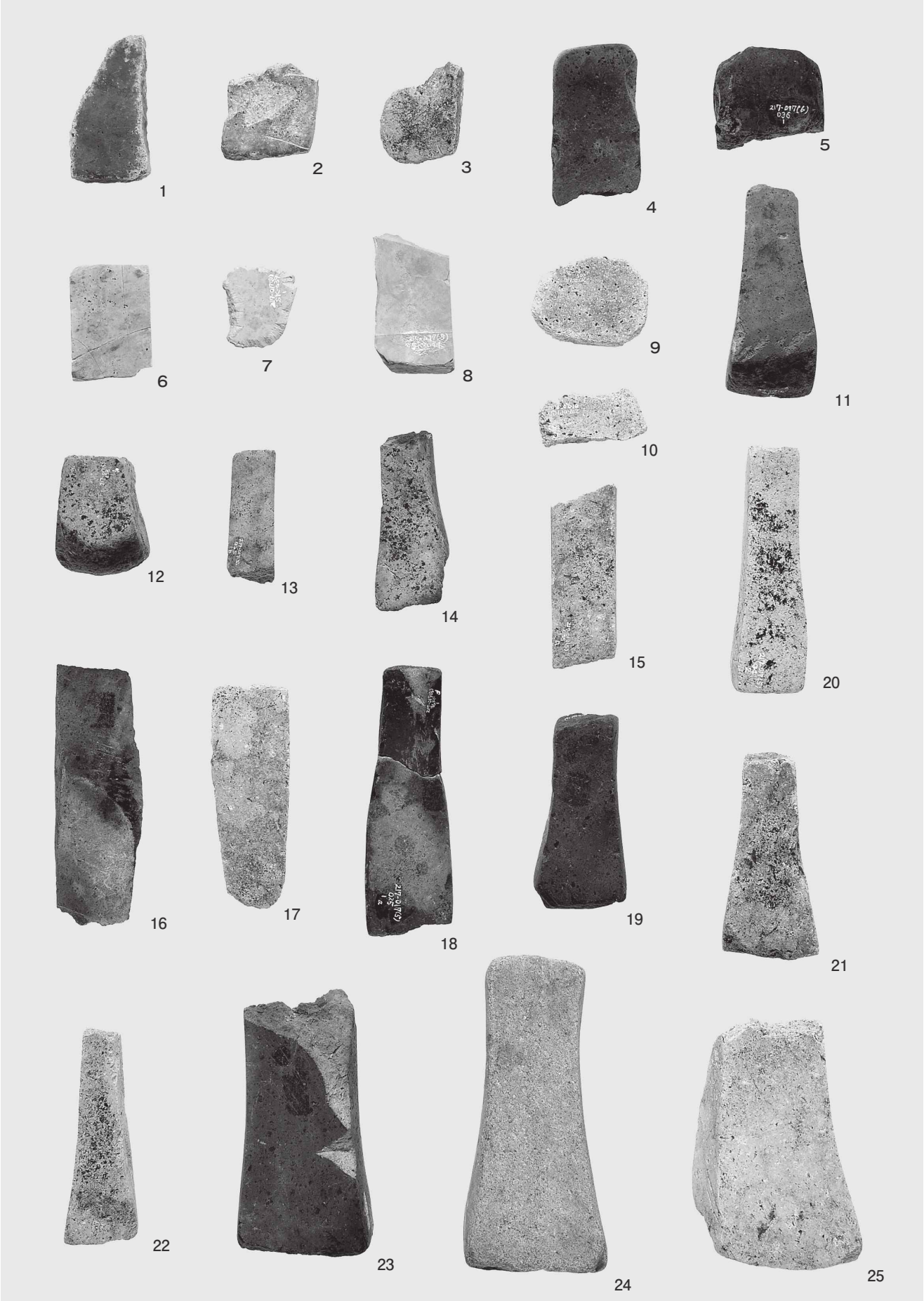
陶磁器類（4）



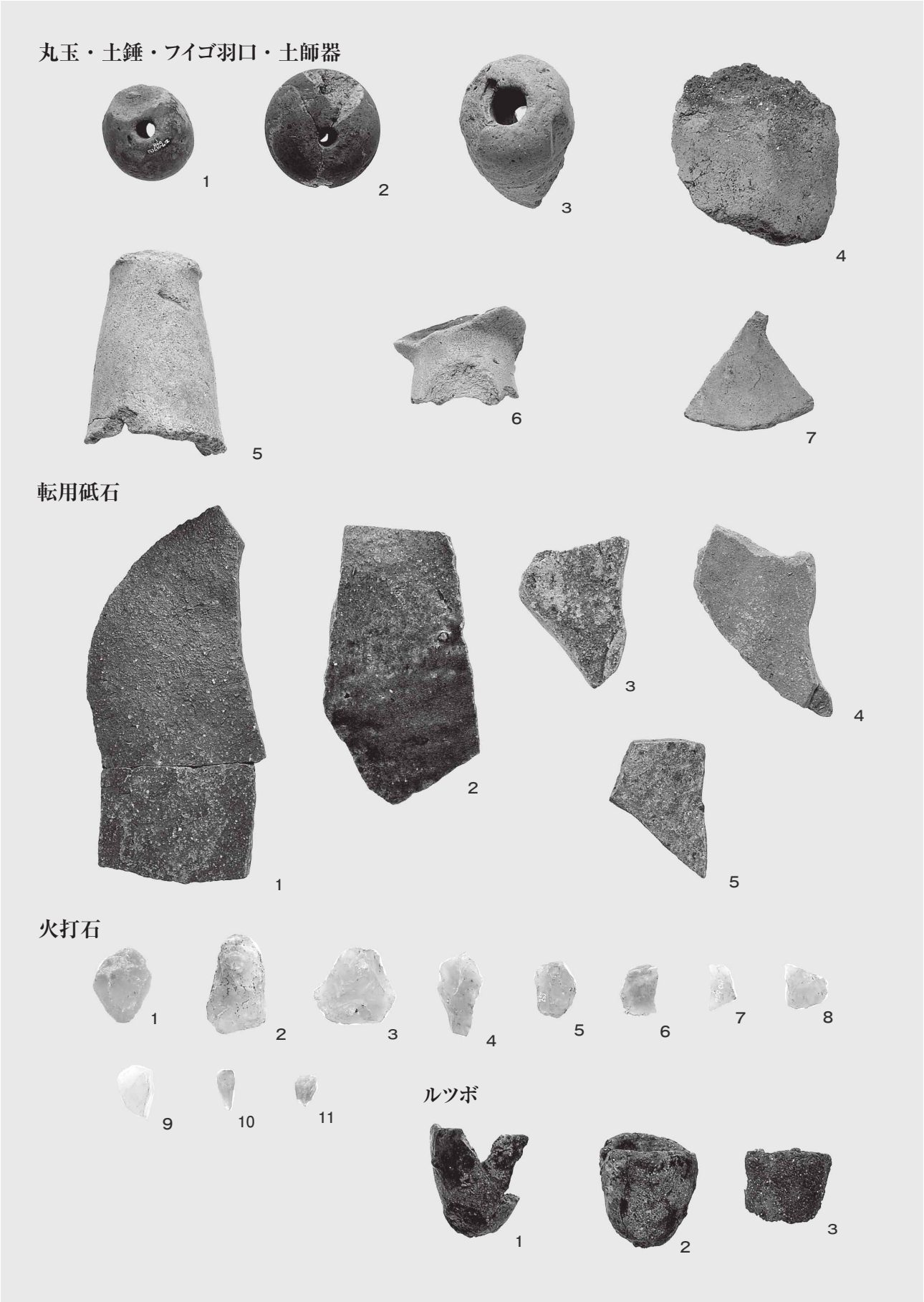
石製品・石造物（1）



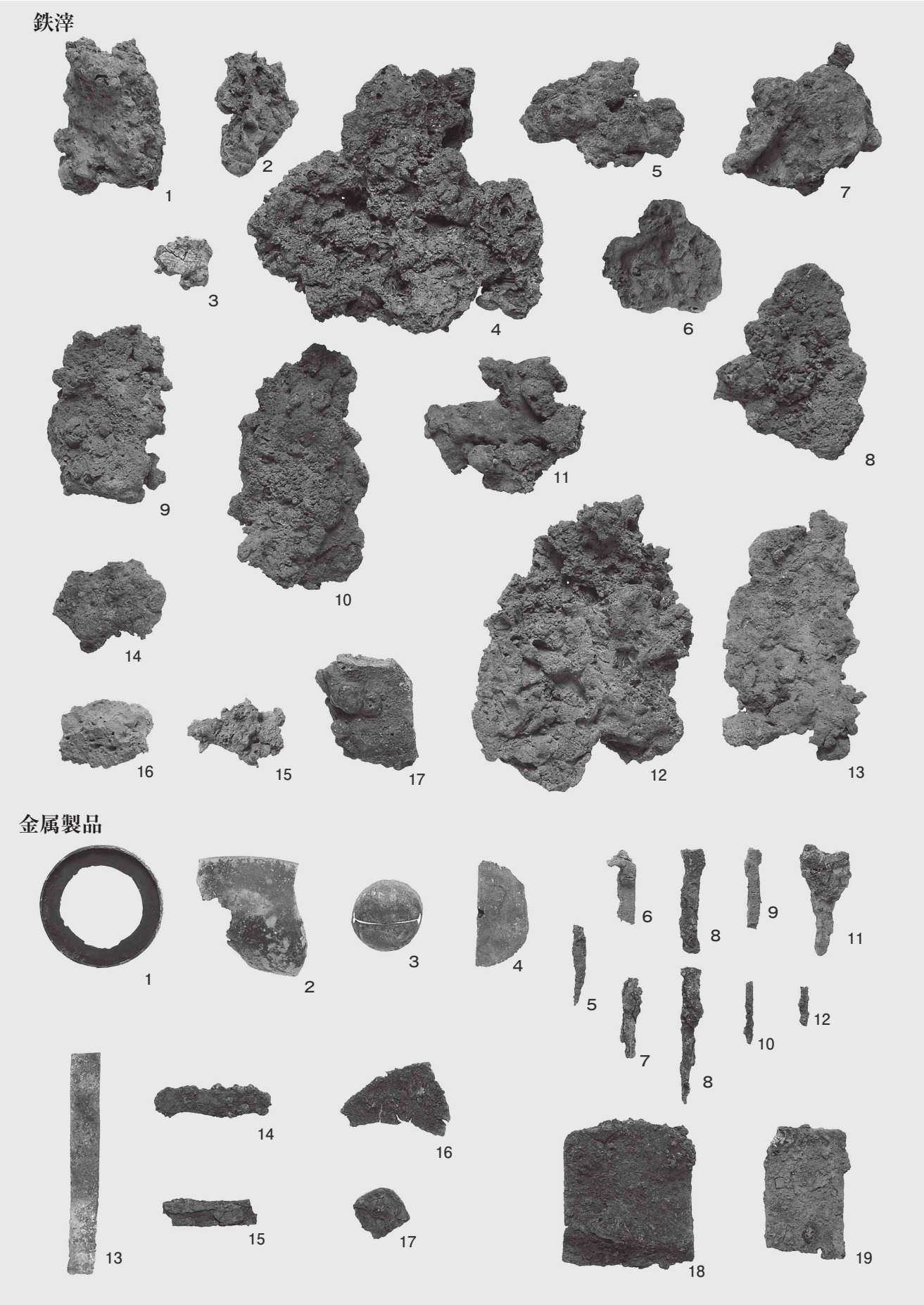
石製品・石造物（2）



砥石



丸玉・土錘・フイゴ羽口・土師器・転用砥石・火打石・ルツボ


鉄滓
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
金属製品
1
2
3
4
5
6
7
8
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19

鉄滓・金属製品

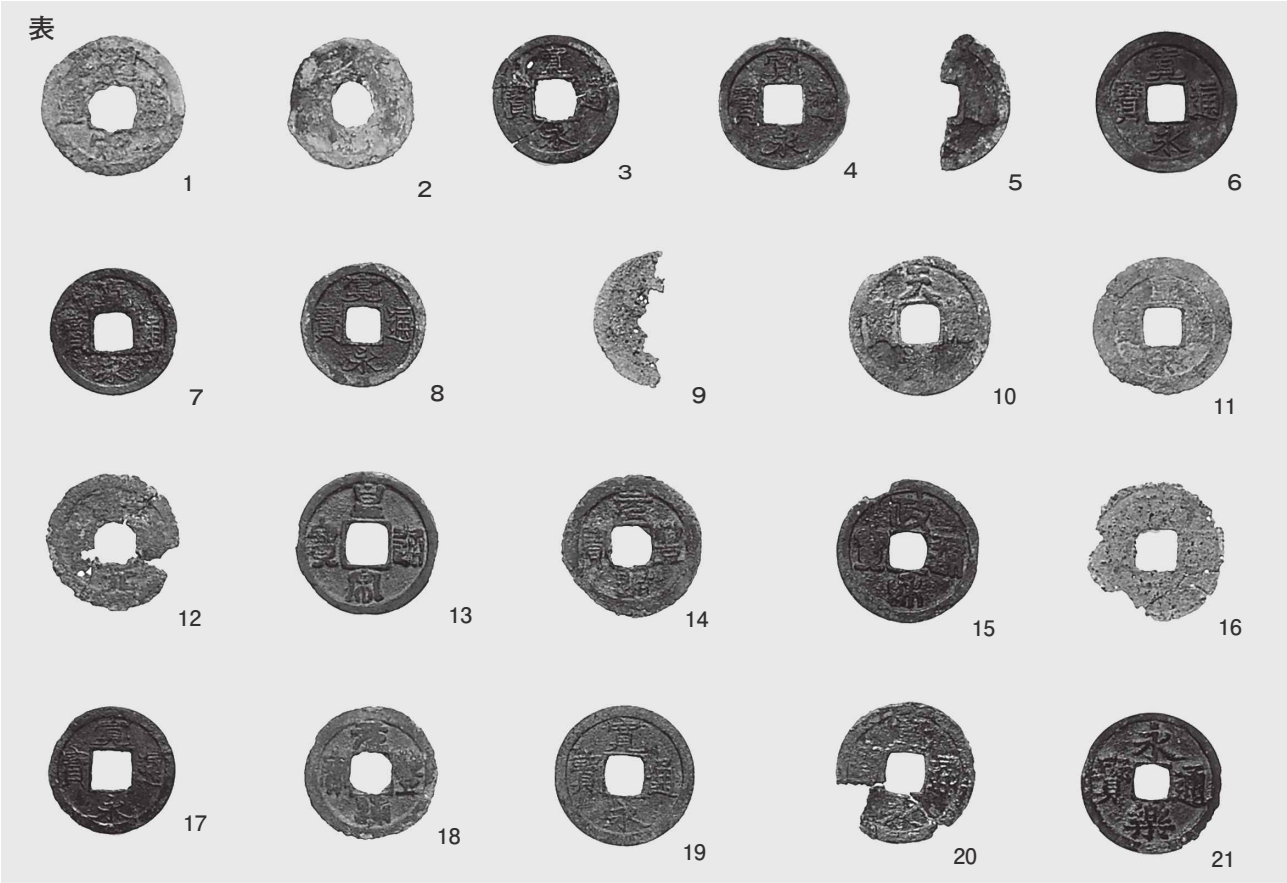
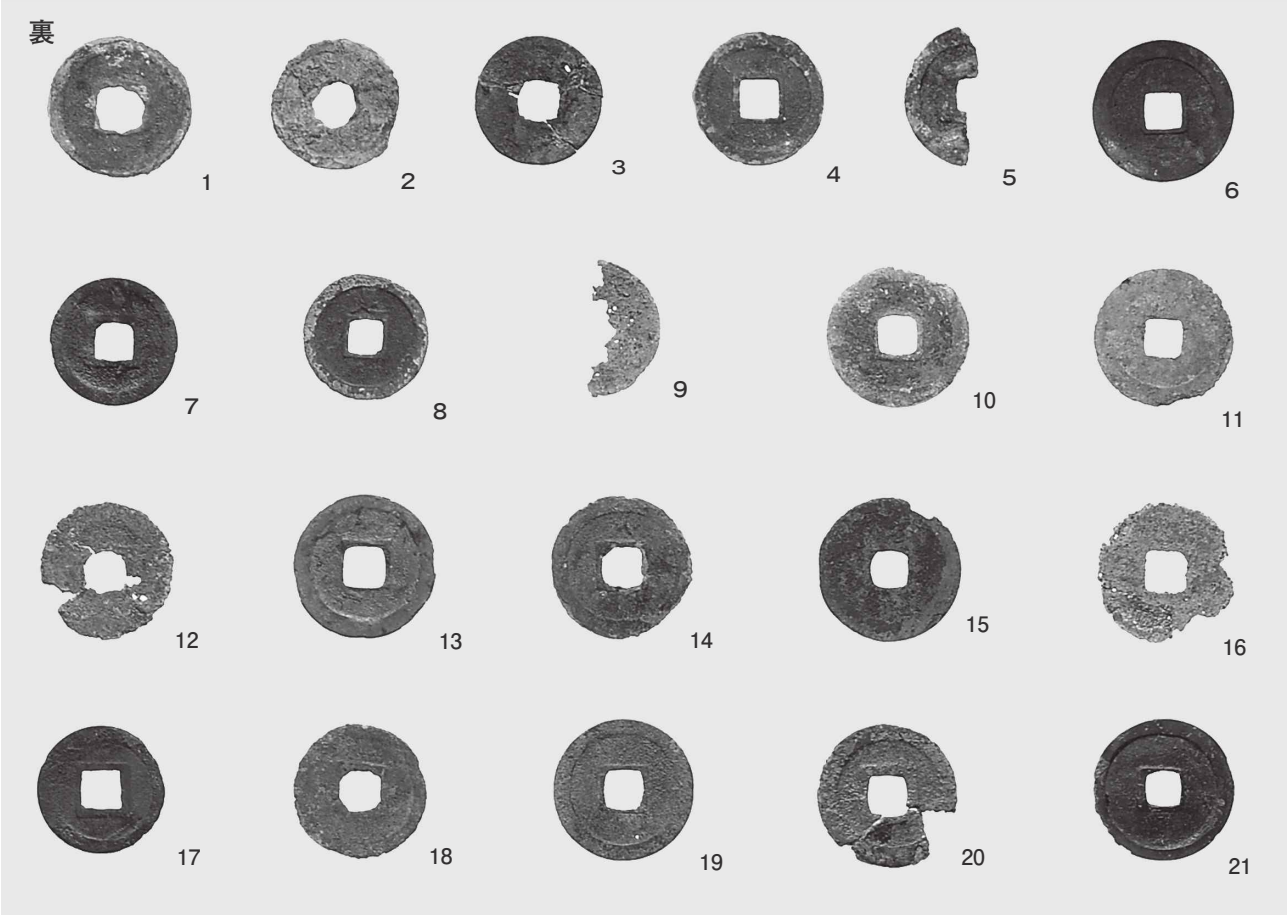


表
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21


裏
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

銭貨

報告書抄録

ふりがな	かしわほくぶちゅうおうちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書
副書名	-柏市須賀井遺跡- 縄文時代以降編
巻次	7
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第18集
編著者名	鳴田浩司・田島 新・牧 武尊・黒住耐二
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129
発行年月日	西暦 2017 年 3 月 24 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
		市町村	遺跡番号					
須賀井遺跡（すがいいせき）	柏市若柴字須賀井226-45ほか（かしわしわかしばあざすがい）	12217	017	35度53分35秒	139度57分28秒	19980713～20080307	30,563㎡	土地区画整理
				世界測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
須賀井遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 中世から 近世初頭	縄文時代竪穴住居跡１軒、ピット群・ピット2基、陥穴７基 中世台地整形区画３か所、掘立柱建物跡６棟、地下式坑24基、井戸10基、火葬施設７基、土坑196基以上、溝18条	縄文時代土器･石器 古墳時代土師器 中世陶磁器類、金属製品、石製品	中世の土坑から古瀬戸中Ⅱ期の広口壺の蓋が出土した。

要約	手賀沼水系の小河川によって開析された台地縁辺から中世の台地整形区画が検出された。台地整形区画の範囲内から、掘立柱建物跡、地下式坑、井戸、火葬施設（火葬墓）や多数の土坑が検出された。出土陶器の年代から14世紀から15世紀前半に当たる。土坑墓・火葬墓を含む墓域や小屋・井戸などを伴う作業空間であった。地下式坑の出入口には遮蔽用の蓋（板壁）を設置していた痕跡が確認された。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第18集

柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書 7

－柏市須賀井遺跡－　縄文時代以降編

平成 29 年 3 月 24 日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１

印　　刷　株式会社白樺写真工芸
千葉市稲毛区山王町102－5